エナルジア戦記

白蜘蛛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エナルジア戦記

【Ｎコード】
Ｎ７８２４Ｏ

【作者名】
白蜘蛛

【あらすじ】
この世界の大気にはエナルが含まれている。
エナルによって自らの力を増幅させる者をエナルダと呼ぶ。
エナルダは性別・年齢を問わず優秀な戦士だ。重装鎧を装着し大剣を振るう。戦いを左右する存在となったエナルダは自問する。“我々は何者なのか”と。

１－１　思いつき

俺はあと数分の命だ。この真っ暗で湿った場所で死ぬのか。
くっ、手が痺れる。頭が痛ぇ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「おい上原、早く資料を出せよ」
俺は考え事をしていて、「は？」としか答えられなかった。
俺の隣では新人が懸命にキーボードを叩いていた。
「おいおい、大丈夫かよ。提出まであと３０分もないぞ？」
新人は消え入りそうな声で答えた。
「・・・ハイ・・・」
ドウシテ　何モ　シテクレナインダ

俺は椅子の背もたれに体重を預けて、頭の後ろで両手を組んで訊いた。
「できるか？」
「・・・ハイ・・・」
デキルワケナイ　オレハ　新人ダ　マダ新人ダ

出来ないと言えない、助けてくれと言えない、俺と同じだなコイツ。
事態を取り返しのつかない状況までもっていく危険性があるヤツ。
声を掛けられるのを待っている。手を出してくれるのを待っている。
頭の中じゃ、出来なかった自分を正当化する理由を探している。

１０分後、誰が見ても間に合わない事が判った。
俺は作成中のコピーを転送させ、資料を完成させた。提出５分前に逆転送する。

新人はファイルを開けて、ほっとした後、不機嫌な顔をしている。
「時間が無ぇよ、早く提出してこいよ」
更に追いかけるように言う。
「後で中身の確認を頼むぜ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

路上は7月の太陽を受けてうだるような暑さだ。
「なぁ、ナルミ。お前、甘いんじゃないか？」
「あ？上原の事か？」
「お前が甘いと後であいつが苦労するぞ。大体、俺の業務まで影響するじゃんか」
「あぁ、そうだな。悪かった、気をつけるよ」
「他部署の俺が言うのも気が引けるが、上原も入社して４ヶ月だろ？一度痛い思いをしなきゃ直らんよ。」
「それにしてもお前、最近元気が無いな。何かあったら力になるから言ってくれ。・・・ま、金と女以外だけどな」
「じゃ、いらねぇよ」

明るく笑って別れた。良いヤツだ。同期の中でも配属が同じだったせいか何かと一緒に動く事が多かった。
入社した時は体育会系の筋肉バカって感じで、入社しばらくは俺の方が出来たし、評価も高かった。
しかし、今じゃ仕事もかなりできるし上司との交渉や新人の指導もしっかりやってる。着実に積み上げているという感じだ。
一方で俺は何をしていたんだろう。いつもその場しのぎで不安定だ。

働き始めて5年が経つ。去年、主任になった。後輩もいるし、形の上では部下もいる。
もういっぱしの社会人だ。

ところがこのところ何をする気も起きないし、つまらない事にイラついていた。
原因不明の頭痛があって、慢性的に俺を苦しめた。
上司は面倒そうな顔で「大丈夫か？無理はするなよ」という
俗に言う「無理させて、無理をするなと、無理を言い」ってヤツだ。
頭痛もあったし有給もたんまり残っているので、土日に引っ掛けて
４日間の休みを取った。
この会社にしては大盤振舞だ。

「どうだ。田舎にでも帰って元気な顔を見せて来いよ」先輩が言う。
ま、元気ではないから休暇を取ったのだが、この先輩は天然だし嫌いじゃないから良しとしよう。
だが、どうやらこの休暇は会社の指示って事になっている様だ。
それはそれで気に入らない。

普通、俺らくらいの年になれば親に感謝の一つもする。
だが、俺はそんな事をした事もないし、働き始めてから母親のところには３回しか帰っていない。
俺が幼い頃、父親が失踪した。
父親は臨床心理学の研究員だったらしい。
父がいなくなってから母親は苦労したらしい。
働いてばかりで一緒にいられる時間はほとんどなかった。
俺は周囲から母親に感謝しろと言われ続けてきた。

ワカッテル俺ダッテ・・・

どうしていいのか分らないんだよ。
ずっと母親だけが頼りだった。でも孤独な環境を憎んでた。
それをぶつける相手が母親しかいなかったんだろう。
母親にはいつもふて腐れて反発ばかりしてた。

子供の頃、疑問というか不安というか、常にそんな事が頭を巡っていた。
俺は母親から愛されているのか？
本当はお荷物なんじゃないのか？
いない方がイイんじゃないのか？

この休みは田舎へ行こう。
子供の頃の思い出の場所へ行こうと思いついたのだ。
急に、本当に急に思い出した、俺だけの秘密基地。
小学校に入学する前だから４歳か５歳だったはずだ。
当時、新しく出来た山越えのバイパス道路から林道を入ったところだ。
思いついた時からウキウキしはじめた。
最近こんな気持ちになった事はないなぁ。
よし、朝７：００に出発すれば８：３０には林道の入り口まで行けるだろう。
秘密基地までの道筋は全く思い出せないが、林道から沢を通って登ると林にポッカリと空き地があって小さな小屋がある。
林と藪に囲まれた空き地は狭く、見上げると木々の梢が伸びて空が丸く見えた。

その後は何か買って母親のところに寄ってみようかと考えた。
友人に会うって事も頭をよぎったが、昔からどんなに仲良くなっても、その時だけだった。
中学高校、部活の剣道、それなりに親友だと思っていたし、部活では試合で涙しあった仲間だった。
だが、離れてしまえばそれきりだった。何度か連絡はある。年賀状も来る。そのうち音沙汰がなくなる。
いつもこのパターンだ。多分俺が原因だと思う。剣道部のＯＢ会にも出た頃は無い。

いつもクラスでは中心グループに居ることは居た。明るくて面白いヤツと評される。勉強もスポーツもそこそこできた。
おちゃらけて通り過ぎるような奴。そういう奴なんだ俺は。
真剣じゃなかったんだろう。悩み事の話とかしたことないもんな。
自分からは絶対に悩み事なんて相談しなかったし、相談されても、当たり障り無い事しか言わない。恐かったんだろうな。俺が言った事で他人を左右するのが。
つまりは本当の意味では真剣じゃなかった。大事なところで共有できなかったんだ。
だから今更声を掛けようって友人も居ないし、声を掛けても相手が戸惑うだろう。
大体、会ってどうしようってんだ。
そこまで考えたところで携帯が鳴る。母からだ。
ちょっと間を置いて出る。

「体は大丈夫？同窓会のハガキが来てるよ。名簿の住所とか変更してないの？」「来月１５日だけど、参加で良いよね？」
「いや、後でこっちから連絡するから」「今、部屋を片付けてるんだ。じゃ、後で」
母との電話を切った時、いつも母親に悪い事をしたような気持ちになる。
どうしてもう少し優しくできないのか。
「やっぱり明日寄ってみるか・・・」
独り言をつぶやいてＴＶを着けると、薄っぺらいバラエティー番組が映った。

１―２　キャンペーン

翌朝、昨日の計画では林道に到着するはずだった８：３０頃に出発した。
単なる寝坊だ。
バイクで高速を飛ばす。

サービスエリアに寄って、缶コーヒーで一服しよう。
自販機の前に立つと新発売の文字が躍る。
『シブいボトルで新登場』
スポーツドリンクだ。カーキ色の５００ｍｌアルミボトル。
買っとくか。コーヒーとスポーツドリンクを手に喫煙所へ。
さっさと吸ってコーヒーの空き缶を捨て、ふらっと、売店に入ってみた。

奥の一角で女の子が声をあげている。
「いらっしゃいませ～、新発売で～す。応募はがきにご記入下されば、素敵なプレゼントが当たりま～す」
微妙に茶色く胸まで届く髪はさらさらとしていた。
ややとんがった顔つきはツンの要素で満たされている。
俺は奥のドアから出ようと前を通りながら視線を送ると、その娘（こ）の視線とぶつかった。
１７か１８、高校生だろう。バイトって訳か。
「ねぇ、おにいさん見てってよ。新発売よ」
呼び込みとは違う声色の問いかけに、つい足を止めた。
「新しいボトルのスポーツドリンク、キャンペーンなの。４本パックを買ってもらえると応募ハガキがついてて、特等は温泉旅行」
ややきつめの瞳はお願いするような目になる。
これはヤバイ。この娘（こ）は目だけでツンデレする。

「スポーツドリンクと温泉旅行ってターゲットがずれてないか？」
お願いの目は驚きの目、そして柔らかく笑った。カワイイ。
「そうよね。そうですよね。でも、若い人が温泉に行ってもいいでしょ。親にプレゼントしてもいいし」
微妙な抵抗は更にカワイイのゲージを押し上げる。
「じゃ、ハガキ出してみるか」
「毎度どうも～」
買うとは言っていないのに遅滞なく返答する。頭も悪くない。非常に惹かれる。
財布を出そうとして、右手にぶら下げていたカーキ色のボトルをテーブルに置く。
女の子はまたもや驚いた目をして、今度は掛け値なしの笑顔だ。
その中に参ったという色が見える。

俺はリュックに4本パックを入れようとしていると、応募ハガキとボールペンが差し出された。
「私が書きましょうか？」
なにやら急に距離が近い感じの問いに、「じゃ、頼むわ」と応え、名前と住所、連絡先を訊かれる。

俺の名前はナルミ。
「ナルミさん？それって上？」
「あぁ、口に鳥でナル、海でナルミだ」
「へぇ、下は？」
名前を上と下という表現で分けるあたりに親近感が湧く。
「クラト。林家木久蔵の蔵に人でクラト」
「キクゾー？あぁ、落語の？はい、ク・ラ・ト、さんっと」
少しウケたような気もする。昔はもっとウケたんだが。
木久蔵の例えは名前を言う時のクセのようなものだ。

やや後悔しつつ、訊かれるままに住所や電話番号を答え、アンケートの内容にも適当に回答して完了。

「この連絡先って今持っている携帯ですか？」
「そうだよ。いつも家には居ないし」
「今日は休み？どこかへ行くの？」
「いや、予定は無いんだ。ただブラっと出てきただけだよ」
「へぇ～。・・・あの、後で連絡してもいいですか？」
「そりゃ、構わないけど・・・」
「ここでバイトしてると遊びに行く人達ばかりだから、ちょっとツライの」
「ま、世は夏休みだからな。山か海にでも行くんだろう」
「私、海に行きたいなぁ、今年はまだ行ってないもの」
「海かぁ、いいなぁ。俺も行ってないなぁ」
「じゃ、行こうよ～。海」
「これ、電話で話をする内容じゃないの？」
「あ、ホントだ。いやだなぁ、私ったら、もう～」

というような妄想をしている間に応募はガキは完成し、応募箱とハデに書かれた箱に入れられた。
「またお願いしま～す」
という声に押されるようにその場を離れる。
久し振りにやっちまったな。妄想。可愛かったなぁ。
バイクのところに戻ると声が追いかけてくる。
「ナルミさ～ん」
先ほどの女の子だ。胸が高鳴る。
「これ、忘れてますよ」
あ、自販機で買ったスポーツドリンクだ。
高鳴った胸に耳が赤くなりそうだ。

「じゃ、運転気をつけて下さい。またお話とかできたらいいですね」
と言って、パッと走って行った。
誰も見ていないだろうが、俺は少しだけカッコつけてバイクに跨った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

１０：３０に林道の入り口に到着。昨日の予定より大分遅れている。
高速を降りた頃から頭痛がする。
「またか・・・」
せっかくの気分に水を差されたようでイラつきながらもロキソニンを１錠飲む。
舗装されていない林道に入ると、薄暗くひんやりとする。
林道は右側が急な上り斜面で左側には水が干上がりそうな沢に落ち葉がたまっているのが見える。
沢はこの先にいくにつれて岩が多くなり、水遊びができる程度に水が溜まった場所もある。
１５分も走ると見覚えのある待避所があった。
車がＵターンできる程度のスペースがコンクリートで整地してある。
待避所にバイクを停め、ハンドルロック、ヘルメットロック、ついでにワイヤーロックする。誰も来ないだろうが念の為だ。
すぐに左側の沢を渡り、斜面を登る。
ロキソニンが効いてきたのか頭痛はすっかり治まっている。
林の管理道のようなものを手掛かりに沢沿いに進む。
小道は徐々に沢から離れ、一段ときつい上りになったところで急に左に曲がる。
這うようにして背の高いススキを抜けると、ぽっかりとした空き地に出た。

「ハッ、や、やっと・・・着いた・・・ハァハァ・・・」

息は上がったが懐かしい場所は記憶のまま残っていた。
錆だらけの道具が置かれた小屋。２０年も経っているのに変わっていない。
小屋の横にある大きくて平らな石にリュックを降ろして見渡す。
懐かしい。あのままだ。
草の匂いも虫の声も夏の日差しも・・・

リュックからスポーツドリンクを取り出して半分飲み干す。
ボトルを片手に小屋の回りを歩いてみる。本当に何も変わらない。
草を引き抜いたり、落ちていた枝を振ったりしながらリュックを置いた石の所まで戻ると、残った少し残ったスポーツドリンクを飲み干す。
「４本パックは正解だったかな」
そう思いつつ伸びをして石に腰を下ろす。水分をとったせいか汗が急に流れる。
周りの林に比べて太陽が照りつけるこの場所はとても暑くて、急な山道を登ってきた心臓の鼓動も強く感じた。
山もいいが、やっぱり夏は海だな。
そういえば名前くらい聞いても良かったか・・・。

1－3　井戸

小屋をのぞいてみる。
小屋といっても農機具を置くだけの掘っ立て小屋だ。
屋根と壁の間が大きく開いているしドアも無い。
小屋の中には錆びた鎌の他にも何に使うのか判らない道具が置いてあった。

秘密基地はあまりに小さくて、懐かしい事は懐かしいがすぐに手持ち無沙汰になった。
辺りを見渡すと空き地の外れに石を積んだ井戸らしいものがあった。
（あり？こんなのあったか？）
近づいてみると直径２ｍはありそうな大きな井戸にトタンで作った蓋が被せてある。
でかいな・・・農業用水か？
トタンの蓋を外して覗き込む。
「おっ、あぶねぇ！」
胸のポケットに入れていた携帯を落すところだった。
井戸の縁（ふち）に置いて覗き込む。
何も見えない。日差しが強いせいだろう。
井戸は木陰になっているし、意外と深いのかもしれない。

石でも落してみようと後ろに振り返った瞬間、視界の端で何かが動いた。
ハッと振り返るがそこには井戸があるだけだ。
（ドクンッ！！）心臓が鳴る。
瞬時に恐怖に包まれた。
夏の日差しが急に弱くなり気温が下がった。虫の声も聞こえない。
何かいる！周囲の藪に、小屋の中に、何かに見られている。

慌てて辺りを見渡す、目が回るようだ。
視線を上げると林から伸びる梢（こずえ）と丸い空がぐるぐると回る。
何かが潜んでいる。禍々（まがまが）しいものが。
どこかで息をころして。様子を窺っている
息は荒くなる。
完全なパニックだ。立っていられない。

突然、「ブゥ～～ン」小屋の裏から草を刈る機械の音が聞こえた。
途端に緊張が解けた。日差しはその強さと熱さを取り戻す。
虫の鳴声も聞こえる。森にも小屋にも何の気配も感じられない。

ほっとしながら強張った顔を手で撫でる。
俺はひとりで照れてわざと声に出した。
「いやはや、何てこった」
小屋の裏、藪の向こうから聞こえる機械の音は、やや間の抜けた音を立て続けていた。
おそらく林野庁の下草刈りだろう。もしかするとすぐ裏は農地にでもなっているのかもしれない。
間の抜けた機械音よりも、すぐそばに人が居るという事が俺の心を落ち着かせた。
タバコでも吸うか・・・。リュックに手を伸ばす。
途端に衝撃が走る。
「どうやって来たんだ?・・・5歳の俺はどうやって来たんだ?」
バスが通る旧道から林道の入り口までは5ｋｍ以上あるし、林道も３０ｋｍ／ｈ程度とはいえ、１５分以上走った。
それに、沢を越えた後の険しい山道。とても子供ひとりで来れるようなところではない。

鋭い痛みにも似た疑問。夏の日差しが虫の声が現実感を失いつつある。

暑さに関係ない汗が出る。耳の奥で小さく高い音がする。
ここを離れたほうがいい。
また恐怖とパニックが足元を浸し始めたのを感じる。
すぐに帰ろう。今のうちに。
リュックを背負う。
はッ、携帯・・・！
井戸の縁（ふち）に置いたままだ。
井戸に近づく事に恐れを感じる。
あの中は暗闇だ。何があるかわからない。
わからないというのは恐怖の根源だ。
携帯に手を伸ばした途端、何か出てくるじゃないのか？
「バカな」声に出して言う。
井戸に近づき手を伸ばす。
自分から伸びている手が自分のものではないように見えた。映画の主人公視点みたいだ。
現実感の喪失。
その手が携帯を掴んだ。その瞬間、地面が揺れた。
地震か！？いや、違う。
思わず腰から後ろに倒れそうになる。「ヤバイ」と感じた。
立ち上がろうと足に力を入れた途端に、後ろから地面がせり上がる。
前へのめった俺の身体は井戸の入口へ。
「くっ！」
井戸の反対側の縁に手が掛かるが苔（こけ）で滑る。
俺は井戸に転落してしまった。
「痛てぇ・・・」井戸の底で呻く。
見上げると７・８ｍぐらいの深さだった。丸い空が見える。
頭から落ちなくて良かった。井戸の内面にぶつかったし、底に積もった落ち葉がクッションにもなったようだ。
井戸の底はじめっとして、当然薄暗い。
ただ、立ち上がれば、６メートルほど上に空が見える。

どうする？
井戸の内側は苔（コケ）が生えていて滑る。手や足をかけるところは見つからない。
一気に不安が押し寄せる。
「じょうだんじゃねぇぞ、おい」
誰か！・・・そうだ携帯！
井戸の底を手探りで探す。見つからない。
携帯さえあれば！小枝や落ち葉をよけながら探していると、上の方から着信音。
「クソォッ！！」
マジでヤバイ！
「誰か！！」
そうだ、草を刈っている人がいるはずだ。
「オーイ、オーイ！助けてくださーい！井戸に落ちましたー！！」
何度も呼んでみたが、機械の音にかき消されて聞こえないだろう。
でも叫ばずにはいられなかった。
「オーイ！オーイ！誰か助けてくれ！」
暫く叫び続けた。
恐怖と不安で、叫び続けずにはいられなかったのだ。
声は嗄れるが誰も来ない。
どうすりゃいいんだ・・・

ブゥ～～ン
機械音がする！近い！
やった！助かる！
「助けて下さーい！井戸に落ちました！誰かいませんか！」
機械音は響き続ける。どんどん音が大きくなる。近づいてきているのだ。
なおも叫ぶが、反応はない。やはり機械の音に消されてしまうのか。

それでも叫び続けた。叫ばずにはいられない。
くそっ、喉が痛ぇ、声がかすれる。
・・・と、機械音は井戸のすぐ近くで止んだ。
やった！本当に助かった！
声を上げようとした瞬間
（ガコン！）
井戸の蓋が閉められた。
声を上げようとしてむせた。
すぐに機械の音がするが、さっきよりかなり小さく聞こえる。
後はいくら叫ぼうが、機械音が小さくなっていくだけだった。
暗闇は判断力も奪った。叫ぶ事しか出来ない。喉は完全に嗄れてしまった。
井戸の底は闇と絶望に満たされた。
少し目が闇に慣れると、ごく淡い光が蓋の隙間から漏れている。
落ち着け、落ち着け・・・自分に懸命に言い聞かせた。
喉が痛い。忘れていた・・・飲み物・・・スポーツドリンクのボトルが手に触れた瞬間、激しい怒りが湧き上がる。
何でさっき、ものを投げなかった！？
ボトルでも、靴でも何でも良かったはずだ。助かるはずだったという思いが後悔と怒りを大きくした。
ダメ元で井戸の蓋にボトルを投げつけると、大きな音が響いたが、誰も来てはくれなかった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

どれくらい経っただろう。
少しウトウトしてしまったようだ。かすかな光も消えて、井戸の中は文字通りの真っ暗闇だ。
涼しいどころか寒いくらいだ。恐らく夜だろう。
ボトルは1本を空にした。残り3本。

空のボトルに土を詰める。
明日だ。明日、また草を刈りに来くれば助かる。きっと助かる。
翌日は何の音もしなかった。ごく僅かに井戸に入る光で快晴だと判る。
それでも俺はボトルを投げつける事を繰り返した。
何かしていないといられない。叫んでもみたが声が出ない。
このままかよ、出られなければ・・・俺は死ぬのか？しかも餓死だぞ、餓死！
産まれて初めて死と向かい合っている。
しかも、その死はゆっくりと、実にゆっくりと迫ってくる。
気が狂いそうだ。
頭が痛い。いつもの頭痛だ。
意識がボンヤリする。投げたボトルが井戸の蓋まで届かない。
また夜になったらしい。今日もボトルを1本消費した。
背中が冷たい。リュックに残り2本のボトルとタオルを押し込み、背負って井戸の内側に寄りかかる。
井戸は大きいので横になれるが、底に積もった落ち葉の下の湿った土から水分がしみてくるのだ。
枯葉をできるだけ一ヶ所に集めて座っていた。
それに横になると頭痛が増す。くそっ、ロキソニンがあれば。
リュックに入れたはずのピルケースは見当たらなかった。
俺には、あとどれくらいの時間があるのか。
残された時間は恐怖と苦痛に苛(さいな)まれる時間だ。
携帯以外に時間を知る物を持たない事を後悔しつつ、冷えてきた空気でそれとわかる夜をどうやって過ごそうか考えた。
頭が痛い、食欲もない、どのみち食べるものはないが。
「死にてぇ」

思いがけず呟いた。

1－4　走馬灯

湿った暗闇の中で2回目の夜は俺から色々なものを奪っていった。
ボトルを投げるのも止めてしまった。
身体がだるい。思考がまとまらない。
さっき、枯葉や小枝を集める時にとげが刺さっても、ただ痛いだけだった。
怒りも起きない。感情が無くなっていた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ウトウトしてふと目が覚める。
淡い光が差している。夜が明けたようだ。
何か震動を感じる。
地震か？そういえば井戸に落ちた時の揺れは地震じゃなかった。
震動が大きくなってきたと感じた瞬間、井戸の底が崩れた。
思わず手を伸ばすと、井戸の底に張り出していたらしい木の根を掴んだ。
足元は完全に抜け落ちているらしく、足を動かしてみるが何も触れない。
落ちた土が何かにぶつかる音はしなかった。
相当深いようだ。枯れた地下水の空間か？

落ちたら助かるまい。
手が早くも痺れてくる。あと数分もつか。
頭が痛い。力を入れると脈打つように痛い。
どうせいずれは落ちる。でも手を離せなかった。
苦しくても死ぬ瞬間まで生きようと動くものなのか。
しかし、その瞬間は不意に訪れる。

右手を握り直そうとして左手が滑った。
あっ、と思った時にはもう両手は空を掻いていた。

その時、フラッシュをまともに見たように視界が真っ白になって脳裏に情景が浮かぶ。
パーキングの売店の女の子、母親からの電話、一昨日会社から帰る風景、去年の正月、入社式、間隔を広げつつフィルムのように目まぐるしく変わる。
高校時代の部活、中学の文化祭、小学の運動会、暑い昼下がりにアイスを食べた事、写真でしか知らない頃、脳裏に浮かぶ俺はいつも笑っていた。
ベビーベットで天井を見上げて笑っている。
小さい手を握ったまま眠っている俺・・・。

これが走馬灯というやつか?

ふと母親が見えた。
顔からは汗が噴き出し、苦痛に歪んでいる。
髪が幾筋も顔に掛かる。病気か?
苦しそうで見ていられない。
ふと、真っ暗になった。
すぐに眩しい光に包まれる。そして母親が目に入った。
さっき苦しんでいた母親が俺に両手を伸ばしている。
髪は乱れ疲労と汗にまみれた顔は喜びに溢れていた。
目には愛情を湛(たた)え、俺を抱きしめた。
「ありがとう」といって涙を流した。

俺は気付いた。俺は愛されていた。必要とされていた。
たった今、気づいた。
「母さん!!」嗄れた喉から子供のような声が響く。

俺は愛されていた。
ふと上を見ると、さっき掴んでいた木の根が見える。
１ｍも離れていない。そんな瞬間的な出来事だった。
脳裏のフィルムは回り続ける。
たらいの風呂、ベットの足につかまりながら立って笑う。
記憶には無い誕生祝い、七五三・・・情景は加速して変わる。
そして、秘密基地で遊ぶ俺。
５歳の記憶なのにどうして忘れてしまったのか不思議だった。
今、判った。忘れようとしたからだ。
俺が記憶を持ち続ける事が苦しくて捨てたんだ。

俺は、ここに父親と来た。
気が付いたら父が消えていた。
あの小屋で一人ぼっちの不安な夜を過ごした。
母さんとパトカーに乗った。

父さんの記憶は忘れたんじゃない。捨てたんだ。
父さんが居なくなった後、子供の俺が父さんの事を聞いた時、母さんは痩せた横顔を無理に微笑(ほほえ)ませて「わからないわぁ」と言った。
それから俺は父さんの事を聞かなくなった。
父さんは大きくて強くて何でも知ってる。何でもできる。大好きだった。

巻き戻されたフィルムが現在に向かって回り続ける。
暑い日のアイス、運動会・・・。

俺は安らかな気持ちになった。全てを受け入れられる。
最後に母さんと父さんに会えたような気がした。
「もう・・・いいか・・・」

最後に脳裏に映ったのは、井戸の底から見上げた丸い青空だった。

それまで落下している事に気付かなかったが、急に空を切って体が落ちているのを感じた。

途端に背中に衝撃。思わず声が出る。

「うぉ、うわわわあぁ」

何かにぶつかりながら落ちている。ひときわ大きな衝撃。

体が転がり落ちる様な衝撃が続く。

（ガラガラ、ザザッザー）

痛い、目が回る。体は堅い何かにぶつかって止まった。

声が出ない。

「ぐぐ・・・」

息を止めて痛みに耐える。心臓の鼓動にあわせて痛みが全身に走る。

痛みに顔を歪めながら、この場所が非常に寒い事に気付いた。

地面は滑らかな岩のような感じでとても冷たい。

やっとの事で身を起こして座り込む。

「生きてる・・・のか」「まぁ、この痛みは・・・生きてるんだろうな」

どうやら大きな怪我はしていないようだ。

覚悟させといて、ひでぇ話だ・・・。でも、助かった。

痛みが俺を覚醒させる。

命が助かったという喜びが過ぎると不安が押し寄せた。

完全な暗闇だ。上を見ても微かな光すら見えない。

手探りで這ってみると横幅１ｍくらいの溝になっていて、両側はかなりの急勾配で壁になっている。

この斜面を滑り落ちてきたのか・・・まともに落ちたらアウトだったな。

溝も僅かに傾斜しているようだ。

俺は溝に沿って緩やかな傾斜を上に進み始めた。

目前に何かあるような感覚におどおどしながらも這って進んだ。
暫く進んでいると、徐々に寒さが増してきて耐え難い程になった。
寒さは加速して歯の根が合わない程震える。
這うスピードは自然と上がる。

落ちて、落ちて、地の底。暗くて寒い、地の底。

1－5　地下

暗い地下。凍えるような寒さ。

ふと前方に淡い明かりが見えた。
太陽の光ではない事は確かだが、救われた気持ちで急いだ。
明かりは溝から上に突き出した岩の上にあった。
周りは赤い光が広がっている。焚き火の残り火のような色だ。
近づくと暖かさを感じた。
手をかざすと全身が暖かさに包まれる。

何だろうこれは。
丸みを帯びた六角形、オレンジ色の物体が岩の上に在る。
指でチョンと触れると熱い。
何かは分らないが助かった。
しかし、この物体を持って行かないと凍えてしまう。
乗せる石でもないかと辺りを見渡す。
突然、ヴーン、ヴーンと音が鳴る。
オレンジ色の物体が微かに震動している。
今度は何だ?
考える間もなく、足元から微かな音、水が流れる音だ。
見るとまさに水が流れている。
さらさらという音が次第に大きくなり水量が増えてきた。
「水か！ありがたい！」
流れる水に手を入れて反射的に引き戻した。
信じられないくらい冷たい。
手が痺れている。氷水だってこんなに冷たくない。
考えているうちに水量は急激に増えてくるぶしまで浸る。
「痛ぇ！」

冷たいという言葉が出ないほどの冷たさだ。これはまずい。
辺りを見渡すと片方の斜面から岩が突き出していて登れそうだ。
足が痺れる。急がなくては。
その時オレンジ色の物体の立てる音が大きくなった。
あ、これをなんとかしなきゃ凍えちまう。
水はふくらはぎまで達している。更にひときわ大きな水の音が聞こえる。
（ザザーーッ！）
時間が無い。とっさに素手で物体を掴んだ。
「ぐぅっ、熱い・・・」
恐らく火傷しているだろうという熱さだ。
凍えて痺れる足で何とか岩を登る。
「くそっ、熱っちぃ」
でも離すわけには行かない。コイツを無くしたら死ぬ。
みるみる水量は増え、水深は１．５ｍ位になった。
あの場所にいたら死んでいただろう。
いや、壁を登れる場所があるここだから助かったのか。
しかし、水量は増える一方だ。
物体を乗せた左手が熱い。
顔をしかめながら登る場所を探す。左の方なら進めそうだ。
だが、左手にこれを持っていては手が掛けられない。
右手も両足も岩にとり付くので精一杯だ。
俺はそのオレンジ色で六角形の物体を捨てようとは思わなかった。
上がる水面が足を浸し始めた。それでも離さなかった。
左手をかざして上の方を見た。２ｍほど上は平らな岩棚になっているようだ。あの岩棚まで行ければと思った。
更に左手をかざした瞬間。
六角形の物体は溶けた。いや溶けたように見えた。
オレンジ色の光を放ったまま腕を伝って流れていった。

流れた腕には激しい熱さを感じる。
辺りは暗闇に包まれ、俺は喪失感の中、自由になった左手で岩を掴み、痺れる足を踏ん張りながら岩棚を目指す。
水はどんどん増えているようだ。音はもう激流と言ってよいだろう。
何とか岩棚まで登りきると、あとは手探りで少しでも高い場所を探して這っていった。
しばらくすると水の音も小さくなり、寒さが和らいできた。足の痺れもなくなっている。
「助かった」
しかし、状況が変わった訳ではない。相変わらず俺は暗闇の地下にいた。

俺は進み続けた。高みを目指して進むとまた溝のようなところを進んでいた。幅は両手を広げた位だ。
ふらつきながら立ち上がる。
手を上に伸ばしてみると意外にも天井に当たった。
高さは２ｍと少しあるだろうか。
膝が痛い。左手を壁に、右手を前方に差し出して歩く。
歩き続けるにつれ、寒さを感じなくなった。足元も岩に土が混じり始めた。土の匂いに勇気が湧く。どんどん進む。

徐々にトンネルが細くなり始め、少し不安を感じた時、微かな光が見えた。
光に向かって急ぐ。
トンネルは直径１ｍくらいまで細くなり、急に上へ４５度位の傾斜になった。
その先に光が漏れていた。
間違いなく太陽の光だ。もう嬉しくて涙が出てきた。
狭いトンネルの先の岩と岩の隙間から光が差し込んでいる。
体をねじって腕を伸ばし、光が漏れる穴に指を入れると穴はこぶし

位の大きさになった。
眩しい。草の匂いがする。嬉しすぎて逆にパニックになりそうだ。
一旦下がって改めて見るとトンネルは直径６０ｃｍ位まで狭くなっている。
トンネルの上には大きな岩が重なり、左右はこぶし大からサッカーボール大の石が積み重なって隙間を土やコケが埋めている。
少しずつでも石を外して後ろの広いトンネルに出していくしかないか・・・よしッ。
何個か石を動かしてみると意外と簡単に外れる。
外しては下がって後ろへ石を転がす。
そして、何度目か石を外している時、頭上の岩が動いた。
「ヤバイ！」
思った時には背中に激しい圧力。
と、脳裏にオレンジ色の光が弾ける。
いくつもの岩が崩れるようにトンネルを転がり落ちていった。
「危ねぇ。でも、助かったぜ」
岩があった空間に体を滑り込ませる。
あちこちから光の筋が入ってくる。
地表を覆っているのは苔、木の根と苔で下の岩が無くなっても崩れずにいるようだ。

冒険の果てに発見した宝物箱を開けるような気持ちでコケを崩すと、一気に光が満ちた。
「は、ははぁ、はあぁ！」
変な笑い方が出た。
「助かった。とにかく助かった」
俺は這い出すと草の上に寝転んだ。
何という爽快感だろう。こんな気分は初めてだ。
空気が美味い。決して大袈裟ではなく本当に美味い。

しばらく草の上で太陽の暖かさを感じながら深呼吸をしていた。
俺は陽の暖かさと草の匂いに包まれ、助かったという感動を味わう。
陽が高い。昼頃だろう。

改めて見渡してみると、出てきた場所は草地になっているが周りは林になっている。
秘密基地の辺りは植林された杉が多かったが、この森は広葉樹だった。
立ち上がって振り返ると、ここは丘になっていて結構上の辺りから這い出した事が判った。
草地の端には丘を下る小道がある。
まず、リュックの中を確認した。一番の心配は財布だ。
心配したとおり財布はなかった。
「免許やらカードやら面倒な事になったな・・・」
舌打ちしつつ、確認を続ける。
バイクのカギはあった。
スポーツドリンクのボトルが2本、その場で1本の半分を一息に飲む。ウマイ。
他には赤のバンダナとタオルだけだった。
タバコも無い。井戸の底でリュックを引っ掻き回した時に失くしたらしい。
カーゴパンツのポケットに手を入れるがライターも無くなっている。
お気に入りのジッポだったがしょうがないだろう。
ふとベルト通しにぶら下げた携帯灰皿が目についた。
タバコが無い事を間抜けに感じた。

携帯電話は井戸のところにあるだろう。
痛いのは財布だけか。
下に下りたら電話で母さんに連絡するしかないだろうな・・・面倒なコトになったと思いながらも、早く声を聞きたかった。

休みは明日までだ。会社には間に合うな。
４日も休みを取って更に休むなんて事はできない。
その時、頭は休みの間にやっておこうと思っていた仕事を思い出した。
明日は仕事で潰すしかないか。

しかし、休みが完全に無駄になってしまった。
・・・いや無駄でもないか。
そうだ無駄ではない。母さんに連絡しよう。

2－1　現実

地下から這い出した丘を下る小道は林の中に続く。
少し降りて見渡すと、右側は木々の向こうが崖になって落ち込み、その先にも崖の斜面が見える。
谷のようになった底は１００m程の幅があり草地になっているようだ。
舗装はされていないが、車が行き来した跡が見える。
木々で見え隠れする道を確認しながら崖沿いに進むと、崖はなだらかな斜面に変わり斜面には草が生えている。
道の先は崖とは反対方向へ曲がっていたので、少し急勾配だが斜面を降りて、下の道に出ようと考えた。
俺は木々につかまりながら斜面を降り始めた。
少し降りたところで何やら音が聞こえる。
金属や木材などがぶつかるような音だ。
何かしら作業場でもあるのだろう。
気持ちは逸った。とにかく電話をしたい。

と、足が草に滑る。俺は斜面の草の上を滑り落ちていく。
何度か木に手に掛けるが掴みきれず滑り降りていくと、木々が途切れ視界が開けた。
俺はあわてて前方に目を向ける。
斜面は下まで草が生えており、障害物は無い。大丈夫そうだ。
崖の上から確認した道が左右に続いているのが見える。
右は崖に沿って蛇行しながら奥は森になっている。
道を左に視線を辿ると・・・
そこまで確認したが降りるスピードを落すように手足を広げる
滑っていく先に見えたのは馬車と生物。西部劇で見るような馬車と

見慣れた生物。
それは映画や図鑑で見慣れた恐竜だった。

今、俺は嫌も応も無く恐竜に向かって滑り落ちていく。
現実ではない。そう思いつつも、滑り落ちながらパニックになって手足をばたつかせる。
斜面の下に着地、勢いで前に投げ出される。頭から砂を被り、両手で拭う。
俺が前を見るのと2匹の恐竜が振り返るのと同時だった。
高さは3mはあるだろうか、恐竜の口は真っ赤だった。

頭では解っているのに足が立たない。
座ったまま後ずさりする。
2頭の恐竜は完全にこちらを向いて、低い唸り声をあげた。
「グルル・・・」
続いて吠える。
「ガガ、ガガァァ」
恐竜から疑問と戸惑いのイメージが頭に流れ込む。
「ガガァ、ガガッ、グガガ、グガガ」
“殺ス”というイメージが聞こえる。
その時、俺の口から出たのはひどく間抜けな声だった。
「ひぃあぁぁー！」
2匹はこちらに向かって来る。
「うわっうわっ、うわぁーっ！」
裏返った声は意識とは別に絞り出される。
なおも後ずさりするが、ちょうどそこにあった岩にぶつかり下がれない。
その岩にも気づかない俺の手に何かが触れた。
1本の丸太だった。俺の太もも位の太さで4m程ある。持つと意外

と軽い。
俺は慌ててそれを小脇に抱えて立ち上がろうとしたが、1頭がそのまま突進して来る。
立ち上がりながらも思わず目をつぶる。丸太を通して重い衝撃が伝わって腰が落ちる。
丸太の端が岩に当たる。その後はスローモーションだった。
丸太の先端が恐竜の腹に突き刺さる。
恐竜の突進した凄まじい勢いで押されるが丸太が岩にあたり、恐竜を串刺しにしたまま垂直に立った。
丸太を抱えたまま何もできない俺に大量の血が降り注ぐ。
粘つく液体で俺の体は赤く染まった。

スローモーションが解けるように丸太は横倒しになり、凄まじい振動を腕に感じた。
慌てて丸太を引き抜く。
もう一匹の恐竜は、一瞬ポカンとした顔をしていたが、すぐに恐ろしい目に変わる。
おれは対峙したまま丸太を構える。串刺しになった恐竜はピクリともしない。
馬車の辺りから何か聞こえた。人間の声だが聞き取れない。
誰かいる！目を向ける間もなく、頭に鮮明なイメージが流れ込む。
「左から来るぞ！」
左を見ると2頭、その後ろから更に3頭がこちらに向かってくる。
冗談じゃない！
馬車に目をやると何かが動いている。
俺は丸太を振り回した。突っ込んできた1頭の頭に当たると、そいつは思いがけず倒れた。
他の恐竜は足を止め、倒れたやつも首を振りながら立ち上がり、ややふらついている。
結局6頭もの恐竜を目の前にしている。

やつらも勝手が違うという様子で低く唸っている。
おぼろげなイメージ「ナゼダ？」
またもや馬車からの声と共にイメージ。
「左端、こちらから当てる。それを狙え」
と、馬車から何か飛んだ。馬車から最も近い1頭の頭に何かが突き立った。
しかしダメージを与える程ではなく、大きく唸って馬車に頭を向けた。
ここか！俺は思い切り左端の1頭に向けて丸太を振った。
恐竜の首は異様な方向へ曲がり、音を立てて倒れた。立ち上がる気配は無い。
すぐに丸太を右へ振る。もう一頭の顔をかすめ、悲鳴のような声が上がる。
俺は丸太を抱えなおし、腰を低く落して構えた。
横たわって動かない2頭、今の一撃で顔に傷を負った1頭、少しふらついた一頭、ノーダメージの3頭、にらみ合い。

突然、恐竜たちは“帰ル”というイメージを残して去っていった。
恐竜たちが視界から姿を消すまで動けなかった。恐竜達は谷の奥に広がる森へ入ったようだ。
一気に力が抜けて丸太を落すと意外に重い音を立てた。
俺はむせ返るようなヘモグロビンの臭いを感じながら腕をほぐすように曲げ伸ばしする。

「ありえねぇ」そう考える事すら忘れていた。

時として確認よりも対処を優先する場合がある。今がそうだ。

フラフラと馬車にむかう。そこに誰かいるはずだ。
横倒しになった馬車に近づくと、馬が2頭死んでいた。2頭とも首

が無い。
馬の下から人間の足も突き出しているが、どう見ても生きてはいないだろう。
さっきの異様な戦いで感情を失ってしまったのだろうか。何も感じなかった。
幌が掛かった荷台に目を向けると1人這い出してくる。
負傷しているようだ。かなり消耗しているのか肩で息をしている。
人に会えたというのに感情が動かない。
茶色の髪をうなじで束ね、青い布を額に巻いている。
顔を見ると俗に云うイイ男だ。
体にぴったりとした黒いシャツ、左胸には三角形の青い胸当て。
ポケットの無いカーゴパンツのようなものを履いている。
俺が近づくとその男が見上げる。

俺はどんな顔をしていただろう。

2－2　混乱

青いバンダナと胸当て。俺の前にいる男は誰だ。
男はハッとして地面に座り込み、何か言った。
聞いたことも無い言葉。
聞こえたと同時に頭にイメージが湧く。
「助かりました。ありがとうございます」
男はそれだけ言うと下を向いて息を整えている。
「もう少し休めば歩けます。水をお持ちですか？」
俺はその若い男から目を離さずにリュックからスポーツドリンクを取り出して手渡した。
手渡されたボトルをしばし見つめ、俺を見上げ、またボトルを見る。
少し飲んで驚いた顔をしてつぶやく。
「うまい」というイメージ。
半分ほどを一気に飲んだ。返されたボトルを「全部やる」と言って手渡す。
男は一瞬戸惑ったが、礼を言って受け取った。
全身の力が抜けたように頭と肩を落して、「ありがとうございます」と繰り返した。

残りを飲み干すと、苦痛に顔をゆがめながら立ち上がって、右手を左肩にあて、少し頭を下げて名乗った。
「私はグリファ国、ルーフェンの郷、ティラント家の家臣、ジュノ・ガクレイと申します」
何だそりゃ。聞いたこともねぇよ。今さら驚きゃしねぇけどな。
夢にしちゃイイ出来だ。俺の想像力ってのは中々のものだろう。
ジュノと名乗った男は、もうスタスタと歩き始めた。かなり深手を

負っていたようだが・・・
俺の疑問を察したのか、「私は水の属性ですから」と意味不明な説明を付け加えた。
ジュノは３０ｍほど離れて横倒しになっている他の馬車に近づき、崩れるように膝を着いた。
後ろから近づくと「何たる事・・・」と呻いている。絞り出すような声だ。
背後からのぞくと、これ以上は無いという惨状だった。
３台の馬車の周囲に人間の死体が折り重なっている。
恐竜が３頭、横たわっていて、１頭は息があり脚が空を掻いている。
ジュノは素早く、そして無造作に止めを刺す。
死んでいるのは、ざっと見て３０人くらいか。ジュノと同じ服装で、青い肩当をしている。
ほとんどの死体は頭がなかった。腹を食い破られた死体もある。
ジュノは立ち上がって振り返ると「我らが無能でした。親衛隊は全滅です」と言い捨てた。

彼は少し思案していたようだが、「私は帰らねばなりません」と言って、俺の顔を見つめた。
俺は困った。現実なのか夢なのかを考える時間もなかったし、その点では頭がまるきり働いていない。
今、俺にあるのは単に恐怖だった。
痛みや苦痛、恐れ、不安から逃れたいという気持ちだけだった。
また、それを冷静に見ているもう一人の俺がいる。

俺が無言で突っ立っているとジュノから声とイメージが伝わってくる。
「まずは安全なところまで急ぎましょう」「またベナプトルが現れるかもしれない。次に襲われたら防ぎようがありません」
ベナプトル？さっきの恐竜のことか？

「こんなところまで出て来る事は考えられない。あの数、それに戦闘的すぎます」「とにかく急ぎましょう」
そう言われると恐竜がどこからか飛び出してくるんじゃないかと思えてきた。

ジュノは恐竜が去った森の方向へ足を向けた。
「おいおい、そっちでいいのかよ！」
「敵はベナプトルだけではありませんから」
少し歩くと崖の陰に1台の馬車があった。馬も御者もいないが、馬車は壊れていないようだ。
「馬と御者は逃げたのか？」
それを不自然に感じながらジュノが馬車を確認する。

「こちらへ」
俺が近づくと手にした甲冑のようなものを俺の胸にかざす。
「私と同じくらいですね、これで良いでしょう」
甲冑は胸側と背中側に分かれていて、肩の部分をベルトで、脇は紐で固定するようだ。
甲冑といっても大袈裟なものではなく、へその辺りまでしかない。
カレー皿を被せたような肩当てもついている。
ジュノは俺に甲冑を着けさせ、篭手（こて）も着ける。
何となくそれらしい格好になったのだろう、ジュノは初めて笑顔を見せた。
思っていたより若いようだ。２０歳そこそこに見える。
続いて剣と刀を馬車から降ろす。剣も刀も鞘ごと甲冑に装着できるそうだ。
剣は背に、刀は甲冑の下に伸びている皮の筒に通す。
ジュノは自分の装備をつけ始める。なるほど手際が良い。
見とれつつ背中に装着した剣の柄を握って腕を伸ばす。
少し上に動くがそれ以上は抜けない。

色々動かして、柄を手前に倒すようにしたらスルリと抜けた。
見た目より軽い。片手で自由に振り回せる。
ジュノが驚いた顔をしている。
「あり？これはどうやって鞘に戻すんだ？」
あたふたしていると、ジュノが俺の右肩から前に垂れた金具を引いた。
背中の鞘が上がり右肩に鞘の口が見える。
鞘の口には縦に切り込みがあり、そこに剣を添えて引くと切っ先が鞘に入る。
後はそのまま剣を押し込みつつ立てれば鞘に納まる。
「抜くときも金具を引くと抜きやすいですよ」
「まぁ、そんな抜き方をするのは訓練中の新兵くらいですから、あなたのような方がする事では・・・」
「おぉ！確かに抜きやすい！」
はしゃぐ俺を見て、あきれつつも微笑むジュノ。
何度か抜いて戻しをを繰り返し、次は刀に手を掛ける。刀といってもサーベルのようなものだ。

剣道部に所属していた俺は監督に日本刀、といっても模擬刀だが、抜かせてもらった事がある。監督は居合いの段持ちで、道場の会員募集の一環らしい。
興味を持たせるのが目的なのだが、その前に抜き方の指導をしてしまう。
しかも厳しくやってしまうので会員は増えない。あの監督の悪い癖だ。

今、それを思い出しながら刀を抜く。
刃を上向きにして鞘を持った左手首を内側に捻る。親指で鍔の部分を少し押して柄を握った右手は肘を意識しながら右へ払うように抜く。

右へ払って上段から振り下ろす。刀を鞘に戻すと強い視線を感じた。
ジュノが険しい顔で俺の手許を見ている。
「どうした?」
ジュノは目を逸らした。
「いえ、何でもありません。急ぎましょう」

親衛隊の死体の山を過ぎて、ジュノがいた馬車に戻ると。ジュノは
30センチくらいの細長い箱を馬車から取り出し、甲冑を緩めて胸
側に入れる。
ちらと見るときらびやかな装飾が施されている。ジュノの動きはど
ことなく俺を避けているようで、その箱が何なのかは聞かなかった。

『そういえば』
2人が同時に声をあげた。ジュノが俺に譲る。
「さっきの甲冑とかが積んであった馬車だけ襲われなかったのはな
んでだ?」
「馬車には武具しか積んでいませんでした。襲う対象がいません」
「馬も御者もいたんだろ?どこへ行った?」
ジュノは少し考えて「・・・判りません。逃げたとしか考えられま
せん」とだけ言った。
そして、補うように説明を始めた。
「一行は馬車5台、私は先頭の馬車に、親衛隊員は3台、最後に武
具の馬車と連なっていました。森を出て少し経つと、武具を積んだ
馬車の車輪が壊れたので我々だけ先行したのです」「そこを襲われ
ました。武器があればあれほどたやすく全滅する事はなかったでし
ょう」
「もうすぐ我が郷の領地になりますし、この地の豪族とは友好関係
にありましたので安心していました・・・まさかベナトプルが」
ジュノはまだ何かを考えているようだった。
「そういえば、俺にに何か聞きたいじゃないのか?」

ハッとした様子でジュノは、俺の名前を聞いた。
「よろしければ教えてください」
名乗らない俺が無礼なのに慇懃な聞き方をする。

俺は慌てた。ジュノが名乗った時になんで名乗らなかったのだろう。
木久蔵の蔵と言いそうになって、こいつは木久蔵なんて知らねぇ！
と気付いて止めたが、木久蔵だけ伝わった。
「キクゾーさんですか・・・良いお名前ですね」
「イヤ、それは違・・・」
俺が言い直そうとすると、ジュノが大声をあげた。
「まさか・・・そんな事が・・・。しかし・・・荷馬車から馬を外して逃げるなんて無理だ」
ジュノは握り締めた拳を口に当ててなおも考えを巡らしている。
「おい、どうしたんだよ、俺の名前・・・」
「キクゾーさん、申し訳ありませんが急ぎます！」
「だから、名前が・・・」

俺はジュノを追いかけるように走り出した。

2－3　警戒

走るジュノのスピードはかなり速い。
俺も走るのは速い方だが、速すぎる。置いて行かれてはたまらない。

しかし、走り出した俺は思わず声をもらした。
「おぉっ!?」
体が軽い、息も楽だ、ジュノに追いついていける。もっと速く走れそうだ。
ジュノに声を掛けようとしたが、あまりに思いつめた顔をしているのでやめた。
ジュノは時折振り向いて、その度に驚いた顔を見せた。
しばらく走り続けるとさすがに息があがる。ジュノの息もかなり荒くなっている。
ジュノは川のそばで立ち止まり、川を指差して言う。
「これから我が領主に会っていただく事になります。失礼ですが血で汚れてますので、体を洗っていただけますか?」

違和感。
俺が領主に会う必要なんてあるのか?
しかもあれほど急いでいたのに・・・。

戸惑っていると、ジュノは「お願いします」と言って頭を下げた。
まぁ、いいだろう。
俺が考えたところで何か分る訳でもないし、ジュノがいなけりゃ何にも出来ないしな。
剣と刀、甲冑を外す。
トレッキングシューズと靴下を脱いで川に入る。
川は膝くらいの深さで、冷たいが震えるほどではない。

ナイロンのシャツとカーゴパンツを脱いで、ジャブジャブと洗う。
たちまち川の水は赤く染まった。
絞って川岸の岩に広げた。パンツだけになった俺はタオルを手にまた川に入る。
髪に着いた血が固まってカチカチだ。指でほぐす様にして洗う。
タオルで体を擦っていると、背後にザブザブという音を聞いて振り返ると、ジュノが近づいてきた。

「どうした？顔でも洗うのか？」
ジュノは答えず、素早く動いた。
体を沈めるようにして一歩踏み出しつつ刀を抜く。
刀は翻って俺の喉元に。

「あなたは非常に危険な人だ。一体、何者ですか？」
刀を突きつけられながらも俺は何故か落ち着いていた。
ほんの少しの時間しか一緒にいないが、ジュノは信用できる奴だと思う。
生真面目な奴だ。恐らく真面目すぎるぐらいだろう。
ジュノの役目は何となく判った。親衛隊とか言っていたしな。
川で体を洗わせたのは武装解除する為だろう。

「俺にも解らないんだよ。何でこうなったのか」「地下を彷徨って気が付いたらこの世界にいたんだ」
「地下を・・・」
ジュノの目から冷静さが消えようとしたが、かろうじて留まった。
「この世界？あなたの国は？」
「日本だ」
ジュノはなおも考えているようだ。
「最初は井戸から落ちた。地面が歪んで落ちたんだ。死ぬはずだったんだ、本当は」「でも生きてここに居る」

「この世界、私が知る限りニホンという国はありません」
「分ってるよ、そんな事。俺がいた世界にあんな化け物はいないし、俺が落ちた井戸の周りでこんな風景の場所はないよ。これだけ走っても人家すらねぇし」

突然、ジュノは膝を着く。胸まで川に浸かって詫びた。
「申し訳ありません。助けていただきながら邪推して・・・」
命の恩人に刀を向けるなど・・・
「いいよ、何か任務があるんだろ。個人の事では済まないんだろうし」
ジュノの背中がビリッと震える。
「大体、俺だってこんなところでジュノに放り出されたら捨て犬同然だしな、ハハッ」
ジュノの肩が揺れている。
「体が冷えるから川からあがるぜ」
岩の上に腰を下ろすと、陽に暖められて気持ちが良かった。
ジュノは少し離れた岩に腰を下ろして俯いている。
沈黙に耐えられず、俺は生乾きのシャツとカーゴパンツを着た。
シューズを履くとグジグジする。まぁ、仕方ないだろう。
甲冑を着けようとすると素早くジュノが手伝ってくれる。剣と刀もジュノが装着する。
「いいのか？剣と刀？」
「大丈夫です。あなたは」
「そうか、ありがとう。じゃ、急ごうか。腹が減ったよ。何か食いたい」
ジュノは救われたように笑顔を見せ、「街についたら食事を準備させます」と言った。
「ありがたい。じゃ、急ごうぜ」
「少し飛ばしますよ。遅れないで下さいね、キクゾーさん」
ジュノは走り出す。

「あー忘れてた！おいおい、ちが・・・ふぅ、落ち着いたら訂正しよう」
俺も走り出した。
とりあえず落ち着いたら考えよう。色々と。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

5分ほど走っただろうか。ジュノは急に走るのをやめ、俺の背中を押すと繁みに身を隠した。
「何者か来ますよ」
確かに地面を叩くような音がする。馬だ。
疾駆する馬が近づき、突然ジュノが飛び出した。
手綱を引かれ馬が立ち上がる。
「リシア副長！」
黒い胸当てをした30歳台と思われる男は馬上から「ジュノ殿！」と叫ぶと、馬から降りて膝を着く。傷を負っているようだ。
ジュノは馬の手綱を引き、リシアと呼んだ男に肩を貸して繁みまで連れて来た。馬は繁みの奥に繋ぐ。
リシアは俺に気付き、「ジュノ殿、このお方は？」
ジュノはリシアの傷をから目を離さずに答えた。
「異人です」
「え、異人？」聞いたのは俺だった。
「あなたのように違う世界から来た人間が稀に現れるのです。そういう人間を異人と呼んでいます」
「リシア殿、状況をご説明願えますか」
リシアは俺を見て戸惑っているようだったが、ジュノが「この方は大丈夫です」というと、説明し始めた。
「本日早朝に正体不明の軍から攻撃を受けました。守備隊は壊滅。領主様や一族は捕らえられました」「このまま郷に戻っては捕らわれるだけです」

ジュノの郷、ルーフェンが落ちた。
ジュノは知っている事を確認したように穏やかに受け入れた。
これだけの大事を前に、ジュノは非常に落ち着いていた。それが俺には理解できなかった。

「我々も武器がない状況で襲われました。１０頭のベナプトルに。私以外は全滅です」
「全滅？親衛隊が全滅！？」
リシアは絶句した。
「それにしてもベナプトルが１０頭とは、それに全滅させるまで襲うなど考えられない・・・」
「事実です。非常に戦闘的で、喰う為ではなく殺すために襲ったようです」
「何者かがコントロールしていたとしか考えられませんが、ベルサ郷でしょう」
ジュノは木箱から巻物を取り出すとリシアに見せた。
「これがベルサ郷から託された同盟の密書です。中は・・・」
ジュノが巻物を払うように広げると何も書かれてはいなかった。
「やはり、ベルサの謀略です」
「ではベルサ郷に滞在している大臣や随行した軍の者達は・・・」
「もはや生きてはいないでしょう・・・」

ベルサ郷はルーフェン郷に同盟を申し入れ、様々な交渉の末に同盟は成った。
同盟の調印にはベルサ領主がルーフェンを訪れるというベルサ側の申し出は、同盟を申し入れた側とはいえ一歩引いた姿勢だった。それだけに交渉はベルサで行うという要求もベルサ領領主の威厳を保つという意味で無理なものではなかった。

2－4　異人

この世界は戦いの世界だ。しかし、謀略での勝利。
ベルサは大きな力を背景にしているのか、または手段を選ばない戦いで拡大路線を選んだのか。
どちらにせよ一事は万事を刺激せずにはおかない。
戦乱の予感。

ジュノは目を薄くし、引き締めた口元から、リシアに説明を続ける。
「私も死ぬところでしたが、この方に救われたのです」「この方はベナプトルを2頭仕留めています」
「なんと、たった1人で2頭も！」
「しかも1頭は突き殺して跳ね上げ、その血を浴びました」
「・・・！！」
リシアが声にもならないという顔で俺をみる。
「あぁ、あの血は参ったよ。ぬるぬるして、生臭くてな。ま、血なんだから当たり前か。まだ臭うか？」
リシアが言おうとした事をジュノが説明する。
「この地には伝説があるんですよ。『竜獣を切り裂いて、天からの血を最初に浴びた者は絶大な力と不死を得る』という伝説が」
「へぇ、伝説かぁ」
「その昔、ベナプトルは人間にとって抗い難い存在だった頃の言い伝えでしょう。ベナプトルを捕らえては、その血を浴びたという王や領主の記録もあります」
「不死か・・・。でも、俺は腹が減って死にそうだぜ？」
ジュノとリシアは弾けるように笑うと、まずは敵の勢力圏からの脱出を算段した。

まだまだ危険な状態にある。肌で危機を感じている。

異世界、郷の滅亡、俺も彼らも落ち着いた時と場所が必要だ。
その時に改めて身に降りかかった不幸を直視する事になるのだろうか。
今は身の上を嘆く暇も無い。
「あの、キクゾーさん？」
「キクゾー？」
「あ、この方はキクゾーさんとおっしゃる方なのです」
「おぉ、いかにも異人という感じのお名前ですな」
「いや、その名前は・・・」
「キクゾーさん、これからは逃亡生活となります。できるだけ目立ちたくないので・・・その、心苦しいのですが、偽名を使って頂けませんか」
「偽名もなにも、俺はキクゾーって名前じゃねぇよ」
「えー！だって・・・」
「ジュノが勘違いしたんだよ。ま、その後は訂正する暇もなかったし」
「俺は蔵人（くらと）って言うんだ。クラト・ナルミだ」
「クラトさんでしたか、クラウドとかクロットという名前は一般的ですから大丈夫でしょう」「クラトさん、改めてよろしくお願い致します」
「私はリシア・ヌマーデと申します。第三軍の副長をしておりました。あなたの様な武人にお会いできて光栄です」
「武人か・・・ま、実際はサラリーマンだけどね」
「ま、その辺の細かい事情はおいといて、まずはの脱出経路を考えましょう」
「ジュノ殿、郷が敗れたからには国内には居場所はありません。南へ郷を出てから西へ。まずはカピアーノ様のところへ身を寄せて下さい」
「では行きましょう、クラトさん」

馬を引いて来たジュノが促す。俺はすぐに立ち上がった。
リシアは身を横たえた。傍らにはジュノの水筒がある。
2人は挨拶を交わした。
「では、お気をつけて」
「はい、リシア殿、安らかに」
俺は、えっ?と振り返った。
リシアは死んでいた。さっきまであんなに元気だったのに。
「なんだ・・・?」
「リシア殿の傷は深く、治癒はできませんでした。私には痛みをやわらげるくらいしか・・・」
「じゃ、死ぬって分ってたのか?ジュノも、リシア本人も?」
「はい。・・・行きましょう。我々はまだ危機の中にいるのですから」

なんてこった。こいつらには涙が出る。
死ぬと分っていて、あれ程普通にふるまえるものなのか。
俺は親衛隊の死体を思い出していた。逃げ散りもせず、最後の1人まで戦ったのだろう。
だからこそまともな武器もないまま3頭のベナプトルを仕留める事が出来たのだろう。
サムライだな。こいつらの本性は。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

俺とジュノはカピアーノ博士の元へ逃れる事にした。
ジュノはカピアーノ博士と親交があり、だいぶ世話になっているらしい。
詳しくは到着してから聞く事になるのだが、エナルというものについて簡単な説明を受けた。
この世界にはいたる所にエナルというものがあるらしい。エナルは

物質ではないが、人間の脳神経と精神に影響され思考を伝達する作用がある。
この世界の言葉が、耳では意味不明であっても、エナルによって脳神経に直接イメージとして伝わるのだそうだ。
そして、エナルを利用して力を増幅させる事ができる人間がおり、エナルダと呼ばれる彼らは、その多くが武人として活躍をしているようだ。
エナルには空気・土・水・火の４種の属があり、どの生物も個体ごとにいずれかの属が生まれながらにして決まっているらしい。
つまりは血液型みたいなものだ。そしてジュノは水の属なのだそうだ。特徴としては治癒回復力に優れているらしい。
そういえば、初めて会った時にそんな事を言っていたな。

酔狂で乗馬を何度か経験しておいて良かった。
馬をつぶさないように交互に走ったし、周囲を警戒しながらの移動で、気持ちにも余裕が無いせいか、思考はまとまらなかったが、エナルというものは解った。
どうして話している内容がイメージで入ってくるのかという疑問も解消できた。

しばらく走るとジュノは立ち止まり、俺を待たせて林の中を探っていたが、やがて戻ってきた。
「大丈夫です、行きましょう。ただ、カピアーノ博士は留守のようです」
「どうして分かる？」
「侵入者を警戒する仕掛けがあるのです。そして、博士が外出する時の仕掛けもありました。だから留守です」
「私に着いて来て下さい」
ジュノは道からそれ、Ｓ字を描くようにして進んだ。
仕掛けとやらを躱（かわ）しているのだろう。

やがて、建物が見えた。それは森から抜けると突然現れたように存在している。
ジュノはどこかへ走って行き、戻ってくると、正面の入り口ではなく、建物の端にある小さな扉のカギを開けて建物に入った。
「ここは資料室ですよ。廊下を通って建物の反対側がキッチンです。いまスープを温めてきます」
ジュノは戻ると、俺に椅子を勧め、自らも腰を下ろして、深く息を吐いた。
顔には疲労の色が見える。

少し俯いていたが、不意に俺を見て訊いた。
「クラトさんの世界はどのような世界だったのですか?」
「まぁ、ここよりは進んでるな」
「進んでる?」
「進んでるって表現が正しいか知らんけど、馬車とかは使ってないよ」
「自動車・・・んー、燃料を燃やして・・・動力を得るエンジンってので走るんだ。エンジンで船も動かすし、空も飛べるんだ。・・・分る?」
「内燃機関ですね」
「そう、それだよ・・・って、なんで知ってんだ?」
「実は私も異人なんです。１４年前にこの世界に来ました」
「なぬぅ!なんだよ、散々俺を異人扱いしてたくせに!」
「すみません。でもこの世界に来た時は子供だったので、この世界の人間みたいなものですよ」
「そうだったのか・・・。で、ジュノの世界はどんな感じだったんだ?」
「惑星間戦争が起きていました」
「へ?わ、惑星間戦争!?」
「当時１０歳だった私は戦火を避けるため、保存惑星に逃れました。

保存惑星とは自然のままに保つと決められた惑星です」
「その惑星で私と友人の１２人は不思議な体験をしました。地面が歪み、谷に落ちたのです。洞窟を彷徨ってこの世界に辿り着いたのは私を含め３人だけでした。この世界で３日を過ごした時、私以外の２人は眠ったまま息を引き取りました」
「地面が歪んで・・・洞窟を彷徨ったって、俺と同じじゃんか」
「それから森を彷徨い、倒れていたところをカピアーノ博士に救われ、軍人のタレス将軍に武人として育てられたのです」「この世界は私達の惑星より重力が少し大きいので苦労しました」
「そうか、俺の世界はここよりかなり重いな。空気、というか酸素・・・わかる？」
「はい」
「酸素が多い気がする。呼吸がすごい楽なんだ。だから俺がこんなに怪力だし、走るのも楽なのか？」
「そうかもしれません」
なんだ。そういう事か。特別な力って訳でもないんだな。
少し残念だがほっとした。

「そういえばクラトさんが這い出したという丘から２０年以上前にも異人が現れたそうです」
「他にも異人は現れていますが、その異人は何とか元の世界に戻ろうと何度も東の丘へ行ったそうです。しかし、何の手掛かりも得られなかったそうです」

（ドクン！）俺の身体が脈打つ。

「その異人は元の世界に戻ることを諦めましたが、エナルについて研究を重ね、カピアーノ博士と協力して研究結果を１冊の本にまとめたのです」

「彼は自分の世界から誰かが来た時の為に元の世界の言葉で研究結果を翻訳した本も残しています。当然ながら私には読めません」

（ドクンッ！！）強まる鼓動を抑えながら、俺はある事を考えていた。

「その男は今どうしてるんだ？」

「7年ほど前に北へ旅立ちました。エナルの研究を続けたいと言って」「帰ってくるとも何とも言わず、ただ深く感謝の気持ちだけを伝えて去って行ったらしいのです」

「らしい？」

「はい。見送ったのはカピアーノ博士だけでしたから」

「そうか・・」

２０年以上前・・・、俺が来た丘から・・・・、違う世界から来た人間・・・

2―5　世界

２０年以上前に現れた異人。その異人は俺と同じ丘から現れたと言う。

俺の鼓動はどんどん高鳴っていった。
「その人の名前は!?」
「ジョシュ・ティラント。元の名前は聞いていません」
「そうか。で、その翻訳した本は?」
「ありますよ。もとよりクラトさんに見てもらおうと思っていたんですから」
ジュノは奥の棚から1冊の本を取り出した。それは表紙に見たことも無い文字が書かれていた。
「表題はこちらの文字ですよ。エナル研究の異人文字への翻訳としてあります」
「そ、そうか」
俺は期待しているのか。地球の人間が・・・もしかすると・・・。
ジュノも俺の手許を見つめている。
ガバッと本を開く、ジュノの視線が俺の手許から顔に移る。

「読めねぇ～!」
日本語どころかどう考えても地球の文字じゃねぇよコレ。
そりゃ、全ての文字を知ってる訳じゃないが、明らかに違うよコリャ。
ジュノは残念そうだ。
俺はむしろ、ほっとしていた。
もし・・・もしもだ。日本語で書かれていたら、俺はおかしくなってしまうだろう。
何を置いても追いかけていた。北へ。

そして必ず不幸な結果になっていただろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「さ、スープとパンしかありませんが、このスープで全ての栄養は摂れます」

置かれたボウルを見ると、ドロリとした青い液体が湯気を立てている。

その青は青と緑の絵の具を混ぜたような鮮明なパステルカラーだ。

知らんのか？地球人にとって青は食欲減退色なんだよ。

「さ、食べてください。食べながらで失礼ですが、質問があればどうぞ」

「早速聞きたいんだが、このスープは大丈夫なのか？」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

この世界は国に分かれてはいるものの、国が直接管理しているのは首都および軍事・経済上、特に重要な都市や地域だけです。

それ以外の地域は外地と呼ばれています。そして郷と称され領主が統治しており、政治経済軍事ともに独立しています。

「江戸時代の幕藩体制みたいなもんか・・・」

バクハン体制？

「あ、俺の国でも数百年前は同じような体制だったんだよ。新しい制度を推す勢力に取って代わられた。世界が広がるのに対応できなかったんだな」

確かにこの体制は不安定なのかもしれません。郷は勢力争いに明け暮れ、国の関心事は保身ばかりです。

通常において郷と郷の戦いに国はノータッチです。どの郷であろうと国家の領土に違いはありませんからね。

ただ、あまりに力を付けた郷は国から危険視されます。国から姻戚関係や重臣の派遣を迫られたり、滅ぼされて国王の一族が領主となるケースもあります。

国境にある郷は隣国からの攻撃に対する防波堤的な役目も求められますので、比較的大きい軍事力を認められていますが、常に危険視され、監視されています。

郷の外交は国家のそれと同じですが、軍事同盟は禁止されています。ルーフェンとベルサは郷の中でも強大な郷です。力を併せれば小さな国家位にはなるでしょう。今回は単なる平和条約ではなかったはずです。

ルーフェンもベルサもグリファ国に属していますが、ベルサは北端にあって隣国クエーシトに接しています。クエーシトは領土も狭く、国力は小さいので、国境の郷にありがちな苦労はベルサにはありませんでした。ただ、南は強大な郷のルーフェンがあるので、ベルサは領土を広げる事ができません。

もしかするとルーフェンを危険視したグリファ国が関与しているのかもしれません。

「どういう事だ？」

ジュノは、あくまで推測であると断った上で、断定的な表現を使った。

「グリファ国で一番強大な郷は我らの郷、ルーフェンです。ただ、近年あまりに力を持ちすぎた感がありました。グリファ本国政府の懸念は大きい」

「ベルサは強大といってもルーフェンよりは数段下です。グリファ本国は他国に接しているベルサを補強し、強大になり過ぎたルーフェンを滅ぼしたのです。恐らくはグリファ王の一族からルーフェンの領主が出るでしょう。バルサとも縁戚関係を作るはずです」

この世界は、どれほどの国があるんだろう。その国はすべて多くの

郷を抱えているのだろうか。この世界・・・惑星はどのくらい大きいのだろう。

青の絵の具をぶちまけたようなスープは思いのほか美味かった。スープとパンの食事が済むと、一気に眠気に襲われる。
ジュノも眠そうだ。２人ともが自分が起きているから寝て良いと言っていたが、２人ともテーブルに突っ伏して寝てしまった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

目を覚ますと、尿意を催す。眠っているジュノを起こさないように、そっと外に出ると森に入り用を足す。
チャックを引き上げると、視線を感じた。
振り向くと１匹の犬がこちらを見ている。その目は理性と知性を感じさせる瞳が鳶色に輝いていた。
シェパードのような姿をしているが、ただの犬じゃない。それだけは判った。

犬は胸を反らせるようにして、低い位置ながら見下ろすような目で吠えた。
「オマエハ誰ダ。ナゼ我ガ主ノ住処カラ出テキタ？」
頭にイメージが流れ込む。そういえばベナプトルの時もそうだった。
しかし今回は鮮明なイメージだ。
俺は犬に話しかける事を戸惑った。
「主ニ仇ナス者ハ許サナイ」
犬はスタスタと近づいてくる。その様は尊大にさえ見えた。
「こいつは・・・」危険を感じた。
それは善悪などの性質ではなく、力、戦闘力に対してだ。
犬は約４メートルまで近づいてピタリと止まる。
「オマエ“力”ヲ持ッテイルナ？・・・私ト同ジ“力”ヲ」

エナル?説明されたアレか。エナルってのはその辺に漂っているんだろ?持ってるってどういう事だ?
ま、とにかく同じってんだから、仲間って事で納めようじゃないか。
「俺とお前が同じなら争う道理はないだろ。俺はお前に危害を加えるつもりはない」
「何ヲ言ッテル?同ジ“力(エナル)”ヲ持ツナラ・・・益々生カシテ置ケナイ」
「オマエハ危険ダ」
なんだこの犬?考える間もなく、姿勢を低くした犬が跳ぶ。
「うぉっ!?」思わず体勢が崩れる。
しかし、犬は俺の体を踏み台にするようにして2メートルほど横に着地する。

「友達ノ匂イダ、友達ノ匂イ、ジュノ、ジュノ、ジュノ」
犬は尻尾を振り、脚を小刻みに踏んで嬉しさを表現している。
なんだコイツ?ジュノを知っているのか?
「ジュノ、何処?何処ニ居ル?」
「ジュノは資料室に居るぜ」
「遊ブ、ジュノト遊ブ」
「じゃ、呼んでくるよ」
「オマエ、イイ奴、ジュノノ友達。私ト友達。イイ奴」
何だか普通の犬になってる。言葉も片言になってるし。
ま、普通の犬は喋らないけど。
俺が資料室に戻りながら振り向くと、前足をしきりに動かして催促している。

ジュノを早く起こそう。喜ぶだろうか。
ジュノは、今は無きルーフェンの親衛隊第一隊の隊長だ。
しかし犬と戯れる姿は剣を振るうよりもヤツに似合ってる気がする。

2－6　オルグ

あの犬はジュノに似てるな。さて、ジュノは寝起きが良い方か？

資料室に入るとジュノは消えていた。

ジュノが突っ伏していたテーブルに積み上げた本も、スープのボウルもそのままだ。

キッチンに行ってみたが居ない。資料室とキッチンの間の廊下には幾つものドアがあったが、全てにカギが掛かっている。キッチンから外に出るドアも同様だ。

俺は仕方なく資料室に戻り、少し考えたが、犬のところへ行った。

「なぁ、喜ばせておいて悪いんだが、ジュノが居なくなってんだよ」

「何故？ジュノ居ナイ？何処（どこ）？ジュノ、何処（どこ）？」

「分らない。どうして消えちまったんだろう」

「オマエ、本当ニジュノノ仲間ナノカ？」

「当たり前だろ。俺はなぁ、ジュノに助けられて昨日ここに着いたんだ。青いスープの食事の後、2人とも眠ってしまって、目が覚めたら朝だった。でもその時、ジュノはまだ寝てたぜ」

「青色スープヲ飲ンダノカ。ナラバ、ジュノノ仲間ダナ」

青色のスープで誤解が解けるとは・・・。

しかし、どうする？

「探ス。オマエモ手伝エ。一緒ニ来イ」

「あぁ、そうだな。でも、どうやって？」

「匂イデ分ル」

「そうか、オマエは犬だもんな」

犬は、ついっ、と俺の方を見ると、教師が生徒に教えるように吠える。

「言ッテオクガ、私ハ“ベルファー”ダ。“犬”デハ私ヲ識別デキ

ナイ」
「そうか、分ったよベルファー。で、俺の名前は聞かないのか？」
「オマエ　ハ　オマエダ」
「なんつー勝手な奴！クラトだ、クラト・ナル・・・おい、ちゃんと聞けっての！」
ベルファーは資料室に向かいながら振り向いて吠えた。
「大丈夫ダ、クラト。必要ナラ呼ブ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ベルファーは資料室からキッチンまでを2往復して、俺に指示した。
「鍵ヲ掛ケテ、鍵ハ水汲ミ場ノ砂利ノ中ニ隠セ」
「ここに置けばジュノは分るのか？」
「分ル、ジュノ、分ル。探ソウ、ジュノ」
また片言かよ。余程ジュノが好きなようだ。
「よし、行こうぜ！」

こうして俺とベルファーは、ジュノを探して森を彷徨う事になった。

ベルファーは森の奥へ奥へと進んだ。途中で方向を変える。
俺の方向感覚が正しければ、カピアーノ博士の研究所を迂回するようにUターンしているようだ。
やがて森を抜けると、砂地と草地が入り混じった場所に出た。
突然、視界の右端で何かが動いた。鈍い音と共にベルファーの体が宙に浮く。
俺の右側、ベルファーが居たところには毛むくじゃらの生物が居た。
危険を感じる。ベルファーを見た時と同じ危険と、違う危険。
戦闘力も性質も危険だ。

そいつの小さな目が俺を見上げた。

猪だ。猪の毛を長くしたような生物。
「フギィー！」
甲高くと鳴くと俺に突進してくる。横っ飛びで避けて、剣を抜く。
チラリと見るとベルファーは体を震わせながら立ち上がろうとしている。
丁度、三者が同じ距離。
俺と猪が同時に動く。ベルファーに向かって。
俺は剣をベルファーの傍の地面に打ち付けた。
猪は方向転換をして一気に１０メートルも避けている。
ベルファーが微かに吠える。
“オルグ”ダ。奴ノ識別ハ・・・ガハァッ！」
ベルファーが血を吐いた。
猪が唸る。嬉しそうに。
“ラヴェン０２”ダ。オマエ等ガ勝手ニソウ呼ブ」
俺は動けずにいた。打ち下ろした剣もそのままに。

剣の傍らから微かに聞こえる。
「済マナイ、油断シタ」
「元ハ只ノ猪ナノニ・・・余程強力ナ融合ダッタノダロウ」
意味がわかんねぇよ、ベルファー。
ベルファーはまた倒れた。
「おい、ベルファー、大丈夫か！」

「ヒィヒヒヒィ！犬ヲ突イテヤッタ！牙デ突イテヤッタ！」
「イツモ俺ヲ追イ回ス犬、イツモ俺ノ邪魔ヲスル犬！」
「人間ト仲良クシテ、褒メラレ、撫デラレル犬！」
ラヴェン０２と呼ばれる猪は、更に嬉しそうに唸る。
「モウ立テナイ、走レナイ、死ヌ！」
「俺ハオマエヲ喰ワナイ、毎日見ニ来ル、腐ル、骨ニナル、白イ骨ニナルマデ・・・ギィギィヒィヒヒヒィィ！」

ラヴェン０２はひとしきり笑った後、俺を見た。
その目は秘密を見られたような目つきだった。その目に暗い影が宿る。
「オマエハ犬ヨリモ嫌イダ」
いきなり突っ込んできた。ベルファーの前で構えて防御する。
跳ね飛ばされたラヴェン０２は、信じられないという目つきをした。
俺は、ベルファーを護るように剣を地面に突きたて、刀を抜く。
下段に構える。カウンターしかない。
剣道で下段に構える奴なんて見た事もないが。
さて、どう動くか・・・。
突っ込んできた。
突きを入れる直前で方向を変えたラヴェン０２はベルファーに向かった。
「ちぃっ、しつけぇ奴め！」
腕を伸ばして、思い切り刀を振ったが峰で打ってしまい、刀は折れた。
牙も少し欠けたようだが、ラヴェン０２は全く気にするそぶりも見せず嫌な笑い声を立てた。
俺は急いで剣を手にする。両手持ちで横に構える。
ラヴェン０２が突っ込み、俺の手前で右に跳ぶ。
剣の届く範囲の外側を走って、ベルファーに止めを刺そうと牙を向ける。
俺など最初から眼中にないのだ。
しかし、方手持ちで伸ばした剣は範囲を超えて伸び、ラヴェン０２の肩から腰にかけて切り裂いた。
ラヴェン０２は走り続けながら右へ傾き倒れた。
俺が近づくと、驚いたことにラヴェン０２は泣いていた。
グゥ、グフゥと声を上げながら。

見れば体中に傷がある。こいつも戦いの中で生きて来たのだろう。
何かしっくりこない気持ちが俺を満たしていった。

もう動かなくなった猪を置いて、ベルファーの傍に急ぐと、ベルファーは小さく尻尾を振った。
それが今できるぎりぎりの感謝らしい。
ベルファーは右腹に突き傷があり、骨も折れているようだ。

俺はベルファーを抱えて森に入る。とにかく戻らなければ。

2―7　休息

ラヴェン02に突かれたベルファーの傷は、深いが出血はそれほどひどくなかった。
何の知識もないが、とにかく出来る事をしなければ。

ベルファーの傷を洗い、近くにあった布を当てて固定する。骨が折れているので緩く縛る。
キッチンの戸棚を空けると、干し肉とチーズらしきものを発見した。頂いてしまおう。
ベルファーに干し肉をやると、しばらく口の中に含んでから噛み始めた。
チーズのようなものはとても塩辛くて食べられなかった。
ベルファーは俺の様子をみて小さく笑う。
敷いた毛布にベルファーを横たえ、上からも毛布を掛けてやる。
ベルファーは横に座った俺の足に頭を乗せて眠り始めた。暫くすると俺も眠りに落ちていった。

どれくらいが経ったのだろう。
目を覚ますと部屋の中は薄暗くなっていた。疲れか、寝たせいか、頭がぼんやりする。
喉が渇いてカラカラになっている。
ふと見るとベルファーの脇腹に右手を当てているジュノが居た。ジュノは左手で俺を制した。
俺は静かに立ち上がり、外に出る。
水汲み場に行くと血で汚れていた。森の中にあるこの場所の夕方は早い。
俺は水を流して血を洗い、水を飲んだ。
置いてあるカップに水を汲んでいきジュノに手渡す。

ベルファーは飲みづらそうにカップから水を飲むと、またぐったりした。
ジュノは何も話さない。重苦しい時間が過ぎていった。

暫くすると、ジュノが目配せをしてキッチンへ向かう。
ジュノは俺がベルファーを救った事に感謝した。ベルファーが言うように友達なのだという。
俺はジュノが最初に会った頃に比べてどんどん幼くなっていくように感じた。
話し方や行動がそう思わせるのだ。
ジュノが椅子を2つ出した。2人はお互いが報告する。
ジュノはラヴェン02を知っていた。
ラヴェンの森で発見されたオルグ。
オルグとはエナルが集合体となって大きな力を持った時に融合した生物を指す。
大抵は怪物と化してしまい、駆除の対象となる。
元々獰猛な生物、猛獣や竜獣（ベナプトル）などが融合した場合は、郷や国が協力して駆除に乗り出す。
ベルファーも同じ生い立ちを持ち、オルグといえるが、オルグは怪物と化した生物を指すので、ベルファーをオルグとは認識していない。
オルグ自体が非常に珍しい現象であるので、ある意味ベルファーが奇跡的な存在なのだ。
なるほど。ところでジュノはどこへ行っていたのだろう。

私が目を覚ました時、クラトさんが外へ出て行くところでした。
私は水汲み場へ行きましたが、ふと気になって南側にある侵入警戒の仕掛けを見に行ったのです。
そこで3人の男を発見しました。
この森は普通の人間が足を踏み入れるような場所ではありません。

軽装甲冑を装着し、三連射のボウガンと刀で武装していました。
この武装は強行偵察で良く使われるものです。
この3人と戦闘になったのです。
2人を倒しましたが、1人は逃げました。追って森の外へ。
繋いであった馬で逃げましたが、私も馬で追いかけ何とか仕留めました。
馬は森の中に繋いでおきましたし、装備は水汲み場の先にある物置に入れてあります。

「そうか、無事で何よりだ。むちゃくちゃ不安だったよ」「ここに放置されたら、ベルファーと一緒に、まさに捨て犬状態だっての」
「すみません。心配掛けちゃったみたいですね。でも、クラトさんが無事で何よりですよ。あのラヴェン02は頭が良いうえに機敏ですから中々駆除できなかったんです」
「あいつ、死ぬ間際に泣いてたぜ。ベルファーと人間の関係を羨んでいるようだった。死ぬ事よりも境遇を恨んでいるような感じだったよ」「駆除か・・・何だかスッキリしねぇな」
「でも、何人も犠牲者が出ていますからね。致し方ないでしょう」
「クラトさんは優しいですからね・・・でも、この世界では優しさが致命的な結果となってしまう事も多いですから。敵に情けは禁物ですよ」
「あぁ、分ったよ。気を付ける」
「ベルサの強行偵察はルーフェンの残党狩りでしょう」
「ここが見つかったんじゃないのか?」
「装備を見ましたが、馬には携行食糧が大量に積んでありましたから、5日以上の偵察です。数日は帰還しなくても不審には思わないでしょう」
「とりあえず数日は大丈夫って事か?」
「はい。でも明後日にはここを出ましょう」
「カピアーノ博士はどうするんだ?」

「大丈夫です。あの方はグリファ本国から招聘されるほどの人物ですし、政治には一切関与していませんから」
「そうか、じゃ、今日はゆっくり休もうぜ」
「えぇ、ベルファーも明日になれば、かなり動けるでしょう」「風呂を沸かしますからどうぞ」
「風呂が何だかすごい贅沢な事のような気がする」
「明後日からは完全な逃亡生活に入りますから、確かに贅沢かもしれませんね」

風呂はとても気持ち良かった。やっぱりいいよなぁ。
どんな作りになっているのか知らないが、湯船の湯は循環しているようだし、浴室全体が暖かかった。
風呂からあがると替えの衣類が置いてあった。
「サイズが合わないかもしれませんが、我慢して下さい。脱いだものは明日洗濯しましょう」
俺が風呂に入っている間に料理の下ごしらえをしていたらしく、ジュノが風呂を済ませた後、たちどころに夕食となった。
干し肉と野菜を煮たもの、パン、そしてあの青色スープ。それに酒のような飲み物がついた。
どれもこれも美味い。キッチンのドアから外に出ると、ここにも水汲み場がある。
洗い物は俺がやった。ドアを開けるとキッチンの光で充分に明るい。
焚き木の匂いと夜の空気は心地よく、俺を落ち着かせた。

翌日、ベルファーはジュノが言うとおり、だいぶ動けるようになっていた。一緒に昨日の残りで朝食を済ませる。
洗濯をして干す。ベルファーは嬉しいらしく、ジュノの足許にまとわりついている。
明日は夜明け前に出発する。落ち着いたら考えようと思っていた事は、既に通り過ぎてしまった。

今更これは夢かと問うのも馬鹿げた話だ。
それに今日はジュノから、この世界について色々と説明を聞く予定だ。
時間が惜しい。

2－8　エナル

青い空に洗濯物が揺れる。
ジュノは最後のシャツを干すと、空に向かって伸びをした。
伸びをしたまま傍らの俺を見ると、「さて」と言って資料室へ移動してお茶を淹れた。
ベルファーは窓からの陽だまりで眠っている。

ジュノはもう一度「さて」と言って、エナルとこの世界について説明を始めた。
俺はこれほど気持ちを込めて人の話を聞いた事はあっただろうか。

【エナル】
この世界にはエナルというものが存在し、世界の成り立ちや生命に大きな影響を及ぼすと伝えられている。
エナルは質量を持たない物質で、生物の脳神経や精神に作用する。
エナルは基本的に、その多くが大気に存在し、場所や季節、天候によってその濃度は変化する。
エナルは、気（空気）、水、土、火の４元素に大別され、それぞれを属性として体系づけている。
人間（他の動物も同じ）の意思は周囲のエナルに伝わり、声を発っすると空気の振動、音と一緒に伝達される。それが故にエナルの速度は音と同じである。
エナルは言葉を伝えようとする意思に反応し、その意思によって発せられた言葉に乗って伝わるのであり、思考などが直接伝わる訳ではない。
つまりエナルの基本作用とは意思の伝達ではあるが、発した言葉の内容の伝達と言える。また言葉の内容自体を知らない相手には発音した単語が伝わるのである。

「クラトさんはディカノを“ウマ”と呼びますが、私がディカノと発音すればクラトさんがディカノという単語を知らなくても“ウマ”と伝わるのです」
「また、ディカノという生物を知らない相手だと“ディカノ”という発音がそのまま伝わる事になります」

この作用によって言語が違う者同志の意思疎通が可能となるが、エナルがなぜこのような働きをするのかは不明である。
エナルが特に高濃度で存在する場所では、動物との会話さえ可能と言われている。
エナルはその思考に作用する為、知能が高い生物ほど作用しやすい。

【エナルダ】
エナルを利用して自らの能力を向上させる事ができる者をエナルダと呼ぶ。
エナルダとなれるかどうかは素質によって決まり、素質がない者はエナルダにはなれない。
エナルダの力を得る事を“覚醒”または“発現”と呼んでいる。
ただ、この才能はいつ覚醒するかが不明であり、未覚醒の者を覚醒させる方法は今のところは無い。
エナルダはエナルと同じ４つの属性のいずれかを持っている。これは血液型と同じように持って産まれたものである。
４つの属はそれぞれに特性があり、エナルダはその特性によって発揮する力が変わってくる。
気の属はスピードに優れ、俊敏さが大きく向上する。
水の属は治癒回復力に優れ、優秀なエナルダは他人の治癒を行う事もできる。
土の属は防御力に優れ、耐力が大きく向上する。
火の属は攻撃力に優れ、筋力が大きく向上する。

つまり、エナルダはその能力によって、元々持つ力、スピード・回復力・防御力・攻撃力などを向上させるが、持っている属の特性が特に大きく向上するのだ。
どれだけ能力を高める事ができるかをエナル係数と呼ぶ。
エナル係数はエナルダの才能によるが、覚醒した者は鍛錬によって僅かながら係数を伸ばす事が可能だ。
エナルダにはその力（元々の能力をエナル係数で高めた力）の大きさに応じて、下級エナルダ、中級エナルダ、上級エナルダに区別される。
力に係わらず、エナル係数が特に高いものをマスターエナルダと呼ぶ。

【エナルス】
エナルの濃度が高い状態で何らかの外的要因が加わるとエナルの集合体が形成され、これをエナルスと呼ぶ。エナルスは淡い光を発し浮遊しているが、時間の経過にともない拡散してしまう。
稀にエナルスが同時多発した際、エナルス同士がさらに結合して、より高濃度のエナルスを形成する場合がある。
この状態をハイエナルと呼び、無機物や生物と融合する場合がある。
融合する要因は全く不明である。
融合した無機物をマスエナル、融合した生物をリアエナルと呼ぶ。

【マスエナル】
ハイエナルは周囲にある無機物と融合してインゴットに変わる場合がある。
こうなると簡単に拡散する事は無い。
この状態をマスエナルと呼ぶ。マスエナルはこぶし大で、形状は例外なく六角形の板状である。
マスエナルは武具などの性能を高める作用があり、その作用はエナルダのエナル係数と同様に作用係数として非常に重要視される。

その作用はあくまで武具本来の性能を高める事であり、武具の形状が変わったり、武具が自ら動くなどという事は無い。
エナルダのエナル活用では全ての能力が高め、属の特性能力を特に上昇させるが、マスエナルの作用は属の特性のみが上昇する。

【リアエナル】
ハイエナルが融合した生物をリアエナルと呼ぶ。
融合した生物は多岐にわたるが、融合した生物は凶暴性を示す場合がほとんどで、特に“オルグ”と呼ばれている。オルグはエナルダのような能力を持つと考えられているが、人間が融合した例は報告されていない為、詳細は不明である。

2－9　研究

≪マスエナルの利用≫

マスエナルは誰にでも利用可能であるが、エナルダは自らのエナル係数を使ってマスエナルの作用を最大まで高める事が可能である。つまり自ら発揮する力を減ずる代わりにマスエナルの作用係数を高めるのである。

この使い方はエナルダであれば少々の訓練で自由に発動できる。

マスエナルの使用方法は武具に埋め込むのが基本であるが、最近では付け替えを安易にする為、ホルダーと呼ばれる容器に収められ、武具はホルダーが収められるよう加工されているものが一般的である。

このホルダーは海洋生物のシザルプ（人間ほどの大きさの大エビ）の殻を加工して作られる。

マスエナルは貴重品として取引されるが、特に係数が高いものは驚くほど高値で取引される。

通常は防具ならば土の属性で防御力を、武器ならば火の属性で攻撃力を向上させるなど、武具の目的に応じて使用するのが一般的である。

しかし、利用者の能力や武具の性能によっては、目的以外の属性を持つマスエナルを装着する場合もある。

例えば、鎧は防具であるから土の属性のマスエナルで防御力を高めるべきだが、防御力が低い防具にマスエナルを利用しても高い防御力は期待出来ない。

体力が弱く軽い甲冑しか装着できない者は、むしろ重装鎧に気の属性のマスエナルを装着する事で、重装鎧の高い防御力を小さな重量負担で使用する事が可能となる。

更にマスエナルの作用係数が大きく、作用が鎧の重さを超えると鎧

の重量負担は0以下となり、重装鎧ながら装備する事でむしろ俊敏さを高める事も可能だ。
表現を変えればマスエナルは装着した武具を使用する者に作用するといえる。
このようにマスエナルの利用方法は、利用する者、装着する武具、マスエナルの属と作用係数などにより様々である。

≪マスエナルの応用≫
マスエナルの複数装着は現在のところ成功例がない。違う属性だけでなく同じ属性であろうと、2つ以上のマスエナルを装着した場合は片方の能力しか発揮できないのだ。
ただし、エナルダは2つ以上のマスエナルを装着し、その作用を切り替える事が可能である。
例えば鎧に土の属性と気の属性のマスエナルを装着し、戦闘時と移動時で使い分けるという利用方法だ。
マスエナルの同時発動はマスターエナルダによって研究が続けられている。

≪エナルダの研究≫
我々は力を表す単位として、ディカノ（馬）の力を36としたディカルを使用しているが、一般的な人間の力は3ディカル程度だ。
例えばこの平均的な力を持つ人間がエナル覚醒してエナルダとなった場合にどのような力の増幅を得るかを示す。
ただ、人間の力は状況によって変動するという点、エナル係数は便宜上の数を当てはめているという点を理解した上で以下の推論へと移行したい。

以前よりエナル係数という概念はあったが基礎体力への単なる加算または乗算と考えられていた。3ディカルの者が覚醒し、エナル係数4の場合、加算して7ディカルか、乗算して12ディカルかと考

えられていたのだ。
しかし検体のほとんどがこれには当てはまらなかった。元々、基礎体力もエナル係数も明確にカウントできるものではないが故に見過ごされて来た点だ。
１０年前、ジョシュ・ティラントによる研究によって、エナル係数と能力は次のように結論づけられた。
まず、ジョシュ・ティラントの実験では、検体を定期的に体力を測定していた者に絞った。
つまりは兵士と学生である。
その結果、エナル係数は加算と乗算の組み合わせによって能力を最大限に発揮している事が発見されたのだ。

仮に基礎体力３ディカルでエナル係数４のエナルダの場合、係数４を体力３ディカルに加算と乗算で振り分けられる。（係数１は加算だと１から、乗算では２からカウントされる）
それでは３ディカルのエナルダについてエナル係数を２～５へ変化させて、その能力パターンを示す。
【エナル係数２】
（３＋０）×３（係数２）＝９
（３＋１）×２（係数１）＝８
（３＋２）×１（係数０）＝５
【エナル係数３】
（３＋０）×４（係数３）＝１２
（３＋１）×３（係数２）＝１２
（３＋２）×２（係数１）＝１０
（３＋３）×１（係数０）＝６
【エナル係数４】
（３＋０）×５（係数４）＝１５
（３＋１）×４（係数３）＝１６
（３＋２）×３（係数２）＝１５

（３＋３）×２（係数１）＝１２
（３＋４）×１（係数０）＝７
【エナル係数５】
（３＋０）×６（係数５）＝１８
（３＋１）×５（係数４）＝２０
（３＋２）×４（係数３）＝２０
（３＋３）×３（係数２）＝１８
（３＋４）×２（係数１）＝１４
（３＋５）×１（係数０）＝８

これらを見ると、（エナル係数＋加算）と（乗算）が等しいか、（エナル係数＋加算）が１大きいパターンが最も能力を発揮するパターンであり、ほとんどの検体がこの数値を示した。

これは結果からの逆説的なアプローチである。
例えば２０ディカルのエナルダについて、発現前の体力が３ディカルならばエナル係数は５となり、４ディカルならばエナル係数は４という事になる。
これによってエナル係数の算出が可能となったが、あくまで基礎体力が記録されている事が前提である。
現在ではマスエナルの係数判定が主な利用法だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

この後、エナル研究は人工的にエナルス、ハイエナルを発生させる事が中心となっていった。
その為にはエナル係数が高い者が重要な役割を発揮するとされたので、エナル係数が一人歩きを始め、エナル係数のみでエナルダを評価する風潮が広がった。
しかし力に関して最もシビアな軍部は早々に混乱を収め、エナル係数至上主義の熱は収束した。

ジョシュ・ティラントを中心とした『新進派』と呼ばれる研究者達はエナルスの人工発生すら成功していないにもかかわらず、次の研究をマスエナルの人工融合、更にリアエナルの人工融合。
そしてリアエナルからの最終アプローチとして未覚醒者からの新しいエナルダ創造とし、研究計画だけが先へと進んだ。
これは研究費用を国から引き出す為ではあったが、他の研究者や識者を不安にさせるものであった。

2－10　新進派

ハイエナルと人間を融合させて、エナルダのような人間を作る研究。
何だか遺伝子操作の話に似てて面倒な気がするな。
どちらにせよジョシュ・ティラントってヤツが中心になってる・・・
というより、エナル研究をジョシュが牽引しているのは間違いない。
そしてそのジョシュは7年前にルーフェンを出て行ったって事か。
ジュノの説明は基本的に１０年前から5年前の話だ。
ジョシュの研究に多くの人が反対したってのは理解できる。
ただ、この世界の軍事力としてはかなりデカイ話だ。研究の抑制とかしなくて良かったのか？
地球だって最終的な正義は力だ。まして戦いが多いこの世界で放っておいてイイとは思わないんだが・・・。
ジョシュが牽引しているというよりも、他のヤツらが引きずられているように感じる。
しかもこれは技術だ。技術は拡散するのも早いし、新しい技術は更に新しい技術を生む。
停滞が長ければ長いほど、革新が一気に進むのが常だ。
化け物同士か超人同士かは知らんが、いずれ戦争の内容が大変なコトになるんじゃないだろうか。
ジュノに聞いてみよう。

「そうですね。８年前、ジョシュがエナルダを人工的に作り上げる計画を発表した時には、多くの研究者や識者が懸念を表明し、ほとんどの国も郷も同様の意見でした。クエーシトを除いて」
「そして、１年後にジョシュは北に向かいました。恐らく目的地はクエーシトでしょう」
「でも、大丈夫ですよ。私もエナル濃度が高い森の奥や湿地で長く

野営を続けたりしましたが、エナルスを見た回数は片手でさえ余ります。しかも見ているうちに消えてしまいました。あれを人工的に発生させるのは難しいと思います。しかもマスエナルはハイエナルの発生および無機物との融合という、更に低い可能性の変化が2回おきるコトから成り立っていますから」

「私もマスエナルは一応持っていますが、これは作用係数も小さい軍からの支給品です。作用係数が大きいものは大抵が国王の城に厳重に保管されていますよ。武器にも食料にもならない宝石の類と一緒に」

ジュノの言い方は、少し投げやりな感じだった。戦場で戦う者としての不満は分る。

まぁ、貴族なんてそんなものだろう。マスエナルでどれくらい強くなるのかは知らんけど。

マスエナルがどうこうよりも、あの聡明で慎重なジュノが軽く考えている事が気になった。

「カピアーノ博士ですら、４つの属性全てを持ってはいません。それにジョシュとカピアーノ博士が合同で研究していた5年間で進歩したのは、エナルに関する体系付けや理論など、机上のものばかりです」

「ジョシュは研究に没頭してその影響を考慮せず、実験の犠牲をも顧みませんでした。カピアーノ博士はジョシュの実験を抑えていたようです」

「カピアーノ博士はジョシュの才能の愛していましたし、ジョシュもカピアーノ博士に恩義を感じて父のように慕っていました。しかし、ついに袂を分かつ決断をしたようです」

「その直後です。ジョシュが新進派と称するグループを作ったのは。人数こそ6名と少なかったのですが、メンバーにはマスターエナルダも名を連ね、ジョシュの理論を軸として実験を進めました」

「ジョシュのクエーシト入りはメンバーを伴っていたでしょう。その後、カピアーノ博士にも明かさなかった理論と仮説の実験を一気に推し進めたと聞いています。そして5年前、エナルスの人工発生に成功したとの発表がありました」

エナル研究の関係者に激震が走りました。今までのエナル研究は入り口さえ見えていませんでした。それ故にエナルは超常的現象、精神的神秘的なものとして、その現象を記録するだけに留まっていたのです。しかし僅かであれ扉は開いたのです。そしてこじ開けたのは、あのジョシュ・ティラントです」

「ただ、エナルス人工発生の発表も公式のものではありませんでしたし、その後、研究の進歩を示すものは何も出ていません。今では人工発生の成功自体に対して懐疑的な意見が主流です。よしんば成功していたとしても、エナルスの発生が限界で、ハイエナルの生成やマスエナルの融合は不可能なのではないかと考えられています」

ジュノがジョシュのエナル研究について危険性を否定する度に俺の不安は増していった。言い過ぎかもしれないが、カピアーノ博士も無責任なんじゃないのか。ま、俺に何かが出来る訳じゃないが・・・。

「そうだ、後で私のマスエナルを使ってみて下さい。体感するのが一番分りやすいでしょうから」

ジュノは既に冷えてしまったお茶を一気に飲み干した。

「それでは、昼食の後で軍の説明をしましょう」

食事と聞いてベルファーは頭をもたげる。相変わらず現金なヤツだ。

食事に青色スープは無かった。朝から水で戻しておいた干し肉をフライパンで焼く。塩辛いチーズのようなものを削って乗せると、溶けて肉に絡む。一気に香ばしい匂いが立ちこめた。

「クラトさん、皿を下さい」

「え、皿？」
「そこの皿ですよ、それそれ」
「これか？」
「隣の小さいのです、2枚！早く早く！あぁ、焦げる～」
俺があたふたしていると、ベルファーが舌を出しながら楽しそうに見ている。
よく見ると、よだれが床に落ちている。
今度はそれをジュノが微笑みながら見ている。
ボイルした野菜にも塩辛いチーズを削ったものがかけられ、何かの穀物の粥がボウルによそわれた。
テーブルには2人と1匹の食事が並ぶ。
ベルファーはきちんとイスに座ってテーブルに並べられたボウルを前にしている。
空腹だったようで、いきなり顔を近づけ、熱い湯気にくしゃみをする。
笑い声が満ちた。
食事の後は陽の光を受けながら庭でまどろむ。ジュノとベルファーは既に寝音を立てていた。
俺のまぶたも次第に重くなっていく。

ジュノに肩を揺すられて目を覚ますと、すぐ近くにベルファーの顔があった。
「うぁっ、何だっつーの！」
ベルファーは俺の頬を舌で撫でる。
俺が立ち上がると、ベルファーはさっと離れる。俺が近づくと逃げる。
「こんにゃろ！」
エナルが伝えられるのか疑問な言葉を発しながらベルファーを追いかけた。
こうしてベルファーの望みどおりの追いかけっこの後、乾いた洗濯

物を抱えて資料室へ。
何だか体に力が漲るようだ。昨日からの食事と睡眠が回復させたのだろう。

水汲み場で口を漱ぎ、水を飲む。さぁ、戻って軍についての説明を聞こう。

ジュノとベルファーの後から資料室へ向かう。
と、左肩と腰の上に何かが当たったような衝撃。
何だろう。手を伸ばすと細長い物に触れた。
その細長い物を握った瞬間、体に電流が走り、俺の体は崩れた。
俺の頭上を何かが飛んでいく。
顔を上げるとジュノが叫びながら跳んだ。声は聞こえない。
ベルファーが恐ろしい形相で走り抜ける。

ジュノは水汲み場の陰に俺を引きずり込んだ。
ベルファーの唸り声と人間の悲鳴が交差する。

肩と腰に突っ張るような感覚と激しい痛み。ジュノは矢の先端を凝視している。
「大丈夫、毒はありません。しかし、この矢は軍用ではない」
「まさか、こんな・・・」
ジュノは戸惑いながらも驚きの声をあげた。
「クラトさん、緊急の治療は不要です。このままここに居て下さい」

ジュノは水汲み場から飛び出す。
数本の矢が水汲み場の石に当たって落ちる。
倉庫に取り付いたジュノは中からボウガンと刀を取り出し、左手に3連ボウガン、右手に刀を握る。
森に向かうと繁みから放たれた矢がジュノを迎える。

信じられない速さで矢を躱すと矢が放たれた繁みへ突進する。
ジュノの動きはあまりに速くて、矢が放たれる前に躱しているように見えた。
ジュノはボウガンを繁みに3連射して投げ捨てると、両手で刀を握り斬り込んだ。
ベルファーの唸り声が遠くに聞こえる。
金属と金属がぶつかる音、悲鳴、重い物が地に落ちる音。
「ベルファー！逃がすな！」
ジュノの悲鳴のような声が飛ぶ。
腰と肩に何か重い物が乗っているような感覚。
痛みは感じなくなっていた。
意識が遠のいていく。

2－11　無駄

意識が戻ると、ベルファーとジュノの顔が見える。
気配を感じて視線を移すと２０歳にも満たない男が後ろ手に縛られて座っていた。
肩から胸にかけて血を流している。
「残党狩りです。追っ手はルーフェンの者です・・・」
「何人だ？」
「６人です」
「残りの５人は？」
ジュノだけでなく手を縛られた男も「何故？」という顔をした。

ベルサが仕掛けた賞金目当ての残党狩りだ。
分るだろう？逃がしたら軍が差し向けられる。
生きている訳がないじゃないか。
生かしておく訳がないじゃないか。
俺だって生きては帰れない。

「ここから一番近い村か町は、歩いてどれくらいだ？」
「！！」
「クラトさん、いけませんよ！昨日言ったはずじゃないですか！」
「でもなぁ、明日の夜明け前に出るし、大丈夫じゃないの？」
ジュノは何かを言おうとしたが、俺の目を見ると諦めたように男の縄を切った。
男は逃げもせず、ただ突っ立っている。

「済まないな、ジュノ」
ここで何の感情も示さなかった男が激しく動揺する。
ジュノ？あの親衛隊第一隊の隊長の？

タレス将軍の後継者と目されたジュノ・ガクレイ？
この男は何者だ？
あの矢で射られて・・・不死身なのか？
俺をなぜ助けた？

「どこへでも行くがいい」
ジュノは無機質な声で告げると、ベルファーに目配せして、俺に肩を貸した。
資料室へ戻ると、矢傷の消毒をして布を巻く。
ジュノが傷に手をかざすと、暖かいようなむず痒いような感覚が気になったが、すぐに眠りに落ちた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

起きるとだいぶ楽になっていた。水の属性のジュノは俺の傷に手をかざしている。
もう夕方になっているらしく、濃いオレンジ色の光が窓から反対側の壁を照らしている。
「クラトさん、あなたの身体にはエナルダかマスエナルの作用があるようですが・・・」
「知ラネ。でも洞窟でマスエナルっぽいのを発見したぜ。オレンジ色で明るくて熱いんだ」
「えっ？」
「でも、融けちまったよ。そして消えちまった」
「マスエナルもエナルスも同じようにエナルに戻る可能性があると聞いた事があります。通常マスエナルは物質として安定しているし、事例を聞いた事もありませんが、理論上は成り立つそうです。まぁ、私からは何とも言えませんが・・・」
「それよりクラトさん。矢の傷ですが、治癒したというより、ダメージが驚くほど少なかったのです」

「クラトさんを射った弓矢は大型獣用の強力な長弓です。それが小指ほどしか身体に刺さっていませんでした。普通なら貫通して即死ですよ」「いくらクラトさんの身体がいくら強靭だといってもありえない事です」
「何なんだろうな？」
「分かりません。とりあえず夜明け前の出発は延期しましょう。まずは休んで下さい」
「大丈夫かな？」
「え？」
「いや、あの奴隷の男がさ」
「大丈夫ですよ」
ジュノは目を逸らして答えた。

その夜、ベルファーは帰ってこなかった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

翌日、だいぶ楽になっていた。明日の朝には出発できるだろう。変わり映えしないが安心で栄養がある食事と休息、ジュノの治療で昼過ぎには歩けるようになっていた。自分でも驚きの回復だ。

また暫く寝てから起きると、夕方になっていた。
ジュノはキッチンにいる。ベルファーはまだ帰ってこないようだ。
ふと喉が渇いて外に出ると、昨日のままの位置で男が立っており、ベルファーが監視のように男を見ていた。
俺が近づくと男は体中を強張らせた。
「俺はクラト・ナルミだ。名前は？」
「ホーカーです。・・・家の名はありません」
「そうか。この犬はベルファーだ。もう一人はジュノ・ガクレイ」
「知ってます。ジュノ様は親衛隊の第一隊長でしたから」

「あ、そう。結構有名人だな、あんにゃろ」
俺は水を汲んで、男にカップを差し出した。
ホーカーは戸惑っていたが、両手で受け取ると一気に飲んだ。
一気に飲んで荒い息に胸を弾ませている。
男は胸の前でカップを両手に抱えたまま、膝を着いて泣き始めた。
振り返るとドアにもたれかかったジュノが腕を組んでこちらを見ていた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ガタイの良い、若い男はホーカーと名乗った。
家の名前が無いという事は奴隷かそれに準じた身分という事らしい。
奴隷だと言って得をする事は何も無い。
あえて家名を持たぬと言うのは馬鹿か、救えない正直者か。
しかし、ホーカーの目には勇気と誠実の色が見える。
ホーカーは、主人に命令されて今回の残党狩りに参加したらしい。
これまでも竜獣狩り（ベナプトル）やオルグの駆除にも参加した事があるという。
その度に主人である貴族には金が入るのだ。仕事が危険であればあるほどに。
一通りの質問をした後、何か聞きたい事はあるかと訊ねた。
「なぜ俺を助けるんですか」
「お前が死ぬのは勿体無いからだ」
「勿体無い？」
「あぁ、俺が死んでいれば、お前は目的を果たしたんだから死んでもいいだろ？でも俺が生きているのに死んだら、お前は無駄死にだっつーの」
ホーカーもジュノも驚いた顔をした後、ジュノは笑ったが、ホーカーは意味が分らないとでもいうように目を泳がせた。
「ホーカー、何でお前は逃げなかったんだ？」

「・・・なぜ助けられたか聞きたかったからです」
「じゃ、理由も判ったな。よし、飯でも食うか。食ったら帰れよ。まぁ、もうすぐ夜だが」
「俺、目はイイんです。夜でも大丈夫です」
ベルファーは、ぶすッとしている。気に入らないようだ。
不思議な雰囲気の食事の後、ホーカーは出て行った。

ホーカーが出て行ったのを見届けると、ベルファーは不満を漏らす。
「危険ヲ残シタ、何モ得ラレナイ。アノ奴隷ハ悪イ人間デハナイガ、ドンナニ僅カデアロウト危険ノ芽ハ摘ンデオクベキダ」
俺は機嫌を取るように耳の後ろと首の周りを掻いてやった。

「ホーカーですが、本当はベルファーが殺す予定だったんです」
「えっ？」俺はジュノの顔を見た。
「ベルファーが後をつけて、森の外で始末する予定でした。しかし、ホーカーは放たれても逃げなかった。結果として命を拾った事になります」
「それにベルファーが一度敵対した人間を許すのは初めてです」
「アノ奴隷ハ無知ダガ、愚者（オロカモノ）デハナイ。遠イ昔ノ私ニ似テイル」
「・・・ダガ、次ニ見ツケタラ、必ズ仕留メル。必ズ、ダ」

2－12　浪人

翌朝、まだ暗いうちに目が覚めた。
俺の体調は旅に差し支えないほどまで回復している。
すごいなジュノは。

そのジュノは既に出発の準備を整えている。さすがに軍に所属しているだけの事はある。
夜明け前に出発する事にした。

ジュノは戸棚の食料をすっかり出してベルファーの分はテーブルの上に置いた。
「いいのか？博士のものだろ。もう随分と食っちまったけど」
「博士が戻って、食べ物が無いっていうのは笑い話で済みますから・・・」

ジュノは博士が戻らないことも想定しているようだ。
「私ハ大丈夫、ジュノ、持ッテ行ク、安心」
「大丈夫だよ、ベルファー。先日の強行偵察隊の携帯食料もあるし」
「遠慮すんなよベルファー。まぁ、俺のモンじゃねぇけどさ」
「私ハ狩リデ、新鮮ナ肉ヲ食スノダ。コノ古イ肉ハ、オマエニヤル」
「何か、いちいちカチンと来るんだよね、コイツは」
「まぁまぁ。では、博士の分として残しておきましょう。さすがに帰ってきて何もないというのも申し訳ないし」

さあ、準備も出来た。

「クラト、名前ヲ教エロ」
「はぁ？何だよ急に。クラト・ナルミだよ」

「ソウカ、“クラト・ナルミ”ダナ。憶エテオク」
ジュノが驚いた顔をしている。

ベルファーは人間の名前を覚えようとしない。
ましてやフルネームで憶えているのは、カピアーノ博士と私だけだ。
私の親代わりだったタレス将軍さえ覚えようとはしなかった。
命を助けられたからといってこういう行動には出ないベルファーだ。
何か感じるものがあるのだろう。

「クラトさん、行きましょう」
「おう。じゃあな、ベルファー」
「クラト・ナルミ、オマエハ・・・」
「何だよ」
「オマエハ、オカシナ奴ダ」
「はぁ？お前ケンカ売ってんの？もうちょっと気の効いた事言えないのか？」
「クラトさん、ベルファーはクラトさんを認めているんですよ」
「そうかぁ？」
「夜ガ明ケルゾ、急ゲ」
「あぁ、そうだな。またなベルファー」
「ベルファー、カピアーノ博士を頼んだよ。必ずまた来るからね」
「ウンウン、博士ハ主、私ハ護ル。マタ会ウ、ジュノ、クラト、マタ会ウ、私ハ待ツ」

馬は5頭確保していたが、1頭は放って、荷物を積んだ2頭をジュノが誘導する。
俺は一番最後からついて行く。
休憩も最小限に留め、先を急いだ。まずはグリファ国から出なければならない。
念の為、開けた土地は避けて移動したので、随分と遠回りをしてい

るようだ。
しかし、この慎重さが俺を安心させた。

森は深く、囁くようなイメージがどんどん流れ込んでくる。
エナルが濃いのだろう。
「あ、クラトさん、あれを！」
ほの暗い森に長さ５０ｃｍ四方程の光が歪みながら漂っている。
「あれがエナルスですよ。まだ薄いようですけど」
「そうか、あれがオルグの元か」
「ジョシュが目指した北の国クエーシトはエナルの濃度が高いので、元々エナルの研究が進んでいるようです」
「クエーシトはエナルダが立てた国ですし、優れたエナルダが多いと聞いています。マスエナルを輸出していますし、エナルに頼らないと成り立たない国ですからね」
「ハイエナルの発生やマスエナルの融合とか出来たら地図が変わるぜ」
「確かにそれが出来たら勢力図は塗り替えられるでしょうね。ただ、出来たらの話です」

２日後、グリファと国境を接するタルキア国に入った。ジュノは移動速度を緩めず、そのまま森の奥へ入る。
ここで馬の手入れとこれからの移動に備えるのだそうだ。旅の商人として移動するらしい。
目立つ武器は捨てる。
馬２頭にはそれぞれ長方形の箱を２つづつ背負わせている。
左側の箱に刀と３連ボウガンが毛布の下に隠されている。
服装もカピアーノ博士のところにあったものに着替える。
さすがに甲冑は着けられないし、ジュノは親衛隊丸出しだったからだ。

しかし、馬に乗ってると内股とケツが痛い。
矢傷が心配だったが、こちらは全く問題無いようだ。
僅か4日でほぼ完治している。驚くべき事だ。
これから西へ進路を変更し、タルキアを南北に貫く街道へぶつかったら、それからは北を目指すそうだ。
驚いた事にジュノにはベルサやグリファ国への復讐の念はあまり感じられなかった。
いくら腕が立っても1人では何も出来ないと割り切っているのか、タレス将軍も亡き今、郷に未練はないのか。
いずれにせよ変わっているなと感じたが、ここは控えておこう。

進路を変更して3日後、タルキアの南北街道に出た。
街道を北へ向かってすぐ大きな街に入る。この街で東西の街道と交わっており、多くの人や物が流れる経済の重要な拠点らしい。
服装は気にしなくて良かったんじゃないかと思うくらいに多種多様な人間が往来を行き来している。

「なんだ、武装しているヤツ等もいるぜ」
「郷の兵士は他の郷には入れません。ましては他国に入るなど言語道断です。国の兵士すら通常は郷の勢力地域には入らないのが不文律の掟です。ですから兵士は間違いなくここの郷の兵士です」
「また、兵士でないのに武装しているのは武装商隊です。彼等は商人ですが、金品を自ら守ります」「通常の商隊は報酬を支払って護衛を雇います。護衛を頼むと費用が掛かりますが、商隊を組んでいる時だけです。護衛を自前でそろえようとするとかえって費用がかさむのです。ですから武装商隊は商売もするし腕も立つという人達ですね。まだ商売を始めたばかりで資金が無いという場合もあるでしょうが、ならず者が多くて商人だか賊だか判らないような商隊も多いですよ」

ジュノは食事が出来る宿に馬を繋ぎ、市場を見て回った後、俺に相談してきた。
「あのぅ、非常に言いづらいんですが、お金が足りません」
「お金？」
「はい、これでは何も購入できませんし、この先食料が尽きてしまいます」
「働くか？」
「いえ、そこで相談なんですが、商人のふりをするのも無理があるので、旅の浪人って事にしませんか？」
「旅のローニン？」
「はい、取り立ててくれる領主や貴族を探している武人です。元々の目的はそこですから」
「軽い武装なら説明がつきますし、馬が2頭売れます。この際ですからボウガンも売ってしまいましょう」
「ん～、任せるよ」

暫くするとジュノがホクホク顔で戻ってきた。
「足元は見られましたが、良い馬だったので高く売れました。ボウガンの3連射は軍用なので買い取れないとの事でした」
「どうするんだ？」
「分解して捨ててきました」
「何か勿体無ぇな」
「しょうがないですよ、軍関係者に見つかったら無用な詮索を受けますから」「それにクラトさんは異人ですから少々面倒になるかも知れませんし」

そうだ。この世界では俺は異分子なのだ。

3－1　栄養

馬を売って得た金でまずは飯を食おう。

宿で馬を預け、食事をする。久々に食事らしい食事だ。

「クラトさんは何を食べますか？」

「え～っと、よう分らんわ。字が読めねぇし」

「じゃ、栄養があるものを私が適当に頼みますよ」

「おぅ、頼む」

暫く待って出てきたのは、嫌なニオイを発した大きな椀だった。

「これは・・・チト臭うな」

「慣れると美味しいんですが・・・」

バツが悪そうなジュノに悪いのでトライしようとスプーンですくってみる。

「うぉッ、何やら得体の知れない動物の臓物（ぞうもつ）が・・・！」

（しかも、タップリ入ってるじゃねぇかよ。こ、これはイカン）

（どうしようか、謝っちゃおうかな。・・・いっそ滑ったふりしてこぼしちまおうか）

（調味料とか肉の臭い消しは無ぇのかな）

などと考えながら外を見ると、見覚えのある顔が一瞬見えて消えた。

振り返ってジュノを見るとジュノも気付いたらしい。

「ホーカー・・・だったよな？」

「はい。でも、どうしてこんなところに」

「よし、俺が聞いてくる」

「しかし」

「大丈夫だよ。任せとけって」

俺は刀が納まったベルトを着けると外に出た。

これで誤魔化せるかもな。あの臓物汁。

宿から出ると、ホーカーは大きな背中を向けて突っ立っている。
「おい、ホーカー」
俺が声を掛けると、びくっとして埃にまみれた情けない顔で振り向いた。
「どうしたんだ、帰らなかったのか？」
ホーカーは俯いて黙っているだけだ。
「そんなところにいてもしょうがないだろ、その桶の水で顔を洗って来い」
その時、ホーカーの腹が鳴った。
ホーカーが思わず腹を押さえる。
「腹が減っているのか？飯を食ってから話を聞くから、顔を洗えって」
俺は満面の笑みだった。臓物汁から脱出成功。

顔を洗ってきたホーカーは、ジュノに膝を着いて挨拶をした後、戸惑っていた。
「どうしたホーカー、まずは座れよ」
ホーカーは首を横に振る。
「クラトさん、彼は奴隷だったので同じテーブルでは食事をしないのです」
「ジュノは構わないか？」
「はい、私は全く気にしません」
「という事だホーカー。まずは座れって。そして栄養タップリのコレを食え」
「じゃ、俺は違うものでも頼もうかな」
「あ、もう頼みましたよ。クラトさんの事だからホーカーを連れてくると思ったので」
「・・・何を頼んだの？」
「栄養タップリの料理です」

「ンガッ！謝る！これは駄目だぁ、食えねぇよ！」
ジュノは楽しそうに笑って、違うものを頼んだと言った。
「何だよジュノ、驚かすなよ」
その横でホーカーは泣きながら肉を掻き込んでいた。

食事の後、ホーカーは言った。
「俺は命を狙ったのに許されました。恩を返してから会おうと思ってずっと後をつけて来たんです」
「でも、その前に腹が減っちまって。森なら獲物を取れるんですが・・・」
「会わせる顔なんて無いんですが、逆に頼っちまいました」
「それなのにクラトさんは、あんな笑顔で俺を・・・」
何だか勘違いがあるようだが、まぁイイか。

「奴隷の俺と同じテーブルで食事を・・・」
そんなの気にしねぇよ。

「クラトさんに当たった矢は俺が射ったのに・・・」
「そうか・・・って、お前か！コノヤロー！痛かったじゃねぇかよ！」
俺が背中をベシベシ叩くと、ホーカーはなぜか照れていた。

そんなこんなで旅の一行は3人になった。
ホーカーは力もあるし、足も速い。
馬の扱いも巧いし、気も利く。そして何よりイイ奴だ。

旅の道すがらジュノから剣術指南を受けた。
さすがは若いながら親衛隊第一隊長だけの事はある。
俺が剣道をやっていた事も随分と為になっている。
ジュノはベナプトルとの戦闘よりも、教え始めてからの方が驚きが

大きいと言った。

3－2　軍隊

この世界では6という数字が大きな意味を持つ。
この世界の物質は4元素（空気・水・土・火）であり、それに2極（光・闇）を加えた6が世界そのものを表現しているのだ。
6は神聖な数字であり、国の行事や人々の祝い事では常に意識される。

グリファ国もルーフェン郷も国王と領主を頂点として成り立ち、賢人会という王の補佐機関を持っている。
ルーフェンの賢人会は神聖な数字を掛けた36を員数とし、グリファ国は108名を数える。

この世界の政治としては、国王の下には6つの府がある。
国によって名称は違うが、軍事・内政・外政・経済・貴族・主直の各大臣がいる。

貴族とは王の一族および、王から貴族と認められた家及び個人だ。
その貴族の管理を行うのが貴族府なのだが、仕事の内容は貴族に仕える役目であり大臣も貴族からは選ばれない。
しかし、実情は力を持った貴族を監視する役目も担っている。
それは秘密警察の任務に近いがより隠密性が高いと言える。

主直とは王直属の部署で、王に仕えて身の回りの一切を取り仕切るだけでなく、秘密警察や情報収集など国王から直接指示され、軍事・内政・外政の要素も持つ府である。非常にプライドが強く、他の府と衝突する事が多い。

軍事府は内務を軍事大臣が管理し、実戦部隊は元帥が頂点として率いる。
但し、輜重隊は大臣の管理となっており、実戦部隊の暴走を止めている。
意外とシビリアンコントロールも効いているのだ。

軍人は大きく2つに分れ、職業軍人と徴兵・召集・招聘軍人に分かれている。
職業軍人は軍事専門で、武人と呼ばれる者はこれにあたる。
一方、徴兵は兵士、招集は士官、招聘は将校の補充の為に行われる。
徴兵は各村や町にあらかじめ振り当てられた人数を兵士として供出するものだ。
これには段階があり、戦いの重要度や戦局によって追加徴兵がある。
兵士の給与は所属する村や町に支払われる。
召集とは、士官クラスの能力がある者を集めるもので、職業軍人ではないものの、戦闘力に優れたものや、諜報や工作に長けた者、エナルダ、それらが事前に登録されており、状況に応じて声が掛かる。
報酬は個人に支払われる。
招聘とは引退した将校や特に優れたエナルダである。これは非常に名誉であり、報酬も莫大である。

ルーフェンを例に戦闘部隊を見ると、部隊編成は徴兵レベルによる規模に左右されるが、第1軍から第3軍までは常設されている。
それは侵攻・防衛・遊撃の三軍であり、徴兵された者はこの三軍に配属される。
当然ながら、防衛戦と侵攻戦では優先補充先が変わる。

軍の最小単位は、小隊（兵5名＋隊長1名＝6名）である。この小隊を基準として戦闘部隊が形成される。
中隊（6コ小隊＋中隊長・副隊長＝38名）、大隊（6コ中隊＋大

隊長以下４名＝２３２名）、師団（４コ大隊＋師団長以下１０名＝９３８名）、軍団（２コ師団＋軍団長以下１４名＝１，８９０名）となる。

軍団は規模としては最大４コ師団まで増員が可能とされており、第４軍以降は状況に応じて編成される。

通常配備されているのは一軍あたり、職業軍人約５００名と常時徴兵５００名の１，０００名程度であり、三軍を併せても３，０００名程度である。

三軍で一番重要視されるのは遊撃隊の第３軍団である。戦局全体を睨んで独自の判断で動き、戦い方も多様で危険も多い。軍団長は歴戦の将軍が務めるのが常であり、誉高き軍団であるといえる。

第２軍団は防衛隊。第１軍団は元帥が指揮する主力軍だ。

ジュノを育てたタレス将軍は長い間、第３軍の軍団長を務めてきた。ジュノがこの世界に現れる少し前に年齢を理由に第２軍へ転属となった。

本人は相当不満だったらしく、領主に直談判まで行ったようだ。結局は受け入れたが、第３軍を率いていた頃の覇気は薄れていた。

そんなところにカピアーノ博士からジュノを託される。子に恵まれなかったタレス将軍はジュノの教育に力を注ぐ。

ジュノは天性の才能と血の滲むような努力、そしてエナルダとしての覚醒によって、ルーフェン指折りの武人に成長した。そのタレス将軍も２年前に急逝している。

正規軍とは別に約１００名の親衛隊と、エナルダのみで編成された特別遊撃隊がある。

親衛隊とは領主の護衛の軍だ。組織上は軍事府の実戦部隊に置かれてはいるが、その任務内容から主直の指示で動く場合が多かった。事前に軍事府への連絡はあるが、主直府は親衛隊総隊長に対しても尊大な態度をとるため、親衛隊は主直府を毛嫌いしていた。

特別遊撃隊はエナルダの存在が明らかになった時代に設立された部門だ。
今では正式に稼動している国は少ない。

ルーフェンにおいてエナルダの軍への編入は細かく規定されている。それによれば、小隊には下級エナルダ１名、中隊には中級エナルダ２名、大隊には上級エナルダ１名、師団には上級エナルダ２名、軍団にはマスターエナルダ２名を配属する事になっている。つまり１つの軍に下級エナルダなら２８８名、中級でも９６名が必要となる。三軍で見れば、マスターエナルダ６名、上級エナルダだと３６名が必要となってくる。
エナルダは確かに特殊能力ではあるが、あくまで元々の力を増やすだけの能力だ。
基礎となる力が弱ければ、エナルダではなくとも力と技量に優れた者が勝つ。
エナルの活用方法が研究されているとはいえ、現状ではエナルダはエナルで高めた力、攻撃力や防御力、俊敏さなどを純粋に評価されて配属されるだけである。
ルーフェン軍のエナルダ規定は、いまでは完全に意味をなさない。
その昔エナルダという能力が明らかになった頃の名残であろうし、また軍の要望はあまりにも過大であった。

しかし、何事にも例外がある。
存在するのだ。元々の力に係わらず莫大なエナル係数によって人間の限界を超え、強大なオルグすら凌駕する者が。彼等はマスターとは呼ばれない。
マスターは戦闘力よりもむしろエナル活用研究に長けている者を指すようになっていた。
脅威の戦闘力を持つ彼等はエクスエナルダ（エクサー）と呼ばれる。

ところで特別遊撃隊だが、採用している国や郷は少ない。
あっても形だけの部隊である場合が多く、式典で登場する美しい女性だけの部隊や、水の属だけを集めた治癒回復部隊、という程度だ。

しかし、優秀なエナルダが多いクエーシトではエナルダの戦闘隊が編成され、その強力な戦闘力で恐れられている。それがクエーシトが国家として存在できる理由の1つでもある。
この元々弱小国であった「クエーシト」はマスエナルとエナルダによって徐々に力を増していく。
クエーシトはその国土のほとんどが湿地であり、貧しい国であった。しかしエナル濃度は高く、エナルスの発生率も高い。
マスエナルは貴重な輸出品であるが、他国からのマスエナル目当ての侵入者も多いためパトロールに力を入れている。
エナルダの中から特に能力が高い者が選ばれたパトロール隊は、国家が地位と待遇を保証して編成され「オロフォス隊」と呼ばれた。
オロフォスとは、この地の言い伝えで氷の竜の事である。
オロフォス隊はマスエナルによって強化した武具を装備しており、その戦闘力は1人でクエーシト軍大隊（232名）に匹敵すると伝えられる。
侵入したエナルダと激しい戦闘になる場合もあるが、ほとんどの場合、侵入者は殲滅される。

それは将来に復活する事になる特別遊撃隊を予感させるものだった。

ロスト？

携帯に連絡したけど出ない。
１回目は、かなりドキドキした。
２回目は、何度も掛けると引かれるかなと思った。
３回目は、電波が通じなかった。

これまで、失ったり、壊れたり、傷ついたりするのが怖かった。
気持ちに正直じゃない分、違うところで無理をしてたと思う。
何度も思い返してる。どうして言わなかったんだろう。
テーブルにあったライターの事。

でもライターがなかったら電話なんてできない。
あたしって何て弱いんだろう。

ライターをつけるとオイルが燃える匂いが心地いい。
夏休みは、時に早く、時にゆっくりと過ぎていく。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

千夏が、持ち主の消えた携帯へ連絡をした翌日、美沙子はテーブルの上に置いたままにしてあるハガキを手に取った瞬間、息子に呼ばれたような気がした。
息子は、もう２７にもなるのに、聞こえたのは子供の声だった。
でも確かに聞こえた。確かに息子の声だった。
ハガキの表に書かれた息子の名前を見ながら
「いつも心配なのよ、アンタは。お父さんに似てるから」
話しかけるような独り言の後、自分のため息と台所の換気扇の音がなぜか不安な気持ちを掻きたてた。

なんだろう。落ち着かない。
さっき作ったきゅうりのスープもほど良く冷えている頃なのに。
迷惑がるだろうけど、連絡してみよう。
3日前と同じようにハガキを手に受話器を手にした。
「お掛けになった電話番号は電波の届かない場所にあるか、電源が・・・」
何度か掛けたが同じだった。
そうだ。よく考えたら今日は月曜日だ。
しまった、仕事中に電話しちゃった。
心の中で頭を掻きながらも、不安は心の底に溜まっていった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「おい上原、ナルミが来てないって?」
「あ、加藤主任。携帯も繋がらなくって連絡が取れないんです」
「・・・実家に連絡しろ」
「え、実家っスか?だってナルミ主任は一人暮らしじゃないですか」
「じゃ、行って来い。居なかったら実家に連絡する」「課長には俺から言っておく。すぐに行け」
「でも、加藤さんはうちの部署と違うじゃないですか」
「分ってる。でも、今日はあいつが絶対に休まない日だ」
「何です?それ」
「休み明け、特に今回は有給明けだ。こういう時にアイツは絶対に休まない。無理だろうが何だろうが、通常通りに出社する」
「意味が分りませんけど」
「いいよ、分らなくて」
課長がコーヒーカップを手に席に戻る。
「課長。ナルミが出社してないんですけど、連絡が取れないんですよ。上原に行かせたいので、許可を頂けませんか」
この課長はナルミと合わないからな・・・。放っておかれるかもな。

「来てないのか？ナルミが」「加藤君、済まなかったな。上原、行って様子を見て来てくれ」
いざとなったら、今日が締め切りの書類があると嘘をつこうと思ったが、課長はナルミが出社していない事に、加藤と同じように何かを感じたようだ。
課長は上原が出て行くのを見届けた後、念のためかナルミの携帯へ連絡をしている。
やはり繋がらないらしく、落ち着かない様子で腕を組んで何か考えているようだった。
そして「済まなかったな。後はこちらでやるから戻ってくれ」と言って小さく頷いた。

俺もナルミもまだまだって事か。俺らは知らない所で恵まれているんだ。きっと。
俺は無意識にいつもより深く礼をして部署に戻った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ライターのオイルが無くなった。
コンビニで出来るだけさり気なく聞いて、オイルの小さい缶を買う。
その夜の事だった。
偶然にテレビで見た。あのバイクは。

行方不明？
井戸の近くに携帯が落ちていたって。
井戸の中を捜索したけど、見つからなかったって。

そして私の携帯に警察から連絡があった。
着レキがあったからだ。
バイトの事と、その時に話が弾んで連絡先を教えてくれたと説明し

た。
また嘘をついちゃった。

同じ事を何度も聞かれた。
表現を変え、順番を変え、何度も聞かれた。

ロスト？

氏名は成海蔵人、２７歳会社員

遺留品はバイクが林道に放置され、携帯が井戸の傍に落ちていた。
行方不明者は間違いなくここに来たようだ。
一昨日出された捜索願いは、不審な放置バイクの連絡からこの場所に行き着いた。

井戸の中へ降りて捜索するが、何も見当たらなかった。
井戸の底は、いま掘り起こされたばかりのように砂で覆われていた。
この井戸の底には数日前まで落ち葉が積もっていたのだ。
井戸の内側の苔も一部が掻き落ちている。
しかし誰も気付くまい。

警察からの報告を受けた美沙子は暫く口が利けなかった。
なぜ、あんな場所に。あの場所になにがあるの。

私も追いかけて行ける？
夫や息子を・・・追いかけて行ける？
警察の話を聞いて目が回るようで立っていられない。どうにかなってしまいそう。
でも、やらなければと思うと何とか私でいられそうな気がする。
行かなければ、私も。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

大したニュースにもならないようで、場所は全く分らなかった。
ネットで事件の事を振ってみた。何件か反応があった。

ナルミさんの近所の人らしい。
どうやらナルミさんのお父さんも同じ場所で失踪というか行方知れずというか、とにかくいなくなったって。

何それ?どういう事?

近所では結構な噂になっているようで、場所をきいたら、すぐに教えてくれた。
すぐに調べる。意外と近い場所だ。
なぜだろう。行かなきゃならない気持ちが溢れる。
でも、行ってどうするの?警察が周辺も捜索したんでしょ?
私に何ができるの?
それにナルミさんとは何の関係も無いじゃない。

ハガキ一枚書いただけ。

その時、机の上で鈍い光を放つジッポが目に留まった。
この少女が名前を知らない色はブラックニッケル。
刻印しかないシンプルな作りのそれは、決して加工では出せない使い込まれた雰囲気があった。

行かなきゃ。

やっぱり私、行かなきゃ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「加藤君・・・加藤君?・・・おい、加藤!」
「あ、はい!」
「お前、ナルミの事が気になるのは分るが、我々には何も出来ない

んだ、しっかりしろ！」
「はい、すみません」
「お前も休み取るか？まったく」
「・・・お願いします！」
「おい、冗談だよ。え、ほんとに取るのか？」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

お母さんが居るかどうか分らないが、ついでだから寄ってみよう。
慌てて買った菓子折りが助手席のシートで揺れる。
ナルミの実家に着いたが、不在のようだ。
じゃ、行ってみるか。目的地に。
林道を走っていくと、待避所にミニバイクが2台止まっている。
2台は待避所の端と端に止まっていて、持ち主が知り合いでは無い事を示していた。
「全く、車が止めづらいじゃないか」
数回切り替えして山肌に寄せて駐車する。

沢を渡って、山道を登る。
黄色に黒文字のテープの切れ端が落ちている。
ここか・・・あたりは草が踏み倒されて土が露出している場所もあった。
この井戸の近くで携帯が見つかったんだな。
トタンで作ってある蓋が外されている。中を覗くが何も無い。
当たり前だ。
多くの人間の足跡で倒された草々。梢が風に揺れている。
まるで俺を哂っているようだ。

なぜ俺は来たんだろう。何もできないのに。
帰ろう。

警察が散々捜索した後だ。
落し物じゃあるまいし、人間一人を見逃す訳が無いじゃないか。
振り返って井戸に背を向けた瞬間に感じた。
誰か居る！

なぜか動けなかった。
振り向けない。顔さえ動かせない。

小さな声が聞こえた。女性の声だが何を話しているのか聞こえない。
小さいからというより、か細く生気が無いせいだ。

動けない俺の背後で2人の女性の声が近づいてくる。
「これがナルミさんの」

俺は、ぐいと振り向いた。
2人のうつむいた女性が小屋の角から姿を現した。

「そうですか。これがあの子のライターですか」

3－3　酒場

ホーカーはエナルダではないが、身体能力に恵まれているし、オルグやベナプトルの駆除に何度も参加して戦闘経験が豊富だ。
狩猟用の長弓を仕入れて持たせると喜んで、また泣いている。
よく泣くヤツだ。

ホーカーはジュノに頼んで色々なものを買い込んだ。
長弓の手入れ道具と改造する材料らしい。
長弓は俺の身長より大きく、２ｍはありそうだ。
ホーカーは薄い木材と動物の角、革の紐、あとは何だか判らない練り物で補強を施した。
引くには力が要るが、強力な弓となり射程も破壊力も抜群なのだそうだ。

通常の矢は鏃（やじり）が取れるようになっており、矢を抜いても鏃（やじり）が体内に残るらしい。
ホーカーは鏃（やじり）を固定して取れないようにしたもの、鏃（やじり）の代わりに小さな鉄球や土を革で包んだものをつけたものを作った。
試射を見たが、こいつはスゲェ。
固定した鏃（やじり）は狩猟用の矢を改造したもので貫通力が高い。俺が射られたのがこれだ。的（マト）にした分厚い板を簡単に貫通してしまう。
聞けば、俺を襲撃した時は弓が長弓ではなかったので弓勢はこれほど強くはないらしいが、よく死ななかったもんだと思う。
鉄球の矢は相手が鎧を装着している場合に使う。軽装の鎧ならまだしも重装鎧の貫通は難しいので、むしろ衝撃でダメージを与えるのだそうだ。
革の矢は捕縛用。できるだけ傷付けずに戦闘力を奪うためのものだ。
他にも何種類もあるらしいが、今のところはこれぐらいしか作れな

いようだ。

ホーカーは分厚い板に刺さった矢を抜こうと懸命だ。
「なんかミミッチィな。ぶち抜くまではカッコ良かったのに」
「そう言わないで下さい。この矢の胴は結構良いものを使っているんです」「それに、弓も後でスゴイのを作りますから待ってて下さい」
「ふ～ん、今すぐ作りゃイイんじゃないの？」
「次の弓を作るには2本作るだけの金が必要なんですよ」
「ジュノ、お金ある？」
「ありますが、この町は物価が高いですね。馬が高く売れたのもそのせいかもしれません」
「そうか、でもホーカーがまた泣くからさぁ、買ってくれよ」
「俺、泣かないっスよ」
「じゃ、いらないのか？」
「・・・す、すごく欲しいっス」
「てな感じなんだが・・・どうかね、ジュノ経済大臣」
「致し方ありませんね。ではクラト軍事大臣の申請を許可します」
「ホーカー、良いってさ。金はジュノが持ってるから、買ってこいよ。俺はここで馬の番をしているからさ」
「ありがとうございます！すごいの作りますよ！」
「おぉ、すんごいのを頼むぜ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ホーカーは、私には気を遣った対応をする。軽口も叩かないし、必要な事しか喋らない。
私もそうだ。クラトさんには素で話が出来る。そういえばベルファーもそうだった。
・・・不思議な人だな。

ジュノはそんな事を考えながら、ホーカーの買物を終えると、クラトが待つ場所までの道すがら、ホーカーに尋ねた。
「どうして戻らなかったんだ？」
ホーカーは突然訊ねられて慌てた。買ったばかりの弓を見つめながら答えた。
「わ、分んないです」
「分らない？」
「はい。一晩中立ってたのも、クラトさんとジュノ隊長を追ったのも、気が付いたらそうしてたって感じで・・・」
「そうか」
「す、済みません」
「いや、それはそれでお前の答えなのだろう」
ホーカーは、この第一親衛隊長が武人とは思えないほど優しい人間であると感じた。
ホーカーの涙腺が緩む。
ホーカーは努力してやっと、普通に「ありがとうございます」と言う事ができた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

歩いていくと、待っているクラトが見えた。下ろした鞍に寄りかかって寝ているようだ。
ジュノもホーカーも、そっと近づいて驚かそうと思った。相手がクラトだとこんな考えも浮かぶようだ。
ふと、クラトの傍に近づく2人の男に気付いた。クラトの様子を窺いながら馬の手綱を丸太から外そうとしている。
ジュノが声をあげる前に、ホーカーが一歩前に出ると矢を弓につがえた。
狙う間もないタイミングで矢は放たれる。
長弓でこんな速射が出来る者をジュノは知らなかった。

手綱を外そうとしている男の横の丸太に命中して丸太を軋ませた。
クラトが目を覚ますと同時に男たちは逃げて行った。

「お、何だ、もう帰ってきたか」
「何だ、じゃありませんよ、もう少しで馬を盗まれるところだったんですから」
「え、そうなの？」
「ホーカーが矢で追い払いましたから大丈夫でしたけど」
「そうか、ホーカーの矢はすげぇからな。助かったよホーカー」
ホーカーは馬泥棒の事は忘れたように、ニコニコしながら購入したものを見せた。
弓が二張と長弓の補強で使ったのと同じ材料。俺にはさっぱり分らないが、良いものなのだろう。
今度はかなり手を入れるらしく、空いた時間を見つけて作るそうだ。

ホーカーはなかなか忙しい。
馬の世話もするし、森の近くを通る時には狩りもする。
食事の準備ではジュノの手伝いをするし、空いた時間はジュノから剣術を指南されている。
剣術は苦手なようで、剣を突き出して構えてしまうので、どうしても腰が引ける。いわゆるへっぴり腰というやつだ。

2日ほどで次の街に到着した。この街は少々小さいようだ。
宿で食事をする。ホーカーはまた臓物汁を注文した。
俺とジュノは肉と野菜のスープだ。それぞれにパンか粥が付く。
硬いパンをちぎって口に入れてゆっくり噛む。
俺はふと気付いた。奥のテーブルで食事をしている老人、前の街で見た事がある。
気付くと同時に違和感が湧く。身なりはごく普通だが、なんとなく上品さを感じる。

つまり、こんな安宿には似合わないという事だ。俺はほとんど睨むように見つめていた。
老人は俺達のテーブルのすぐ横の壁に掛けてあるメニュー、俺には読めないが、それを見ている。
またしても違和感。俺がこれだけ見つめているのに、ちらりとも視線をこちらに向けない。それに瞳が動いていない。壁のメニューを読んでいないという事だ。

俺はジュノに顔を向けて前の街で見たヤツが居るぜと伝えると、小さく「分ってます」と返ってきた。しかしジュノは全く違う方向を見ている。
「あの年寄りは何だろうな？」
「えっ？」
ここで初めてジュノが俺を見る。
俺が目で老人を指したが、指したテーブルには食器が並んでいるだけだった。

「クラトさん、それよりもこちらを」
一方、ジュノが注視している男はいかにも商人という感じだが、服装はかなり派手だ。
身に着けているのは安物ではないだろうが、さっきのジイさんと違って、何を身に着けようと安宿が似合うような男だった。
年齢は４０歳位か。仲間らしい男２人と酒を飲んでいる。

俺たちが食事を済ませると、男はゆらりと立ち上がった。
俺達のテーブルに近づくと愛想の良い顔でこう切り出した。
「私どもの護衛をお願いできませんでしょうか」
ジュノは全く無視している。
「護衛？」
俺が聞き返すと、男は目で頷いた。

「そうです。自前の護衛もおりますが、今回は重要な品でしてね。やはり腕の立つ方ににお願いしたいと思いまして」
男の顔は話しながらジュノに向けられた。
「我々は傭兵でもなければ護衛稼業もしていません」
ジュノは相変わらず男の顔も見ずにそっけ無く答えた。
「あなた、ジュノ様でございますよね。ルーフェンの第一親衛隊長の」
「だからどうだというのです。今は浪人の身、親衛隊の名前すら迷惑な話です」
「これは失礼いたしました。しかしこの世の中、なかなか実力は分らないもの。ジュノ様の経歴は信用に足るものです。是非お願いしたい」
「何度も言うようですが・・・」
ジュノの言葉をさえぎるように商人の主はこう切り出した。

「北で戦乱が起こりますよ」
ジュノの動きが止まる。
「我々の商隊は明日の昼頃に出発します。それまではここで仲間と打ち合わせをする予定ですので、よろしければおいで下さい」
男はそう言うと、深くお辞儀をしてテーブルに戻った。

「出ましょう」
ジュノは短く言うと、俺たちの顔も見ずに宿を出た。

3－4　襲撃

突然の護衛依頼。商隊の主がジュノに告げた“北の戦乱”
その後、ジュノの様子が少しおかしい。

ジュノは預けた馬を受取り、手綱を両手にして帰ってくると、やっと俺たちの顔を見た。
「すみません。今日はここで宿をとりましょう。相談があります」
少々ギクシャクした雰囲気だ。
「風呂ある？」
俺が聞くと、ジュノの硬い表情は少し緩んだ。
「ありますよ。では、さっぱりしてから相談といきますか」
「よしホーカー、風呂だ。着替えを買ってこようぜ」
「うれしいっス。暖かい風呂なんて久し振りです」
心配顔のホーカーも無邪気に戻る。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「彼等は武装です」
「ブソー？」
「武装商隊ですよ」
「あぁ、この前聞いたやつね」
「あの男が頭目でしょうね。商人なら主人（しゅじん）ですが、武装商隊は頭目と呼んでいます。あの男は結構できそうですよ。一緒に居た2人も隙がありませんでした」
「ジュノがそういうなら結構なヤツ等なんだろう。で、どうするんだ？」
「普通なら断ります。ただ、あの男は北で戦が起きると言いました。ここから北に向かうとギルモア国に入ります。ギルモアは東にグリ

ファ国のルーフェン郷とベルサ郷、北東にはクエーシト国と接しています」

「ここで戦乱が起きるとすると、ギルモア国が関係するのは間違いありません。クエーシトが自ら戦を起こすとは考えられませんし、近年国力を増しているグリファ国の侵攻戦と見るのが普通です。しかし、グリファ国は先のルーフェン殲滅戦で北西部の戦力は低下しているはずです。力は拮抗しているでしょう。もしかするとクエーシトの傭兵部隊が重要な動きをするかもしれません」「戦力の均衡が取れていればいるほど、小さい作用で戦が起きるものです」

「グリファが侵攻すると何か問題があるのか？」

「もしグリファ国の勢力が拡大すれば、私達の行き場が狭くなります。グリファが私達を武人として迎え入れる訳がないでしょう？」

「じゃ、何で北に向かうんだ？」

「戦場に立つ事が今後を見通す手段なのです。それにクエーシトが気になります」

「ジョシュ・ティラントか？」

「今後の戦を変えるとしたらクエーシトの技術です。詳しい情報が欲しい。できれば直に見ておきたいのです」

ジュノは俺の問いに直接は答えなかった。

「それに、戦があればこそ私達は力を発揮できるのですから」

このところジュノの柔いところばかりを見てきたので、違和感があるが、ジュノは武人なんだ。

そうだ、ジュノは戦いの中に生きる人種なのだ。

ルーフェンの近隣ではジュノの知名度は高い。あの商人の言っている事は正解だ。

後はどこの国、どこの郷に飛び込むかだな。

「護衛につくと、食は全て依頼主持ちですし、任務完了後に報酬が

支払われますから、何も無い者にはもってこいの仕事なのです。まぁ命がけの仕事ですから腕に自信がないとやってられませんけど」
「ただ、何か引っかかるんですよね。あの男は」
「一言で言えば切れ者ですよ。しかも情に流されない。この世界で成功する種類の人間ですね」

「俺はどうでもイイぜ。ホーカーはどう思う？」
これまで意見を求められた事がないのだろう。ホーカーは困った顔をしている。
「えっと、お、俺は、決めてもらえれば何でもやります」
「じゃ、やろうか用心棒」
「はい。ではそうしましょう。ホーカー、新しい弓を仕上げておいた方がいいよ」
ホーカーはジュノの言葉遣いが変わってきている事に気付いたが、言ったジュノは気付いてない。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ブォン！
ホーカーの長弓の音がする。
遠くで馬から人間が落ちる。ホーカーは遠距離から2人を射落し、もう1つの弓を手にした。
こちらは1．5mくらいで2本の弦がある。ホーカーの連射によって絶え間なく矢を射続ける。
ホーカーは親指と人差し指、薬指と小指でそれぞれ矢を番（つが）えている。同時に2本の矢を射れるが、ホーカー曰く、本来の使い方とは違うらしい。

北を目指す商隊に対して森から飛び出してきた賊は、既に5人が射落された。

森までが近かったせいで、ホーカーの長弓を使う時間はあまり無かった。
まだ３０人以上いるだろうか。怯む様子は全く見せず、突っ込んでくる。
ジュノは静かに足を前に進める。
横ではホーカーが震えだした。接近戦になるとからきしだ。
俺は荷馬車にベタ付きで荷を守る事になっている。

俺たちは武装商隊から甲冑と武器の配給を受けていた。
今日のジュノはフル武装だ。背には剣、両腰には刀、右手に槍、左手に３連ボウガン。
軍用の３連ボウガンを持たせるあたり、確かにこの武装商隊はただ者ではないようだ。
ジュノの足の動きは徐々に速くなりついには駆け出した。
ボウガンを３連射して投げ捨てるや、馬上の賊を槍に掛け、撥ね上げる。
剣で馬の脚を払い、落ちた賊に留めを刺す。
奪った馬に乗ると、左手は刀を逆手に持って防御し手綱を操る。右手で刀を振るう。
ジュノは刀を軽く振るう。相手の首が赤く染まり次々と落馬していく。
右肩から先を血で真っ赤にして走り回るジュノは別な生物に見えた。

商隊の護衛は俺たち３人と商隊自前の５人の８人だ。ジュノと昨日酒場に居た２人、たった３人で３０人以上の賊を抑えている。
「コイツら只者じゃねぇな。凄すぎる」

賊の荷馬車を追う速度が落ちた。それまで賊を追っていたジュノ達は、今度は賊から離れるように動く。
各個が包囲されるのを避けたのだ。

この賊はかなり高度に組織化されている戦闘部隊だ。
数も中隊規模以上だし騎馬の数も多い。つまり資金と場所を持っているという事だ。

街道の左には低い崖が壁のように連なっている。うねるように続く崖に沿って荷馬車は走る。
荷馬車は賊を右後方に見ながら進むと、前方に馬車が見えた。
「5～6人、子供も乗ってます！」目の良いホーカーが報告する。
「あの馬車に近づくな！」
武装商隊の頭目、バイカルノ・ブレントは馬車を操る御者に怒鳴った。
御者は速度を落として進路をとった。右から10人程度の賊が迫っている。
後方に目を向けると賊は5～6人、3つの隊に分かれ、護衛2人とジュノを牽制している。こうなるとジュノ達は迂闊に動けない。
荷馬車に取り付く賊を追うと後方から攻撃を受ける。
いくら腕が立つといっても後方から6人に囲まれてはひとたまりも無い。
バイカルノは護衛の1人を新たにジュノ達の戦う場所に送り出した。

突然、前方の馬車が狂ったように速度を上げた。
賊が商隊を襲っている事に気付いたのだろう。
そこへ賊の数人が先行して矢を射る。
馬車は急に左にそれて崖にぶつかるようにして停まる。
前方も抑えられた。
バイカルノは荷馬車を左の崖をうねった場所に停めるように御者に指示をする。

「ホーカー、弓で迎え撃て。俺とクラトは荷を守る。アレクトロとグラッサーは突っ込んですぐに戻れ。ボウガンで援護する」

御者と従者も戦うようで刀を手にしている。
バイカルノはボウガン越しに振り向いて言った。
「俺達は武装商隊だ。この仕事を終わらせて莫大な報酬を得るんだ。それに、俺達が運んでるのは荷物だけじゃねぇぞ！わかったな！」
それが合図かのようにホーカーが2本弦の弓を乱射する。近づく賊にアレクトロとグラッサーが突っ込み、槍で馬上の賊と斬り結んでいる。
バイカルノのボウガンとホーカーの弓が敵を確実に倒していく。
馬車に戻ろうとしたアレクトロが背後から討たれる。
血飛沫が舞う。

俺は震えていた。怖い。単純に怖い。
ラヴェン02と戦った時には何も感じなかったのに。
動かない。身体が。
剣の柄に両手が貼り付いたようになっている。

展開が早い。
実際の戦闘は、始まったら状況を見る余裕など無かった。
俺は何をしたら良いか分らず、ただ全身を強張らせているだけだった。

3－5　突貫

「く、くそぉッ！」
戦いが始まって俺は恐怖に取り憑かれた。身体は少しも動かせない。
その時、横転した馬車から数人が駆けて来るのが見えた。
その後方からは数人の賊が追ってくる。
賊の狙いはこの商隊だ。他へ逃げれば良いものを・・・。

逃げてくる中には女や子供が見えた。俺の身体が動いた。
「来るな！」声を張り上げる。
走ってくるのは中年と若い男女、それに子供だ。
顔には恐怖が張り付いている。俺の声など聞こえないのか必死に走ってくる。

クラトを横目に、バイカルノは走ってくる6人にむき会うと、ボウガンを発射した。
先頭の中年が倒れる。若い男も倒れる。
クラトが凄い形相でバイカルノの腕を掴むと、バイカルノは冷たい目でちらりとクラトを見た後、視線を戻す。
クラトも視線を戻すと、ちょうど賊が槍で女を突こうしていた。
背中を反らせた女の胸から槍先が突き出し、前にのめるように倒れると背中に突き立った槍が見えた。
賊は足を止めずに槍を持ち変えて引き抜き、逃げる背中を次々と突く。
ほんの数秒の事だった。

「うぁ、ふうぅあぁぁ！！」
俺は恐怖と怒りで混乱した。

走ってくる賊がスローモーションに見える。

振り返ると賊が放った弓がゆっくりと飛び交う。

ホーカーの身体には何本かの矢が立っている。

さっき女を突き殺した賊の顔が笑っているように見えた。

瞬間、俺は地を蹴っていた。刀を振り上げた賊の横を走り抜ける。
剣には僅かだが充分な手応え。賊は身体をくるりと回転させて倒れた。
次の賊を横から払うと甲冑が割れ、賊の身体は“く”の字に曲がってすっ飛ぶ。
槍が俺に向かって突き出された。
剣を立てて槍を避けると、剣をそのままに刀を抜きつつ賊に迫り、
肩口から袈裟懸けに刀を振るうと血煙があがる。

その先に小さな身体が落ちていた。血にまみれて落ちていた。
顔だけは眠っているようで、余計に俺の感情を昂ぶらせた。

近くに矢が飛んできて振り返ると、射られたホーカーが馬車から落ちるところだった。
俺の脳裏がフラッシュして体が勝手に動く。
剣を左手に刀を右手に賊に突っ込む。
左右から騎馬に挟まれたジュノが見える。レイソンの肩にも矢が立っている。
俺は両手をめちゃくちゃに振り回した。
腰を落として身体を回すように振るう。刀が折れる。
剣を両手に持って賊に打ち込む。賊の刀が折れ甲冑が割れる。

何度か背中に衝撃を感じたが、気にならない。ただ目の前にいる賊に剣を振るい続けた。

目の前に賊はいなくなった。振り返ると１０人にも満たない賊が逃げている。

ジュノが肩で息をつきながら馬を寄せてくる。

ベックとレイソンは槍で身体を支えている。

ホーカーは!?

馬車まで走っていくと、御者がグラッサーを、従者がホーカーの手当てをしていた。

「生きてたか」

戦いの後は声まで重く冷たくなるのだろうか。自分の声ではないように思えた。

無理に笑ったホーカー。

「凄いっスねクラトさん。剣術としてはメチャクチャだったけど」

「お前が言うな」

「こっちはアレクトロがやられたが、荷は守れた。ベックとレイソンも負傷しているだろう。応急手当をして先に進むぞ」

バイカルノがクラトに顔も向けずに言った。

「おい、バイカルノ」俺の重く冷たい声が響く。

「なぜ撃った。なぜ無関係の人間を撃った?」

「そんな事を聞くのか?お前のようなヤツが仕事を失敗させるんだ」

「答えろ。なぜ撃った」

「くだらん。あれが賊の罠だったらどうする?迎え入れて、次の瞬間に全滅だ」

「だが、罠ではなかった!」

「お前、魔法でも使えるのか?過去に戻れるのか?結果が出てから

じゃ間に合わんだろうが。僅かだろうと危険な可能性は潰しておくものだ。それもすぐにだ」
ベルファーも同じ事を言った。それが正解なのだろう。

頭では分る。分るが納得できなかった。
無意識のうちに刀に手がかかる。
すぐに後ろからベックとレイソンが俺の両脇に詰める。
「くだらん手間をかけさせるんじゃない。ベックとレイソンの手当てが先だ」
バイカルノがベックとレイソンを呼んで御者と従者が手当てをする。

取り残された俺にジュノが声を掛けた。
「クラトさん助かりましたよ。あの賊は普通じゃない。想定外です。それは相手も同じでしょうけど」
さすがに水の属性は回復が早い。
「クラトさん。言いづらいですが、バイカルノ殿の言った事が正解ですよ。納得は出来ないかもしれませんが、この世界で生きるのはそういう事です」
「わかってるよ。大丈夫だ」

「バイカルノ」俺が声を掛けると、バイカルノは御者と従者に死んだ賊の持ち物を回収するように指示し、俺に向かって言った。
「バイカルノでは呼びづらいだろう。バイカーでいいぜ」
バイカルノは宿で会った時のような商人然とした雰囲気は少しも見せなかった。

「クラト、お前はベタ付きで荷物を守る任務のはずだ。勝手に突っ込むんじゃねぇよ」「ま、突貫力は大したもんだ。今日はそれでチャラにしといてやる」
「そうかい、そりゃどうも」

俺も完全に冷静さを取り戻していた。

俺は自分が変わってしまった事に気付いていた。
戦だ。命が懸かっている。戦わなければ何も守れない、何も得られない。
しかし、どんなに言い繕おうと、俺は人を殺してしまった。
変わってしまったし、もう戻れない。
いや、変わらなければならないし、戻ってはいけないのだ。
何の為に？
生きる為だ。
俺は異人だ。
この世界では異分子だ。
そんな異人のくだらない悩みは、この世界じゃ犬だって鼻で笑うんだろう。
ま、ベルファーだったら説教するだろうが。

強い南風が吹いた。
風は砂を運び、俺に顔を背けさせる。
振り返るなと言わんばかりに風は吹く。

3－6　意識

タルキア国を南北に走る街道。
街道の西側にある低い崖の上に2人の人影があった

「風が出てきたな・・・」
「はい」

「それにしても・・・」
老人は風に乗ってきた砂のせいなのか言葉を探しているのか、少し間をおいた。
「とんでもない者達がいたものだな」
「はい」
若い男の声が僅かに棘を帯びる。

「本格的に接触してみるか」
若い男、思慮深さに満ちた顔と力に溢れた身体を持つ男が答える。
「わかりました。では早速追いましょう。次の街で休養を取るはずですし、護衛を補充するかもしれません。どちらにせよ我々には好都合です」

老人は目の前に手をかざし、街道を南から北へと見渡した。
「あの武装商隊には、私が欲しいものが揃っている」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

俺は初めて人を斬った。
斬った相手は血を流し骨が砕けた。
僅かな時間の苦痛と永遠の闇を与えたのだ。

死とは恐ろしい。死自体は苦痛ではない。
むしろ苦痛や悩みから逃れる手段でもある。
死の恐ろしさは、意識の喪失だ。
今、自分がここにいる。
呼吸をし、光を浴び、自分自身を認識している。
意識が切断されたら、本当に自分は消えてしまうだろう。
そして本当の恐ろしさは、自分が消えても世界が存在し続ける事だ。
認識できない世界が存在し続ける。
見る事も感じる事もできない世界が。
それが恐ろしいのだ。

俺がいた世界でも人間は大勢死ぬ。
戦争で、事故で、事件で、死ぬはずでは無かった人間が死ぬ。

死ぬはずでは無い？
ふざけるな。永遠の命でも手に入れたつもりか？
人間は死ぬのが普通なのだ。
力と運があって、やっと生き延びる事ができるのだ。
わかったか？
命とは、我々に力と運を要求しているのだ。

誰の言葉だっただろう。頭の中に響いた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

生き残った護衛は、俺たち“護衛傭兵”の他、ベック、レイソン、
ロキウス、グラッサーの４人だ。
この４人は、やはりエナルダだった。
傷は軽傷で済んでいるが、レイソンが戦闘中に自分で抜いた矢は鏃（やじり）

が身体の中に残ってしまったらしく、次の街で医者に見せるという。
ホーカーは5本の矢を受けて重傷だが、ジュノが馬車の移動中も治療するので何とかなるだろう。
しかし、ジュノ自身もだいぶ消耗しているし、2~3日滞在するらしい。
バイカルノが途中の休憩で説明すると、武装商隊のヤツ等は驚いていた。
ベックとロキウスの話が漏れ聞こえたが、普通なら重傷者を置いてでも先に進むらしい。
また、バイカーと呼ばせる事も無いそうだ。
ジュノとホーカーは相変わらずバイカルノと呼んでいるから、バイカーと呼ぶのは俺だけだが、良くなかったかね?
でも本人が言ったんだし、気にしないでおこう。

クラトが覚醒者ではないと知ると、皆が一様に驚く。
若いベックとロキウスは興味があるようだ。いつも不機嫌な顔をしている年配のレイソンは、ますます苦い顔をした。
グラッサーは「エナルダであろうと無かろうと力が全てだ」とベックとロキウスに言い聞かせたが、「だからクラトは優秀だという認識で良い」と付け加えてクラトの力を認めた。

ホーカーの治療を続けるジュノにバイカルノが声をかける。
「ジュノ、次の襲撃があるかもしれん。治療を止めて自分の回復に努めてくれ」
「・・・」
「大丈夫だ、ホーカーを置き去りにはしない」

置き去りにしたらジュノはどうする。
たぶん俺たちに付いて来るだろう。契約だから。
いや、もっと根源的な、約束を守るというプライドだ。

それは俺もヤツも分っている。しかしクラトはホーカーと残るだろう。
あいつは甘ちゃんだからな。
しかし、こいつら、クラトが抜けたら力は出し切れないだろう。
それにクラトの戦闘力は惜しい。これからの旅を考えると、遠距離戦のホーカーと近距離戦のクラトは重要な戦力だ。むざむざ捨てる訳にもいくまい。

「ホーカーを残すとクラトも残る。ヤツ等が抜けると戦力的に旅自体が困難になる」
「わかりました。そうしましょう」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「お、俺はいつもので・・・」
「また臓物汁か！その臭いが嫌いなんだよ俺は。お前はあっちで食えよ、まったく！」「だいたい、いつものって、馴染みの客かっての！」
「クラトさん、これは本当に栄養があるんですよ。私も今日は同じものにします」
「うはぁ、タマランなぁ。両脇で臓物汁かよ。俺は肉と野菜のスープにパンでいいや」
テーブルの反対側ではベックとロキウスが笑い、レイソンは不機嫌で、グラッサーは考え事をしていた。
バイカルノは従者を連れて出掛けている。戦場で拾い集めた武具や馬を売りに行ったのだ。

バイカルノは市場に集まる品を覗きながら歩いていた。
「変わったヤツだ」
まだ左腕には掴まれた時の感覚が残っている。

右手でさすりながら、不思議な感覚に捉われてた。
一種の警戒ににた感覚。自分が変わっていくような感覚だ。
しかし何だろう。不快ではなかった。

3－7　交差

武装商隊の従者はやや猫背で腕が長い。
黒ずんだ顔色のうだつがあがらなそうな男だ。
バイカルノの傍に従者の姿は無かった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バイカルノは盗賊との戦いを思い返して、不思議な感覚に浸っていた。
激しい戦闘だった。記憶にあるのは腕を掴んだクラトの顔だ。
まったく甘ちゃんだよ。あいつは。

突然、背中に声を掛けられた。
若い声だ。かなり出来ると感じた。

愛想の良い商人、バイカルノが振り返る。
「わたくしでございますか？何の御用でしょう？」
「依頼だ」
「私は荷を運ぶ商人でございます。今も荷を運ぶ途中でございまして、新たな仕事はお請け致しかねます」
若い男は全てを見通しているような冷ややかな目をバイカルノに向けていた。
「仕事の声を掛けていただくのはありがたい事ですが、実に残念でございます。また機会がございましたら、よろしくお願いいたします」
若い男の重圧（プレッシャー）は相当なものだ。バイカルノはいつになく喋り過ぎていた。

それだけでなく、若い男の背後に老人がいる事にも今気付いた。
老人はバイカルノが気付くのを待っていたかのように口を開く。
「まるごと買いたい」
「何かのご冗談でしょうか」
「場所を変えよう。我々には時間が無いのだ。良いだろう？武装商隊の頭目、バイカルノ」

バイカルノは顔に張り付いた笑みを外して言った。
「この若い奴と込みなら、あんたを雇ってやってもいいぜ」
若い男が半歩前に出て言った。
「ふざけるな。武装風情が軽口を叩くんじゃない」
「何だ、少しは出来ると思ったが、ガキはガキか。お前らを雇う話は無しだ。そっちの話を聞こうか」
若い男はつまらなそうに横を向き、老人は嬉しそうな顔をして言った。
「では付いて来てくれ」

バイカルノは自分が細い糸を掴んだような気がしていた。
それは大きな宝に繋がっているのか。それとも生きてきた己の人生を解れさせる糸なのか分らない。
分らないが気持ちが高揚していくのを感じた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

市場の外れに酒場があった。中心からかなり外れている。
置いてあるのは安酒、建物もそうだが、テーブルやイスも古く汚れている。
当然、集まる人間も決まってくる。
陽が落ちた頃、集まる人数も人間の種類も増えていく。

その酒場の一番奥、裏口がある厨房に近く、入口が良く見えるテーブル。
顔色の悪い男が、背を丸めるようにして干した肉をかじりながら酒を飲んでいる。
そこへマントを羽織った男が近づいて座る。
顔色の悪い男は酒を注文した。
酒が運ばれて来ると、マントの男は手を付ける前にもう一杯注文する。
一気に飲み干すと、革で包まれたものをテーブルの上に置いた。
2杯目の酒が運ばれてくる。
また一気に飲み干す。テーブルの上に置かれた小さな木箱を掴むとそのまま出て行った。

テーブルに残されたサイモスは革の包みを懐に入れると暫くの間、肉をかじっては酒を飲み続けた。
つい先ほどから入り口に害意を持った気配を感じる。
暫く待ったが気配が消えない。しかし時間もない。
サイモスは新たに酒とつまみを注文し、運ばれてくると用を足すのは外かと聞いた。もちろん外だ。

酒を運んできたまだ若い男は思った。
なんだこいつ。こんな安酒を出す酒場に便所がある訳無いだろう。
外の市場共同の便所に行け。

サイモスはすぐに戻るから言うと、若い男は体を寄せてきた。睨むような目つきは疑いの色に満ちている。
(俺が食い逃げってか。やれやれ)
サイモスは代金を支払い、テーブルを片付けるなと言ってから裏口から外に出た。

外へ出るとサイモスは酔った足取りで歩く。
大丈夫だ。気配は感じない。

サイモスは気付かなかったが、市場の共同便所の裏には一つの死体があった。
血でも流れていれば気付かないはずもなかったが、その死体は首を絞められていた。
首を絞められた死体の臭いは排泄物と同じだ。これでは気付かない。

サイモスは共同便所に近づきながら、かすかな気配を感じた。
右から3つ、左から2つ。
随分と念入りな事だな。サイモスは口許を少しだけ歪めて酔った足を進める。
あと数歩というところで5人の足音が聞こえた。
取り囲むように動こうとしている。

こいつ等、足音も消さずに近づくのか？
念入りなのは数だけか・・・
俺が酔っていると本当に思っているのか。
それとも5人で囲めば封殺できるとでも思ったのか。
サイモスは苛立った。
「舐められたものだ」

サイモスの酔った足取りは乱れ、左によろめく。
次の瞬間、体勢は疾駆に移り、左から近づく男の胸に短剣を押し込む。
後方では明らかな動揺が感じられた。便所の裏に回る。
と、潜んでいた男が構えていた刀を振った。

間に合わない！

言葉にもならない確信が脳裏を貫いた。

3－8　依頼

何者かは分らないが敵に包囲された。
1人を仕留め、便所の裏に姿を消してから反撃に移るはずだった。
裏に回った瞬間、横から刀が迫る。

間に合わないと感じる間もなく、何かがサイモスの足がぶつかり体勢を崩した。
僅かな頭上を刀が薙(な)いでいった。
サイモスは無理に体勢を立て直さない代わりに刀を確実に抜いた。
地面に預けた身体を回転させて、刀を振った男を下から突く。
しかし突きは浅く、死ぬ直前の反撃を肩に受ける。
「ぐぅ、くそっ」
前から3人、後ろから1人が駆けて来る。
前方に突っ込む。
3人は動揺した。手薄な後方へ走ると考えていたのだ。

交差して2人、切り返して1人を仕留める。
残る後方の1人は逃走を図った。
「バカが・・・」
つぶやくと瞬時に追い付き、首元へ一撃を加える。

便所の裏に戻ると、マントの男が死んでいた。
さっきはコイツに蹲いたのか。
働くのが嫌いな男だったが、最後に良い働きをしたようだ。
懐に木箱はない。
あの木箱に入っていたのはマスエナルだ。そこそこの品だが、どうでもいい。
襲った男達を検(あらた)めたが、何も出ては来なかった。

荷馬車を襲った賊との関連づけるものも見つからない。

物取りとは思えない。
我々の組織に何かが近づいている。誰かが何かに気付いたのか。
用意周到な割に稚拙な戦い方をする敵の襲撃。
考えがまとまらない。
肩の傷が心臓の鼓動に合わせて痛む。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バイカルノが組織しているのは武装商隊だけではなかった。
いや、むしろこちらが本業だ。
それは、この世界で“葉（レノ）”と呼ばれ、諜報活動や密書などの運搬を行う者たち。
ある者は国や郷に雇われ、ある者はその都度の契約で働く。
活動内容は幅広く、敵国の調査や諜報活動だけでなく、風説流布や情報操作、果ては暗殺まで行う。

総首領のバイカルノは配下の“葉（レノ）”達を“サバール隊”と名付けていた。
サバールとは“水飛沫（みずしぶき）”の事だ。
隊員は約２０名。機敏さに優れた者ばかりで、やはり気の属性のエナルダが重宝される。
驚くべきはその身体能力で森の中は猿のごとく、草原では鹿のごとしと評される。
１日の移動距離は馬以上であり、駅伝制度が整った街道でも無い限り、レノの者が一番早い情報を運ぶ事になる。
その運ぶものは時として暗殺という命であったりもするのだが・・・
レノの優れた点は山道だろうと崖だろうと踏破できるところにある。
時間の最短距離を進める利点は計り知れない。

また運用に馬のような設備や手間は要らないし、隠密活動には最適なのだ。
サイモスはサバール隊を任されているが、今回は武装商隊に同行を命じられていた。

肩に布を当てて縛る。男からマントを剥ぎ取って羽織るとサイモスは一旦街を出た。
街の境界線になっている水路の外側を暫く走ってから街に入った。
あのスピードで走れば追っ手がいてもまいたはずだ。
すぐに医者へ行った。レイソンとホーカーを治療した医者だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

老人は唐突に切り出した。
「全ての面で今より満足できる仕事がある」
「どこぞの貴族か政府の者だろうが、俺を使おうって話なら、まずは名乗ってもらおう」
若い男はにらみつけ、老人はまた笑いながら詫びた。
「ギルモア国バルカ郷、内務府のヴェルーノだ」
この老人はそれ以上言わなかったが、バイカルノは国や郷の要人の名前は全て記憶している。
眼前の老人はバルカ郷の内務大臣ヴェルーノ・マラウィ卿だ。
「この男は親衛隊のランクスだ」
ランクスは目だけで挨拶をした。
茶を入れて二人の前におくと部屋の入口まで下がって控えている。

老人は目以外の笑顔をバイカルノに向けて言った。
「調べさせてもらった。お前の武装商隊を」
「それは構わんよ。隠すものは何も無い」
「お前の頭の中以外はな」

「何が言いたい？」
「お前の優れた所はその頭脳だろう。商隊を経営しているが、むしろ軍師としての才能がある」
「お前の組織ごと丸々抱え込みたいのだ」

バイカルノは警戒心が表に出ないように注意しながら聞いた。
「丸々とは？」
「武装商隊のメンバーの事だ。軍事の面でも優秀なのだよ、お前の組織は」
「言っておくが、今回のメンバーのうち、3人は雇い入れた護衛だ。そいつが欲しいんだったら直接聞くんだな」
「そういう交渉も含めての依頼だ」
「もう少し詳しく話しを聞かせてくれ」

バイカルノは無性に喉が乾いていた。
しかし喉を潤すよりも、老人の説明を欲している。

3－9　寿命

ギルモア国バルカ郷の内務大臣ヴェルーノ卿
この老人は交渉が一歩進んだ事を感じながら次の説明に移る。
“北の戦乱”の噂は聞いているな。この戦にバルカ郷は無関係だ。
しかし、遠からず必ず巻き込まれる。

ギルモアもバルカも遥か昔からの歴史を持っている。
クエーシトなどという流民の国家や、グリファのような成り上がり国家とは違うのだ。
しかし、バルカは余りにも長く眠りすぎていたのだ。
バルカ郷も先代の殿が御存命の時には何とかなっていたのだが・・・。

我々が無能だった。いつの間にか気骨も失っていたのだ。
このままでは消えていくしかない。
儂(わし)のような老いぼれが言うなら、若い者の未来とでも言うべきなのかもしれんが、儂はバルカ郷の存続と栄光をこの目で確信したい。
その為に我が身を使いたいのだ。
お前に頼みたいのは、簡単に言えば郷の建て直しだ。
お前とお前が選んだ人間には、いづれバルカの要職についてもらう。

「何の戯言だ？」
バイカルノは言いつつも、この老人は狂人でもないし、真摯に心を吐露している事を感じた。
しかし、どうやって？この老人は大臣といっても内務大臣でしかない。
内務府は重要かつ大規模ではあるが、外部からの人間を要職につけ

るなど可能なのか？

「当然危険は伴うし、確約はできない」
バイカルノは確信した。この老人は一種の政変を起こそうとしている。
「ヴェルーノ卿、何をしようとしているのか分っているのか？」

「寿命なのだよ・・・」
「なに？」バイカルノが聞き返した。
「もう、我らの郷は寿命なのだよ」
「我が郷は古より、この世界を造った創造主を守る三軍神のひとつであり、その後の大戦乱“世界の混沌”で唯一血筋を守ったという神話を持つバルカ家だ」
「バルカ家が国家になる機会は過去に何度となくあったが、その時の領主はそれを潔しとせず、あくまで軍神であろうとした」「それはそれで良いとしても、長い年月は“潔い”を“甘んじる”に変えていった。気位が高く、しきたりばかりを重んじる、古臭い郷が残ったという事だ」

バイカルノは黙って聞いた。
この老人は命を賭けて語っていると感じたからだ。
そして、この老人が命を賭けるという事は、自分の命も既に賭けられている事を意味する。
あの若い男が後ろに控えているのは、返答次第では斬るという事なのだ。
しかし、そんな事はどうでもよかった。

「俺は今でこそマトモにやってるが、元々は盗賊の一味だった。そんな男でも引き込もうっていうのか？」
「ふむ、今の国や郷の王族も元を辿れば同じようなものだろう」

老人は自嘲気味に少し笑った後、バイカルノに向かうと、「どうだ」と言って目を見据えた。

「いいぜ・・・。うん、やろう」

「商人のくせに条件とか出さないのか？もっと詳しく聞かないのか？」

「利を多く取るのにリスクは付きものだ。勢いがある郷の勝ち馬に乗っても取り分は少ないだろうし、兵隊として使い捨てられるのがオチだ」

「ま、元々商人なんてガラじゃないのさ。武装でなけりゃ商売なんてやって無いだろう」「それに１０や２０の手下を率いて盗賊やらの相手をするのも飽きたしな」

「・・・だいたい、ここで受けなきゃ、俺の首は飛んでるんだろ？」

老人はひとしきり笑った後で満足そうに言った。

「また連絡をする。それまでランクスを預ける。好きに使ってくれ」

控えていた若い男はバイカルノの前に進むと、深々と頭を下げた。

バイカルノはランクスという若い男が優秀である事を確信した。

そして、いつでも自分を斬れるという事も。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

サイモスはバイカルノと酒場で会った。

この街で最高級の酒場だ。

この部屋には、老人の命懸けの意志が残っているようだ。バイカルノは珍しく高揚していた。

サイモスもこんなバイカルノを見た事がない。

バイカルノは今回を最後に武装商隊を解散させ、傭兵隊を組織すると言った。

サバール隊は引き続きサイモスが管理し、側面から傭兵隊を援護す

る事とした。
武装商隊のメンバーに話しをするのは荷を運んでからだ。
荷の送り先はクエーシト。

クエーシトの中心部までは入れないが、何かしら得るものがあるかもしれない。
特にジュノはこだわっているようだ。

まずは無事にこの旅を終わらせてからだ。
武装商隊の頭目バイカルノ、サバール隊隊長サイモス、バルカ郷親衛隊ランクス、クラト達護衛傭兵、武装商隊一行はタルキアの街道を北へ。
武装商隊は荷の他に新たな思惑を乗せて進む。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ランクスは武装商隊の一員として旅を続ける中でこれまでにない充実感を味わっていた。
崖の上で賊との戦闘で見た事を実感する。
この武装商隊は凄い。よくこれだけの人物を揃えたものだ。
ランクスが合流した後も何度か盗賊からの襲撃を受けたが、２０人程度の賊ならばジュノ、ベック、レイソンの３人で蹴散らしてしまう。
盗賊も１０人程度の商隊と考えているようで、襲うにも手頃と感じているのだろうが、まさかエナルダを５人も擁し、クラトやホーカーなど戦闘力が高い護衛がいるとは思いもつかないだろう。

この武装商隊をヴェルーノ卿の下（もと）へ引き入れる事ができれば計画は前進する。
自分の任務はメンバーのデータ収集と監視だ。

ランクスは改めて考える。
武装商隊のメンバーはバイカルノに任せれば良いだろう。問題は護衛傭兵隊の３人だ。
この３人が問題なのは、バイカルノの配下ではないという事よりも、その戦闘力を含めた価値が特に高い点にある。“抜けたら痛い”という事だ。

ヴェルーノ卿が求めているのは、軍事面でも政治面でも強い意志をもって任務を遂行できる人物だ。
バイカルノは作戦立案・遂行能力に優れ、軍団長としてはもちろん、バルカ郷の軍師としても充分にやっていけると考えている。
軍師は今のバルカにおいては最大にしてデリケートな問題なのだ。
課題ではなく“問題点”なのだ。今回の作戦において最も重要な部分となる。
後々バイカルノには説明をしなければならないだろう。
レイソン、グラッサーは師団長、ベック、ロキウスは年齢的にも中隊長か大隊長が適任だろう。
これで軍団が一つできあがる。

後は護衛傭兵隊をどうするか。

3－10　女剣士

さて、護衛傭兵隊の3人だが・・・

ジュノは指揮能力に優れ、バイカルノと同様に作戦の遂行と結果を最優先し、流されない心を持つ。

軍団を任せられる人物だ。

ルーフェン郷はギルモア国に近く、ジュノの名前はバルカ郷にも伝わっていた。

それは近隣国に響き渡ったタレス将軍の養子にして後継者と目されている部分があるにせよ、その実力だけでなく人柄や容姿を含めて、“ルーフェンの青騎士”と称され、特に婦人方には人気が高かった。

元第一親衛隊長とうい過去にこだわらず、食事の準備や歩哨、武具馬具の手入れなど、率先して行ってその真摯は姿勢は他の者の身を正すものだ。

ホーカーやクラトへの剣術指南を見ると、ジュノの才能が戦闘力だけではなく将としても優れている事がわかる。

１０人預けても、１，０００人預けても任務を完遂するだろう。

つまり、兵士としても士官としても将校としても優れているという事だ。

ホーカーは元奴隷らしい。バルカ郷貴族の奴隷ならば放置できないが、他国の脱走奴隷にとやかく言うつもりはない。

奴隷はその生殺与奪権を含めて持ち主の所有である。どの国でもごく普通に売買されている。

奴隷は市民としての権利は無いが、生産力として見れば市民以上のそれが期待でき、多くの奴隷を所有する事で多くの収入を得る事が可能だった。

事実、貴族は奴隷の上に成り立っていたと言っても過言ではない。

しかし近年、国や郷が奴隷税を導入してから奴隷の数は急激に減っていった。
“稼ぐ”奴隷でなければ税金で赤字になってしまうのだ。
このホーカーという奴隷は射手としての能力が高く、オルグ狩りに参加していたというから“稼ぐ”奴隷だったのだろう。その能力は先の戦いで確認済みだ。

そしてクラトだが・・・
その戦闘力はこれまで見てきた一線級の武人と比べても遜色無い。
むしろ突貫力では群を抜いている。
ただ、あまりにも不安定だ。
その力は感情の爆発であり、自らコントロールしきれていない。
これでは大小に係わらず隊は任せられない。
しかし、休憩の時など、クラトの周りには人が集まる。
皆が言う。「クラトの前だと話がしやすい」
言い方を変えれば気を遣わなくていいという事か。
聞けば異人だという話だし、驚いた事に“覚醒”していないという。

不思議な男だ。ギルモア国の創世記に記された王に似ている。
創世記によれば、ギルモア建国の王は、友人のように語りかけ、親を頼るように請い、子供を守るように助ける。
喜怒哀楽を明らかにして隠すところがない。
人々は集い全てを語る。それが故に真実を知る。
真実を知り私心無くば大業の基なり。

本当に不思議な男だ。話をしていると何でも出来そうな気がしてくる。
危険だ。気をつけなければなるまい。
クラトという男、多くの人間を死に導く者かも知れない。

ランクスが合流して４日後、ギルモアとタルキアの国境にさしかかった。
ここから西に向かえばバルカ郷に至るが、バルカに入るのはまだ先だ。
ギルモア国のパレント郷を北上する。
パレント郷は東をグリファ国ベルサ郷、北東はクエーシト国と接している。
つまり両国と国境を接するギルモアにとっては重要な郷である。

ここまでランクスが見せた戦闘力はヴェルーノ卿の言葉どおり、非常に高いものだった。
ジュノはランクスの動きに武人を感じ、違和感を感じた。
そして、ランクスはサイモスが途中から先にクエーシトへ向かった事に違和感を感じていた。
それぞれの立場と思惑が交差しつつ、商隊は進む。
クエーシトに到着するのは４日後の予定だ。
そう、この旅も後４日のはずだった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

国境は国の中心から外れ、賊の住処（すみか）になっている場合が多い。
特に最近のギルモア国内では盗賊の数が増えていた。
国力が低下している証拠だ。
盗賊は古来より山中に砦を作って暮らしているのが普通だが、村の中に存在する場合もあった。
これらの村は盗賊に貢ぎ仕える事で被害を回避し、さらに他の勢力から守ってもらうのだ。
この村と盗賊の関係は、生産と防衛の分業によって一体化し、ここに地方勢力を形成する。
この防衛の部分を自警団的な組織が担う場合もあるが、職業的武装

集団の維持は、経済的にも戦闘能力的にも非常に困難であった。
この世界では盗賊も一つの職業と言えるのかもしれない。

国境で盗賊の襲撃を受ける。ランクスが合流してから3度目だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ギルモアの国境付近で襲ってきた盗賊は、異常な強さの女首領と、戦慣れしていない配下の男達だった。
女首領にグラッサーとベックが挑み、逆に深手を負う。
戦闘力を奪ったと考えたのか、止めも刺さずに荷馬車へ向かう。
荷馬車を護るクラトは真正面からぶつかる。
もの凄い音がした。

ルシルヴァ・バークレイは目の下に真一文字の刀傷がある赤い髪の女剣士だ。
実力優先のこの世界でも女の首領は珍しい。
彼女は優秀なエナルダだった。元々の身体能力にも優れており、エナル係数が効率よく作用しているのであろう。
それまで負けた事など無かった。相手が何人であろうと打ち倒してきたのだ。
そのルシルヴァが打ち負けて身体ごと弾き飛ばされている。
弾き飛ばされながら信じられないという目を見開いた。

さすがに醜く腰を打つ事もなく、何とか踏みとどまったところへクラトの剣が横殴りに迫る。
甲冑は割れ、今度こそ文字通り身体は宙を舞った。
信じられなかった。
一太刀も浴びせられないまま地に這っている。
起き上がろうとして身体が転がる。

青い空が見えた。

クラトがゆっくりと迫る。
そこへ左右から2騎づつ賊が迫り、2人が斬られる間にルシルヴァを馬へ救い上げた。1人は自らの馬を譲り、もう1人が手綱を引いて逃走を図る。
降りた賊は首領の逃走を見送ると、クラトに打って掛かり、追い付いたレイソンに斬られた。

今回は蹴散らすだけではなく、賊の砦まで攻め込む。
これまでの襲撃と関係ありと見たバイカルノが、クラト、ジュノ、ホーカー、ランクスを連れて追撃したのだ。

クラトが砦の中まで単独で突っ込んだ。ジュノ達は援護すべく周囲の賊と戦い始める。
「またクラトの先走りかよ。まったく」
バイカルノが剣を振るいながらもぼやく

森と岩場が混在する場所に柵が造られ、戦いにくい事このうえない。
こんなところに単独で突入するなど、無謀すぎた。
バイカルノ達はクラトが気になりつつも、なかなか突破できないでいた。

3－11　逃亡

クラトは砦に侵入したが、賊は見当たらない。
そのまま突っ走る。

クラトが砦の奥まで迫ると3人の賊が肩で息をついていた。
砦の後ろの森に抜ける場所。
3人ともかなりの深手を負っている。
クラトは背中を向けて出て行こうとした。
その背中に女の声が飛ぶ。
「待ちな、なんで殺さないんだい」
「必要がない」
「あたしらは盗賊だよ。盗賊が逃げる事もできないほど負けたら死ぬしかないじゃないか」
「何で盗賊なんかやってんだ？」
「ふん、この砦の連中は元々農民なのさ。5年前に国に土地を召し上げられたんだ。僅かな代金でね」「土地を失った農民は奴隷か盗賊になるしかないんだよ」
「お前も村の者か？」
「あたしは村の自警団の1人だった」
「自警団？女でか？」
「あたしはエナルダに覚醒してたからね。今は奪ったマスエナルも装備しているし、結構強化してると思ってたんだけどね」
「実際、負けた事なんか無かった。あんた凄いよ本気（マジ）で」
「さ、これで分っただろう？殺しておくれよ」
「死ねば少しは世の中の為になるんだろう？あたしは盗賊なんだからさ」
「ま、最後に自分より強い男に会えて良かったよ」

クラトは震えていた。自分でも分らないまま。
国家の理不尽と懸命に生きようとする人間。
クラトは「逃げろ」と言った。
3人とも驚いた目でクラトを見つめた。
「お前らは正しくは無いが、間違えてもいない」「俺は帰るぜ。お前らは死ぬべき人間じゃない」
「待ちな、訳が分んないよ」
「俺だって分らねぇよ。俺が異人だからかな？」
「異人？あんた異人か・・・」
「とにかく逃げな。戦場だったら問答無用でぶっ飛ばすけどな」

クラトが振り返った瞬間、バイカルノたちが走り込んで来た。
「クラトさん、無事っスか！」
ホーカーが大声を出す。
ほっとした空気が流れる中、バイカルノがボウガンの照準を合わせながら、冷たい声で言った。
「クラト、どきな」
「こいつらはもう抵抗できないぜ。殺すのは無意味だ」
「てめぇの甘さにゃ反吐（へど）が出るぜ！」「戦いってのは恨みしか残さねぇんだ。そして恨みってのは損得抜きで晴らすもんだ」
「どうなる！こいつらを生かしてみろ、こいつらの生きる目的は俺たちへの復讐になるんだ」

「それは違う！こいつらは元農民で土地を国に奪われたんだ。盗賊稼業に納得していない！」
「いい加減にしろよ、てめぇも一緒にぶち抜くぜ」
「こいつら死ぬって言ってんだよ！そこまで覚悟してるんだ！やり直せる！」

バイカルノの動きが止まった。

まさに引き金を引くタイミングでジュノの声が響く。
「バイカルノ殿！待って下さい！クラトさん！ダメです、戻って下さい！」
ホーカーがバイカルノの前まで進むと、クラトに剣を構えた。
「ホーカー、俺に剣を向けようってのか？いいだろう、相手になってやるぜ」
ホーカーは剣を上段に構えつつも目は何かを訴えていた。
ホーカーが打ち下ろす剣を、クラトは剣を寝かせて受ける。
剣からは火花が飛び散り、弾かれたホーカーが剣を振るう。
クラトが受け、打ち返す。激しい打ち合いが続く。

ランクスがジュノに耳打ちする。
「おかしいですよ、この打ち合いは」
「しっ、黙って。バイカルノ殿も気付いているはずです。何も動かないのは見逃しているのでしょう」
「良いのですか？」
「指揮官はバイカルノ殿です。彼の判断に委ねましょう。それに指摘をしたら、バイカルノ殿はクラトさんとホーカー、2人とも討ち取らねばならなくなります」
「しかし」
ジュノは諦めたような楽しんでいるような、それでいて諭すような不思議な微笑みを見せて言った。
「仕方が無いですよ。クラトさんは、まだまだ異人なのです」「それに、これほど対立しても、バイカルノ殿もクラトさんも恨みには思わないでしょう」
「そういうものですか？」
「そういうものです。あの人達は」

クラトがやや押されている。力だけで見ればホーカーもなかなかのものだ。

クラトが叫ぶ「下がれ！」
賊は戸惑いながらも逃げていった。
「はッ、本当に逃がしやがった」「お前には厳罰を受けてもらうぜ」
「厳罰だと？いやなこった！」
クラトは剣を構えたまま後ろへ跳んだ。
跳びながら剣を横に払うと、腕ぐらいの樹木が何本もなぎ倒される。

誰も追わなかった。
ホーカーは泣いているし、ジュノは押し黙ったまま、ランクスは呆然としている。

バイカルノはショックを受けていた。
俺は正しいはずだ。なのにクラトは去った。
ホーカーは積極的に、ジュノは消極的に妨害した。
そして何よりも、俺自身が認めていた。賊の解放もジュノ達の妨害も。
どうなっちまったんだ俺は？
クラトと会ってからだ。俺が変わっちまう。
「くそっ！」
バイカルノは一言「帰るぞ」と言って馬車に向かった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

馬車の近くまで戻ると、バイカルノは振り向いて言った。
「クラトは賊を追って森の奥へ入った。あんなバカを待ってられんから出発するぞ」
「本当にイライラするぜ、まったく」
バイカルノが苛(いら)ついているのは自分に対してだった。

「クラトさんは子供みたいだ」

ホーカーがぽつりと漏らすと、バイカルノが返す。
「あんな大剣振り回すガキがいたんじゃ危なくてしょうがねぇな。今度会ったらお仕置きと指導が必要だぜ。かなりキツイのがな」
バイカルノはクラトを許していた。
ここにサイモスがいたら気を失うだろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「ほんとにバカだね、アンタは」
逃亡の直後、ルシルヴァとクラトはパレント郷の盗賊討伐隊に捕縛されていた。

3－12　処刑

貴様ら盗賊は、殺し、奪い、去っていく。
死刑なのは間違いないが、長官が不在だ。牢に入っていろ。
長官がお戻りになり次第、貴様らには死んでもらう。

「さっさと殺しゃいいじゃないか、長官とやらがいなけりゃ何もできないのかい？」
「バカ者が。貴様らの死刑は決まっていると言っただろうが。長官がお決めになるのは、お前達をどうやって殺すかだ」

討伐隊は内務府隷下の治安庁に属している。長官とは治安庁のトップだ。
その長官の到着は2日後になるという。
「まさか簡単に死ねるとでも思っていたのか？このところ盗賊が増えた。郷への反逆行為がどのような結果になるか思い知らせてやる」
討伐隊の隊長は楽しそうに続ける。
「まぁ、百分刑かリグノ刑・・・長官の機嫌が良ければ百本刑かもな」
隊長が笑いながら手を挙げると、兵士が１０人も集まってきた。
クラトとルシルヴァは引き立てられ、牢へ放り込まれる。
水さえ与えられなかった。後2日生きてさえいれば良いのだから。

「おい、さっきのハゲが言ってた刑の意味が分らないんだが」
「ハゲね、ハハッ。そうか、アンタは異人だったね」
「百分刑ってのは身体に百本の線を描いて、心臓から遠い順から切断していく処刑方法だ。ま、途中で出血多量で死ぬけどね」
「リグノってのは重さの単位だよ。何て説明すればいいかな。ん～、あたしの体重が１１０リグノだ。アンタは１２０はありそうだね。

そうだ、アンタの剣が１５リグノだよ。あれは通常品の中で一番大型のもので、エナルダじゃない限り扱えない代物さ。それを片手で振り回すんだからアンタ異常だよ」

「１人だったら捕まる事もなかったろうに、初めてだよこんな男は、本当に・・・」

ルシルヴァは俺の顔を少し見入った。

視線が近づくのを感じる。

「俺が変わってるのは異人だからかな？」

ルシルヴァは慌てたように説明を続ける。

「あ、リグノ刑だったね。脇の下にロープを結んで吊り下げて、縛った足に１リグノづつ錘を足していくんだ。一度見た事があるけど、関節が外れて足が異常に長くなってた。しかもなかなか死ねないから苦しいよ」

「百本刑は身体に百本の釘を打ち込む刑。もっとも５本目が心臓、６本目が額だから、余り苦しまないで死ねるかな。昔は心臓と額は最後だったらしいけど」

説明を聞いていて胸が悪くなってきた。

それにしても屈託無く説明するよな。この女は。

改めて横顔を見ると、非常に美しい顔をしている事に気付く。

赤い髪に浅黒い肌、目の下を横に走る傷痕、それにあの口調。

ルシルヴァの美しさを隠すものは多い。

「な、なに見てんのさ」

「いや、なかなか美人だな。と思ってさ」

ルシルヴァが目を丸くすると同時に頬が染まる。

（ドガッ！）

「ぐぅ、痛ぇ・・・」

「じょ、冗談いってんじゃないよ！まったく！」

「お前、けが人じゃなかったっけ・・・冗談みたいに痛いよコリャ。

いや、美人だってのは冗談じゃな・・・」
（ガスッ！）
「ぐぁ、処刑される前に死んじまうよ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

牢に入れられてから何とか逃げ出せないものかと色々やってみたが、牢は頑丈な造りだし、足には鎖をかけられているし、どうにもならなかった。

ルシルヴァと話して過ごす。
俺はこの世界の事を色々と聞いた。
リグノの５０分の１がグノン。５００倍がリガルだ。
リグノは大体０．５ｋｇ位と考えてよさそうだ。
長さはリティが約８０ｃｍ、５０分の１がミティ、５００倍がファロだ。
「今さらそんな事聞いてどうするんだい」
「色々と知りたいんだよ、知らないままってのも気持ち悪いだろ」
「じゃ、アンタの事を教えてくれないか」
俺は色々と話してやった。お互い自己紹介する時間はたっぷりある。
ルシルヴァも次第に自分の事を語りだした。

ルシルヴァの歳は２３、なんだ俺より下じゃないか。
また殴られるから黙っておこう。
ギルモア国の西部にあるマーカスという郷の出身らしい。
ジプシーのように放浪してあの砦に落ち着いたって話だ。
ルシルヴァは俺の世界の事をしきりに聞いた。
まるでおとぎ話のようだと言っては、目を丸くして驚き、目を細くして笑う。
表情が豊かで魅力的だと感じた。

話を続けるうちにルシルヴァは少女のようなあどけなさを感じさせた。
１５歳で覚醒して自警団入り、１７歳で自警団隊長、１８歳で村を追われて、２０歳で盗賊の首領か・・・
なかなか過酷な人生だ。
戦い以外はまだ１５歳の少女のままなのかもな。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

意外と早く時間は過ぎて、処刑の朝を迎えた。
マジでどうにもならなかった。死ぬのか？
死にそうになって痛い思いして、痛い思いして死にそうになって、結局死ぬってか。
アホくさ。ま、少しは楽しかったし、まぁイイか。
俺の、死というもの、いや命というものについての考え方が変わってきたのか、冷静でいられた。
覚悟ってのは過酷を経験して出来るものなのだろう。

昼頃、長官がやってきたようだ。
処刑方法を決める代わりに、捕まった賊はエナルダとエナルダ以外に分けられた。
俺とルシルヴァは聞かれもせずにエナルダに振り分けられている。
エナルダと申請したのは６人だ。
隊長も落ち着かない様子で、書類を何度も確認している。
エナルダには水と粗末な食べ物が与えられた。
足の自由を奪う鎖ますます厳重になり、歩くにも難儀する。

「お前らエナルダで良かったな。とある筋からお前らを欲しいと要請があったんで、お前らは死ななくて良い事になった」
「俺はエナルダじゃないぜ」

「バ、バカッ」ルシルヴァが慌ててクラトを引っ張る。
長官が隊長に顔を向け、隊長は慌てた。
「お前ふざけるな！１５リグノ剣を片手で振り回しておいて、エナルダじゃない訳がないだろうが！」

「バカだねアンタは。なにやってんだい」「それよりクラトは逃げられるんじゃないか。この鎖さえ何とかすれば」
「ん～、いいよ。お前、まだ走れないだろ」
「は？なに言ってるんだ、１人で逃げりゃいいじゃないか」
「そうもいかんだろ。仲間を裏切ってまで助けた意味がねぇよ」「そんな事したら仲間にも悪いし」
「ほんと訳わかんないね。裏切っといて何が悪いだよ・・・」
「ふふっ、クラトがおかしいのは元々だからね。ま、ありがと、うれしいよ」
ルシルヴァは柔らかく笑った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

その後は監視が厳しいものの、扱いは良くなった。
俺たちは馬車で運ばれる事になり、檻車（かんしゃ）に乗せられた。

3－13　護送

「報酬は行き渡ったか？」
「あの、包みが一つ多いのですが」
ジュノがたずねると、バイカルノは面倒臭そうに「クラトの分だ」と言った。
報酬はかなりの額だった。
ホーカーは目を丸くして口も利けない。何を運んだというのだろう。

ここはクエーシトとギルモアの国境の街。
仕事を終えて、バイカルノは得た報酬の分配を行った。

「この後、席を設けてある。今後の話があるから、今回の商隊に参加しなかったメンバーも全員呼んである。お前らも全員参加してくれ」
皆、一風呂浴びて宴席に向かうらしく、ガヤガヤと楽しそうに出て行った。

ジュノとホーカー、ランクスとバイカルノが残った。
バイカルノは「お前らも必ず来いよ」と言って腰を上げた。
「分りました」とジュノが答えると、バイカルノは出て行き、ランクスも続いた。

ジュノとホーカーが通りに出ると、バイカルノが腕を組んで立っていた。遠くを見ている。
明らかにジュノ達を待っていたようだ。
ジュノは並んで話しかけた「何かお話でも？」
「ジュノ、とある郷から軍団長をやって欲しいと依頼があったらどうする？」

「何ですか突然。武人にとって軍団長は夢ですからね。それは指揮を執ってみたいですが、やはり良い国や郷に仕えたいという気持ちが強いです」
「なに言ってんだ？良い国ってなんだ？お前もクラトの毒を喰らったんじゃないのか？」
「クラトさんの話は止めましょう。いない人間の話は実が無い」
ホーカーは口を挟むような事ではないので、遠くを見つめていた。
と、その口から言葉が漏れる。
「クラトさん・・・」
「ホーカー、お前がクラトさんに思い入れがあるのは分るけど、未練を残しては先に進めないよ」
「いや、クラトさんが・・・」
「いい加減にしな、ホーカー」バイカルノの苛立った声。

「やっぱりクラトさんだ、クラトさんがいますよ！」
「はぁ？お前、目が腐ってきたんじゃないのか？」
「あそこです、あそこです」
ホーカーが指差す先を見ると、１台の大型馬車が街道を横切るところだった。
その馬車は護送用の檻車（かんしゃ）を引いており、確かにクラトが乗っている。
その隣にはあの女首領もいる。
３人は駆け出した。ホーカーが立ちはだかって馬車を停めると、馬車の後方から護衛の騎馬が飛んでくる。
「我らはギルモア国パレント郷の内務府治安庁所属の護送班だ。クエーシト政府の許可も得ている」
どうやら、クエーシト警備兵から警戒されたと勘違いしているようだ。
バイカルノは進み出ると「隊長と話がしたい」実に重厚な態度と声だ。
護衛からどう聞いたものか、隊長は慌ててやってきた。

「そなたが隊長か、話がある」
それだけ言うとバイカルノは踵(きびす)を返して街中へ向かう。
隊長は部下に休憩を命じてバイカルノの後を追った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「捕らえられた者の中にグリファの者が居る。何かの手違いで囚われたのだろう。引き渡してもらいたい」
小太りの隊長はバイカルノに威圧されながらも、笑いを浮かべて断った。
「グリファの者が正式な裁判も無く罪人とされる事を我々グリファ国は絶対に許さない。後で正式に抗議する事になるが、今件はそなたの判断で拒否されたという事で良いな？」
隊長は突然大きくなった話に驚いて声も出ないようだ。
「もし、グリファとギルモアの外交問題になった場合はそなたが原因という事で良いのだな？」
護送隊長は青ざめている。
バイカルノは口調を和らげて言った。
「我らは外交で各国を渡っている身ゆえ、事は荒立てたくない。ついては隊長に費用を支払うから解放してもらいたい」
護送隊長はまだ迷っているようだ。
「囚人の護送では途中で死亡者が出る事もあるらしいな。ギルモアで死んだ事にすればよかろう」
隊長の目の前に金を積む。驚くほどの大金だ。
隊長の怯えた目は驚きの目に、そして欲望の目に変わっていった。
何か言おうとする隊長にバイカルノは獣(けもの)の目で言った。
「我々はグリファ王直府の者だ。高レベルのエナルダを5名程連れている。貴様を含めて護送隊を消滅させる事も簡単なのだぞ。これ以上考えるな、これ以上望むな」
小太りの護送隊長は金を甲冑の中にしまい込むと、丁重にバイカル

ノを先導して檻車に向かう。部下たちを呼び、少し話をしていたが、やがて部下たちが檻車までバイカルノ達を誘導した。

思わずホーカーが声を漏らす。

「クラトさん！」

「おぉっ！？ホーカーとジュノじゃないかよ！なんだよバイカーもいるのか」

「ふざけるなよ！いつも手間を掛けさせやがって！さっさと出ろ！」

護送隊員が鎖を外す。クラトに促されてルシルヴァの鎖も外す。

「その女の話は聞いていない！」

隊長が高い声で言うと、ホーカーは自分の報酬全てを隊長に握らせた。そして手に力を込め、隊長の手が砕ける寸前で離す。護送隊長はただ頷くだけだった。

小太りの隊長は護送隊をそそくさと出発させ、それは見送ったバイカルノはクラトを罵る。

「手間も時間も掛けて、今回は金も遣った！てめぇは疫病神だ。儲けが減ったぜ！」

「悪かったよ、今回はマジで」

いつも反発するクラトから素直に謝られると、バイカルノもきつくは言えなくなった。

「お前は俺に借りがあるんだからな！これからはバイカルノ様って呼ぶんだぞ！」

「へぇへぇ分りましたよ。バイカルノさま～」

一同は笑い、バイカルノは吠える。

「本当にお前は頭に来るぜ！」

バイカルノは心の中で更に罵った。

“クラトは誰彼構わず心に巣食う厄病神だ”

クラトを見て、ほっとしてしまった自分を罵っているのだ。

3－14　傭兵団

バイカルノは“事実ではないが事実に近い話”を単刀直入に説明した。
「商隊は解散だ。これから俺は傭兵団を組織する。既に雇い主も決まっていて、俺を含む傭兵団全てを召抱えるそうだ。残る奴は、明日の昼にまたここへ集まってくれ。詳しく説明する」
「さぁ、こんどの商売は上手くいった。めいめいの前に置かれているのは臨時報酬だ。今日は飲んで食って日頃のうさを晴らしてくれ」
「俺もすぐに酔っ払いそうだから、傭兵団の話を先にしたが、まずは楽しんでくれよ」
すぐに賑やかな宴となった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

時間が経過して場が乱れ始めると、バイカルノは区切りをつける。
「まだ夜は長い。楽しんでくれ。ただ揉め事だけは起こさないようにな！」
ここで飲み続ける者、場所をかえて飲み直す者、女を買いにいく者、宿に帰って休む者。
バイカルノの許に残ろうと残るまいと、決めている者は今夜を楽しめば良いのだ。
残っている者達は決断出来ない者だと言える。

バイカルノは誰にするでもなく話し始めた。
正式な軍に準じた組織になる。常人よりも戦に慣れている俺たちはすぐに隊長になれるし、その後の働き次第じゃ将校にだってなれる。
同じような危険を冒して一回こっきりにの商売を続けるよりも、武

人になる方が良いだろう？

残った者たちは顔を明るくして出て行く。
バイカルノや幹部クラスは別として、兵士からスタートする者はあくまで傭兵扱いとなる可能性が高い。
戦争では最も危険な場所に配置されるだろう。しかも今度の相手は正規兵だ。
ルシルヴァのような特別な存在は別として、盗賊が弱いのは組織化されていないからだ。
組織としての正規兵は強い。軍規と訓練を有する軍隊とは常人を戦士に引き上げる装置なのだ。
先ほどの者たちは生き残れないだろう。

部屋に残っているのはクラト、ジュノ、ホーカー、ルシルヴァ、バイカルノ、サイモス、ランクス。
サイモスは、のそりと出て行った。
バイカルノにとってサイモスとサバール隊は切り札だ。
まだヴェルーノ卿側には知られたくない。

先ほどの宴の中でルシルヴァが新加入者として紹介され、簡単に自己紹介をした。
一度はやり合っている相手だ。場の空気が冷えた。
その時、グラッサーが「俺とベックが軽く捻られた。仲間なら心強い」と言ってフォローした。
グラッサーって奴はなかなか“イイ男”のようだ。
改めてルシルヴァはバイカルノに挨拶した。
バイカルノはルシルヴァを大きな戦力と見ているが、クラトに影響されるという点を懸念していた。
クラト次第って戦力もバカにならんな・・・
そんな思いが軽口に出る。

「なんだ、汚れを落としたらなかなかの別嬪じゃないか」
「そりゃどうも」
無感情に答えて、料理を口に運ぶ。
「おいおい、素っ気ないなぁ」クラトが言う。
なぜそんな事をいうのか、という顔のルシルヴァに
「あのお方は、バイカルノさま～、なんだぜ～」と言って笑いをさそう。
バイカルノもやや高い声で
「うむ。クラトとやら、そちはなかなか心得ておる。褒めてつかわすぞ」
とおどけて皆を笑わせた。
今日の酒は美味いな。
仕事を終えた後の酒は格別だ。
酒だけじゃない、空気すら美味い。そう感じる時間だった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

翌日、ほとんどの者が顔を見せた。
バイカルノはサイモス以外の主力が全員揃っているのを確認する。
今日からサイモスと表立って会う事はないだろう。
斥候隊を上手く使って連絡を取り続ける段取りが必要だ。

バルカ郷までは総勢３５名の旅となる。目立つので６つのグループに分けて出発する。
バイカルノ、グラッサー、レイソン、ベック、ロキウス、それぞれが隊を率いる。
クラト達４人にはマッシュという少年が同行して先導する。
生意気そうな少年で年齢はまだ１７だという。
ホーカーが子供だとからかうと、本気で怒っているようだ。
まぁ、そういうところが子供なのだが。

「どれだけ強いかどれだけ役に立つか、歳は関係無ぇよ。頑張りな」
俺がそういうと、ジュノも続ける。
「ホーカーだって２０歳じゃないか。私だってクラトさんだって、軍の中で見れば若いし、むしろヒヨッ子といわれる歳だよ。でも私は親衛隊の分隊長をしていたし、クラトさんはバイカルノ殿に認められている。ホーカーだって実力からすれば中隊くらいは指揮していかないと」
そう言って、注意を与えつつ期待を伝えた。

野営で3泊、いつものように俺たちは稽古をする。ジュノの刀、ホーカーの長弓、俺やルシルヴァの剣、マッシュは茫然と見ている。ロキウスから話を聞いていたようだが、目の当りにして驚きを通り越してショックだったらしい。
有名なジュノが俺に丁寧な口を利くし、ベナプトルやラヴェン０２の話も聞いたらしく、何か勘違いをしているようだ。隊長隊長とうるさい。
「俺は隊長じゃねぇよ。ウチの隊長はジュノだろ」
「どうしてそうなるんですか？」ジュノが口を挟む。
「何でったって、ジュノが一番強いし、何でも知ってるし、冷静で判断力もあるし、言い出したらキリがないくらい理由があるよ」
「そりゃダメっスよクラトさん。俺が合流した時から、クラトさんが頭って雰囲気なんですから」
ホーカーがやけに落ち着いて言う。
ジュノも続ける。
「そうですよ、私もクラトさんと一緒ならサブ的な立場が自分を活かすのに最適だと感じます」

ジュノやホーカーはそう言うが、俺みたいなのが隊長ではダメだろ。
ここでルシルヴァが口を開く。
「私から見るとね、誰が隊長をやるかっていうより、フォローする

立場はジュノしか出来ないと思うよ」

「だいたい、クラトは食事の準備も、武具の整備も、馬の世話も、何もできないじゃないか」

やめて

「盗賊を攻めておいて一緒に逃げちゃうし」

やめてぇ

「それに字も読めないし、何より変わってるし」

やめてくれぇ

「そ、そんなに言わなくても・・・」

ジュノが言うと、ルシルヴァはこう付け加えた。

「でもね、クラトがいると何でも出来そうな気がするんだよ。理由や後ろ盾が無くても、大丈夫って気になるんだよ」「だからクラトが隊長でいいと思うよ」

ジュノとホーカーは黙って頷いている。

隊長といっても何か決まった組織でもないし、ルシルヴァの発言で弱っている俺は何でも構わないからこの話を終わらせたかった。

「もう、隊長でも番犬でも何でもいいよ」

そんなこんなでバルカに入ると、小さいながら宿場町があり、ランクスが迎えに来ていた。

「バイカルノ殿がクラトさんの事を一番“危ない”と言って迎えに行くように仰せつかりました」

「チミチミ、いくらバイカーがそう言ったからって、普通は気を遣って、“心配して”とか言わんかね」

「あ、まぁ、そうですが、私もクラトさんがちゃんと来れるか不安だったので、つい・・・」

「何が、つい、だっつーの、全く！」
一同は笑って、集合場所に向かう。
宿に入ると、バイカルノの使者が待っていた。

4－1　軍師

使者は会議を行う別室へクラトとジュノを案内した。

会議室はざわついていた。

説明によると、同席しているのは、バルカの内務大臣だというし、ランクスはバルカ親衛隊の隊員だという。

今回、バイカルノ傭兵団を雇うのはバルカ郷だが、なぜ軍事府ではなく内務府なのか。

それに大臣が直々に出席するとはどういう事なのか。

ヴェルーノ卿は簡単な挨拶の後、次のように述べた。

ここに出席した者は幹部であり信用の置ける人物と聞いている。

だから話そう。

我がバルカ郷は長い歴史を持つ郷だ。

しかし、先代領主が崩御なされてから国力に翳(かげ)りが見えてきた。

近頃、パレント郷とアティーラ郷で諍いが起きているが、これは戦乱に発展する可能性が高い。

そうなればバルカ郷は必ず巻き込まれる。

そこで優秀な人材を補強する事になったのだ。

各々（おのおの）の配置についてはバイカルノ殿から聞いてもらうが、そのバイカルノ殿は第４軍団長だ。

会議室がどよめく。

軍団長？

頭目だったバイカルノが軍団長の地位に着けば自分達の栄達も見えてくる。

しかし、第４軍団って、臨戦体制か？

歓喜と疑問が渦巻く。

バイカルノが説明を引き継ぐ。
ジュノは第４軍団副団長、師団長にグラッサーとレイソン、大隊長にロキウスとベック、他にも会議に呼ばれた者は中隊長になってもらう。
ただ、この会議に参加していない者は兵士配属となる者もいるから、そいつ等には辛抱させてくれ。
兵士も含めて、バルカ郷から補充を受ける我々としてはバランスをとる必要もあるのだ。
まぁ、実力があれば軍団長の俺が昇格させてやる。ただし、気を抜いていると降格もするからな。しっかり頼むぞ。

ここで一呼吸おくと、皆の視線は自然とクラト達に集まる。
バイカルノ傭兵団では最強の突貫力を誇るクラト、グラッサーとベックを全く寄せ付けなかったルシルヴァ、強力な長弓の使い手ホーカー、この３人の名前が出ていないからだ。

それに答えるようにバイカルノが説明する。
「クラトとルシルヴァは特別編成の突撃大隊を指揮してもらう。とりあえずは俺の軍団所属だ」
突撃大隊？
突撃とは軍事機動の一つに過ぎない。しかしバイカルノはそれに特化した専門の大隊を創設するという。
クラトの突貫力は抜群だ。敵に斬り込んで混乱させたり、敵本隊への直接攻撃など、有効な用途は多い部隊になるだろう。
しかしこの部隊には大きな危険が伴う。
まず、防御に徹した敵への突撃は必ずしも有効ではないし、突撃後に包囲されたら待っているのは全滅しかない。
これらに対し、バイカルノは“ホーカーに指揮をさせる長弓隊による援護を行う”と説明した。

長弓隊だけで援護ができるとは思えない。
大体、そんな兵科を創って意味はあるのか？
クラトとルシルヴァは長生きできないだろう。皆がそう思った。
しかし、ジュノとランクスは突撃大隊に有効性を感じていた。
特にジュノは重要な局面で結果を左右するのは突撃隊だろうと予感していた。

バイカルノが説明を終えると、ヴェルーノ内務大臣が口を開く。
「バイカルノ殿には軍団長と兼任で副軍師に着任してもらう」
大きなどよめきが起こった。副軍師！？
バルカの軍師といえば、あのフィアレスがいるじゃないか。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

フィアレス・アクレインは先代領主ヴェルハント・バルカに見出され、“疾風（しっぷう）の軍師”の称号を持つ、生ける伝説だ。現在は姫の後見として執政に当たっている。

ヴェルハントが領主となった直後、弱冠２４歳で軍師に抜擢されるや、バルカ郷が他の郷に蚕食された領地を回復、更には新たな領地の獲得にも成功。この時の戦功により“疾風の軍師”の称号を得る。
しかし、そのあまりに見事な用兵術と戦略は敵だけでなく、味方の将軍をも苦しめた。
彼の思考についていける将軍が存在しなかったのである。

輝ける戦果と領主ヴェルハントの絶大なる信頼により、フィアレスは大きな権力を得る。
それはフィアレス自身が意図したものではなかった。
しかし、彼は軍事以外の才能にも秀でており、特に政治においてそのバランス感覚は天才であった。

領主の側近として、内務・外務・経済について助言を行う立場に着くや、的確な判断と有効な政策を進言し、バルカは国力を増していった。
それに伴い、フィアレスの発言はバルカ郷で重みを増していく。
これが後にフィアレス自身を苦しめる事になる。
いつしかバルカ郷の政治はフィアレス抜きでは成り立たなくなっていたのである。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ヴェルハントとフィアレスは野望を共有していた。
“バルカ郷をバルカ国へ”
しかもギルモア国からの独立ではなく、ギルモアに取って代わる、つまりギルモアを滅ぼす事を意図していたのだ。
これまでも郷が国になったケースはあったが、それは郷の領主が国王の縁者である場合で、領土を拡大した後、または他国への侵攻を意図して行われるものだ。
ヴェルハント・バルカの野望とは、これまでの領主の“軍神であるべし”という意向にも真っ向から対立し、小によって大を制するという軍事面でも常識では考えられないものだった。
ヴェルハントのバルカ郷を独立国家へという野望は単なる空想に近かった。
しかし、フィアレスという天才を見出した事によって徐々に現実味を増していったのだ。

フィアレスが疾風（しっぷう）の軍師と呼ばれ始めてから４年、ギルモア侵攻作戦の準備は第一段階を完了した。
軍は精鋭中の精鋭と化した。武具は全てが改良され、フィアレスを頂点とする命令系統も万全だった。

驚くべきは、フィアレスは軍師となった時点で、既にギルモア侵攻作戦を想定していた事だ。
バルカ郷が失った領地の奪還作戦で、唯一回復をしていないのがアティーレ郷に奪われた領地だった。
しかしそれは意図して残されたのだった。

4－2　劣化

“疾風の軍師”フィアレスはギルモア侵攻作戦を想定し、意図してアティーレ郷に奪われた領地の奪還を見送った。

アティーレ郷はその昔、ギルモア国が北の蛮族へ侵攻して得た領土に国王の親族を領主として成立させた強大な郷である。

しかし、先々代のギルモア本国の世継ぎ問題に、一族であるアティーレ領主が口出しをしてから関係が急速に悪化していった。

ギルモア本国としてはアティーレ郷はいずれ解決しなければならない問題でもあったのだ。

ヴェルハントからギルモア国王に宛てた書簡には『ギルモア国の軍神にして国王の臣下であるヴェルハント・バルカ』と記されていた。

内容はアティーレ郷に奪われた領地を奪還する戦の許可を請うものだ。

本来、郷同士の戦に国の許可は不要だが、忠誠を示し、アティーレ征伐を提案する為に許可を請う形にしたのだった。

『アティーレ郷は領地を拝受した身でありながら、盟主ギルモア国の意向に従わない忘恩の徒です。これを野放しにしては他の郷もギルモア本国を軽く見るでしょうし、他国に対するギルモア国の威信も揺らぐのではないかと臣ヴェルハントは心を痛めております』

『もし、アティーレ郷への侵攻をご許可いただけるのであれば、ギルモアの先兵として働きたく存じます』

『臣が求めるのはギルモア国の安泰であり、アティーレ郷に奪われた領地以外に望むものはございません。アティーレを屈服させた後は兵を引き、アティーレの処遇はギルモア国王のご判断にお任せいたします』

『なお、アティーレ領主の処遇は事前にご指示下さいませ。私がお

望みのままに実行致します』

ギルモア国王は狂喜した。
アティーレの力を削ぎたいギルモアにバルカの領地奪還についての異論は無い。
本来の力関係からすればアティーレ郷など問題とはしないギルモアだが、国力が低下しつつある今、無駄な力は使いたくない。
近年隆々たる勢いのバルカが恭順を示しているのも心強いし、アティーレに侵攻したバルカとの調停を行うという形なら体裁も整うだろう。
ギルモア国王は長年の懸案だったアティーレ問題の解決は今しかないと判断した。
バルカ郷にアティーレ郷への侵攻を許可し、援助を惜しまないと回答する。

バルカ郷からは戦いに向けて次のような要請が届く。
・アティーレに対する包囲戦を行うべく、ギルモア国内の通過許可。
・アティーレの後方を抑える為にギルモア国から兵力をアティーレ西部へ派遣。

位置関係としてはギルモア本国を中心として、東にバルカ郷、パレント郷と続き、それぞれの北方にはアティーレ郷が接している。
アティーレ郷の中心はギルモア本国とバルカ郷の境から真北に位置しているが、アティーレは東西に長い領土を持ち、蛮族に備える為に複数の城を構築している。
バルカが東から侵入した場合、複数の城を持つアティーレは後退しつつ抵抗を続ける事が懸念される。
ギルモアの東西街道を利用して敵兵力を分断して包囲戦に持ち込み、後方、つまり西端にギルモア本国の軍を派遣して退路を断つという名目だ。

ギルモア侵攻の作戦準備はギルモア南部で勢力を張る盗賊への協力要請で完了する。
バルカがアティーレへ侵攻、アティーレの城を攻略した時点でギルモア本国からアティーレ西部へ威圧と国力誇示を目的として大規模な軍が送られる。
ここで盗賊の活動を活発化させ、ギルモア直轄の経済都市を襲撃させる。
これでギルモア本国は大分手薄になるだろう。
そしてアティーレ郷からギルモア国首都は急行すれば3日の距離でしかない。
ギルモアの東西街道の通過許可を得たバルカ軍のギルモア侵攻は完全な奇襲となるに違いない。

◇＊◇＊◇＊◇

ヴェルハントとフィアレスは酒を酌み交わしていた。
騙し討ちが何だというのだ、ギルモアには国内を纏める力も威信も残ってはいない。
だからあのような書簡をやすやすと信じるのだ。
ギルモアはいずれ滅びる。それが少し早まっただけの話だ。
バルカがここまで国力を落とした原因も、元はといえばギルモアを支えてきたからなのだ。

「これまでのツケを返してもらおうではないか」
「殿、返して頂くものがいささか大きすぎますが」
「はは、それは利子というものだフィアレス」
「殿は商才もおありのようですな」
ここまで来たという実感が酒と共に身体に染み渡り、二人は戯言に興じ笑い合った。

ヴェルハントとフィアレスの両輪で突き進むバルカ郷はまさに絶頂期を迎える。
フィアレスの名はギルモア国内だけでなく、近隣国にも鳴り響いていた。
端整な顔立ちと柔らかい物腰、しかし戦となれば勇猛で鳴らす将軍達に鋭く指示を与え、バルカを勝利に導く。
バルカ郷の全てがフィアレスに憬れた。
フィアレスは全てを可能にする軍師だ。
フィアレスに聞けば良い。フィアレスの言葉を信じれば良い。

しかし、大きな落とし穴は“口を開けずに”待っていた。
それはフィアレスが余りにも優れており、軍事だけでなく内政や外交を含め、全てを掌握してしまった事に起因する。
そしてフィアレスの唯一の落ち度は後進を育てなかった事にあった。
領地の回復と拡大、経済の建て直し、並行して対ギルモア戦の準備に全力を傾けたフィアレスにとって、それだけの時間も余力もなかったのかもしれない。
どの大臣もフィアレスの前では何も意見が出来なかった。
自分の意見は更に優れた指示で返ってくるからだ。
そして残念な事にヴェルハントはこの点について何もしなかった。
大臣達は自分が郷を動かしていると考えていたが、実はフィアレスの言葉に動かされていただけだった。
徐々に思考もプライドも失っていった。
そんな“組織の劣化”に誰も気付かないほどフィアレスの政治手腕は優れていたと言える。
そして6年前、ある事件によって、落とし穴はその大きな口を開いたのだった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ヴェルハントはフィアレスや将軍達を連れて狩りに出掛けるのが好きだった。
将軍とは師団長以上の階級の者と、特に功績があった大隊長に与えられる称号だ。

ヴェルハントは従者も連れず、時には野営して獲物を追った。
武人の嗜(たしな)みでもあるし、将軍達と気兼ねなく話が時間でもあった。
フィアレスは狩りに同行した際、その場所の地形に応じた戦術を将軍達に考えさせた。
将軍達はそれを“課外授業”と呼んで嫌った。
フィアレスにとっては指導的な説明であっても、将軍達にとっては無能さを指摘されているとしか感じられなかったのだ。
古参の将軍としてみれば、領主の前で青年軍師から指導を受けるのは耐え難いものであった。

さらに悪い事にヴェルハントとフィアレスは将来の野望を二人だけのものにした。
将軍達は何かが進行していると感じながらも、大臣達と同様に何もせず、いつしか距離を置くようになっていった。

4－3　落とし穴

その日、ヴェルハントとフィアレスは将軍達と連れ立って、狩りに出かけていた。
その日は獲物も多く、フィアレスも珍しく獲物を追い、将軍達も狩りに熱中した。

そして気付いた時には、ヴェルハントとフィアレスは森の中で“葉（レノ）”に包囲されていた。
フィアレスは武術が得意ではない。
将軍達を呼び叫ぶフィアレスにヴェルハントは言う。
「お前は“バルカの宝”だ。俺が護ってやるから安心しろ」
本来、フィアレスは身体を盾にしても領主を護らねばならない。
しかし出来なかった。ただ恐ろしかった。
将軍達を呼ぶ自分の声が、やけに虚ろに響くだけだ。

ヴェルハントは振り向いて笑顔を見せた。
「ティエラも15だ。嫁ぎ先を考えねばならん。帰ったら私から話してお前と婚約させたいがどうだ？」
フィアレスは何も答えられなかった。
「頼むぞ」
ヴェルハントが前を向いた瞬間だった。

（ザザーッ！）
無数の矢が空気を切る音。
葉（レノ）が暗殺に使う矢には毒が塗ってある。
しかし毒は全く必要なかった。
ヴェルハントは全身に矢をつき立てたまま倒れ、「太陽が黒いな」とつぶやいて絶命した。

この暗殺はヴェルハントの最後の言葉から“黒い太陽事件”と呼ばれる。
フィアレスは左目と左足に矢を受けた。
レノは２０人以上いた。無言でフィアレスに向かう。
痛みすら感じない程の恐怖の中、フィアレスが残った右目で捉えたものは十数の騎馬だった。
後方のレノが数人倒れる。レノ達が一斉に振り返る間にも数人が倒れる。
その身体には狩猟用の矢が突き立っていた。
レノ達は数人が斬られながらも、逃亡を図る。

将軍達はヴェルハントとフィアレスの容態を確認したが、ヴェルハントは既に絶命している。
フィアレスは生きているが、矢には毒が塗ってある。
気の属性の将軍は馬も武具も捨てて走った。
残る将軍達は治療を受けるフィアレスの周囲に剣を構えて防御陣を張る。
将軍達の対処は適切だった。
暫く後、１個大隊が到着し、兵士たちは野営所を設置してフィアレスを収容、同行した医者による治療を行う。
結果的に水の属性の将軍が2名いた事が幸いした。
いや、後のフィアレスを考えると幸いとは言えないかもしれない。

フィアレスはその後１ヶ月にわたって生死の境をさまよう。
何とか命は取りとめたものの、左足と左目を失い、毒の影響で顔の左半分は爛れてしまった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

領主が謀殺され、残されたのは弱冠１５歳の姫。いかにすべきか。

各府の大臣は誰もが決断できずにいた。フィアレスが生きていたからだ。
会議を重ねて決まった事は、復帰の目処すら立っていないフィアレスを名目上の執政としただけだった。
国内外にはフィアレスの政治の中心にいる事とした。
一部の者を除いて、フィアレスは執務室で政治を執り行っていると思い込んだ。
フィアレスの名前には絶大な力があった。
他国から余計な干渉を受けなかったのも、国内で不穏な動きが無かったのも“フィアレス健在なり”という点が大きく作用したのだ。

一方、フィアレスはその後も傷と毒に苦しみ続け、バルカに1年間の政治空白が生じた。
各府の大臣は何もしなかった。
フィアレスが健在の時には何も出来なかったが、今回は何もしなかったのだ。
ここにバルカの政治は崩壊したと言って良い。
やがて大臣達が待ちに待ったフィアレスの復帰の日を迎えた。
しかし、フィアレスは左目と左足だけでなく、その能力も失っていたのだった。

それはフィアレス自身が一番認識していた。
身体の自由が利かない、思考もまとまらない。
努力はした。懸命に。
大臣からの報告を受けて指示を出す。
時間は今までの何倍もかかり、内容は平凡なものばかりだった。
体調を理由にしながら懸命な努力を続けたが、かつての“疾風の軍師”の輝きには遠く及ばない。

そして、政治に復帰して1年後、ついに彼は力尽きてしまった。

領主を守らなかった自分、後を託されながら力を失った自分、自分を頼るばかりの大臣や将軍達。
日に日に美しくなる姫、壊れて醜い自分。
文字通り彼は壊れてしまった。

酒の量は日に日に増し、痛みを抑える為の薬の量も増えていった。
自室に遊女をはべらせ、大臣には罵声を浴びせた。
そして時折、理性を取り戻しては、自らを苛む苦痛の時間を過ごすのだった。

フィアレスは自己崩壊してからもなお執政であり続けた。
“黒い太陽事件”の時と同じように、誰もが決断出来なかったからだ。

そして内務大臣ヴェルーノ・マラウィ卿が動いたのだ。
どのような形にせよ、フィアレスは政治から排除せねばなるまい。
最大の功労者にして、先主の意志を最も知る者だ。
困難が待っているに違いない。最も恐ろしいのは国内外の反応だ。
政変を成功させるのも困難だが、その後も多くの困難が待っているだろう。

それでもやる。やらねば未来がないから。

4－4　城壁

軍事府への提案という形で始まった軍の補強計画を、軍事府は意外にも簡単に受け入れた。
ヴェルーノ卿は、第2軍団長、軍事府大臣を歴任し、軍務を退いた後もフィアレスの下、失地回復の戦い“洪水作戦”、領地拡大の戦い“津波作戦”に参加した人物だ。
2年前に内務大臣の急逝により、その後任に就いたが、いまだに軍事関係者への影響力は強い。
だからこそ今回の計画も立案可能だったのだろう。

「ヴェルーノ卿！気は確かか！？」「奴等は武装崩れ、しかも元盗賊もいるらしいではないか！」
この男は王直府大臣ピサノ。
領主亡き今、フィアレスの手足となって働いている。
バイカルノ傭兵団がバルカ領内に入って2日。情報収集力は大したものだ。
現在の仕事は国内、特に城の中の情報収集にある。
内務大臣が10日も城をあけていたのは軍師へ報告するのに十分な内容だ。

「我らの郷は歴史あるバルカ家ですぞ！」
「ピサノ大臣、バルカ家とは何だね？」
「な、なにをおっしゃる・・・」
「バルカ家とは何を指すのだ？今この郷において、この城において」
「ヴェルーノ卿、バルカ家を蔑ろにするとも聞こえる発言ですぞ」
「ピサノ、儂の言う意味は分っているだろう。他の者もそうだ。我が郷とは何なのだ？」
「今、この時において姫を護り立てる意外は全てバルカ家を蔑ろに

していると考えるが？」

ヴェルーノ卿は全ての大臣を含む政治に係わる者へ痛烈な批判を行ったのだ。

誰の為に何をしているのだ・・・

ティエラ姫も２０歳を過ぎた。姫はこれまでどんな縁談も断り続けてきた。

ティエラの夫は次代領主の夫だ。

郷内の貴族はもとよりギルモア本国からの申し出も多かった。

ギルモア国王としてはバルカ郷に親族政権を樹立できれば勿怪（もっけ）の幸いというものなのだろう。

ヴェルハントはフィアレスとの婚姻を考えていたようだ。

確かにヴェルハントと二人三脚で郷を運営し、才能に溢れたフィアレスなら相応しいと言えるだろう。

しかし、その意思を聞いたものはフィアレスしかいないし、フィアレスは何も語らなかった。

大臣達はティエラの婚姻という、本人だけでなくバルカ家、ひいてはバルカ郷にも重要な事柄をまたもや先送りにした。

本人が婚姻に否定的な事もあるが、ここでもフィアレスの存在が影響していたと言える。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バルカ郷を立て直す。

政治の建て直しは必須だが、その為には、経済と軍事は外せない。

何だかんだ言っても金。

そして最後にものをいうのは武力だ。

軍幹部を外部から登用する事に対し、バルカ内では異論も多かったが、内務と軍事の両大臣に加え、戦乱の危機を早くから警告してい

た外務の後押しもあり、バイカルノ傭兵団の編入が決定された。
ただ、将軍の中には内心穏やかではない者もいるだろう。
配属や指揮系統が確立されるまですんなりいくとは思えない。

そういった点で“ルーフェンの青騎士”ジュノ・ガクレイの存在は大きい。
ルーフェンの第2軍団長タレス将軍が病没した際、ジュノが軍団長に就任しても異論は少なかっただろう。
それだけジュノの評価が高いという事だが、あれから2年が経過し、“亡国の青騎士”となったジュノの入城に同情と期待が集まるのは当然な事であった。
バルカはジュノという良将を手に入れたのだ。
領内にもジュノの許ならという兵士も少なくない。

そしてジュノよりも高い地位に置かれたバイカルノ。
聞くところによれば、報告を受けたフィアレスがむしろ積極的に賛同したらしい。
この時、ヴェルーノ卿は思った。フィアレスがティエラの夫になれば、うまくいくのではないかと。
しかし、今、ティエラにそれを求めるのは酷というものだろう。
黒い太陽事件以来、フィアレスはフィアレスではなくなっていたのだから。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

待機させられていたバイカルノ傭兵団の許に連絡があり、軍事副大臣以下3名が事前の打ち合わせに来訪するという。
バイカルノ傭兵団の主要メンバーの地位についてはバイカルノの要望が通った。
ただ、バイカルノが副大臣なので、副軍団長のジュノが実質的な軍

団長となるだろう。
バルカ郷政府は事前にランクスから報告を受けているようで、バイカルノ傭兵団について、かなり細かい部分まで把握しているようだった。
バイカルノ傭兵団の入場は3日後の昼過ぎとされた。バルカとしても色々と準備があるらしい。
2日後には城の近くに宿を移して入城に備える事とした。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

入城を翌日に控え、宿の移動も済んだ。
俺は時間を持て余して、城壁の外周に広がる町を見物した。
城壁には近づかないように言われていたが、何も無いようだし、そっと近づいてみた。
ここが俺の働く場所か。
そういういえば時間の余裕なんて無かったな。
この世界に辿り着いてから何日が経つのだろう。
数えてみると30日近く経過している。
何年も経ったような気もするし、井戸に落ちたのが1週間前のような気もする。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

この世界の1年間は本来6ヶ月にわかれているらしいが、それぞれの月は前半と後半に分かれていて、別な呼び方をするので、結果として12ヶ月として数えるようだ。
1ヶ月は36日だが、12月は20日しかない。年間で416日。
季節の変化もあり、春は1～4月、夏は5～7月、秋は8・9月、冬は10～12月、今日は6月5日、地球で言うところの真夏にあたる。

1日は12等分しており感覚的には12時間と考えて良いだろう。
元々は1日を12等分したというよりも、昼と夜をそれぞれ6等分していたらしい。
つまり季節によって1時間の長さが変わる訳だ。
農作業も戦(いくさ)もこの方がやりやすいとの話だが、バネ時計の発明で正確な時間が分るようになってからは、1時間の長さが固定され、夜明けを0時として春と秋は昼が6時間、夏は7時間、冬は5時間、残りは夜、と決められている。最近やっと慣れ始めたところだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

地球じゃ8月も下旬か・・・。
突然、本当に突然、感情が溢れてきた。
涙が止まらない。悲しさも寂しさもない。あるのは喪失感だけだった。
あるべき生活と人々。
「やべぇ、また気持ちが引き戻されそうだ」
俺はこの世界に生きる異人だ。
頭を強く振って涙を払った。
この涙は拭(ぬぐ)うべきではない。振り払うべきだ。

気配を感じた。
ふと見上げると、軍装の少女と目が合った。
俺は声も出せなかった。

あのツン顔は高速のパーキングでバイトをしていた娘(こ)じゃないか・・・

ロスト？

見上げると空は青く高い。
汗が一筋流れた。
頬を伝う汗を感じると思い出す。
林道を抜け、沢を渡り、山道を登った小さな空き地。
これまた小さな小屋と、不釣合いに大きな井戸。
そこで２０数年前、そして僅か１ヶ月前、人が消えた。

「あの、千夏？」
私は袖を引かれて我に返る。
「行くの？駅ビル」
眠そうでややアニメ声だが、これが普通（いつも）の声だ。
夏海という名前のクラスメイト。中２からずっと一緒。

「うん。つき合わせてごめんね。パフェおごるから」
「うぅん、行くのはいいんだけど、最近、変だよ」
「そう？私が？何か成長したのかなぁ～？」
「ちがうよぉ」
夏海はいつも他人を心配している。
天然とは違う純粋な娘（こ）で、本人が居ないところで“妖精さん”と呼ばれたりする。
「何・・・探してるの？」
「うん、ジッポ」
「ジッポ・・・って、ライター？」
「そう、随分前だけど、３Ｆで見た事があるんだ。他にも売っているところはあるんだろうけど」

駅ビルは入っているお店がオバさんっぽくて、あまり行かない。

４Ｆの書店にたまに寄るぐらい。
だから記憶もあやふやだ。
３Ｆの時計売り場の辺りで見たような気がする。
夏海はライターに“よろしくない”イメージを持っているようだ。
何に使うのかしきりに聞いてくる。
答える代わりに、オイルの燃える匂いとか、開閉の音の説明をした。
ネットで同じようなものを探したら、３千円くらいだった。
他にはもっと高いものもあって、どちらかというと安い方だ。

「ブラックニッケルのサテーナ仕上げってありますか？」
お店はオバさんしかいなくて、分らないようだ。
小さなショーケースに並ぶジッポを夏海と二人で眺める。
「これかなぁ・・・。ごめんね夏海、時間をとらせちゃって」
横を見ると夏海は目をキラキラさせて見入っている。
表面の綺麗な仕上げやカワイイ加工のジッポに釘付けのようだ。
「ま、イイか」
私はまたケースの端から数えるように見ていく。

「お、ダブルエスじゃんか」
突然、背後から声を掛けられた。
≪ダブルエス≫
誰だったか忘れたけど、クラスの男子が呼び始めて定着しつつある。
イニシャルとは全く関係ない。
二人とも名前に夏（ＳＵＭＭＥＲ）があるからだって。バッカみたい。

「ん？なーんだ、コータかぁ」
「何だじゃねぇだろ、なにジッポなんか見てんの？」
隣りでは夏海が固まっている。
「鮎川、無視すんなよ。お前らタバコでも始めたか？」

夏海は疑われるぐらいビクッとした。
「えっ？マジで？鮎川が？」
「な訳ないでしょ、アンタこそタバコ止めたら？もうすぐ値上げだし」
「そうだよ、困るマジで。ガッコが休みだと本数増えるんだよな」
コータは軽い感じのクラス男子で、夏海にぞっこんだ。
本人は誰も気付いていないと思っているようだけどバレバレ。
クラスでは誰もが知ってる。
残念な事に夏海を除いて。

今日のコータも夏海をかなり意識している。
「どんなの探してんの？」
「・・・」
「俺、ボトムズアップとか欲しいよ。鮎川だったらカワイイ感じのスリムがいいんじゃね？」
「・・・」
夏海は無意識にコータを撃墜する。いつもの事だ。
早く消えて欲しいけど、ちょっと可哀想になって、声をかける。
「夏海は付き合ってもらっただけだから。コータはどんなの持ってるの？」
コータは救われたようにヒップバックから赤い箱のタバコとボロボロのジッポを取り出して見せた。
「シブいだろ？ユーズド加工したんだ」
「加工？」
「使い込んだような感じにするんだよ。薬品つかったり磨いたりしてさ」
「わかんないなぁ、汚くするなんて」
「ジーンズのダメージ加工と同じだよ」
「ふ～ん、でもボロボロ過ぎない？」「ねぇ？夏海」

「私、これがいいと思う・・・」
夏海が突然、ペアのジッポを指差した。

レギューラーとスリム、エンジェルウィングが彫られている。
並べると両翼が揃うペアジッポ。
「・・・これ、欲しいのか？」
夏海に悪気はないだろうけど、私がいなかったら勘違いするシチュエーションよね。
値札には5桁の数字が並ぶ。ふぇ、高いなぁ。
何気なく目に入ったコータの右手が握り締められている。
「あ、あのさ、俺さ」

やめとけー！さっき撃墜されたばっかじゃん！

「俺・・・も、これイイなって思う」
理性なのか弱気なのかは分らないけど、ギリギリのところでセーフ！

私の視線に気付いたコータは少し寂しそうに笑った。
夏海がコータの気持ちに気付いていないっていうのが止めを指されない理由なんだから。
はっきり断られたらマジ墜落死だよ。

「鮎川、このペアジッポ、俺がプレゼントするって言ったらもらってくれるか？」

いったー！！どうしちゃったのアンタ！！
夏海は1秒くらい後にコータに顔を向けると、少し俯いて答えた。
「こんなに高いのはもらえないよ」

えぇ～！？夏海もどうしちゃったの！？聞き分けがイイ女のＯＫだ

よ、それ！！
コータも混乱していた。予想外の答えに。
「なな、なあ、俺さ、バイトでやってんだ、コンビニ。だから、だいじょぶ」
コータはもはや文法無視の言葉しか出てこない。

「でも、机の上に飾っておきたいだけだし、２つあっても使わないだろうし」

「え〝！？」
コータが固まる。
夏海の鈍さもここまで来ると感動してしまう。
コータは今日２回目の墜落。
しかし幸いにもパラシュートで脱出できたようだ。

ロスト？

撃墜されたコータは白っぽい顔色で立ち尽くし、夏海はショーケースをじっと覗き込んでいる。
うぁ、気まずいなぁ。

「済みません、ちょっと出てまして。何かお探しですか？」
エプロンをつけながら、お店のオジサン、といっても３０歳半ば位の店員さんが出て来た。
ふぅ、助かった。

私の説明を聞いてショーケースからいくつか取り出した。
「ブラックニッケルですね。これあたりかな？」
「もう少し丸みがあったような気がするんですけど」
「あぁ、じゃ１９４１レプリカかな」
違う棚から小さな箱を出してくれた。
黒いプラスチックのケースからジッポを取り出す。
「あっ、それです！」つい声が大きくなる。
「随分と探していたようですね。さっきのよりちょっと高いですけど・・・これでいいですか？」
「いくらですか？」
「込みで５，７７５円です」
「はい」
思ったより高い。ちょっとじゃないじゃん。

「オイル、入れますか？」
「あ、はい。お願いします」
私と夏海は店員の手を見つめる。
コータは帰るタイミングを掴めずに突っ立っている。

この娘達、タバコを吸うようには見えないが、遅い夏デビューってやつかな。
・・・いや、何だか雰囲気じゃないねぇ。

店員はそんな事を考えながら、いつもの作業を行った。
ケースからインサイドユニットを引き出し、フリントスプリングのネジを回して引き抜く。
フリントをつまんで入れると、スプリングを元に戻す。
パットの穴からオイルを注ぐ。
ユニットをケースに戻してホイールを回すと、ジャッという音と火花が散った。
何度目かに点火。一旦消してからウィックを揉むようにして、再度ホイールを回すと簡単に点火した。
ホイールとフリントの擦過音も、“ジャッ”から“シャッ”に変わる。
何度か開け閉めしてカムとヒンジの具合を確かめる。
よし、いいだろう。

「ラッピングはどうしますか?」
「え?」
「あ、プレゼントですか?」
「いえ」
「えっ、自分用ですか」
「えぇ、キャンプとかで重宝するって聞いたんです。それでどうせなら気に入ったものにしようと思って」
「そうですか。コイツはタフですけど、大事に使ってやって下さい。箱に入れます?」
「いえ、そのままで」
「はい。じゃ、箱とサービスの石はこちらの袋に入れておきますね。

毎度ありがとうございました」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

蓋を開けると、ピンッという音。
親指で弾くと一発で点火した。柔らかい炎だ。
蓋を閉じると、パチリと音がする。
かすかにオイルと炎の匂いが立つ。
なんだか嬉しい。

夏海とコーヒーショップへ。流れでコータも一緒だ。
テーブルの上にジッポを乗せると、夏海がウズウズしているのが分った。
「点けてみる？」
夏海はぎこちなく蓋を開けて何度か指を動かしてやっと点火できた。
パチリと閉じる。
「なんだか私も欲しくなっちゃった・・・」

少しジッポの話をした後、夏海がトイレに行くと、コータがつぶやくようにもらす。
「今日は疲れたよ」「カッコ悪いな、オレ」
「そんな事ないよ。あそこで行くとは思わなかったもん。逆にカッコいいって」
「自分でも行くつもりはなかったんだけどな」
作った笑みはコータを大人びて見せる。

途端にリョウスケの話を思い出した。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

それは夏休みの前、テスト期間の昼休みだった。
クラスがテストでピリピリしている中、コータはいつもの調子で少しウザがられていた。
「コータはいつもチャラっとしてるね」「あぁ、軽量軽薄ってカンジね」「努力とか似合わないモンね」
などと軽い気持ちで話していたら、バスケ部のリョウスケがコータを遠くに見ながら話し始めた。
リョウスケはコータと同じ中学で、コータはサッカー部のキャプテンだったそうだ。
目立つようなチームではないが、コータは近隣の高校からマークされる存在だったらしい。
「ウチの高校なら即レギュラーだったろうな。俺はあんなに努力するヤツを見た事ないよ」
「でも、3年の春休みでアイツは変わっちまった。ツイてなかったんだ」

私は理由を聞かなかった。
コータがたまに足を引きずるのを知っていたからだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

コータはすぐにいつもの調子に戻る。
「ダメとは分っててても止まらんかったのよねぇ、コレが！」
コータは笑いながらおどけて見せた。

「よっし、次はぜってーハッキリ言うぜ！」
目の前のコータを見て不思議な気持ちになった。
憐れむような気持ちと、憧れるような気持ちだ。

コータはこの前向きさというか、笑顔を手に入れるためにどれだけ

悩んだのだろう。
悲しみが見えない笑顔を手に入れるために、どれだけ苦しんだのだろう。
よく“困難から逃げるな”と言われるけど、運命と真正面から向き合ったら私は壊れてしまうよ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

夜、ライターを灯す。小気味良い音にオイルが燃える匂い。
私はこのライターで何から自分を守ろうとしているのだろう。
勝手に入り込んで、勝手に失って、勝手に感じている喪失感。
ぽっかりと開いた穴に蓋をしても満たされはしない。
夏休みも残り1週間。

炎が長くなったり短くなったり、まるで呼吸をしているようだ。
もう一度行ってみよう。

ライターの炎は風も無いのに揺らめいた。

4－5　入城

バルカ郷の城。
その城壁の外で出会った軍装の少女。
それはパーキングでバイトをしていたツン顔の娘だった。

俺は混乱した。
さっき押さえ込んだ感情が再び溢れようとしている。

「お前は何者だ」
その声は更に俺を混乱させた。
「俺だよ、高速のパーキングで会っただろ」「また会えるなんて思ってもいなかった」
声が震えているのが自分でも分った。
「お前など知らぬ。所属階級と名を名乗れ」
「忘れたのか？ナルミ、成海蔵人だ。ハガキを書いてくれただろう？」
「訳の分らぬ事を。気でも触れているのか？」
不敵に哂い、からかうような口調で続ける。
「それとも私を誘っているつもりか？」
「なに言ってんだよ」

俺が一歩近づくと、鋭い声が飛ぶ。
「止まれ！武装して城壁に近づくなどもっての他！」
なおも足を進める俺を見るや顔に厳しさが増す。
「それ以上近づくと排除せねばならん！」
少女は言い終わらないうちに刀を抜くと、構えるでもなく近づいてくる。
もう警告も与えない。

近づく速度は徐々に増し、無造作に刀を振るう。
少女の脳裏に未来が映った。
刀が喉を切り裂き、血飛沫があがる。侵入者は倒れ、死体は兵士が運ぶだろう。

クラトは喉許に迫る刀を辛うじて避けた。

かわされた！？
少女の目が一瞬、驚きに染まる。

少女は驚きながらも任務に忠実だった。
今度は絶対に逃がさない。
必殺の構え。
目の前の男からは戦意が全く感じられない。
何かに打ちひしがれているように見える。
まるで敗残兵か捕らえられた盗賊のようだ。
このような相手に刀を構える事になろうとは。
信じられないスピードから掬い上げるように刀を振るう。

（ギャリッ！）

クラトは抜きかけの刀で受けた。刀身の１／３は鞘に納まったままだ。
少女は刀に力を入れたまま、クラトを蹴って距離をとると、体勢を崩したクラトに刀を振り下ろす。

「やめぇい！」

少女の身体はピタリと止まり、後ろ飛びでクラトから距離を取って振り返る。

「ラヴィス隊長！その男は傭兵団だ、斬ってはならん！戻りたまえ！」

傭兵団？あの編入予定の傭兵団か。
ラヴィスと呼ばれた少女は改めてクラトを見た。
なるほどシロウトではないようだ。
「そなたがどのような軍歴を持っているのか知らぬ。しかし、我がバルカ軍に腑抜けは不要だ」

ラヴィスは戻りかけて不意に振り返った。
「そなたが私を誘った事は黙っておいてやろう」
悪戯っぽく笑って去っていった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バイカルノは早速苦情を受けた。
もちろんクラトと“護紅隊”隊長ラヴィスとの一件だ。

護紅隊とは親衛隊のニ番隊でティエラ姫の護衛として創設されたものだ。
ティアラ姫は戦場で赤をパーソナルカラーにしている為、護紅隊と呼称されている。

バイカルノは苦情を受けて、まず大笑いしたという。
使者は唖然とした。
突撃隊の隊長が、親衛隊二番隊の隊長とやりあった。
それを笑い飛ばそうというのか。
傍らのジュノも堪えきれずに笑い出し、使者は抗議どころか戸惑う一方だった。

何だというのだ、この連中は。
軍団外の武人との斬り合いだぞ？
入城の直前、しかも相手は姫の親衛隊隊長だ。大問題じゃないか。
親衛隊の三番隊隊長を任命されたランクスが上手く取りもって使者は帰っていった。

「相変わらずですね、クラトさんは」
「まったくだ。しかし、退屈しなくて済むぜ」
3人はもう一度顔を見合わせて笑うと、明日の軍団内会議の打ち合わせに入った。

バイカルノ傭兵団は入城を許され、歓迎の式典が催されるらしい。
長い歴史を持ち、軍神と呼ばれるバルカ郷だけに、何かと取り決めがある。
バイカルノ傭兵団は軍事府の役人から説明を受けた。
「何かが起きたらヴェルーノ卿から指示があるでしょう」
最後にそれだけ述べて説明は終わった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

野外の円形競技場を使用し、隊長は小隊長から全て出席している。
高い場所にある玉座は空席だった。
左隣にティエラ姫、右には顔を覆った長身の男が座っている。
これがフィアレスだろう。
その一段下には36人の賢人会と左右に6府の大臣。
更に一段下には親衛隊。ラヴィスが緊張した顔で正面を見据えている。
その横にずらりと並んでいるのが将軍達だろう。
大隊以下の隊長たちは競技場に整列している。

紹介を受けたのはバイカルノ副軍師兼第４軍団長、ジュノ第４軍団副長、グラッサー・レイソン師団長の４人だ。
俺たちはその他大勢って訳だ。

昨日の説明どおり、玉座を正面に向いて左ひざを着き、右手は立てた右ひざの上、左手は握って腰の後ろへ。
そして頭を下げると、首を打ちやすい姿勢になる。
これが任命を受ける時の姿勢らしい。
任命を受け、姫とフィアレスから言葉を受ける。
簡単な言葉だった。
「バルカは歓迎する。バルカに全てを捧げ、全てを求めよ」
「されば生きる理由も、戦う理由も、全てが見つかる事を保証しよう」
一度立ち上がって、一礼。

その後、軍事府大臣の挨拶。
軍団を代表して、第１軍軍団長レガーノからバルカ武人への訓示。
大きな歓声。
バイカルノ傭兵団への歓迎と期待の言葉。
小さな拍手。

俺たちが回れ右して礼をすると、競技場に整列していた隊長たちが素早く左右へ移動し、空いた場所に一人の武人が立っていた。
いきなり名乗りをあげる。
「一手所望したい！」
これも事前に聞いていた事だ。
ここでは俺たちの中から、師団長以下で最も上席の者が受け、剣を互いの頭の上に擬するという。
まぁ、演舞みたいなものだ。
グラッサーが緊張した面持ちで務める。

しかし、それだけでは収まらなかった。
「真剣の仕合(しあい)を所望する」
やはり外部から軍団長と師団長、そして副軍師まで迎え入れるという事に抵抗があるのだ。
ついこの間まで武装商隊だった奴等に2千名からのバルカ兵が配属される。
その実力を見なければ納得できないのだろう。
バイカルノが振り返るとフィアレス軍師とヴェルーノ卿が同時に頷いた。

ジュノが動いた。
競技場に降り立つと、控えていた兵士が甲冑を恭(うやうや)しく差し出した。
ジュノは指先で断り、冷たい微笑を浮かべて名乗りを上げた武人へ向かう。
相手は相当できる。
甲冑を身に着けないジュノに怒るでもなく構えている。
この立合いは審判もいない“真剣勝負”だ。
負けを認めるのは敗者であり、敗者の処遇を決めるのは勝者だ。
観戦者が仕合(しあい)内容の良し悪しを判断する。

仕合は唐突に始まった。
ジュノは打ち込まれる剣を避け、受けては流す。
次はまともに受けて弾く。
一旦離れた後、ほぼ同時に動き、すれ違いざまに大きな音が響く。
ジュノは刀を鞘に収め、相手に一礼して離れる。
相手はやっとの事で振り向いた。
兜を打たれて頭に強い衝撃があったのだろう。身体の自由が利かないようだ。

戻ったジュノが小声で言う。
「なかなかできるようですが、上半身の力に頼り過ぎです。・・・まだまだ強くなりますよ」
ようやく相手は一礼して下がる。
ここで競技場に歓声が沸き起こった。賞賛の歓声だ。

続いてもう一人が名乗りを上げる。
見れば１５０ミティ（約２．４ｍ）はあろうかという巨漢の武人だ。
獲物は戦斧（バトリアクス）

4－6　真っ向

バイカルノ傭兵団の歓迎式典で起きた予定外の立合い。
それは真剣勝負だった。
ジュノは甲冑を着けずに立合いに臨んだが、結果として命を落としても文句は言えない。
それが嫌なら最初から受けなければ良いのだ。

ジュノが勝利し、次に名乗りを上げたのは、戦斧（バトルアクス）を得物とする巨漢の武人。
「クラト、行って来いよ。お前の１５リグノ剣ならいい勝負だろう」
バイカルノが言うと、クラトに注目が集まった。

ラヴィスは思わずつぶやいた。
「１５リグノ剣？あいつエナルダだったの？」
はっ、と気付いて咳払いする。
私は護紅隊の隊長なのだ。言葉も武人らしくあらねば・・・。

クラトはバイカルノに目も向けず言い放った。
「断る」

ラヴィスの身体が斜めに揺れた。
なんなのコイツ。膝の力が抜けるじゃない。

・・・しばしの静寂の後、一気に怒号が渦巻く。
ふざけるな！　それでも武人か！　１５リグノ剣は飾りモンか！
この盗賊崩れが！　恥を知れ！　〇〇付いてんのか！
それはそれは物凄い罵倒の嵐だった。
それは上官の指示に従わない態度への反感も大きい。

「俺の配属はまだ決まっていない。それなのに命令を受けられるか！」

・・・またもや静寂

「お前は俺の軍団の特別大隊だぜ。言っただろう？」

「え！？そうだっけ、聞いた？」

「聞いたよ。クラトとあたしは師団に属さない特別大隊だって」

傍らのルシルヴァが答える。

「あ、悪ぃ。いや、これは申し訳ない！では、バイカルノ軍団長の命により対戦する」

ベックやロキウスは懸命に笑いを堪えている。

競技場がザワつく。

あいつはクラトって名前か、特別大隊の隊長らしいが、大丈夫か？

玉座の左に座るティエラは下を向いて身体を震わせている。

何なの？あいつは。

先日といい闘気を鈍らせるヤツ。

ラヴィスは呆れつつもイラついていた。

ラヴィスは今日の立合いを予想し、ひそかに楽しみにしていたのだ。

優れた武人同士の一騎打ちを。

アイツのせいで競技場の雰囲気が緩んだ。

くそっ、台無しだわ。

クラトはゆらゆらと揺れるように階段を降り、甲冑を受け取った。

まじまじと甲冑を見ていたが、兵士に返す。

バイカルノが笑いを堪（こら）えながら小声で話す。

「あいつ、甲冑の着け方知らないんだぜ、きっと」
「そういえば軽装鎧しか装着した事がないですよ、失敗したなぁ」
「大丈夫っスよ、クラトさんなら」
「いや、あいつは2～3発くらった方がいいんだよ」

ラヴィスは微かに伝わった空気の振動を聞いた。
傭兵団はふざけているのか。
さっきの立合いも立場が逆なら死んでいた一戦だ。
この緊張感の無さはなんだ。
イラ立ちは募る。

それにしても・・・
対戦相手はエナルダのディクトール、勇猛なバルカ軍の将軍ですら手を焼く反骨の士。
己の強さのみに執着し、他を顧みない戦士。
腕力では指折りの猛者で軍歴も１０年を数えるが、いまだに小隊長に甘んじている。
いくら力があろうと組織戦が出来ない者を軍は受け入れない。
軍に孤高の騎士など不要なのだ。
そのようなものは物語の中でご婦人方を喜ばせておれば良い。

しかし、このディクトール、サシの勝負ではめっぽう強い。
あの戦斧を食らったら一撃でアウトだ。
クラトはディクトールを前にして、背負った剣の柄に手を掛ける。

（カツーーン！）

突然、玉座の方から音が響いた。
クラトが振り返ると、フィアレスが杖を握っている。
そして誰もがクラトを見ていた。

風圧を感じた。
身体を半身にして抜きかけの剣で受けるものの、まともに戦斧の一撃を食らった。
クラトの身体は１０リティ（８ｍ）以上も飛ばされていた。
誰もが思った。あの男は死んだ。
軽口を叩いていたバイカルノでさえ身を乗り出す。
ラヴィスが振り返ると、ティエラ姫はフィアレスに視線を向けていた。

待機していた兵士が我に返って駆け寄ろうとした時
「痛ぇんだよ！クソがぁ！！」
クラトが立ち上がって右手に剣を握り、左手で首をさする。
ざわつく競技場。
それを意にも介さず戦斧を構える巨漢の武人。

「何なんだいきなり！あぁ？ざけんなっつーの！！」
競技場のざわつきは歓声へ。

「あ～ぁ、怒らせちゃった」ルシルヴァが楽しそうに言う。
ジュノはバイカルノに耳打ちする。
「バイカルノ殿、ヤバイですよ、クラトさんが暴走しちゃいますよ」
「じゃ、止められるか？」
「私かクラトさん、どちらかが死にますね」
「それは困るから止めなくていい」

ラヴィスはバイカルノ達が本気で心配しているように感じた。
心配する相手が逆でしょ。
そう思いながらも視線は競技場に釘付けだ。

クラトは首をさすりながらディクトールに近づき、まだ遠い間合い

からいきなり打ち込んだ。
左足で踏み込んで右腕一本で打ち込む剣は、途中から軌道が伸びた。
剣を振り下ろしながら右足でもう一歩踏み込んだのだ。
ディクトールは戦斧で受けるのが精一杯だ。
戦斧を通して凄まじい衝撃が身体に伝わる。
間髪入れず１５リグノ剣が迫る。
クラトは防御されても構わず打ち込む。
ディクトールも打ち返す。
クラトの脳裏にオレンジ色の光が弾ける。
とてつもない衝撃だ。

ディクトールは驚きながらも喜びを感じていた。
この男はスピードも技巧も優れている。
それなのに打撃力で勝負をつけようとしている。
俺に付き合うというのか？
・・・面白い。とことん付き合ってもらおうか！

もう二人とも打ち込んで受けるの繰り返しだ。
クラトが打ち込む、ディクトールが受ける。
ディクトールが打ち込む、クラトが受ける。
一撃一撃が渾身の打ち込みだ。
どれくらい続いただろうか。
競技場に重い金属音が響き続ける。
「おらぁ！！」
クラトの剣がディクトールの戦斧を弾き、兜を直撃する。
それでもディクトールは倒れなかった。
倒れなかったが、打ち返す事が出来なかった。

「お前、面白いヤツだなぁ」
クラトはディクトールに声をかけて振り返ると、大声を上げた。

「終わったぜ！！」
競技場はもの凄い歓声に包まれた。

ディクトールは手を貸そうとする兵を振りほどいて戦斧を杖にして立っていた。
クラトに一言だけ伝えたかった。
それを伝えるまでは一人で立っていたかった。

「感謝する」
ディクトールは顔を向けたが、クラトは居なかった。
「どうやら・・・」
下の方から声がする。
目を向けると大の字になったクラトが楽しそうに言った。
「どうやら、お前の勝ちらしいぜ」

クラトとディクトールは即入院となった。

4－7　結成

歓迎式典の翌々日、クラトとディクトールは揃って退院した。
「じゃぁな、ディクトール」
ディクトールは礼をしただけだった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

迎えに来たルシルヴァによると、突撃大隊は既に兵士の補充も済んでいるらしい。
「補充されたのは荒くれ者ばかりらしいよ。各軍団とも、これ幸いとばかりに厄介者を選抜したようだね」
「それに突撃隊は４個中隊で、残りの２個中隊はホーカーの長弓隊なんだ。どういうつもりかね」
「ま、おいおい増員するとして、援護の長弓隊とは連携も必要だからな。今のうちから一緒に動いておいた方がイイって事だろ」

「しかし昨日は凄かったね。いい立会いだったよ」
「そぉか？負けちまったし、まだ首が痛ぇよ」
「あれは負けたとは言わないよ。それに、あの立会いに勝ち負けは意味無いと思うけど」
「そんなモンか？」

「それはそうと、もう全員揃ってるよ」
「え、誰が？」
「何言ってるの、もう。突撃大隊の隊員だよ」
「あ、そうか」
「じゃ、挨拶頼むね。ク・ラ・ト・たーいちょ」
「えぇ～？聞いてねぇよ。そんなの慣れてないしなぁ」

「いいんだよ、適当で。俺について来い！みたいな感じで話をすれば」
「そぉ？じゃテキトーにね」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「あ、クラトさん、いやクラト隊長。待ってましたよ」
「ホーカー、また一緒だな。よろしく頼むな」
「はい、頑張りますよ！俺も中隊長になったし。奴隷だった俺が・・・」
「おいおい泣くなよ、相変わらずだな」
「すんません」
「あ、長弓隊は2個中隊の規模ですけど、一つの隊として運用します。突撃大隊長弓中隊って感じっスね。第3軍の弓隊から若い兵士が選抜されたんで鍛えるのに時間が掛かりそうです」
「戦場で長弓を撃てるようになるまでどれくらい掛かる」
「ん～、1ヶ月は掛かるでしょう。救われるのは歩兵としての基本訓練はしっかりと行われているって事ですかね」
「今月中に何とかならんもんかな？」
「今日が10日だから、あと26日っスね・・・やってみます。確約は出来ませんけど」
「よし、頼む。6月30日に経過を教えてくれ」
「わかりました」
俺たちのやりとりをルシルヴァが微笑みながら見ている。

大隊長が俺、副長がルシルヴァ。長弓隊はホーカーが隊長だから、あと4人の中隊長が必要だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クラトが大隊の集合場所に姿を現すとどよめきが起きた。

「クラト・ナルミだ」

歓声が上がる。

「突撃する時には必ず俺が先頭に立つ。俺が倒れたら副長のルシルヴァの指示を仰げ」

「ルシルヴァが倒れたら、中隊長に指揮を執ってもらう」

「で、中隊長に立候補する奴はいるか？」

「おう！」「あいっ！」

勢い良く二人が手を挙げた。

一人は色黒でガタイのいい奴だ。口の周りに髭をたくわえ、頭は剃りあげている。

もう一人は長身で細身、手足が長い。目を開けているのか分らないほど細い目に口元には笑み。

「名前は？」

「俺は第3軍で中隊長をしていたラバック、俺の部下はそのまま俺にまかせてもらいたい」

「私は第2軍で中隊長をしていたスパイクです。同じく元々のメンバーで中隊を組ませて下さい」

「構わんよ。ただ、問題があれば代えるぜ」「後2人だ。誰かいないのか？他薦も認めるぞ」

「一点お伺いしてもよろしいか」

30歳台も半ばだろうと思われる男が声をあげた。

許可すると、立ち上がって話し始めた。

「私は第2軍から転属となったラナシドです。隊長の意向には従いますが、中隊長を立候補などという方法で決めて良いものでしょうか。大隊長が審査なり面接なりをして決めて頂くのがよろしいのではないでしょうか」

ラバックが怒鳴る。
「てめぇ、俺じゃ役不足だってのか！」
俺はラバックを遮るように言う。
「じゃ、お前にやってもらおう」
『は？』ラバックとラナシドの声は同時だった。
「だから、ラナシドに中隊長をやってもらう」
「いや、しかし」
「俺はお前の意見を聞いて決めたんだ。やってもらうぜ」
ラバックとスパイクは大笑いしている。

「さーて、あと一人だ。中隊長がシャンとしないと全滅だからな。良く考えろ！」
・・・
「俺にやらせてくれ」
全員の視線が集中した先にいたのはディクトールだった。

「駄目だ。お前はウチの所属じゃないだろ、何言ってんだよ」
「許可は得て来ました。頼みます」
「ルシルヴァ、どう思う？」
「いいんじゃない？ディクトールは強いし」「むしろどう戦わせるかはクラト次第でしょ」
「そうか、よし、ディクトールを中隊長にする」
ザワつきは徐々に大きくなり、歓声に変わる。
「よーし、じゃ中隊長は順番に俺と立合ってもらうぜ」
・・・
一気に静まり返った。
「あ、ディクトールは一昨日やったからいいよ。なかなか終わらないから面倒だし」

それから3人、全力で打たせた。

打撃が鋭い。なかなかの剣圧だ。
見ている者が引き込まれる。
最後に俺から一撃、3人とも弾かれる。
「よし、いいだろう。中隊長の力は十分にある。精一杯やってくれ」
歓声が上がる。
この大隊はスゲェ！
そんな声も聞こえる。

歓声が一段落すると、ラバックがいきなり声をあげた。
「クラト隊長の下で戦うのはいいが、副隊長さんは女だよな。大丈夫なのかね？」
「おいおい、お前死ぬぞ？」
俺は笑って相手にしなかったが、ルシルヴァは真に受けた。
「ほぉ、やってみるかい？」

ヤバイ。ルシルヴァが切れた。
コイツは俺の事をあーだこーだ言うくせに結構切れやすい。
ラバックも結構強いが、ルシルヴァ相手ではとても敵わないだろう。
切れたルシルヴァが手加減するとは思えない。
最初から大怪我されてはたまらん。

「よし、じゃ、俺がルシルヴァと立合ってみようか」

「なに言ってるんだよ。さっき退院したばかりだろ？」「じゃ、今日のところはクラトに預けるよ」
という言葉を期待していたが見事に裏切られる。

「そうかい、丁度良かった。クラトには一回負けてるからね。あの時の借りを返させてもらおうか」
なぬー！やるってか！？

やべぇ、昨日の今日だし、ラバック達の打ち込みで結構ダメージ食らってるんですけど！
ど、ど、どうする？
しかたねぇ、やるしかねぇか。

しかし、ルシルヴァは面白い女だ。
「お前、やっぱりイイ女だな」
「な？　な、なにを・・・」

（どごぉッ！！）

ルシルヴァの拳は俺の脇腹、やや後ろにめり込んだ。
「うおぁ・・・や、やばいタイミングで入った・・・」
「きゃー！クラトごめーん！！」

俺はめでたく再入院となった。

4－8　直属

俺が入院中に突撃大隊の正式配属先が決まった。
ティエラ姫の特別騎馬隊に組み込まれるのだ。
ただし、暫くはバルカ軍に慣れるためにバイカルノ軍団に留まるらしい。

驚いた事にヴェルーノ卿が直接宿舎を訪れ、俺とルシルヴァにティエラ姫について聞かせてくれた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ティエラ姫は幼い頃から騎馬や武術を好んだ。
１０歳でエナルダ覚醒、１２歳では初陣を飾る。
軍装は美しい甲冑と宝剣、兜の首許から美しく豊かな栗色の髪が溢れる。
馬さえも輝く鎧を装着していた。

あどけない姫の出陣は士気高揚の演出でしかなかったが、全身を煌びやかに着飾った騎馬が信じられないスピードで突っ込んでいく。
親衛隊や将軍たちは大いに慌てた。
姫の突撃をきっかけに総軍突撃の体勢となり、フィアレスの作戦を超えた大勝利を掴むきっかけとなった。

ヴェルハントは根っからの軍人だ。
ティエラを戦場から遠ざけようとはしたものの、一旦軍務に就けば特別扱いしなかった。
ティエラも父を喜ばせたいと願い、戦功を積み重ねた。
その後、彼女は護衛侍女５０名をもって騎馬隊を編成する。

兜から鎧、篭手や脛当に至るまで、全ての武具を赤一色に染め上げた騎馬隊。
その突撃力から、後に“バルカの赤い槍”と呼ばれる赤騎隊がそれだ。
全員が女性で構成されており、現在では１５０名を数える。考えられない事だが、全員がエナルダだという噂すらある。
ティエラ自身も馬上では両手に刀を持ち、恐ろしい戦闘力を発揮する。
その機動力と両刀で前後左右の敵を切り伏せる戦いぶりから“バルカの赤い旋風”と呼ばれ、一直線に敵本隊に突入し、敵の将軍を討ち取る事から、赤騎馬隊が前面に出てくると、敵は師団規模での対応が必要となり、負担を強いられるのだった。

俺が組み込まれた理由は、少数の騎馬で突撃する姫に危険を感じ、その代役が回って来たというのが真相らしい。
そりゃ、そうだ。
一国のお姫様、しかも唯一残った血筋だ。
突撃どころか、本来なら戦場にすら出てもらっては困る。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

形の上ではあるが、姫の直属となった俺とルシルヴァは、姫へお目通りとなった。
姫の執務室へ案内してくれたのは、まだ若そうだが落ち着いた感じの侍女。
部屋に入ると、背もたれが高い椅子に姫が座って、机に肘をついた左手の甲に顎を乗せていた。
隣りにはラヴィスが佇立しており、侍女が3名控えていたが、侍女は全員が人払いされ、４人だけとなる。

「ここでは堅苦しい言葉遣いも無用だ」
「そなた、ラヴィスとやり合うたらしいな」
「あの、えーと」
「よいよい、咎めているのではない。お前の無作法さも先の式典で承知している」
「あー、すみません」
「ラヴィス、この男はどうだ？」
ラヴィスは真面目な顔を動かしもせず答えた。
「は、ディクトールとの一戦をご覧の通り、かなりできます」
「・・・ただし、戦いに対する不謹慎な姿勢はバルカ軍に相応しくありません。私はこの男が嫌いです」
姫は声を上げて笑い、ラヴィスはやや不満そうに姫を見た。

「クラト、ラヴィスはこのとおり口は悪いが、武には優れておる。そして純粋な女子だ、あまりからかってくれるなよ」
「姫っ！」ラヴィスは少し頬を染めながらも高い声を上げる。
ティエラは指先で軽くラヴィスを制する。

「クラト、そなたは異人らしいな。それにエナルダでもないとか・・・」
「あぁ、この世界に来て1ヶ月くらいだ」
「こらっ、言葉遣いに気をつけろ！」ラヴィスが睨みつける。
「今度、時間があったらそなたの世界の事を聞かせてくれ」
「え？えぇ、まぁ、分りました」

姫には、事前に詳しく報告が入っているようで、簡単な自己紹介だけでお目通りは終了した。
城を出て、調練場への道すがら、ルシルヴァはめずらしく無口だった。
調練場に着くと、とりあえず中隊長5人を交えて訓練について相談

を始める。
そこへラヴィスがやって来た。
武具の配給について、担当者と相談しろと言う。
そういえば突撃大隊は得物から鎧、兜まで装備がバラバラだ。

武具の配給と聞いてラバックとスパイクが大騒ぎを始めた。
「大剣で叩き潰すんだよ、敵をよぉ！」
「刀かレイピアを甲冑の隙間から差し込めばそれで済みます」
「そんな事が簡単にできるか！」
「我々は長時間戦い続ける必要があります。体力の温存と戦闘の効率を高めるべきです」
「俺達は突撃大隊だぜ、まずは初手の圧力が大事だろう」

そんなやりとりを聞きながら、ラヴィスはつぶやく様に言った。
「どうしようもない兵士達と聞いていたが、中々まともな事を言うじゃないか」
「俺が見る限り、バルカ軍の中でも結構イケてるヤツ等だと思うけどな」
「まぁ、言動が無作法なのは隊長譲りなのだろうな」
「ちぇ、印象悪いな」「あ、そういえば姫に俺がお前を誘ったとか言っただろう」
「なっ」
「あれは違うぞ、俺の世界で知り合いの娘がお前にそっくりだったんだ」
「えっ？」
「だから、あれはお前を誘ったりした訳じゃないって言ってんの！」
「・・・それがどうした！」

（がすッ！）

「ぐぁ、ルシルヴァと同じ・・・ところに・・・」
「ふんっ」ラヴィスは肩をいからせて帰っていった。
後ろの方からルシルヴァのつぶやく声が聞こえる。
「バカだねぇ、相変わらず」
そう言ったルシルヴァの視線が何かを捉える。

「あれは、マッシュじゃないか」
マッシュはバイカルノ傭兵団がバルカに入る際、クラト達の道案内をした17歳の少年だ。
バイカルノ傭兵団では最年少で今はロキウスの大隊に配属されている。
「あの、俺をクラト隊長の隊に入れてもらえませんか」
「なに言ってんだよ、ダメに決まってるだろ」
「大体、お前はロキウスと仲がいいし、ロキウスの所でやってりゃイイじゃないか」
「そうなんですけど・・・やっぱ昨日の立合いを見ちゃうと」
「好き勝手言ってんじゃねぇよ、ダメだ」
「でも、昨日占ってもらったんだよ、当たるって有名な占い師に」
「はぁ？」
「そしたら、黒い髪の男の下で、勝ち戦のきっかけを作るって言われたんだ」
「・・・バカなのか？お前はバカなのか？」
「入れてやれよ」いきなりレイソンが現れた。
「こいつは昨日の立合いの事を言っちゃいるが、お前らを案内した時からクラトの事ばっかり話してんだ。まだ若いが器用な奴だから色々とこき使ってやってくれ」
「ロキウスも納得してるし、俺からも頼むよ」

マッシュは俺の部下となった。
マッシュはレイソンが言うように器用だ。食事の準備から武具の手

入れまで驚くほど手早い。
少々生意気だが頭も悪くないし、人柄も良い。
ただ、マッシュはまだ若いし鍛える必要があるから、大隊付きの従者という形にした。
マッシュは喜びを全身で表している。
ホーカーとルシルヴァは知っている仲だ。
早速、自己紹介を勝手に始めて、しきりに頑張ると言っている。
まぁ、微笑ましいといえば微笑ましい。

「あ、忘れてた。武具の事」
「じゃ、鎧と兜は俺とルシルヴァで決めるわ。得物も決めるけど、中隊長の許可を得れば何を使ってもいいぞ。ただし行動に支障がでない範囲でな」

またラバックとスパイクが言い合いを始め、マッシュはホーカーとじゃれている。
ラナシドは何種類もの剣や刀を並べ、ヴィクトールは樹の下で腕を組んで座っていた。
傍らではルシルヴァが珍しく考え込んでいる。

高い太陽の下、パズルが嵌(はま)ったかのような感覚。
揃った。これからだ。
これから何でもできる。何でもやってやる。

でも、こういう時いつも感じる。寂しいような虚しいような気分を。

4－9　装備

早速、武具の担当者から説明を受けて欲しいものを申請する事となった。
ルシルヴァと相談して、武器は剣×1、刀×1、ボウガン×2、鎧は軽装鎧の前面を強化した突撃用鎧とした。

バルカの鎧は3種類。通常鎧、軽装鎧、重装鎧。
鎧は革と金属プレート、木材、樹脂などで作られ、樹脂で固めた部分は強い打撃を受けると砕けてしまう。
だから、良い鎧ほど樹脂は使わないし、軽装鎧は樹脂が多い。
この世界の鎧は中世ヨーロッパのプレートメイルのように全身を覆うものではない。
機動力を低下させないように可動部の内側は装甲を施さない。
つまり、脇、股、肘や膝の裏、の装甲は無い。
重装甲であろうと、ここが弱点となる。兜と鎧の隙間もそうだ。
それを防御する為に日本兜でいう“しろこ”を付けたり、鎧の下に鎖帷子（くさりかたびら）を付けたりする。

鎧は基本的に胸部、腹部、腰部、腕、足のパーツに分かれている。
胸部は肩からみぞおち、腹部は臍の下までで、胸部と腹部は連結して使用する。
腰部は6～8枚の装甲板からなるスカートタイプでベルトで固定。
腕は前腕に篭手、上腕は外側のみの装甲。
脚部は大腿部が外側のみ、膝下は脛当てと野球のフットガードのような足の甲までカバーしている。
高機動のエナルダやマスエナルを装着する場合、全体の装甲を厚くする事が可能だ。
俺が始めてジュノと出会った時に装着した鎧は軽装鎧だ。胸部と腹

部が一体化し、手には篭手のみ、足も脛当てのみ。

通常鎧と重装鎧はほぼ同じで違いは装甲の厚さだ。
特に重装鎧の基準はボウガンで撃ち抜かれない装甲を最低でも胸部と腹部に施したものだ。

鎧の下にはゆったりとしたカーゴパンツのようなものと、同じくゆったりとしたシャツだ。
赤騎隊は鎧の下に真っ白な鎧下を着用しており、赤と白のコントラストにこだわっている。

そして兜だが、俺は思いもよらないものを見た。

バルカ軍の兜は何種類かあるが、全てバイクのヘルメットに似ているのだ。
一般兵士用の兜はＡｒａｉのＭＺ。首の後ろが少し広くなっているが、よく似ている。
ギルモア国の兵士がつけていた、ハーフヘルメットのような兜に比べて優れている事は一目で分る。
後頭部や頬まで防護されているし、戦闘時もずれたりしないだろう。
形的には戦国時代の頭形兜（ずなりかぶと）に近いだろうか。
手に取ってみると、金属のプレートと革で出来ているようだ。

騎士用の兜は一般兵士用の兜に可動バイザーが追加され、首を守る３枚のプレートが日本の兜の“しろこ”のように取り付けてある。
特徴は大きなバイザーだ。
格子状のバイザーは中世ヨーロッパの騎士を思わせるような形状で、バイザーを引き上げると、ホンダのＪＴ１Ａのような形状になる。
ホーカーはバイザーが日除けになると言って、長弓隊はこれを使用する事になった。

更に突撃部隊用として特殊な兜がある。
こちらはＧＰＡのブラック・マットにそっくりだ。
バルカの兜を作った奴は地球から迷い込んだヤツじゃないのか？そう思いたくなった。

正面からの打撃を防御するために額の部分に肉厚の革を貼り、更にその上を金属のプレートで覆っている。
赤騎馬隊はこれを使っているらしい。
元々は口許もガードする形状だったらしいが、ティエラ姫が口許が“見える”ように外させたらしい。
赤騎馬隊は戦場に出る際、全員が化粧をするというのだ。
肌を白く、唇には真っ赤な紅を差す。
それを敵に見せるというのだ。
一つの心理的効果があるのかもしれないが、俺には理解できない。

突撃の戦法が多くなる俺の部隊にも突撃用のものを要求したが、一般兵士用ではないとして却下された。
さすがに姫の部隊は特別なのだろう。
グダグダ言っても始まらないので、一般兵士用兜の後頭部に３枚の金属プレートを取り付けるように依頼した。
士官用の兜には色々と飾りが付いている。
特に軍団長や師団長になると直接戦闘に加わる機会は少ないので、機能よりも見た目が重視される。
俺も好きなものを作って良いと言われた。
大隊規模とは言え、ティエラ姫の直属となる突撃隊の隊長ともなると何かと待遇も良いようだ。

将軍達の兜を見せてもらったが、動物の角やら竜獣（ベナプトル）のとう頭骨などで装飾され、なかなか雰囲気を出している。

ジュノは羽根を両サイドに立ててシンプルながら、なかなか格好が良い。
でも、俺は面倒なので兵士用と同じものを使う事にした。

その日の夜、軍事府の武具担当者が青い顔をして俺の所へ飛んできた。
最初の要望どおり、全員に突撃用兜を支給するという。
３日以内と命令されたが、とても２００以上を揃えるのは無理だと言って泣きそうな顔をしている。
聞くところによると、姫から直接軍事大臣へ苦情がいったらしい。
しかもかなりの勢いで。

いつ出来るか聞くと１０日は掛かるという。
それで構わないと答えると、急に驚いた顔をして、何とか７日で準備すると言った。
コイツ・・・７日で出来るものを１０日と答えたのか。
期間短縮を求められても対応できるように余裕を持って返答したのだろう。
自分から７日に変えた理由は聞く人間が聞けば７日は妥当だと分るからだろう。
俺は武具の担当者見据えて低い声で言った。
「いいか。これからは俺に交渉をうつのはやめろ」
「お前が作って俺が戦う。どちらも懸命にやらなければ戦は負ける」
「無理が必要な時には無理をしてもらう。今回は７日でやってくれ」

担当者は複雑な顔をしていたが、低頭して感謝の言葉を口にした。
しかしそのまま佇んでいる。
全く、面倒なヤツだ。
「突撃訓練を行うのは８日後だ。兜はそれまでに揃えてくれればいい。その代わりに、他の仕事も手抜かりするなと言われたと伝えて

くれ。姫には俺から言っておく」
それだけ言うと平伏して去っていった。

4－10　執務室

翌日、ティエラに面会を求め、許可された。
姫の執務室は他の大臣から少々離れている。
住まいは別の棟にあるらしい。

執務室に入った途端に「そなたは甘い」と指摘された。
既に軍事大臣から姫に報告が入ったか。軍人の割に肝が小さいヤツだ。
「それに、私が出した指示を許可無く変更するのは今後許さぬ」
「あぁ、分ったよ。じゃ、そういう事で」
帰ろうとすると侍女がお茶を運んできた。

口にするとプーアール茶のような味と薫りだ。
「美味いな、これ」
思わずつぶやくと、ティエラは笑って、侍女に手を挙げた。
今度はなにやらお菓子らしいものが出てきた。
茶色で親指くらいの花梨等みたいな感じだ。
迷わず口に放り込む。これも美味い。
「むあーい（うまーい）」
ティエラは微笑みながら見ている。
親もお菓子も平らげて帰ろうとすると、更に侍女がお茶とお菓子を持ってくる。
とりあえず食べる。
完食するとまた持ってくる。

かなりの量のお茶とお菓子を食べ、限界が近づいた頃、ティエラはもう我慢できないとうように声を上げて笑い始めた。
侍女も手の甲を口に当てて笑っている。

「異人と聞いたが、どうやら本当のようだの」「この地ではの、出された茶や菓子はきれいに平らげぬものじゃ、少し残す事で満足したという意志を示すのじゃ」
そう言えば地球でもそんな習慣がある国を聞いたことがあるな。
ぼんやり考えながら話を聞いていた。
「・・・あ！また全部食っちまった！」
気が付いたら、また残さず食べてしまっていた。
「もうお持ちするお菓子がございません」
侍女が声を上げて笑っている。
ティエラにいたっては泣きながら笑っている。

「どうしよう、吐いちまおうか」
「よさぬか、良いだろう今日は」「他で茶を出されたら気をつけるのだぞ。私の配下が礼儀知らずでは私が困るのでな」「また明日、来るが良いだろう」

ころころと良く笑う侍女はファトマという名の侍女長だ。
侍女は全部で7名居り、ファトマが取り仕切っている。
仕事は姫の身の回りの世話だ。
女官は他にもいるが、この7名は姫にだけ仕えており、相手が大臣であろうと命令は受け付けない。
本来、姫の侍女は3人程度らしいが、ティエラ姫は戦をするので、どうしても人手がいるのだそうだ。そして一旦城を出ればラヴィス率いる護紅隊が赤騎馬隊と一緒に姫を護るのだ。

俺たちも頑張らないとな。
俺の入院している間、訓練はルシルヴァに任せている。
ラバックもルシルヴァの言う事を聞くようになっていた。
どうやらルシルヴァはヴィクトールと立合いというか、打ち合いをしたらしい。

通りかかったバイカルノが上限を２０合と命じたらしく、お互い２０回の打ち込みで終了したようだ。
それでもルシルヴァの強さを実感するには十分だろう。

訓練についてはラナシドの話が参考になる。
しかし、実に単純な訓練ばかりだ。
運動部の練習や聞きかじった自衛隊の訓練なんかを組み合わせて行う事にした。
まずは礼に始まり礼に終わる。これをやる。
なにも行儀が良い部隊を作りたい訳じゃない。
ダラダラとした訓練はさせたくないのだ。
そして体力だ。徹底的に走らせる事にした。
そして腕が下がらないように鍛える。
口に薄い板を咥えて走らせる。
両手を挙げたまま走らせる。
とにかく走って打ち込む訓練を徹底して続ける。

スピードと圧力を併せると突破力となる。
突破力が無ければ突撃は失敗するのだ。失敗したら悲惨な結果しかない。
その為に走り、打ち込む。

空を見上げると、不思議な気持ちになる。この世界も空は青いのだ。
視線を下ろせば、甲冑に身を包み剣を振る男たち。
やはり違う世界だ。
ここは異世界、俺は紛れ込んだ異人。
ただ、異世界も悪くない。そう思う時がある。

5－1　潜入

訓練に明け暮れて6月も終わろうとしている。
徹底的な体力向上を目指し２０日余りが過ぎた。徐々に効果が現れる頃だ。

努力に対する効果というものは分りづらい。
努力によって力は付く。確実にだ。
それはグラフで表せば、なだらかな上昇を描く。
しかし、その力が目に見える形で現れるのはそれと一致しない。
力がある程度上昇した時に、また何かのきっかけで、それまで上昇していた分の力が発揮されるのだ。
つまり、階段のようなグラフになるだろう。
だから力が欲しければ続けなければならない。
肉体の苦痛と、迷いという苦悩を伴う努力を。
そして突撃大隊は階段を一歩登る状態にあった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

事件は午後の休憩時間に起きた。
第３エリアにある調練場で騒ぎが起きているらしい。

バルカの本城は城と３つの城壁で成り立っている。
領主と貴族、要職者などは第１の城壁、重要な機関や設備、軍の上層部は第２の城壁、軍と特別市民は第３の城壁に守られている。全市民を守る第４の城壁もかつては存在していたが、完全に崩れてしまい、今では境界線の役目しか果たしていない。
そしてそれぞれを第１～４エリアと呼んでいる。

第3エリアの南城門に近い第2調練場で起きた騒動。
喧嘩だという声も聞こえる。
他部隊、特に違う軍団との諍(いさか)いはよく起きる。
大抵は大隊長や師団長が出て収まるのだが、今回は収まらないどころか騒ぎは大きくなるばかりだった。
クラトと談笑していたラバックとスパイクは持ち前の野次馬根性を発揮してすっ飛んでいく。

その直後、誰とも知れない悲痛な声が響く。
「死人が出た！」
腰を上げかけたクラトたちが更に聞いた声は怯えを含んでいた。
「敵が侵入しているぞ！エナルダだっ！」

クラトは現場に急いだ。ルシルヴァが指示を出しつつ続く。
「ラナシド！ホーカーに準備させな！」
ラナシドは手近にいた部下を呼んで、ホーカーに事態の説明と部隊を集めるように伝令を出した。
続いて他の部下をヴィクトールに伝えるように送り出し、突撃大隊の小隊長へ部隊の集合を伝達させる。
更に軍事府への伝達に2名。自らは2個小隊を率いて第2エリアへの通路を固めるべく急いだ。
見れば第2軍団の中隊が早くも各所に向かっていた。
「よし、城は大丈夫だな。戻るぞ」
こういったところでラナシドの能力は発揮される。

ラナシドが戻ると、ホーカーが長弓隊の約半数を揃えたところだった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

現場では5人の男がバルカ兵に遠巻きにされていた。
周囲にはざっと30ほどの死体がある。
その場所は調練場の端にある水汲み場だ。
桶が散乱し、水を溜めた樽がいくつも転がっている。

5人の男たちは確かにエナルダだった。
白昼堂々バルカの城壁内にまで侵入する度胸もさることながら、瞬時に30ものバルカ兵を屠る力量も驚愕に値する。
しかもこの男達はレノではなく、軍に所属する武人であるようだ。
高レベルのエナルダは中隊規模の戦力であり、5人ならばほぼ大隊規模の戦力と言える。
エナルダの集中投入によって、1個大隊規模の戦力が突然現れるという手品のような奇襲も可能という事だ。

男達の目的は不明。
偵察だけならレノで十分だし、逆にレノだったらこんな大立ち回りはせずに逃走を図るはずだ。
どこの国かは知らないが、エナルダを無用に消費する愚策と言える。

この5人は間違いなく討たれるだろう。問題はバルカにどれけだけの被害が出るかだ。
5人の生死という点では無意味な睨み合いが続く。
そこへクラトが到着する。
クラトはいきなり5人へ斬りかかった。
5人だけでなく周囲を固めるバルカ兵にも動揺が走る。
1人がクラトの剣をまともに受けて吹き飛ぶ。
クラトへ向かう4人にルシルヴァがぶつかり1人を屠る。残り3人。
侵入者を圧殺すべく周囲のバルカ兵が足を踏み出そうとした。
まさにその時だった。

周囲を固めるバルカ兵の一角が崩れた。
２人が剣を振るっている。これも敵だ。
残った３人がその場所から突破を試みる。
その３人に黒いものが近づき、１人を斬り倒した。
斬ったのは第１軍団長レガーノ元帥。
その先でもう１人の敵が討たれ、３人が逃走を図る。
南門を突破されたら逃げられてしまう。
南門は開いていた。そこには更に２人の敵。
合流した５人は準備してあった馬で逃走する。
駆けつけたホーカーが１人を撃ち落したものの、４人は逃走してしまった。
２段構えの逃走路確保、馬の準備など、愚策の割には用意周到だ。
違和感がある。

突然、背後から馬蹄の響き。
赤騎隊だ。ラヴィスの親衛隊も混じっている。
「クラト！お主も来い！」
たった４人の敵を追うのに大袈裟な・・・
そう思いつつも俺とルシルヴァは馬上の人となって後を追った。
追いついてみると赤騎隊は副隊長のイオリアはいるものの、総勢５０名程度しかいないし、護紅隊は１０人程度だ。
ラヴィスに馬を寄せる。
「どうしたんだ、この少なさは？」
「どうもこうも全員が準備を整える前に姫が飛び出したんだ」
「まぁ、敵は４名だし、これでも多いくらいだけどな」
「クラト、お前も姫の直属になったのなら姫の身を第一に考えてくれ。この数、しかも軽装だ。敵の師団、いや大隊であっても包囲されたら危険だ。ましてやあの４人はエナルダなんだろう？もし高レベルだったら、あれだけで大隊規模の戦力だ」
「万が一、姫の身に傷でも負わせたら我らは死んでも償えん。お前

が原因なら生かしてはおかない」
「お前、マジ顔で言うと怖ぇよ・・・」

瞬間、脳裏を小さな光が走る。
愚策と周到。嫌な予感が押し寄せる。

俺は馬の横腹を蹴ってティエラを追った。

5－2　騎馬

侵入した敵はどの国、または組織の者か。
追撃する赤騎隊と護紅隊に同行した俺に嫌な予感がよぎる。

ティエラの横につけたいが、普通の馬では姫の駿馬に追いつくのは大変だ。
馬が潰れるのを覚悟で飛ばして追いつく。
途端にティエラから明るい声の叱責を受ける。
「クラト、その馬で我らに追いつくとは飛ばしすぎじゃ、馬が潰れるぞ」
「分ってる。でも、なんかやばそうだ。姫は下がってくれ」
「今日はお主に私の力を見せてやろう。ディクトールとの一戦といい、先ほどの侵入者との闘いといい、お主には見せ付けられてばかりだからな」
「そんな事言ってる場合じゃないだろ。この数で敵に包まれたらやばい、姫の身に何かあったら俺は生きてられないぜ」
ティエラは押し黙り、馬が走るに任せた。
当然、速度は徐々に落ちる。
追撃の速度が落ち、逃走する４人との間隔が開いた。
逃走する１人がチラっと振り向いたのが見える。
少し速度を落としたように感じた。
・・・ヤバイ！誘導されているに違いない。
「ティエラ下がれ！ラヴィス！何だかヤバイぜ！」
ティエラはハッとしたように俺を睨む。
「お主は“調子が良い”な・・・」
再び速度を上げていく。
「おい！待て！」

ラヴィスも気付いた。
逃走する先には森が広がっている。この森は国境まで続く深い森だ。
左右にも1ファロ（４００m）先には森が迫っている。
今、森に突き出したように広がる荒野を走っているのだ。
国境まで続く森、兵を伏せるには都合が良い森、前方と左右を包む森。
「クラト！イオリア！姫をお護りしろ！」「護紅隊！防御陣形！」

その声が合図のように前方から装甲騎馬隊が姿を現した。
装甲騎馬隊とは馬にも金属プレートや鎖帷子の鎧を装備した騎馬隊だ。
重量は増えるが、その防御力は高く、騎馬による防衛陣で使用される。
赤騎隊の馬たちは手綱を引かれ急停止、護紅隊が追い越して防御の陣形を取る。

追撃に不向きな装甲騎馬隊が正面という事は左右に兵を伏せているはずだ。
ラヴィスは左右を確認する。
左右どころか、後方にも敵が回っている。万事休す。

ほぼ全滅だな。
ラヴィスは覚悟した。

しかし何とか姫だけは救わねばならない。
「姫、防御戦ゆえ、僭越ながらこのラヴィスが指揮をとります」
「クラト、ルシルヴァ、後方突破の先頭に立って敵を蹴散らせ！赤騎隊はその後から続き、護紅隊は殿（しんがり）だ！」
クラトとルシルヴァは馬を返す。
その横をティエラ姫が走りぬけ、赤騎隊が続く。

「あ、待てっ！俺たちが先だ！」
ティエラを先頭に槍の穂先のような陣形で５０騎が突っ込む。
クラトとルシルヴァは初めて赤騎隊の力を目の当りにした。
「これがバルカの赤い槍か・・・」
馬上のティエラは馬の背から生えてきたように馬と一体化し、身体を揺らし捻っては双刀を振るう。敵騎兵は首から血飛沫をあげ、次々と落馬していく。
槍を振るうイオリアも次々と敵を突き落とした。
しかし敵は多い。左右から包まれそうになる。
何としても突破せねば。
突破できれば、姫だけは何とか逃げ切れるだろう。
クラトはティエラの傍まで行くと馬を降りた。
乗馬が得意ではないクラトは馬上では戦えないのだ。
しかし、逃走する手段が無ければ捨石になるしかない。
クラトはそんな事を考えもしなかったが、ルシルヴァはそれを承知で馬を降りた。
クラトとルシルヴァは乱戦に飛び込み、歩兵を蹴散らし、騎兵の足といわず馬の脇腹といわず斬りまくった。
しかし、多勢に無勢。赤騎隊は徐々に打ち倒されていく。
ティエラもイオリアも単騎ではおのずと限度がある。

「マジでヤベェ！」
パニックになりそうなのを何とか抑えて剣を振るう。
と、敵の後方から動揺が走った。
側面の敵に矢が降り注ぐ。
馬蹄の音が響く。

（ばきぃッ！）
骨を打ち砕くような音、金属のぶつかる音、馬が地面を踏み鳴らす音。

敵の中から黒い騎馬が数騎飛び出してきた。レガーノ元帥だ。
レガーノ元帥は黒をパーソナルカラーとする第一軍団の軍団長。
初老といって良い年齢ながら、その戦闘力は調練場で見せたように非常に高い。
「姫、ご無事で！」
「済まぬなレガーノ、どうなっている？」
「は、第１・３軍を併せ１２００と突撃大隊長弓中隊５０。後から２０００が到着予定」
「そうか、では正面は大丈夫だな。後方の装甲騎馬でも叩くか？」
「御意！」「久し振りですな、姫と共に戦うのは」
馬を失ったクラトは大声をあげる。
「ティエラ！乗せてくれ！」
「急げ！」
傍につけた馬にクラトがしがみつく。
「行くぞ！」
「いでででえぇぇ！」
ティエラの鞍は一人用で飾りもあるので痛い。
横を見るとレガーノと目が合った。
（闘ったら負けるな）俺は直感した。

その後の戦いは一方的にバルカの勝ち戦となった。

戦いが終わるとティエラは急に無口になった。
軍は撤収を開始している。
俺達も後を追うように城を目指す。
突撃大隊としても機動力は重要だ。何とか騎馬隊を組めないか。
ルシルヴァが言うには、馬を揃えるのが難しいのだという。
馬は平時から世話が必要だし、騎馬ともなれば訓練も装備も必要になる。

大変な労力と金が必要になるのだ。
そうか、そりゃそうだ。なかなか難しいもんだな。
伝令の為に何騎かは準備したいなどと考えつつ、戦場の後始末に行く部隊とすれ違う。
とにかく今日の戦いは終わった。
俺はそう考えていた。
しかし、城に帰った俺を待っていたのは戦に付き物の試練だった。
戦闘が終わっても、俺の戦いは終わってはいなかったのだ。

5－3　羽音

「帰ったぜ」
「ご無事で何よりです」
マッシュが迎える。
中隊長達も顔を揃えている。
「追撃で伏兵を食らったが、レガーノとホーカーの後詰のお陰で勝ち戦だ。姫も無事だったしな」
「どうした、そんな暗い顔して。連れて行けなかったのはしょうがないだろ」

「隊長、こちらへ。うちの大隊の戦死者です」
「はぁ？戦死者って・・・追撃戦には参加してないだろ？」
「いえ、調練場でやられたヤツ等です。突撃大隊で最初の戦死者となります」
ラナシドの後についていくと、多くの遺体が並べられていた。

他の部隊も遺体を前に師団長が兵士に語っている。
威厳を保ち、感情を押し殺して、語り掛けるように、兵を戦いに向かわせる。
敵を憎むために。彼等の死を無駄にするな、彼等の死を忘れるなと。

彼等の死は神聖なものになる。
彼等の途切れた日常も、死の悲しみも怒りもなく、ただ聖なる遺骸となって、かつての同胞の眼前に晒される。
将が語れば死んだ兵は何も語れない。
兵は死んだ後も将の命令に従わなければならないのか。

クラトの後からは突撃大隊の兵が付き従っていく。

「第１中隊２名、第２中隊１５名、第３中隊１名、合計１８名です」
ラナシドの声もぼんやりと響くように聞こえるだけだ。
休憩中に旧師団のところへ行って巻き込まれたようだ。
一気に半数近くを失ったラバックの落ち込みようは激しかった。

クラトは戦死者に近づいた。
その多くは甲冑をつけていなかったので、激しく損傷していた。
腕が切断されていて胴の上に置かれた死体もあれば、治療を受けた後に死んだのか包帯を巻かれた死体もある。
午前中の訓練では汗を流し、昼食で笑っていた顔が、血と砂埃に汚れ、並べられている。
突然、クラトの喉から異様な音が響く。
「ちくしょう！・・・げえぇッ、く、くそったれが！」
「うげぇッ、絶対に、ぐはぁえぇ、許さねぇ！」
クラトは怒り、泣き叫び、嘔吐していた。
膝をついて砂を掴む。
「ちくしょう！ちくしょう！げぇはぁッ、ちくしょう！」
クラトはなおも叫びながら立ち上がると、１５リグノ剣を抜く。
近くにいた中隊長達は息をのむ。
剣は先ほどの激戦で刃が欠け、血に汚れていた。

クラトは傍にあった岩に剣を打ち込んだ。
鋭い音が響く。
続いてもう一度、更にもう一度、ついには１８回、全力で打ち込んだ。
岩や刀身の破片が跳ね、火花が飛び散る。

「何だ、あの取り乱しようは」
「たかが２０名ほどの戦死に何たる事か」
「あれでは兵が付いては来ぬわ」

軍の上層部からはそんな声も聞かれた。

丁度その時、ティエラ姫からの使者が訪れた。
“今日の奮戦に感謝する”
使者は目録を渡そうとするが、クラトの感情は収まってはいなかった。
「俺に触るんじゃねぇよ！ぶった斬るぞ！」

（どがッ！）
ルシルヴァが思い切り殴った。
ポカンとするクラトに背後からヴィクトールが首筋へ一撃。
「うぉッ、い、痛ェ、てめぇら・・・」
「なんて頑丈なんだい」
ルシルヴァが顎をしゃくる。
ヴィクトールがもう一撃。
クラトは気絶した。

大隊の戦死者は部隊の祈りを済ませ、軍事府の検査を経て家族に引き渡された。

クラトが目を覚ました時には日は傾きかけていた。
もう太陽の光は弱くなっているのになぜか目に沁みる。
首が痛い。さすりながら身体を起こすと、先頭にルシルヴァ、その後ろに中隊長、さらには兵士が整列している。
「どうしたんだよ、お前ら」
（ザッ、ザッ、ザッ）
全員が片膝を着く。
「我等、大隊長に、命を預け、命令に背かず、敵を恐れず、戦います」
全員が頭（こうべ）を垂れる。

意味がわからねぇ。
なんと言ったら良いのだろう。
俺は立ち上がって、昂ぶったままの気持ちを思うままに伝えた。
「見ての通りだ。俺は人間も出来てないし、武人としての肝も据わってない。俺に出来る事は真っ先に突っ込んで行く事ぐらいだ」
「だから、むしろ俺の命をくれてやる」
「生き死になんて気にする必要は無いが、死ぬ時は自分で決めな」
「それでも預けるって言うなら、俺じゃなくて天に預けるんだな。ただ懸命にさえやっていれば天が決めてくれるだろう。死ぬべき時を。そしてその時は迷わずに死ねばいいんだ、じゃぁなって」

突撃大隊のヤツ等がどう聞いたのかは知らない。
ただ、俺はこのまま居るのに耐えられなくて「以上だ」と一声残したまま、宿舎へ戻った。
宿舎の中ではすれ違う皆が血と埃に汚れた俺を見てぎょっとする。
俺は自分の部屋に戻り、水を飲むとそのままベットに倒れこんだ。
汚れも気にしない。
突然訪れた長い長い1日が終わろうとしている。
窓から赤い光が差し込んでいた。
小さな虫が飛ぶ音を聞きながら俺の意識は沈んでいった。

5－4　会議

緊急の会議が行われた。
議題は昨日発生した敵の侵入についてだ。

参加者はティエラ姫、フィアレス、バイカルノ、賢人会、各府大臣、師団長以上の将校、親衛隊総隊長。
そして、追撃戦に加わっていたクラトとラヴィスも出席を求められていた。
まず軍事府から調査結果が報告された。

第3エリアへの侵入者は9名、実動部隊は5名で、残りは後詰2名と脱出経路の確保に2名。
このうち少なくとも実動部隊5名を含む7名はエナルダと見られる。
逃走する4名を赤騎隊と護紅隊が追い、伏兵に遭って窮地に陥ったが、レガーノ元帥が率いる1個軍団相当の兵力によって、敵兵力は壊滅。
敵はバルカとアティーレの境界線からパレントの方角へ逃走したが、その先は確認ができなかった。
また、戦場に残された武具はアティーレ、パレントのものではなかったが、捕らえた捕虜はアティーレの者だと供述している。
捕虜の供述を含め、詳細は調査中である。

「なぜ敵の侵入を許したのか？」
「侵入の目的は？」
「ギルモアや他の郷への対応は？」
矢継ぎ早に質問が飛ぶ。
詳細は調査中。余りにも不明な点や不自然な点が多すぎる。

ここで会議の空気は停滞した。

突然、主直府ピサノ大臣が発言する。

「姫、今後はこの度のような行いはお止め下さい」

「もう少しレガーノ軍団長の到着が遅れたら、御身すら危うかったのでございますぞ。軍事に関してはフィアレス軍師に、軍事以外はそれぞれの大臣に伺いを立てるのが最善かと」

レガーノ元帥を格下の“軍団長”と呼ぶ事でこの会議での優位を保とうとしているのか、それとも単なるあてつけなのか。

レガーノは「ふっ」と息を漏らしただけだった。

「やはり姫は姫らしく、戦場に出るなどは控えていただかねば」

確かに普通はそうだろう。

停滞した会議はピサノが吹き込んだ空気に染まる。

レガーノ元帥を始めとする武人はピサノに対する反感も手伝って無視しているが、大臣や賢人会の各所からピサノの指摘に同調するしぐさが見られた。

ティエラは、会議の場で改めて指摘されるような事では無いし、議題とも違う内容に苛立ちを感じながら対応に窮していた。

ここでクラトが手を挙げる。

「ちょっとイイですか？」

「俺、思うんだけど、ティエラは、いやティエラ姫は好きにやっていいと思う。その為に俺達は居るんだから」

腕を組んでいたレガーノが閉じていた目を開いた。

ピサノは口許に薄い笑いを浮かべながら、ため息を吐くように応じた。

「何を言い出すかと思えば。そのような事を言って、万が一の時に

は責任は取れるのか？」
「じゃ、ティエラ姫に何をしろっていうんです？花でも摘んでろってか？宝石でも眺めてろってか？」
「それにティエラは領主に準じた姫なんじゃないのか？伺いを立てろってどういう事だ？」
ピサノも大臣達もクラトに顔を向けた。
クラトの感情が次第に昂ぶってくる。
「責任って言うが、責任を取れる奴がいるのか？ティエラ以外に」
「お前等が何もしないからこうなってんだろうが！だったら文句言うんじゃねぇよ！」
「だいたい姫らしくって何だ？ティエラはティエラらしくでイイじゃないか！」

「こいつ、言葉遣いもわきまえぬうえに、こんな暴言を」
「うるせぇよ、ハゲ」
「は、ハゲだと」「無礼な！貴様、姫の直属だからといっていい気になるなよ！」
「いい気になるも何も、ハゲはハゲだろ」
他の大臣や賢人会の出席者は青くなり、旧バイカルノ傭兵団は懸命に笑いを堪えている。
レガーノは組んだ腕を机について俯くと肩を震わせた。
「クラト大隊長！大臣の責任を問うなら、お前の無礼も問わねばならんぞ、無礼を詫びよ」
「何だよ、ハゲがダメなら、焼け跡でいいだろ」
「や、焼け跡？」
「火事が消えた後に柱が何本かだけ残ってるだろ。うっすら煙が出てたりして、プスプスってイメージだよ」
「キサマーー！！」

突然、フィアレスが笑い出した。

フィアレスが笑い声をあげたのは実に6年ぶりだった。
続いてティエラ、軍団長が笑い出し、会議場は笑いに包まれた。
かつてこんな事はあっただろうか。
軍事会議じゃないのか？
昨日、敵の襲撃を受けたばかりじゃないのか？
誰もが思った。笑っている場合じゃない。

しかし、暴言と言えばティエラに対して伺いを立てろとは正に暴言だろう。
未成年の姫ならまだしも、ヴェルハント亡き今、ティエラの位は領主に準じていると言える。
それを現状維持に終始してきたのは大臣達の失策だ。
ピサノを含め、大臣達はそれに気付いている。
むしろクラトの暴言に救われたとも言えるのだ。

バルカはアティーレおよびギルモアへの侵攻作戦を立てていた。その妨害を目的として“黒い太陽事件”が発生したという懸念は未だに残っている。
今件は事件として本国ギルモアへ報告。
また、バルカと国境接するアティーレ、パレント、ルエンシャ、ルミノールに警告と情報提供の要請を行い、様子を見る事でひとまずの対処とした。
なお、この事件は日付から631事件と呼称される事となった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

会議が終わって、会議場は急に騒がしくなった。
クラトは難しい顔をして腕を組んだまま大臣達を見ていた。
ピサノの両脇には貴族府・経済府の大臣。3人はクラトを睨みながら何か話をしている。

突然、ティエラの声が響く。
「クラト大隊長、今日の振る舞いについて申し付けたい事がある。この後、私の執務室へ来るように」
決して大きな声ではなかったが、凛として厳しい声だった。
ピサノ達はにやつきながら席を立つ。

「分りましたぁ」
ま、言いたい事を言った後だから仕方ねぇな。

不意に肩を叩かれる。
振り向くとレガーノ元帥だ。続いて第2師団長のバルサム、第3軍団長のアヴァン、続いて師団長達。次々とクラトの肩を触れるように叩いていく。
よく分らないが、皆の顔には笑みがあった。
同じ笑みを湛えながら、ラヴィスは書類をまとめている。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バイカルノの元にはサバール隊から報告が入っていた。
クエーシトが他国との商取引を活発に行っている。取引先はアティーレ、パレント、グリファ国のベルサ郷。
大型の荷馬車を使用しての取引が頻繁に行われているが、荷物の中身は不明。必ず荷馬車のまま城壁内に運び込まれているという。

バイカルノは耳の奥に小さな痛みのようなものを感じた。

5－5　遠近

「クラトでーす。入りまーす」やや不貞腐れた声。
姫の執務室に入ると、いつもの背もたれが高い椅子にティエラが座っていた。
いつもは顎を手の甲に乗せて物憂げな態度だが、今日は違った。
「お、来たかクラト。良く来たな、こちらだ」
机を叩きながら手招きをする。

姫の他にはラヴィスと侍女長のファトマだけだ。
珍しくラヴィスも笑顔で迎える。
なんだよ気味が悪いな、おい。
「ファトマ、茶を。菓子もだ」
「はい、畏まりました」
ファトマの笑顔もいつもと違う。

「呼ばれたのは会議での発言ですよね。まぁ、言うだけ言ってスッキリしたから、罰を受けても構わないですよ」
「いやいや、そうではない。私は良く言ってくれたと思っておるのだ」
「え？」
ラヴィスが優しい笑顔で言葉を継ぐ。
「誰もが思っていたのだ。しかし言えなかった。それをお前は大隊長の立場で言ってのけた」
「え？」
ティエラはクラトにぐぃと顔を近づけて言った。
「そなたは私の気持ちを代弁してくれたのだ」
「え？あの・・・ハゲの事？」
途端に３人は笑い出した。

「キャー！」ファトマは思わずお茶をこぼした。
3人とも暫く笑い続けているので、クラトは半分だけ注がれたお茶を飲む。

笑いが収まると、ティエラはラヴィスとファトマに席を外させた。
2人が廊下に出ると、たまたまピサノ大臣が通りかかった。
「そなた達、どうした？」
「クラト大隊長がみえられ、我らは姫より席を外すように命ぜられました」
「そうか、かなり厳しくやってくれそうだな。あのお方はまさに炎のごとき性だからな」
「大隊長も少しは堪えるだろう。では失礼する」

（ふんっ）
ラヴィスは聞こえるか聞こえないか位に鼻を鳴らし、ファトマは心の中で鼻を鳴らした。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「クラト、そなたに良く言ってくれたというのはな、ラヴィスやファトマが思っている事と私が思っている事は違うのだ」
「え、どういう事です？」
「ラヴィスやファトマは大臣達の無策というか無責任ぶりに強く憤っておったし、その点をそなたが指摘した事に喝采しておるのだろう」
「しかし私はな・・・」「私が私らしければ良いと言ってくれた事が嬉しいのだ」

「ティエラは無理をし過ぎなんだよ。苦しみも痛みも、悲しみも後悔も全部溜め込んでる」

ティエラの笑顔が消える。
「だから耐える事で精一杯になるんだ」
ティエラは小さな溜息と共に「なぜだ?」と漏らす。
「なぜ、そなたは私の事をこうも良く分るのだ」
「俺も知らない」

ティエラは何かを求めているようだったが、それが何かは俺には分らなかった。
ティエラは息が苦しいような仕草で溜息をつく。
「私はな、この城で孤独なのだ。本当に心を許せるのはラヴィスとファトマくらいだ。良く考えると、子供の頃から孤独だったのかも知れない」
「人間ってのは難しいよ。頭の中までは覗けないし、心なんて形すら無い」
「だから俺は余り気にしないようにしてるんだ。思った事を言って、やりたい事をやって・・・まぁ、本当にそれができたらいいんだけどな。俺もさすがに子供じゃないから、気を遣ったりするワケ」

ティエラは吹きだして机に突っ伏した。
「そなた、それでも気を遣っておるのか、ハゲやら、ははは、や、焼け跡!はは、あのような事を言い放って、ははは、はぁ、はぁ、ふぅ・・・ははは」

「ティエラは良く笑うよな。まぁ、いい事だ。笑うと長生きするらしいし」
「ふぅ、あぁ可笑しい。私はそんなに良く笑うか?」
「あぁ、いつも笑ってるだろ。茶を残さなかったといえば笑い、ラヴィスに殴られたといえば笑い、入院したといえば笑い、俺から言わせれば笑い姫だよ」
「パレントやルエンシャでは鬼姫とか呼ばれているらしいがな」

「へぇ、鬼姫ねぇ、それはそれで一理あるかもな」
「なんじゃと！」
「ほら、鬼姫」
また笑う。ティエラは本当に良く笑う。

「クラトが言っておった私らしいという事だが、言葉遣いも結構気にしておるのだ、私は」
「そうだろうね。あれだけの人間をまとめるんだから」
「それで、その、このようにそなたと話をする時には気にしなくても良いだろうか？」
「いいんじゃないの？大体、俺自体がこんな感じだし」
「そうか、ありがとう。らしくできれば良いな、私も」
「それがダメだっての。“らしく”を意識したら既に“らしく無い”って。まぁ、そう考えるところがティエラらしいのかもな」「・・・あれ、俺も分らなくなってきた」
「ふふ、何やら難しいものだな」
「いいんだって、思ったようにやれば」
「思ったように・・・か」

なぜだろう、ティエラはすぐ傍にいるクラトが遠くにいるように感じた。

5－6　戦力比

６３１事件から2ヶ月、秋も本格的になり、収穫は最盛期を迎えようとしている。
バルカでは年に一度、大きな祭りがある。収穫が済んでから１２日以内に行う事になっており、それを決めるのは領主だ。
ここ数年は助言を受けてティエラが宣言している。
祭りの時ばかりは大人も子供も、大臣も市民もない。
豊穣の大地に感謝し、戦いの神に祈る。

この世界では神も世界観そのままに天と地、気・土・水・火、６神が中心だ。
天と地を頂点に４つの元素という説とは違い、天を頂点とした天－気－水の神の系統は、更に雷・氷・風などの神がいる。
また、地を頂点とした地－土－火の系統には石・金属・樹木などの神が続く。
バルカに住む者は家系ごとに祀る神が決まっているが、天と地は全員が祀るので、それ以外が守り神となるのだ。

バルカ家の守り神は≪火≫である。
バルカ家の家系には火の属性が発現する頻度が高いらしい。
ヴェルハントはエナルダではなかったが、超人的な武力を誇り、ティエラがエナルダ覚醒した時も感心を示さなかった。
それは１０歳のティエラにとって大きな不安となった。
自分が何か違うものになったらしい。父はそれを喜びはしなかった。
しかし、悪いとも言わなかった。ティエラは認めて欲しかった。エナルダの力を。
なぜなら自分はエナルダなのだから。
ティエラは火の神に祈りを捧げる時、この時の不安と焦りを必ず思

い出すのだった。
この5年間は家長として祈りを捧げる事になった。それも今度で6回目だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

人々は、祭りに準備に追われながらも楽しみにしていた。
そんな慌しくも華やいだ雰囲気のバルカ郷は、突然北方からの侵略を受ける。
穀物の収穫前だ。
過去にこの時期に戦が始まることはなかった。
誰もが感じた。大きな戦乱になる。

侵入地点からアティーレ軍と思われた。
突撃大隊は軍団編成まで前線での警戒を命じられる。

「やっと俺が力を発揮する時が来たぜ！」
マッシュはクラトの伝令として戦場に出る事になったのだ。
このところのマッシュの成長は著しい。
ジュノに見てもらったところでは、将来かなり期待できるとの事だ。
それだけでマッシュは有頂天だ。
「やっぱり占い師の言うとおりだ。俺はクラト隊長の下で勝ち戦のきっかけを掴むんだ。隊長、俺も戦いに参加したいですよ、あれから強くなったんですから」
「まだそんな事を言ってんのかよ、伝令は大事なんだぞ。しっかり頼むぜ」
「はい、でも突撃大隊の伝令はいつも後方への伝令じゃないですか、前線で戦いたいんですよ。頼みますから隊長の中隊に入れて下さいよ」
「ダメだ。お前はお前の仕事をしろ。それが大隊の為だ。お前は足

も速いし、乗馬も得意だ。お前が適任なんだ」
「・・・はい、分りました。でも、機会があったらお願いしますよ」
「分った分った、その時はすぐに連絡する」

しかし、この時アティーレ軍は突撃大隊に接近していたのだった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「敵襲！！」
夜明け直前の野営地に大量の矢が降り注ぐ。
ルシルヴァの声が飛ぶ。
「慌てるんじゃないよ！盾で防ぎながら中隊ごとに展開するんだ！」
最近、めっきり隊長らしくなってきたホーカーも続ける。
「夜明け前のメクラ撃ちでしかない！敵の目的はこちらの混乱だ、慌てるな！」

言う間に空が白み始めた。
敵兵が喊声を上げつつ迫る。

「マッシュ！後続部隊は城を出ているはずだ、小隊を連れて報告に行け！」「ラナシド！お前の1個小隊を伝令に回せ！」
「はいっ！」
「残りは突撃だ。まずは敵の出鼻を叩くぞ！」
突撃大隊は第1～第4中隊まであるが、クラトとルシルヴァの直属部隊も中隊規模で新設され、実質は6個中隊となった。
長弓隊は74名を2隊に分け、ホーカーが両隊長を兼務する。

「こっちはメクラ撃ちじゃないぜぇ！」
ホーカーの長弓隊は突撃大隊の斜め後方から長弓の射撃を開始した。
狙いは機動力がある騎馬隊。次々と射落とされていく。

瞬く間に敵の騎馬大隊は半減。残った騎馬もヴィクトールとラバックが完全にブロックしている。
ホーカーは目標を歩兵に移す。
敵歩兵が盾を持っていると見るや、１隊を短弓に替え、騎馬隊の壊滅を図る。残る１隊はホーカーが選抜して強弓隊と名付けた３０名。射撃に時間がかかるものの、一般兵士が使う盾なら撃ち抜ける弓と矢を持たせている。
（ブォンッ）
強弓特有の音が響く。盾を撃ち抜かれて敵は混乱に陥った。

「よし、突撃しろ！」
ラナシド隊を長弓隊の防御、ルシルヴァ隊を後詰に残し、残り４中隊が一斉に突撃を図る。
スピードを生かすため、少々の敵は相手にしない。ルシルヴァ隊が討ち取るだろう。
「スパイク！敵の本陣は分るか！」
「見えません！」
「よし、頃合を見て引き返す！」

この時、敵２個軍団５０００が近距離まで迫っていた。
突撃大隊が撃破したのは先行部隊である１個師団の約１０００だった。
クラトの判断か、本隊が見えない偶然か、どちらにせよ突撃大隊は命拾いした。
その分、後から進出してきたバルカ第１軍団２０００がまともにぶつかった。

加えて後方を大きく迂回して北東から１個軍団３０００、東から２個軍団５０００が侵入。

バルカ第３軍２０００が東の敵に向かう。
城を防衛する第２軍団は最低の１２００のみとし、第４軍も編成される。
これはジュノが率い、旧バイカルノ傭兵団が多く在籍している。
バルカ第４軍団の進出先について、バイカルノは東から侵入した敵５０００の迎撃に向かったバルカ第３軍の援軍を主張したが、フィアレスは北東の敵３０００の迎撃を主張。
確かにバルカ第４軍団が東の敵に向かい、北東の敵３０００が北の５０００と合流した場合、その方面はバルカ２０００に対して敵８０００、抗し難い戦力差になる。

北東の敵３０００への対処を求められたバイカルノは突撃大隊と赤騎隊で対処するとした。

ばかな。

赤騎隊は６３１事件で１３０程度に減少しているし、突撃大隊も増員したとはいえ３００名程度。
戦力比３０００対５００。
先ほど懸念していたのは８０００対２０００、４倍の戦力比だ。
それを避けるために戦力比６倍以上の戦場を展開するのか？
しかもその戦場に姫を投入しようというのだ。
フィアレスは立案の理由を含め何も聞かなかった。
ただ「任せる」と言っただけだ。

ティエラ姫は出陣準備を整えているだろう。
後退した突撃大隊と合流して、敵３０００に当たってもらう。
第２軍団長バルサムは第５軍団を早急に編成して戦況に応じて投入する。
最悪の場合、城を守る第２軍団を解体して、師団単位で投入する。

最悪の場合だと？
姫が出陣する時点で最悪ではないのか？
バルサムはそう思った。
バイカルノは作戦本部にいる全員に言った。
「ティエラ姫は大丈夫だ、クラトとラヴィスがいる。どれだけ負けようと必ず帰ってくる」
「だから帰る城を守るのが重要だ」

しかし、このバイカルノという男。よくここまで思い切れるものだ。
これはこれで逸材に違いない。

5－7　作戦

クラトの陣に赤騎隊と護紅隊が到着した。
合流によって完全に一体化する訳ではないが、形式上の指揮権はティエラにあり、次席はイオリア、三席がラヴィス、そして次にクラトがくる。

簡易の幕舎で待っていたクラトが出迎える。
「ティエラをこんな前線に送るとは、バイカルノのヤツめ」
「クラト、私はやりたい事をやっているのだ。また共に戦おう。今日の敵はたかだか３０００、少々物足りないが、文句は言うまい」
「おぅ、豪気な事だな。いま作戦考えてんだ。どう戦ったらいいと思う？」
「クラトはどうしたいのだ？」
「最近、ちょっと試してる事があるんだ。何て言ったらいいかな。んー、小規模な包囲戦って感じかな」
「なんだそれは」
「包囲戦ってのは有効な戦法だけど、意外と大掛かりなんだな。それに俺のところは何千もいる訳じゃないからな」
「突撃大隊は敵を混乱させて終わりだろ？後詰というか本隊がないと完全な勝利にはらないってのが、この前の追撃戦でよく分ったよ」

「で、どうしようというのだ？」
「俺たちの戦力で包囲できる規模に敵を分断する」
思わずラヴィスが口を挟む。
「分断して包囲もするのか？だいぶ難しそうだが」
「だから分断する戦力として俺とルシルヴァに直属の中隊を作った。俺の想定は相手が師団くらいまでだから、今回の敵はちと多いね。

だから・・・」
「私が分断してやろう。私とイオリアで赤騎隊を約７０騎づつ2隊、数の上でも歩兵個2中隊よりはよかろう」
「ティエラ姫、それでも敵は３０００、突撃大隊３００で包囲できるのは６００が限度です。赤騎隊で分断するとしても、もう一策必要かと思われますが」
イオリアの意見に、クラトはにやりと笑う。
「ラナシド！ちょっと来てくれ！」
「は、はいっ！」
ラナシドはぎこちない動きで幕舎に入ると、すぐに片膝を着きティエラに拝した。
顔も上げられないラナシドは緊張の塊のようになっている。
「ティエラ、こいつは第４中隊の隊長でラナシドだ。この辺りの地理に詳しい。昨日、進言を受けたんだが、敵を2分する方法があるらしい」「ラナシド、説明してくれ」
「は、はいぃッ、じ、実は、この先にぃ、・・・いや、１０ファロ（約４ｋｍ）先に、が、が、崖が、たか、高さは１５リティ・・・はぁ、ふぅ」
「ラナシド、緊張しすぎだ」
「ラナシドとやらには済まぬが、クラトが説明してくれぬか」
「あぁ、す、済みません」
「敵の現在地から侵攻ルートはほぼ限定される。作戦の場所は他のルートよりも移動しやすい上、北にも南にも進める。敵が合流を考えるならこのルートしか考えづらい。まずはそれが前提だ」
「その侵入ルートの途中に崖があるんだが、崖の下と上に道が分かれていて、１５リティ（約１２ｍ）の崖が３０ファロ（約１２ｋｍ）続いている」

「少数の囮を使って敵の半数を崖に誘導して分断するって作戦だ。
崖の上と下なら簡単には合流できないだろうからな」
「分断できなかったら３０００を相手にするという事か」
ラヴィスは作戦の確実性に疑問を持っているようだ。
元より確実な策など無い。
成功の確率をより高める為の工夫や努力こそ重要だ。
結果ばかりを論じては何も出来はしない。
会議の結果、作戦は次のように決まった。

草原に赤騎隊、護紅隊、第３・４中隊が待機。
突撃大隊１５名と伝令用騎馬８騎の囮を崖下の奥、敵から見えるギリギリの所に配置。
突撃大隊の１・２中隊、クラト・ルシルヴァの直属部隊は崖の上。

敵の出現と同時に混乱を装う。
突撃大隊と護紅隊は崖の上に、囮は崖の下を後方へ走らせる。囮隊の馬には木の枝を引かせて砂塵を立たせる。その直後を徒歩の囮が追う。
敵は我々が混乱して逃走したと考えるだろう。
しかも赤騎隊と知ればティエラを追って騎馬隊が追うはずだ。
崖上に誘導した敵にはホーカーの長弓隊が射撃を開始、クラトとルシルヴァの部隊が伏兵として突撃。
混乱したところへ赤騎隊が切り返して分断。
敵の背後が崖になるように包囲できれば１０００くらいの敵は包囲できそうだ。
問題は崖下の囮を敵の歩兵が追ってくれるかどうかだが・・・タイミングを計り、逃げ切るだけの技量が必要だ。
スパイクかラナシドにやらせたいが、ラナシドは地理に詳しいので側に置きたいし、もし失敗したら敵の全軍を崖上で迎え撃たねばならない。

中隊長が1人抜けると1個中隊が本来の力を発揮できない。これは痛い。

マッシュが突然声を上げた。
「お願いします！」
「なんだよ突然」
「だって、囮を誰にやらせるか考えているんでしょう？これが成功すれば勝ち戦ですもんね。俺にやらせて下さい。絶対に上手くやりますから」

俺は迷った。
普通なら絶対にやらせない。
しかし、囮が失敗する可能性、崖上戦力の確保、マッシュの成長と熱望。
俺はつい、了承してしまった。
実力よりも都合を優先させた。
俺の作戦に対する手ぬるさ。
ティエラとラヴィスは同じ事を言った。
『マッシュという人物を知らぬので適任かどうかはわからないが、クラトが認めるなら良いだろう』

偵察隊の報告から敵の到着は明日の昼を過ぎるだろうと思われた。
俺の判断は失敗だったが、それはあまり意味が無い戦いとなった。
敵の偵察隊が我等を兵力も含めて捕捉していたのである。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

翌日の朝、最終の打ち合せの為崖の分岐点に集合する。
この後、持ち場に移動する予定だ。
そこに敵からの襲撃を受けた。

例によって矢が降り注ぐ。アティーレ軍は通常兵も弓を携行し、まずは全員で矢を放って敵の混乱を誘う。
「くそっ、何だってんだ！」
「クラト吠えるな！囮が失敗しただけの話だ！」
「あぁ済まない、その通りだ」
中心に第1中隊〔ヴィクトール〕と第2中隊〔ラバック〕、その後ろに第4中隊〔ラナシド〕、右翼に第3中隊〔スパイク〕とルシルヴァ隊、左翼にクラト隊と赤騎隊という布陣だ。
ホーカーの長弓隊は既に射撃を開始している。
相変わらず命中率が高い。それだけ速射は抑えているものの、着実な被害は“脅し”ではない。

この時だった。
「マッシュがやられた！」
マッシュは首を射られていた。血が止まらない。
「た、たいひょ・・・」
それきりマッシュは動かなくなった。
「クラト！落ち着け！」
暴走しそうなクラトをラヴィスが戒める。
「あぁ！？うるせぇよ！！」
クラトが暴走して突入、クラト直属部隊が後を追う。
ティエラはその一歩先まで先行し、敵陣の横から突入。
この間もホーカーの長弓隊が騎馬を殲滅にかかる。
アティーレ軍は敵が逃走すると考えていた。
しかし思いもよらず敵は持ち堪えるどころか、突入してくる。
追撃を予定していたアティーレ軍は後方部隊が攻撃を受ける前衛部隊を後方から圧迫する。
アティーレ軍は完全に浮き足立った。
最後部の部隊が森から平地に出た時、兵力は既に６００を消耗していた。

最後部の兵士は異様な戦場を目撃する。
目に入るのは味方の兵ばかりだ。それが分断され、包囲しては殲滅されていく。
まるで怪物の顎（あぎと）のようだ。
騎馬に蹴散らされ、矢に射立てられる。
被害が１０００を超えた時点で撤退命令が下ったが戦場には多くの兵士が取り残された。
最終的な被害は２０００を超えたという。
結果的に囮による分断作戦は行われなかったが、クラトの暴走をきっかけにして、今回の戦局を左右するはずだったアティーレ軍遊撃隊３０００は壊滅的な打撃を受けた。

第１軍団２０００は敵５０００に対し、大きな衝突を避け、時間稼ぎに終始した。
この辺りはレガーノ元帥の戦上手なところだ。
この間、ジュノの第４軍団は第３軍団と協力してアティーレ軍５００を撃破。
その直後、南東からパレント軍もバルカに侵入するが、既にアティーレ軍は撤退しており、連携する軍も無いまま、バルカ第３・４軍団の攻撃を受け、大きな被害を出しつつ撤退していった。

5－8　投入

バルカ郷がアティーレ・パレントの連合軍の侵攻を受けて始まった戦いは徐々にその全貌を明らかにしていく。
ギルモア国のアティーレ郷とパレント郷、グリファ国のベルサ郷がクエーシト側について侵攻を開始したのだ。
“北の戦乱”は3国、5郷を巻き込む大戦乱に発展した。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「おらぁ！！」
鋭い金属音と共にクラトの１５リグノ剣が弾かれる。
「くそぉッ！」

ここ数日、バルカ軍は敵が新しく投入した2体のエナルダに苦戦を強いられていた。
戦闘が始まると、重要な戦場に高い戦闘力を持ったエナルダが出現する。
全身を重装甲冑で覆い、顔さえ確認できない敵のエナルダ。
両手の大剣を振るい、移動速度はとてつもなく早い。
背負った2つの鞘がぶつかり合う音がするので、バルカ軍では“ノッカー”と呼んで恐れた。

「うおぉッ！！」クラトが吼える。

１５リグノ剣って事はエナルダか。
凄い剣圧ね、でも大した事ないわ。
リリューはクラトの剣圧に驚きながらも、改めて自分の力の大きさを実感した。

リリューはハイエナルと人間を融合させた新しいタイプのエナルダ。
後にリアエナルダと呼ばれる、クエーシトの実験で生み出された人造エナルダだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クエーシトはエナルスの生成に続いてハイエナル集成に成功した。
ジョシュ・ティラントのエナル研究は即ちエナルダの研究であった。
戦いに特化した研究は悲惨な結果を数多く生んだ。
人間は理由さえあれば倫理も常識も簡単に踏み越えてしまうのだ。
ジョシュ達は実験を経て実用段階に達した後も融合施術を受ける人間を“検体”と呼び続けた。

ハイエナルと人間の融合は、ハイエナルの集成と人間への融合を連続して行う必要があり、実験に参加したマスターエナルダの負担は非常に大きいものだった。
よって、まずは物質化し安定しているマスエナルの人間への装着が検討された。
まずは犬を実験体として行われ、数体の成功をみた。
マスエナルの係数に比例した能力のアップが見られたのだ。
すぐに3人の検体が準備され装着が完了、動物実験と同じようにマスエナルに応じた力を発揮した。
ついに人造エナルダが誕生する。
彼等は“マスエナルダ”と呼ばれた。

ジョシュ・ティラントは涙を流すほどの喜悦の中、慎重さにおいてはいささかも緩む事はなかった。
この結果は参加メンバー以外は秘匿とし、最終的な成功を急ぐ。

問題はすぐに発生した。
それは日常生活監視期間を過ぎ、軍事訓練に入った時の事だった。
鎧に身を包み、大剣を振るうマスエナルダ達。
地面に突き立てられた丸太を両断していく。
その時、一人のマスエナルダが丸太に衝突した。
まだ大きな力に慣れていないのだろう。
笑いながら近づいた教官はマスエナルダが倒れたまま死亡しているのを確認した。

直ちに遺体は研究室に運び込まれた。
マスエナルダはマスエナルを頭部へ外科的手術で装着している為、衝撃によって脳が損傷してしまう事が分った。
残る2人は事実を知るや、悲観絶望して研究チームに恨みを含むに至り、不穏な空気さえ感じさせた。
彼等は直ちに“駆除”され、実験は中止された。

マスエナルとの融合実験が頓挫した直後、ジョシュは落胆する間もなくハイエナルと人間の融合実験にとりかかる。
それはマスターエナルダに大きな負担をもたらす実験だった。
能力を最大限に発揮させるため薬物が投与され、大変な苦痛を伴う。
それでも協力する者は絶えなかった。

マスターエナルダとはいえ、全てが武人として力を発揮できる訳ではない。
そういういった者達にとって人造エナルダの実験は自分の力を活かせる場所であり、ジョシュは己のエナル係数を評価してくれる存在だった。

彼等はむしろ積極的に実験に協力したのだ。

融合施術にはマスターエナルダが3名必要だ。
まず1人が融合を行う検体を自らの力で包むように意識し、検体のエナル活性を高める。
残る2人はエナルの誘引とエナルス生成、ハイエナル集成を行う。
集成したハイエナルを1人が維持し、残る1人がハイエナルを検体の体内へ誘導する。
融合を行ったマスターエナルダの言葉を借りれば、“羽毛枕のような手応えを保ったままハイエナルを検体に押し込む”のだという。
この作業は半日もの時間を要し、マスターエナルダの体力・精神力を極限まで消耗させてしまうのだった。
また、検体が精神に異常をきたす場合も多く、“オルグ化”した場合に備え、“駆除用”エクスエナルダ（エクサーと呼ばれる最強クラスの戦闘用エナルダ）の立合いも必要だった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

リリューが施術室に入った時、最初に目に入ったのはクエーシトでも1・2を争うエクサーの完全武装した姿だった。
私の目標がそこにいる。
私はなるんだ、エナルダに。
優秀な武人に、そして・・・

リリューの思考はそこで止まった。
薬が効いてきたからだ。
リリューは衣服を脱がされ、細い手足に鎖が掛けられる。
手を天井から下がった鎖につながれ、吊るされた。

リリューは融合施術が済んだ直後に目を覚ました。
とても眠かった。

手足の自由が利かなかったが、鎖で固定されている事にすら気付かなかった。
傍らにはエクサーが剣を抜いて立っている。
「大丈夫か？」
訊ねられて苦労しながら頷く。
「はい、でもとても眠いの」
何人かが覗き込むように見つめている。
「オルグ化は無い。成功だ」
「お前は大きな力を手に入れたぞ」
歓声が上がる。
その歓声が次第に遠のき、また眠りに落ちていった。

5－9　存在

リリュー・コーツェンの融合施術は成功が確認された。
次にリリューが目を覚ました時に感じたのは喪失感だった。
なぜだろう。

うっすらとした記憶に歓声が残っている。
期待していたように大きな力を得た。
力の加減もマスエナルの使用も自由に出来る。
なのに心にぽっかりと穴が開いたような感覚が全身を包む。
そして、エナルダとなり優秀な武人となって、何をしようとしていたのかも思い出せなくなっていた。

1ヶ月に及ぶ訓練の後に決まった配属先は特別遊撃隊。
エナルダの中でも特に優秀な者が集うクエーシト最強の戦闘部隊。
嬉しかった。
しかし実情は隊員をアティーレとベルサに派遣し、数・質ともに大幅に低下している。
それでも嬉しさは変わらない。あこがれていた特別遊撃隊なのだから。

エナルダの配属は2種類に分かれる。
指揮官として部隊を率いるのか、兵士として直接戦闘力を発揮するのか。
リリューの場合は後者だった。早速ベルサへ派遣される。
部下を持たず、部隊を持たず、単独で敵陣へ斬り込み、高い戦闘力の敵を排除する事。

それが彼女の任務だった。

そして厳しく戒められていた。
「相手が強いと思ったら迷わず退け」
不満げなリリューに、特別遊撃隊隊長は「クエーシトの重要な存在を失う訳にはいかないのだ」と言った。
リリューは嬉しかった。

人は必要とされるから存在する。
人は本人の望みに係わらず存在する。
人は存在している以上、何かに必要とされている。
人はその何かを知りたいと望むから苦悩する。

リリューは戦いが全てだった。
いつもどこかの大隊に同行し、戦場では敵を斬りまくる。
それだけの毎日だった。
敵を斬れば皆が認めてくれた。必要としてくれた。
驚きの顔、感謝の顔、賞賛の顔・・・そして怯えと嫌悪の顔。
“オルグ”と陰口を云う者も居たが気にしなかった。

全身に重装甲の鎧を装着し、兜は前面に格子状のバイザーが付いたフルガード。
関節などの可動部分も鎖帷子でカバーし、もう鎧が動いているようにしか見えない。
鎧にはハイクラスのマスエナルも装着している。
得物は背に大剣を2本、腰にはシングルハンドの戦斧。
彼女が戦場に駆けつけると味方の兵は歓声を上げ、敵は絶望するのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

さーて、今日も頑張っていこーか。
昨日は敵の２個大隊をほとんど殲滅したからね。４０３点だっけ？
味方がマイナス６７点だから、えーと、３３６点のプラスだよ。
今日はもっと点数を伸ばそーよ。ねぇ？

「昨日の損害は６９人だ」
「それと、お前の戦闘力は認めるが、あまりふざけた事を言うな。
俺たちがやっているのはゲームじゃない」

へぇ？じゃ、何をしてるのさ？
それは戦死の数え方とかが重要なワケ？

リリューは兜を装着するや、重装鎧特有の金属音と共に戦場へ出向いていった。
「まったく！自分達は弱いくせに文句ばっかり言って、もう！」
既に戦闘は始まっている。
今日の敵はかなり重厚で、ベルファ軍でも第１軍団の上位師団のようだ。

構わず突っ込む。
リリューは敵をなぎ倒しつつ敵陣深く斬り込んでいった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ルーフェン郷とベルファ国の連合軍はクエーシトから集中投入された特別遊撃隊によって、後退を余儀なくされていた。
先のルーフェン殲滅戦ではベルサ郷と結んだグリファ国ではあるが、今となってみれば、あの戦自体が北の戦乱の布石ではなかったのだろうか。

ルーフェン郷の拠点はそのほとんどが陥落し、今や最前線はグリファ国の領内にある。

ベルファ戦線が目標の地点に達した為、リリューはクエーシト本国に召還される。
休養の後、今度は対バルカ戦線に投入されるとの指令を受けた。
兄のスラッツも一緒に投入されるという。

久し振りに会う兄に「休養は退屈で逆に疲れちゃった」と笑ったが、途端に融合後の喪失感が強烈にフィードバックされた。

これまで何度も押し殺してきた疑問。
幸せなのだろうか。私は。
戦い以外には何も無い。
戦闘以外の日常は、ぼんやりと不確かな時間の経過でしかない。
しかし、融合以前にも幸せを感じた事はなかった。
だからこの疑問にも耐えられる。

そんなリリューを兄は無関心な目で見つめていた。
その翌日から2人は揃ってバルカ戦線に投入されたのだった。

そして後にも先にも、この兄妹ほど優れたリアエナルダは誕生しなかった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

2体の人造エナルダは戦場を駆け巡り、剣を振るう。
その都度、確実に何人ものバルカ兵がその命を散らす。

このままでは全軍に影響する。

バイカルノはこの日、自ら戦場に出た。
何とかノッカーを潰さなければならない。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「ノッカーだ！」
その声は恐怖に染まっていた。
それはここから見ても分かる。バルカ兵が蹴散らされて宙に舞う。
3人のエナルダが同時に斬りかかるが、2撃は剣に、1撃は鎧に弾かれた。
ハイレベルのエナルダにハイクラスのマスエナル。
この組み合わせはエクサー（エクスエナルダ）にも匹敵する力を発揮する。
瞬時に2人のエナルダが斬られ、1人は撤退する。

「くそっ、痛いところばかり叩きやがるぜ、あのノッカーは！」

5－10　跳躍

戦いにおいてエナルダの存在は大きい。
通常の兵士など全く寄せ付けないからだ。
しかし使い方は意外と難しい。
敵軍にもエナルダが存在するからだ。

敵エナルダによる自軍の被害を覚悟して、敵の通常兵士を叩かせるか。
敵エナルダにぶつけるか。

エナルダにもレベルがある。
より強力な敵エナルダに自軍エナルダをぶつけて失った場合、貴重な戦力を失う。
よって、戦いの緒戦ではエナルダは温存される傾向にあった。
しかし、今回の敵エナルダは“バルカのエナルダより強力”である事を前提に緒戦から戦場に出ている。
事実その通りなのだ。
このままではバルカのエナルダは狩り尽されてしまう。

「仕方ない、出張ってもらうか」
伝令が飛ぶ、ティエラの許に。
既に出陣準備は出来ていたのか、ほどなくティエラ姫と赤騎隊が到着する。
「姫、ご出陣痛み入ります。目標は敵のエナルダ2体、ハイレベルです」
「分っておる。では行くとするか」
「姫、特別大隊も突入させて下さい」
「それほどの敵か？」

「は、相手は2体です」

ティエラは表情も変えず、ただ「分かった」とだけ言い残して戦場へ向かった。

ノッカーは今日も姿を現した。
やや青みがかった鎧のノッカーがバルカ兵を蹴散らしている。
ティエラは敵エナルダの能力に目を見張った。
あの重装甲冑を装着しているのに素早い。
しかも両手の大剣を振り回す攻撃力は半端ではない。
とんでもない敵だ。
ティエラはそれでも突っ込んだ。
しかし、まともにぶつかるつもりはない。
騎馬で通過しつつ打撃を狙う。

スラッツの目は鮮明な赤を捉えた。
赤備えの騎馬！これが“バルカの赤い旋風”か！
よしっ、俺はついてるぜ！
これを仕留めりゃ大手柄だ。リリューを上回る戦果になる。

バイザー越しに見たバルカの姫。
鎧も兜も篭手や脛当てまで真っ赤に染め上げた騎馬。
その中で面（おもて）は化粧をしたように白い。
そして白い中に真っ赤な唇が映える。
スラッツの感覚は視覚に集中された。
ある意味、他の感覚は奪われてしまったのだ。

スローモーションのように見えた。
目が離せなかった。
赤い騎馬以外の風景は色褪せ、現実感を失う。

ゆっくりと近づいてくる。赤い騎馬が。赤い唇が。
動けなかった。いや、それにすら気付いていない。
言葉を変えれば心を奪われたのだ。
その唇が微笑むのが見えた。
その瞬間にスローモーションが解け、風景が時間と色を取り戻す。
馬蹄の音が鳴り響き、赤い騎馬が迫った。
一瞬動くのが遅れる。

（ガガッッ）

首と肩に斬撃を受けた。
もとより強い打ち込みではない。鎧と兜の隙間、装甲の可動部を狙ったものだ。
しかし2撃も。

「俺とした事が！」
スラッツの両手はティエラの足と馬の前脚を薙ごうと動く。
しかし、それもティエラの防御と馬のスピードにかわされた。
この時、ティエラの馬が優れていなかったら、ティエラの得物が双刀でなかったら、負傷か落馬をしていただろう。

直後、ティエラは遠く走り去っている。
「ちっ、イラつかせる女だ！」
スラッツが舌を打って見送るや、馬は手綱を引かれた。
後脚で立ち上がり、前脚で空気を掻くようにして方向転換した。

「来るのか！？よし、イイ子だ、早く来い」
「分解してやる！！」

スラッツはリリューと双子の兄だ。

リリューの成功を見て志願した。
エナルダとしての能力はリリューが少し優っているとの評価だった。
それがどうしても気に入らない。
事あるごとにリリューをライバル視していた。

ティエラが迫る。赤い騎馬が。
「信じられないな。同じように突っ込んでくるとは」
そこへ徒歩の赤騎隊2人が左右から迫った。
いくらスラッツが二刀遣いとは言え、左右同時では防御までだ。
スピードで勝つしかない。
一歩下がれば斬れる！
そう思った瞬間、後頭部に大きな衝撃を受けた。

スラッツの眩む脳裏に疑問が走る。
後方に敵はいなかったはず・・・
正面！！

赤い騎馬が迫る。
馬上からティエラが跳んだ。
朦朧とする視界を赤い甲冑が舞う。
見上げたその瞬間、身体に電流が走る。
正面！！

視線を前に下げた瞬間、意識は寸断された。

イオリアの槍がスラッツの兜をバイザーごと突き抜く。
それでもスラッツの剣は左右の赤騎隊員を薙ぎ払っていた。
スラッツの身体は膝を着き、両手が落ちる。
イオリアが槍を引き抜くと、どうっと前に倒れた。

ホーカーが大声を上げる。

「ノッカーを討ち取ったぞ！！」

この声は両軍の上に響き、アティーレ軍にうねるような衝撃が走る。

一気に形勢はバルカに傾いた。

5－11　撃砕

スラッツが討たれ、アティーレ軍に衝撃が走る。

北方面の戦いはバルカ兵が盛り返す。
そしてもう一体のリアエナルダ、リリュー。

スラッツが！スラッツが！！
私の唯一の家族が！
許さない！！
このぉーー！！

クラトと一騎打ちの様相だったリリューは、クラトから距離を取ってバルカ兵の集団に突っ込み、一振りで数人づつ屠っていく。

ルシルヴァが斬り込むが、渾身の斬撃も簡単に弾かれる。
クラトもルシルヴァも単独ではこのエナルダに勝てないと判断した。
このまま持ち堪えれば、赤騎隊とラヴィス、ヴィクトールが駆けつけるだろう。
そうなれば押しつぶす事も可能だ。
しかし取り囲む兵の消耗が激しい。
「ルシルヴァ！同時に掛かるぜ！」
「了解！」

くっ、この2人はかなりできる。
1人でも厄介なのに！
撤退も考えた。しかし人数では2：1でも得物では2：2。
十分にやれるとリリューは判断した。

剣と剣がぶつかる音が響く。
クラトは刀を抜き、右手に剣、左手に刀を構える。
ルシルヴァも剣を捨て、両手に刀を持った。
打ち込まれる数は2倍になった。
リリューは辛うじて受けきっている。
更に速度を増す金属音。

同時に4本の刀剣がリリューに迫る。
リリューは身体を前にかがめて腰を落とし、剣を頭の上でクロスさせる。

（ガンッ、キンッ、カカンッ）

クラトとルシルヴァの打撃がリリューの鎧や剣に阻まれる。
リリューの頭上を防御している剣がスッと伸び、更に打ち込もうとするルシルヴァの脇腹にめり込んだ。
「ぐぅッ！」
「ルシルヴァ！下がれ！」

リリューは防御の体制のまま一息ついた。
舞っていた砂塵が風に流される

敵はあと1人。いける。
しかし、撤退すべきだった。
ここはベルファ戦線とは違う。
バルカ兵は強い。なぎ倒された兵たちも屈強な戦士だった。
それはリリューの体力を少しずつ消耗させていったのだ。
加えてクラトやルシルヴァとの戦闘はこれまでにない負担をリリューに強いる。

クラトが刀を投げ捨て、剣を両手で持つ。
打撃力に賭けた斬撃はリリューの腕を麻痺させていった。

激しい音と共に鎧の肩にヒビが入る。
防御で持ち上げた腕も弾かれ、兜に当たる。
視界が霞む。急激に体力の消耗を感じる。
ついに横殴りの剣をまともに受けた。
鎧に包まれた体は１０リティ（約８ｍ）も飛ばされ、兜は外れ、鎧も左肩から腹部にかけて砕け散った。

太陽が眩しかった。
戦場の風が頬を撫でる。
痛くも苦しくも無い。
ただ、何かが終わるのだと感じた。

クラトは敵を見て愕然とした。
これがノッカーと恐れられ、数百ものバルカ兵を屠った相手なのか。
全身を甲冑で包み、戦場を切り裂いたエナルダは少女だった。

まだあどけなさを残した顔は空を見ていた。
口の端からは一筋の血。
鎧が吹き飛んだ身体は細く白かった。
露わになった胸が上下に鼓動している。

「まだ子供じゃないか」
呻（うめ）くような声。

私はもう１５。子供じゃないわ。
でも、声にならない。

ふと視界に人の顔を捉えた。
敵！
起き上がろうとした。剣を握ろうとした。

「クラト！早く止めを刺せ！」
「くっ、くふぅ、くそぉッ」
クラトは動けなかった。

「この馬鹿が！」
バイカルノは起き上がろうとするリリューの肩を踏みつける。
リリューの顔が歪む。
「クラト、いい加減にしやがれ！」

バイカルノは胸の僅かな膨らみの下に剣先を当てると力を入れた。
リリューの身体は震えも痙攣もなく、微かに起こしていた首だけが地に落ちる。

「殺さないでどうしようと思ったんだ？こいつが生き延びたらまた何百ものバルカ兵が死ぬ。お前には厳罰を受けてもらうからな」
「どのみち助かるような傷じゃねぇ事は分ってるだろうが」

クラトは俯いて肩を震わせるだけだった。
「おいクラト、尻拭いはこれっきりにしてもらうぞ」
バイカルノは戦況の確認に向かう。

すれ違いざまにバイカルノは告げた。
「お前がグズなせいで、あの女エナルダは長く苦しんだぜ」
クラトは振り返ったが、バイカルノは振り向きもしなかった。

6－1　小鳥

ティエラはここ数日気分が晴れなかった。

先日の戦闘でノッカーと呼ばれたエナルダを2体倒した。
体つきから2人とも１０台半ばだと思われる。
あれほど高い戦闘力だ。戦場では有効な戦力だろう。
しかし、あんな子供を戦場に投入するとは。
軍事活動では心など何の斟酌(しんしゃく)もされない。

こんな戦いは今回だけなのだろうか。それとも今回が始まりなのだろうか。
恐らくは悪い方だろう。
バルカ内では、今回の戦いにクエーシトの影を感じ始めていた。

クラトはエナルダの少女を殺せなかった。
己の命が危うくても殺せなかったかもしれない。全く理解できない。
私なら真っ先に殺すだろう。

大きな衝撃だった。クラトの甘く柔弱なところにではない。
クラトと自分の違いが余りに大きい事がショックだった。
クラトは異人なのだ。違っていて当たり前だと思う。
しかし、私の事をあれほど理解し、認め、受け入れている・・・
それが無ければ違う事を気に病んだりしない。
私を理解する者が、私と大きく違う者なのだ。

なぜこんなにも気に懸かるのだろう。
同じく在りたいと思う。共有したいと思う。

クラトは何も欲しがらない。
他の者は、地位・金・領地を欲しがり、与えられれば喜び感謝してくれる。
しかし、クラトはそのようなものを欲しがらないし喜びもしない。
部屋に呼んでもお茶を飲んで帰るだけだ。

この者は私の許に居てくれるのだろうか。
この者を繋ぎ止める手がかりが何も無い。
何を与えれば良いのだろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ファトマが戻った。
「ティエラ様、これを」

ファトマはクラトが参加した会議の後、ティエラ姫ではなく、ティエラ様と呼ぶようになった。
理由を聞いたが、成人しているからだという。何を今更と思ったが、そのままにしておいた。

「これは？」
「クラト様が姫にと」
「クラトが？・・・なんだろう、これは」
「判りません。でも、ティエラ様が何かお悩みではないかと仰っておりました」
「・・・」
「ティエラ様はお疲れなのですよ。あの激戦の後ですもの」
「・・・」
「あの、姫？」
「あ、あぁ、クラトには礼を言っておいてくれ」「ファトマが言う

ように私は少し疲れているようだ。休むから外してくれ」
「はい」
ファトマがドアの向こうに消える。
ティエラは机に突っ伏してクラトから届いた紙細工を見ていた。
紙細工はティエラが知らない“鶴”の折り紙だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

何だろう、この気持ちは。
子供の頃、父からもらった小鳥に逃げられた事がある。
窓から逃げた小鳥はしばらく小枝に留まっていたが、やがて飛び去った。
紙細工はそんな事まで思い出させた。

クラトを見るのは、小枝に留まる小鳥を見るようだ。
どうしようもない気持ちはティエラを苛立たせ、戸惑わせるのだった。

6－2　純真

紙細工が届いた翌日、ティエラは城の通路でクラトと偶然会った。
ここは暗くて狭い地下通路。増築した城との連絡通路だ。
「よぉティエラ、今度訓練に付き合ってくれないか」
なぜだろう。ティエラは声を掛けられて嬉しかった。
その嬉しさに戸惑う。
戸惑いを隠そうとすると素直さも隠れてしまう。
「なぜ突撃大隊の訓練に赤騎隊が付き合わなければならんのだ」
「何だよ、イイじゃんかよ」
「我等には我等の訓練があるのだ。大体いつも突然ではないか」
「そりゃそうなんだが、無理か・・・」
引き下がりそうなクラトにティエラが慌てる。
「何の訓練をするのだ？」
「騎馬隊を相手にする訓練をしたいんだけどダメか？」
「まぁ、駄目な事もないが」
「助かるよ！３０騎くらい大丈夫かな？」
「あぁ、私も行こう」
「ありがとう。でもティエラが来るとラナシドがまたガチガチになるな」
「あの中隊長か」
「いつもは冷静な男なのにな」
「そう言えば昨日の紙細工、あれは何だ？」
「あぁ、俺の世界で鶴っていう鳥をイメージしたものだ」
「やはり鳥なのか・・・」

「どうした、まだ何か悩んでいるのか？」
「私が？」
「時々こちらが見てられないぐらい辛そうな時がある」
「・・・」
「立場が重いんだよな。背負ったままじゃアレもコレもはできないよ」
「ティエラは、ただ望めばいいんだ。皆が叶えるよ、ティエラの願いを」

ティエラは俯いた。
昨日の感情が再び甦った。
強い望みを持っている。クラトはそれを望めという。
しかし、それが何なのか自分でも分らない。
私の望みは何だ。
望む事が許される事なのか。
どうすれば叶うのか。
分らない。
でも、誰に願えばいいのかは分る。

私は何を望んでいるのか。

俯いたティエラの肩は微かに震えていた。
「じゃぁな、あまり無理はするなよ」
薄暗い狭い通路。クラトはティエラとすれ違おうとする。

ティエラの心に感情が溢れた。
それは抑えようもない激しいものだった。

「・・・るな」

クラトは小さな声を聞いた。

「・・・さわるな」

「えっ？」

「クラト・・・クラト・ナルミ！」

「何だよ、改めてフルネームで呼ぶなよ、照れるだろ」

「触るな、私に触るな！」

「な、なに言ってんだよ、触ってなんか・・・」

クラトはティエラが泣いている事に気付いた。

「私に触るな・・・心に・・・」

「これ以上・・・私の心に・・・触るな・・・」

ティエラは走り去った。

クラトは呆然と立ち尽くすだけだ。

通路の曲がり角の影にファトマがいた。

その背後でバイカルノが呆れたように言う。

「天然女と不器用男ならまだ何とかなるだろうが、天然男と不器用女じゃ上手くいく訳がねぇ」

ファトマは溜息をつき、バイカルノは天井を見上げた。

「追いかけもしねぇ。本当に救えないヤツだ」

「ファトマ、すまないがティエラ姫に上手く言っておいてくれ。クラトが悩んでいると」

「あと、クラトのお守りには疲れたと伝えてくれ」

6－3　権利

ヴェルハントとフィアレスの計画はアティーレを通じてギルモアに漏れていた。

ギルモアは容易には信じなかったが、アティーレの報告を裏付ける事象は多く、ギルモアの首脳に迷いが生じる。
その結果が北の戦乱での中立宣言だ。更に間接的なバルカ郷への協力も消極的になっていった。

戦乱勃発当初、バルカの首脳部にはギルモアの援軍を期待していた者も多かったが、中立宣言によってその期待は打ち砕かれた。そして、せめて物資協力は十分にと訴えた。
フィアレスとバイカルノはギルモアへ使者を送り出す大臣達を尻目に、商業国家タルキアでの物資調達を図る。相場はすでに上がりつつあったが、思い切った資金の投入により大量の物資を得る事ができた。
これが後にバルカを救う事になる。

ギルモアの協力が得られないバルカはグリファとの連携も模索したいところだが、聞くところによれば、ルーフェン軍は壊滅状態にあるというし、グリファ国の精鋭部隊も散々に叩かれたらしい。
ただ、クエーシトを盟主とする北部連合はバルカでの思わぬ戦力消耗によって、全ての戦線が膠着状態となっていた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ついこの前まで戦場だったところににも市場が立つ。
「まぁ何というか、逞しいもんだな」

クラトは市民のパワーに圧倒されつつも市場を見て回った。

「特価だ！誰か買う奴はいないか！」

値札をみれば３００００パスク、ロバ１頭ほどの値段がついている。

商品は２人の奴隷。大人と子供だ。

通常、奴隷は奴隷市場で売買されるものだ。

こんな市場で売られている奴隷は質が悪い。

身体が不自由で労働に耐えられなかったり、性質に問題があって取り扱いが難しいなど、何らかの問題を抱えている場合が多い。

大抵は買い手が付かず放り出される。

奴隷には奴隷税がかかる。

年間に３０万パスク、馬が３頭買える額だ。

商人は奴隷を仕入れてから７２日間は税金が掛からない。

だから期限が迫ると無理にでも売り捌こうとする。

この商人もそのクチだろう。

顔には短気で残忍な性質（たち）が見える。

苛立ちが募るのが分かった。

ついに値段は下がり始め、１万、５千、１千、ついには５００パスクとなった。

人だかりは多いものの誰も買おうとしない。

それはそうだ。

大人は足が不自由なようで何の役にも立たないだろう。

子供の方は痩せて身体も小さい。

父親と息子らしいが、２人とも顔すら上げない。

「ただ同然だ！誰か買えよ！」

商人の苛立ちは大きくなる。

こんな奴隷を仕入れてしまった自分にではなく、“こんな奴隷”に。

もう、買い手はつかないだろう。５００パスクといったら安い酒場の飲み代ほどなのだ。
このまま売れなければ税金がかかる。税金を回避する為には解放するしかない。

「まったく冗談じゃねぇ！もう誰も買わなくていい！！」
商人が何をしようとしているか気付いた者は商人の残忍性に気付いた者だ。
「こいつらが役立たずだからだ！お前らが買わないからだ！」
解放するくらいなら役立たずの奴隷と買いもしないのに集まった奴等を後悔させてやる。
商人は大ぶりのナイフを持ち出した。
一時の感情を２つの命で癒そうとしているのだ。

奴隷の生殺与奪権は持ち主にある。
奴隷はチラとナイフを見たが、また視線を下に落とす。
もう疲れ切ってしまったのか、奴隷の運命を受け入れてしまっているのか。
命を絶つナイフを見ても何の変化もなかった。
遠巻きにしている人々はどよめいた。
明らかに好奇の目を向ける者もいる。

ティエラは頭から大きなスカーフを被り、顎の下を左手で閉じている。
今日はお忍びで市場を覗きにきたのだ。
表情は見えないが、動じているようには見えない。

「待て待て！そんなバカな話があるか！」
クラトが人垣から出ようとすると、ラヴィスが引き止めた。
「待つのはお前だ。お前はあの奴隷達を殺す覚悟があるのか？」

「な、なんだそりゃ」

ラヴィスは強い視線を俺に向けた。

「奴隷を持つという事はそういう事なのだ」

6－4　奴隷

この世界には奴隷がいる。
奴隷は売買され、主人の所有物であり、主人はその生殺与奪権をも握っている。

奴隷は2種類に分けられる。
管理監視され搾取される者と、愛玩動物に似た存在と。
しかし、奴隷税の導入が状況を変えた。

奴隷税の導入と税率の引き上げ。
まず姿を消したのが、愛奴（あいぬ）と呼ばれる奴隷だ。
愛奴は体力に劣り、労働者や兵士としては期待できない。
主な仕事は舞や唄、または性などの享楽的な奉仕である。
愛奴は生活力に乏しく、生きていく為には主人の保護が必要だ。よって脱走は少ない。
それならば奴隷から解放し、使用人にしてしまえば良い。
生殺与奪権を初めとする権限は低下するが、屋敷の中ならどちらによせ同じようなものだ。

搾取される奴隷とは厳しい監視の下、または家族などを囚われ、重労働や危険な任務に就く者達だ。かつてのホーカーがこれにあたる。

「お前がいた世界の事は知らないが、奴隷を持つという事は“奴隷には何も任せない”という事なのだ。生きるも死ぬも持ち主が決めねばならない」

ここでティエラが口を開く。
「あの者はもう奴隷を売るまい。完全に頭のネジが飛んでおる。損

得抜きの感情に支配されて、買うと言っても依怙地になるだけだろう」

ラヴィスは、気持ちは分るというように下を向いて言った。

「諦めるんだ、それがこの世界だ」

「分かったよ」

クラトの納得した声を聞いて、これまで全く動じなかったティエラに動揺が走る。

「でもな、やっぱ無理だよ俺には。このまま見てるってのはよ」

ティエラの微かな笑みはスカーフに隠され見えなかった。

クラトが商人の前に出ると、商人は鋭い目を向け、すぐに警戒するような目つきになった。

ティエラの言うとおり、もう商人は奴隷を売るつもりが無いのだ。

商人は2人を始末して酒場で一杯やりたかった。

「お兄さん、悪いな。もう奴隷は売らないよ」

「奴隷はいらねぇよ。お前、こいつらを殺そうってんだろ？」

「俺が買いたいのは、その権利だ。こいつらを殺す権利」

「なんだって？」

クラトは剣を抜くと地面に突き立てた。

商人は１５リグノ剣を見てクラトがエナルダだと思ったようだ。

クラトは続いて刀を抜いて言う。

「この剣と刀、どれくらい斬れると思う？」

商人は少し呆けた顔をした。

「人間を頭から斬り下げた事がねぇんだよ。真っ二つに斬れるかな？」

商人は　ぬらり　とした笑いを見せた。

「俺のナイフでやるより、少しは楽しいかもな」
「よし、売ってやってもいいが、１人１万だ」
「おいおい、こっちは５００や１０００だったらやってみるかって話なのに、１人１万だと？試し斬りの為に２万も出せるか」

クラトが引き返す素振りを見せた時、声を上げたのはティエラだった。
「お前！無能な者は去ってもらうぞ！」
凛として美しい声に周囲の目も集まる。

「用心棒のくせにつまらぬ事に興味を持ちおって、それに斬るなら出し物として斬れば客も少しは喜ぶだろう。２万パスクで客が喜べば安いものだ。それに気付かぬのか。だからお前はいつまでも剣や刀の上を歩いておらねばならんのだ」
「主人、その者を主（あるじ）として奴隷を引き渡せ」

そう言うとティエラはクラトに金の入った袋を投げつけ、ぷいっとその場を離れた。

クラトは内心では感謝しながら悪態をつく。
「くそ、あの女主人め、いつかヒィヒィ言わせてやる」
商人は若い女主人に罵倒されたクラトを見て機嫌が直ったようだ。
「１５リグノ剣の斬撃を見れないのは残念だが、仕方ねぇな。しかしキツイ女主人だな。まだ若そうだが」
「あぁ、俺も奴隷みたいなもんだ」

「ま、死ぬ時は自分で決めるけどな」
奴隷の２人は初めて反応した。クラトを見つめている。

商人は金を受け取ると、もう興味を無くしたようで、空返事をした。

クラトに１０００パスクを握らせて、片目をつぶる。
クラトは胸がムカムカしながらも無理に笑って答えた。
「悪ぃな。これで一杯やれるぜ」
「ま、お互い様ってな」
商人はもう一度片目をつぶると、大物の雰囲気で帰っていった。

6－5　相場

「クソが、何がお互い様だっての」

クラトは馬車を呼んだが、奴隷を乗せるというと断られた。
散々探して荷馬車を借りたというか、買った。
引くのは馬ではなくロバ。この世界のロバは耳が垂れ下がっている。
荷車は古いがロバを買えばただでつけるという。
相場を知らないクラトは言い値の5万パスクで買った。

「ロバって結構高いな。5万だってさ。でも荷車もついてるからな」
2人はキョトンとしている。
荷馬車を探して走り回ったクラトは流れる汗を拭いながら言った。
「さて、行こうか」
「名前はなんていうんだ?俺はクラトだ。よろしくな」
2人は商人が去ってからもひと言もしゃべらなかったが、見た事もないものを見るような、驚きの表情をクラトに向けている。

ふいに父親が口を開く。
「私はラシェット、これは息子のアズレンです。では、誓いを」
「え、誓いって?」
「・・・誓いとは主人に仕えると約する事です」
「いいよ面倒だから。形ばかりの事に意味は無ぇし」「それより、足はどうしたんだ?かなり悪そうだが」
「は、これは3年前の戦いで受けた矢傷が原因で動かせなくなりました」
ラシェットは右足を軽くさする。少しの衝撃でもかなり痛むらしい。
「そうか、大変だったな。アズレンはいくつになるんだ?」
「17」

高い声が響く。
息子の口の利き方を気にしたのか、ラシェットの顔に影が差す。
「そうか、お前は親父（おやじ）の分まで頑張らなきゃだめだぜ。これからは出来る仕事をやってもらうからな」
2人はますます驚いた顔をしている。

150cmにも満たない身長と華奢な手足、浅黒い肌と銀色の髪。
俯くようにしているせいか、髪に隠れて視線が見えない。
栄養状態が良くないのだろうか。
17歳にはとても思えない体つきだ。
父親はがっしりとした身体と知性を感じさせる瞳をしていた。
なんでこの男が奴隷なんだ？
話し方も雰囲気もさっきの商人など比べようもないほど人間としてのランクが違う。

とりあえず城に戻ろう。
ラシェットに手を貸して荷車に乗せると、アズレンはひょいと荷台へ飛び乗った。
足をほとんど屈伸させていない。信じられない身の軽さだ。
俺の驚きの視線を感じたのかアズレンは振り向いたが、視線を外して俯いた。
ラシェットは御者の席に座ってロバを操る。

水汲み場に差し掛かったとき、クラトは昼食を摂っていない事を思い出した。
「腹が減っちまったよ。何か食う？」
「いえ、私たちは・・・」
言いながらもラシェットの腹が鳴る。
アズレンがクスリと笑う。たちまち3人の笑い声が満ちた。
「減ってるじゃんか。店に入るのは面倒だから、あそこでパンでも

買ってくるよ。ちょっと待っててくれ」
「いや、しかし」
「うるさいね、いちいち。面倒だから遠慮するなって。それとも何か他に食いたいものでもある？」
「いえいえいえ、とんでもない」
「じゃ、買って来るよ」

店に並んでいるパンを適当に３つ、ベーコンっぽい肉の塊と果物。
１５００パスク。
払おうとすると、袖を引かれる。
振り返るとアズレンが首を横に振った。
なんだろう・・・あ、高いのか。
主人に１２００にまけてくれというと、それで構わないという。
意外と簡単にまけてくれるな。
買ったものを受け取り、ホクホク顔で振り向くと、アズレンが俯いて首を振っている。

馬車に戻る途中、ひと言「まだまだ高いと」漏らした。
「えぇ～そうかぁ、あれでいくら位が妥当なんだ？」
「３００」
「え゛！？そんなに安いの？がっかりだよ。俺ってバカだなぁ」
戻ると、ラシェットは馬車から降りようとする。
「また乗るのが面倒だし、馬車の上で食おうぜ」
また驚いた顔をしている。
あ、そうか、ホーカーも同じような感じだったな。
「あのさ、面倒だから奴隷がどうしたっての止めてもらえないか？」
「しかし・・・」
「まぁ、そこんとこを頼むよ」

アズレンが口を開く。

「立場がおかしい。命令すればいい」
「そうか。でも、自分がやりたいようにやるなら頼むんだ」
「申し訳ありません。私どもにはご主人様の仰る意味が解りかねます」
「ご主人？クラトでいいよ」「あと、俺の我儘（わがまま）みたいなもんだから、意味は分らなくても気にすんな。もし解るならいずれ解るだろう。それより早く食おうぜ」

アズレンがまた口を開く。
「これを１２００で買った」
「え、１２００パスクで購入したのですか」
「あぁ、高いらしいね。失敗したよ」
「先ほどから拝見していて相場をご存じないようでしたので、アズレンを行かせたのですが・・・」
「最初は１５００で買おうとして、アズレンが合図したんで１２００にしたんだよね。しかし知らないって怖いな」
「ん？俺が相場を知らないと思ったって事は・・・もしかして・・・」
「はい、このロバは小さいですから2万でおつりがくるでしょう。荷車もだいぶ古くて、ほとんどタダ同然のものです」
「うはぁ、やっちまった。マジで。ティエラに怒られちまうよ」
「ティエラ様とは先ほどの女主人の？」

まぁ、本当は姫だけど、とりあえず軽く濁しておいた。
俺が異人である事や、大隊長をしている事を話した。
ラシェットとアズレンは西の果てという表現を使うほど遠い国から流れて来たらしい。
食事をしながら話してみると、やはりラシェットは優れていると感じた。
アズレンは俯いて黙々と食べていた。

「さて、行こうか。この道をまっすぐだ」
俺が荷台から降りるとラシェットは何かを言おうとしたが、一瞬置いて俯く。
「・・・はい。承知しました」
俺とアズレンは歩いて行く。

ラシェットとアズレンに何をやってもらおうかと考えながら俺は歩いた。

ほどなく、城が見えてきた。

6－6　訓辞

俺たちをルシルヴァとホーカーが出迎えた。

「ラヴィスがさっき来てさ、クラトが奴隷を連れて帰るから面倒を見るように言われたんだ。その2人かい？」

「あぁ、この2人は親子で父親がラシェット、息子がアズレンだ。ラシェットは矢傷が元で右足が利かないんだ。ホーカー、ちょっと見てやってくれないか」

ホーカーが近づくとラシェットは荷台から降りようとした。

「いいっスよ、そのままで。俺も奴隷だったんだ。まぁ脱走奴隷っスけど」

「今はクラト隊長にくっついて中隊長やってる。あちらは大隊のルシルヴァ副隊長だよ」

「ちょっと悪いね。触るよ」

ラシェットが小さく呻く。

「クラト隊長、これは鏃（やじり）が入ってますよ。鏃は砕けてるんで余り目立たないっスけど、骨の周りに破片が沢山入ってるんで痛いんですよ。城の医者ならある程度は治せるんじゃないっスかね」

「マジ？治るのか！？じゃ、早速見てもらおうぜ！」

「ルシルヴァ、一緒に行ってくれないか」

「分かった。クラトは？」

「俺はこいつをきれいにしておくよ」

ホーカーはラシェット肩をかして連れて行った。

「良かったな。治るらしいぜ」
声はしなかったが、銀色の髪が盛んに揺れている。
俺はその銀色の頭に手を乗せてもう一度言った。
「良かったな」

さて、ひと風呂浴びよう。
走り回って汗をかいたところに砂埃がついて真っ黒だ。
アズレンもだいぶ汚れている。
「風呂はいつから入っていない？」
「憶えてない。夜、川に入って洗う」
「そうか。じゃ、久し振りの風呂だな」
俺は軍事府の支給係から下着と日常服、兵士服を貰いに行った。
受領所は訓示などに使われる広場の奥だ。
そして広場の外れには兵士用の浴場がある。

アズレンと兵士用の広い浴室へ。
さすがにこの時間では誰もいなかった。
さっさと脱いでパンツ一丁。
アズレンは服も脱がないで立ち尽くしている。
「また遠慮してんのか、遠慮するなって言っただろ。同じテーブルで飯を食って、同じ風呂に入って、同じ宿舎で寝る。そうすれば仲間だ。仲間は一緒に戦うんだ。何のためにたたかうのかはアズレンが決めればいい」
アズレンはのろのろと服を脱ぎ始めた。
俺はパンツも脱いでタオルを首に掛ける。
アズレンは何かを避けるように後ろを向いた。

背中には傷があった。
細長い傷は褐色の肌に白い線を書きなぐったように何本もあった。
これは鞭で打たれた痕だ。

ま、こんなもの見せたくはないわな。
肩も細くて余計に痛々しく感じる。
どんな生活をしていたんだろう。
ラシェットは3年前から足の自由が利かなくなったというから、それからの苦労は倍増しただろう。
どれだけ働いたのだろうか、この細い身体で。

俺は大きな浴槽に手を入れてみた。だいぶぬるいが、暑い季節に身体を洗うには丁度良いだろう。
アズレンが入ってきたのだろう。背中に気配を感じた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

その頃、広場では丁度突撃大隊が集まっていた。
ティエラ姫の直属となったので、ティエラ姫から直々にお言葉を頂ける予定だ。
中隊長以下、兵士達は極度に緊張していた。姫と口を利く機会など無い。
戦闘時は兜で顔も見えないし、平時はいつも遠くに見るだけだ。
それが今日は自分達のためだけに訓辞を賜るという栄誉に浴するのだ。

美しく強い姫。真っ赤な甲冑の騎馬隊が敵陣を切り裂き、一直線に本陣に突入して敵将を討ち取る。
突撃後は悠々と引き上げ、振り返ると敵陣に向けて刀を突き出し、振り下ろす。
骨がある者はおらぬか！と言わんばかりに。
兵士は戦場で震えるような感動を味わう。
この猛姫将とも言うべきティエラ姫の下（もと）で戦う事に栄光を感じるのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ティエラ姫の準備は出来ているのに、隊長のクラトがいないという。
同行した赤騎隊副長イオリアと護紅隊隊長ラヴィスがルシルヴァに聞くと、息子のアズレンを連れてどこかへ行ったという。
ティエラ姫はもうお出ましになっている。致し方ない。
イオリアから突撃大隊の配置とその栄誉が説明され、ティエラ姫の訓辞が始まる。

「突撃大隊を我が配下に置く意味は、赤騎隊戦術の強化という点にある。この大隊には優れた者達が集まっていると聞く。バルカに弱兵は要らぬ。バルカ兵であれば即ち強兵と心得よ」「日頃の鍛錬に努めよ、戦いに勝利せよ。必ずや賞するであろう」

ここでティエラは軽く俯いて一呼吸置いた。

次に上げた顔は慈愛に満ちていた。
「そなた達が居るから私も居る。そなた達が戦ってくれるから私も戦える。バルカを誇りとせよ、私はそなた達を誇りとしよう。敵に臆するな、我は共にある」
兵士は皆“この姫のためなら”と心に刻んだ。
ラヴィスは思う。この姫だから命を懸けるのだ。
いつも聞いているラヴィスも気持ちが昂ぶるのを感じていた。

6－7　名前

桶にぬるい湯を汲んで身体に掛ける。
体を洗いながらも思考は巡る。
ラシェットとアズレンは何をすれば皆が喜ぶだろうか。
居場所をつくってやらねばならない。
人間にとって居場所とは住むところではない。
必要とされる場所だ。
手っ取り早く言えば役に立つ事。働く事だ。
何が出来るだろうか・・・

背後に気配を感じて振り返ると、すぐ後ろにはアズレンが立っていた。

右手を軽く握って口に添え、顔は視線を避けるように右下に向けている。
丁度見上げるような体勢になった。

「えっ、そんな・・・うあぁぁあぁ！！」
俺はとりあえず取る物も取らずパンツを掴んで飛び出した。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ティエラの訓示は兵士達の心に染みて、一色に染め上げていくようだ。
全員の気持ちが高揚していた。美しく聖なる空気が漂うようだった。
その聖なる空気が掻き乱された。
走り込んで来た男は、半裸というかパンツ一つしか身に着けていな

い。
ティエラ姫達とルシルヴァは思わず背を向ける。
「大変だよ！おい！」
背中を向けたままラヴィスがとがめる。
「どうしたというのだ、姫から訓示を頂いている時に！しかも、そのなりはなんだ！」
「それどころじゃないんだよ、アズレンを風呂に入れてやろうとしたら・・・その・・・女だった」
『なにー！！』
ラヴィスとルシルヴァの高い声。
ティエラがゆっくりと振り向いた。目が据わっている。
「すると何か？お主は誰もいない浴室で女子（おなご）の服を脱がせたという事か？」
「・・・ちょっと違うけど、大筋では合ってる」
「このバカモノがー！何と破廉恥な！」
（どかッ！）
拳がクラトの顎の下に入った。
（がッがッ）
倒れこむクラトを踏みつけるように蹴るティエラ。
「うがっ、やめろって！おい、ティエラやめろ！」
「うるさいわ！お主、女子（おなご）と気付いておったのだろう！」
「知らねぇって！ぐあぅ、やめてくれ～」
「このバカモノ、バカモノが！」
ティエラは息を荒くしていたが、はっと気付いて振り返ると、兵士達は石のように固まっている。

「そ、そなた達、今日はこれまで、任務に励めよ。では私は戻る」

戻りかけて振り返り、ぎろりと睨む。

「この件、他言は無用じゃ・・・分かったな！」

そそくさと戻っていく3人。

倒れている半ケツのクラト。

ウチの隊長はいつも女に殴られてるな・・・

アズレンはイオリア預けになった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

騒動の2日後、アズレンの事でティエラから呼び出しがあった。

バイカルノが面白がって付いて来た。

バイカルノはラシェットの経歴を聞きつけて、やらせたい仕事があるのだという。

ラシェットが言うには、俺の許可が必要だというので、バイカルノが俺の宿舎に来ていたのだ。

ラシェットは体術の使い手で軍略にも詳しいのだそうだ。

バイカルノの嗅覚も大したものだ。

ところでアズレンだが、小ぎれいにすると見違えるようだ。

褐色の肌に紅い唇が映える。銀髪も整えられた。これまで隠れていた目はやや青味がかった美しい色をしている。

ただ、イオリアがいうには名前を言わないのだという。

アズレンは明らかに男性名なので、無用のトラブルにならないよう、わざと名乗っていたのは間違いないだろう。しかし、本当の名前を言わないのはどういう事だろうか。

アズレンは両手を握り締めて下を向いている。
先日の一件があるので俺はちょっと恥ずかしかった。
裸がどうこうではなく、狼狽えてしまった事がだ。

「ラシェットは良くなるってよ。手術は何回か必要らしいけどな」
銀色の髪が揺れる。
「お前、女だったんだな。でも、何も変わらないぜ。仲間と一緒に働いて戦って生きていくんだぞ。男でも女でもお前はお前だし、何が変わる訳でもない」
銀色の髪が震える。

「でも、まぁ、女でアズレンってのは名乗るたびに理由を聞かれるから面倒だ。元々の名前はないのか？」
「アイシャ」
「へぇ、アイシャか。アイシャね。いい名前だな」
「俺の世界でも同じ名前があるよ。アイシャ、いい響きじゃないかアイシャって」

アイシャは俺の胸の下にしがみついて泣き始めた。
「どうしたってんだよ、アイシャ」
「初めてだ・・・この名前をこんなに呼んでくれたのは・・・この名前を褒めてくれたのは」

アイシャはただ泣き続け、バイカルノは呆れたように悪態をついた。
「またクラトの天然が女を泣かせたか、やってられねぇな」

7－1　昇進

ランケトス（獣毛の鳥という意味）と呼ばれる動物がいる。
この動物は猿に似た生物から進化したが、知能面ではなく空を飛ぶ事に進化した種だ。

直立すると３０ミティ（約５０ｃｍ）の体長に同じ長さの尾、背中には長さ５０ミティ（約８０ｃｍ）の翼を2枚持つ。
ただ、この翼は腕が変化したものではなかった。骨が入っておらず、羽根は生えていない。
筋肉が膜状になった翼は前縁部分が角質化して翼全体を支えている。

そして、もっとも特徴的なのは腕が自由に使えるという点だ。
羽ばたくのはぎこちないが、滑空に入ると音も無く近づき、親指が変形した鉤爪で小動物を襲う。
翼の表側は白く美しい毛で覆われ、膜状になっているので利用価値は高い。

あるとき、猟師が不思議な生物を発見した。ランケトスだと思って射った動物は、もっと大型の猿だった。
翼はあるものの飛べないようだし、翼の付け根は癒着したような痕があった。
しかし、貧しい猟師が欲しいのは今日の糧となる獲物だった。
その不思議な生物は翼も痛んでおり利用価値が無いので投げ捨てられ、誰の目にも触れなかった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「グラシス、どうだ調子は」

「はい、どんどん推力が増しています。まるで水中にいるようです」
「そうか、続けてくれ。これが成功すれば、君はマスターどころかエクサーをも超える存在になれるだろう」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

グラシス
彼は中級の上に分類されるエナルダだ。
彼は西の国エルトアから家族と共に渡ってきた。
移民の入国に厳しいクエーシトにおいてグラシスが受け入れられた理由は彼がエナルダだったからに他ならない。
エルトア国は技術力に長け、エナルダをあまり高く評価しない国だった。
時計を発明したのもこの国だ。武具、特に鎧については全身を装甲しながら非常に軽く、また動きやすく作られた逸品として人気が高い。

グラシスは優れた武人だったが、グラシスの能力はエナルダ覚醒によるものだと不当な評価を受けただけでなく、妬んだ上官からあらぬ罪を被せられ、家族と共に脱出を図らねばならなくなった。
バルカに入っていれば違う運命を辿っただろうが、グラシスはエナルダである事を強く意識したがゆえにクエーシトに入国する。
しかし、グラシスは入国して大きなショックを受ける。
自分の力がそれ程大きくはなかったと気付いたのだ。
さすがにクエーシトは優れたエナルダが多い。

しかも研究によって人造エナルダも誕生しているという。
彼は訓練によって、基礎体力とエナル係数の向上に努めた。
しかし、持って生まれた能力の差は如何ともし難かったのである。

ある日、いつものように一人で鍛錬を行っていた。
もっと早く動き、もっと強く打ち込み、もっと高く跳ばねばならない。
理想の自分は常に2歩前に居た。
3リティ程の距離がどうしても縮まらない。
疲れ果て、膝をついて砂を掴む。無力感が全身を覆う。
砂を掴んだ手の平だけが熱かった。
その不思議な感覚。拳に目を向けると指の間から砂が溢れてくる。

なんだ、これは？

グラシスは手の平を見た。
砂が踊っている。
手の平の上で砂が跳ねているのだ。
意識を集中すると砂は弾き飛ばされた。
手の平から目には見えないものが噴出されているようだ。
これがグラシスの能力だった。

彼は密かにその能力を高めていった。
ついには人間を押し倒すほどの噴射力を得た。
そして、彼は体術の訓練でその能力を使ってみた。
相手はグラシスが突いたのだと思った。
しかし繰り返すうちに見ている者達が騒ぎ出した。
「グラシスは触れずに相手を弾き飛ばす」
しかし、この時点ではあまり有益な能力とは思われなかった。
非常に近い位置から意識を集中して、やっと相手がよろめく程度の力。
不思議な力だ、不思議で役に立たない力。

これをジョシュが聞きつけた。

ジョシュは笑わなかった。彼は異人だ。どんな世界から来たのだろう。

しかし、彼が異人だからこそ、発想に制限は無かった。

翌日、グラシスはジョシュ直属の特殊部隊に配属となる。

ジョシュは中隊長だったグラシスに師団長の待遇を与えた。

グラシスが感激したのは言うまでもない。

エナル、いやエナルダの研究ではこの世界で最も優れている人間から評価されたのだから。

エナルダであるが故に祖国を離れざるを得なかった。

父と母にも自分のせいで随分と苦労をさせてしまった。

グラシスの昇進を父と母は涙を流して喜んでくれた。

しかし、彼の昇進を喜んだ父と母は数日後に原因不明の発作により死亡してしまった。

グラシスは、昇進を報告できた事をせめてもの慰めと考えるようにした。

7－2　融合

両親の不可解な死。グラシスはひどく悲しんだ。

父から最後にかけられた言葉を噛み締める。

「私はお前に何も残してやれなかった。何も教えてやれなかった。ただ、懸命に努力するという事だけは、伝える事が出来たと思う。お前は自慢の息子だ」

1人になった彼は訓練に明け暮れ、ついには僅かながらも身体を浮かせる事に成功する。

しかし、それが何の役に立つというのかと思う。

もし高く飛べたとしても両手が使えないでどうするというのか。

グラシス自身が疑問に押し潰されそうになった時、ジョシュはグラシスを自分の執務室へ呼んだ。

ジョシュが執務室に他人を入れるのは非常に珍しい事だ。

それを知っているグラシスは非常に緊張した。

かねてより恩義を感じながらも、まだ何の成果も上げていない自分が心苦しかった。

ジョシュは言った。

「今、君は限界にある」

「・・・はい」

グラシスは力の限界を指摘された事よりも“君”と呼ばれた事がショックだった。

「この能力はあまりに特殊で誰にも使いこなせない力だ。つまり、君以外が同じ能力を持ったとしてもそれは同様だ。だから君が悪いわけではないのだ」

そう言われてグラシスは苦しかった。

「かねてより私は一つの研究を進めている。これはリアエナルダ融合施術で発生した事故が元で始まった研究で、既にある程度の成果を得ている」「あくまで君の意志次第だが、これが君の力を引き出すカギになる」

ここでジョシュは話を続けても良いかと聞くようにグラシスを見つめた。

グラシスは頷き、ジョシュは話を続ける。

「研究の内容は生体同士の融合だ。発端となった事故とはリアエナルダ融合施術の際、マスターエナルダの指が検体の身体と融合してしまったのだ。マスターエナルダは指を1本失う事となったが、検体には何の影響もなかった。それどころか、癒着した指は検体の身体の一部として存在しており、体内に埋没しているが、“指として”機能する事も確認されている」

事故で発生した生体融合を説明したジョシュは、また一呼吸置いてグラシスを見たが、その目は何も問うてはいなかった。

ただ強い意志を含んだ視線を投げかけただけだ。

「君の能力は手の平でエナルを空気中の成分と融合させ、物質化したエナルを飛ばす事だ。どうしてこのような能力が引き出されたのかは不明だが、恐らく君の神経伝達能力と精神力の高さによるものだろう」

「物質化はマスエナル融合と同じ原理だ。融合自体は強力ではないため、飛ばした直後に融合は解けてしまう」

「初速はエナルが伝わる速度、つまり音が伝わるのと同じ速度で噴射できるはずだ」

「また、手の平だけでなく微弱ながら全身に同じ能力があると分かった。手の平が一番大きな力を発揮するとはいえ面積的に余りに噴射量は少ない。今のところ浮いて終わりだ」

「そこでどうだろう。私の研究の成果を試してはみないか。君のエナル融合噴射能力を最大限引き出す翼をその身体に装着してみないか」

「どうだろう、グラシス」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

それからグラシスは肩と背中の筋力増強に励んだ。融合施術を受けるために。

エナルダにエナル融合を施術した者はハイエナルダと呼ばれ、特に戦闘力が高い者はリアエクサーと呼ばれる。

融合によって誕生するエナルダは次の通りだ。

【リアエナルダ】

エナルダ未覚醒の者へのエナル融合。人造エナルダとも呼ばれる。

【ハイエナルダ】

エナルダへのエナル融合。２回目という意味で“トゥーレ”とも呼ばれる。

【リアエクサー】

高い戦闘力を持ったハイエナルダ。ハイレベルのエナルダへのエナル融合で誕生する。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

彼はランケトスの翼を背中に移植すると同時に融合施術を行い、ハイエナルダの能力をも手に入れた。
これで翼からエナル噴射ができれば面積で１０倍以上の噴射力を得る事になる。

ランケトスの翼は長さが５０ミティ（約８０ｃｍ）、幅は２０ミティ（約３０ｃｍ）で刀の切っ先のような形をしている。
グラシスが翼を閉じると丁度背中の広さに収まる大きさだ。
翼の付け根は子供の手首ほどの太さしかない。
訓練で翼自体の筋力も上がるだろうが、羽ばたく必要は無く、噴射する方向だけ変えれば良いので、大きな筋力は必要としないのだ。
エナル融合は異種間の生体融合をも可能にした。
グラシスは飛行能力を手に入れたのだ。

その後、エナルダ覚醒していない者の飛行型への融合実験は立て続けに失敗した。
生体融合とエナル融合という負担に常人では耐えられないのだ。
また、リアエナルダに対してもう一度融合を行う実験も失敗を繰り返していた。
つまり、エナル融合施術は１回しか行えないという事だ。
そのような状況下でグラシスは軍団長の地位に上る。
グラシスの成功を見てエナルダの志願者から新たに２名の飛行型エナルダが誕生した。

飛行型エナルダの３名はそれぞれ地上の直援隊を含めた飛行大隊を結成する。
隊長はグラシス。
残る２名はウーディとエルファ。

エルファはまだ少女だ。

リアエナルダ融合やハイエナルダ融合を含め、検体に占める女性の割合は3割を超える。
これは基礎体力に劣る女性や女性エナルダが施術を希望したからだと思われる。
また、施術を行うマスターエナルダも同じ理由により女性が4割を占める。

飛行大隊は訓練に明け暮れた。
飛行型エナルダが戦場に姿を現せば敵は大混乱に陥るだろう。
それは戦局を左右するほどのインパクトを与えるに違いない。

しかし、彼等が実戦に参加するにはもう少し時間が必要だった。

7－3　転換

バルカは数に勝るアティーレ・パレントの連合軍を撃破し続けていた。
クエーシトからも非公式ながらエナルダで組織された特別遊撃隊を含む軍団が派遣され、一時はバルカ城下まで戦場となったが、バルカ第2軍団とジュノによる防御によって、徐々にクエーシト軍は消耗。特別遊撃隊も慣れない攻城戦に分散投入された為、各個撃破されてしまう。

第2軍団の軍団長は、青をパーソナルカラーとするバルサム・バルカ。
名前の通り、バルカ家の一族だ。
ただ、直接的な血のつながりは無く、武功によって一族に加えられた武人の子孫である。
祖先は“世界の混沌”から存在が確認できるほどの名家だが、このバルサムは長く評価を得る事はなかった。野戦が苦手なのである。
しかし、その堅実さと用意周到さによって拠点をもった防御戦では無類の強さを発揮する。
今回はジュノの第４軍団と協力してほぼ完璧な防御戦を展開、撤退するクエーシト軍をジュノの第４軍団が追撃し、大きな戦果を得た。
結局クエーシトはこの戦いで第３軍団旗下２個師団と第４軍団旗下３師団もの兵力とエナルダを大量に失う。
これにより、クエーシトを盟主とする同盟軍は、バルカ戦線だけでなく、ルーフェン戦線も維持できなくなっていくのだった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

北の戦乱は参戦国に大きな犠牲を強いた。

直接戦場になった、バルカやルーフェン、グリファ、侵攻したアティーレ、パレント、ベルサ。
そしてクエーシトも頼みの特別遊撃隊の消耗に従い、虎の子の騎兵隊とオロフォス隊まで投入するが、戦局を盛り返すまでには至らなかった。
現在の前線は国境の森とバルカ城に近い森の間にある草原だ。
消耗戦の様相を見せる戦いは膠着状態に陥る。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ここで中立を宣言していたギルモアが動く。
戦乱を引き起こした罪を問うとして、アティーレ・パレントに軍を進めたのだ。
瞬く間にアティーレは４つの城を落とされて壊滅寸前。
ギルモアはアティーレとパレントを下した後は、ギルモア国内への干渉と侵略に対する報復としてクエーシトまで軍を進めると宣言する。
バルカにはクエーシト侵攻作戦への協力として3個軍団６０００の兵力供出を要求。
バルカ郷の防衛はギルモア軍が行うという。

バルカがギルモアの代わりに戦って、ギルモアがバルカに居座るというのか。
見下すにも程がある。確かにバルカはギルモアの軍神を自負してきたが、独立した郷であり属国ではない。
軍団が出て行った途端にバルカはギルモアのものになってしまうのではないか？
そもそもギルモアの参戦は自らの中立宣言を反故にする火事場泥棒的行為だ。
会議は紛糾した。

これを拒絶し、もしギルモアから攻められる事になれば、バルカは滅ぶしかない。
これまでバルカはギルモアに尽くしてきた。ギルモアもバルカに感謝こそすれ恨みは無いはずだ。それならギルモアを信じて賭けた方が良いだろう。
会議の空気は要求受諾に傾きつつあった。

ここでフィアレスが静かに口を開く。

ギルモアはバルカの企てを知ったのだろう？
ならば万が一にもバルカが存続を許される可能性はない。
あの国はプライドと欲望だけは強い国だ。
そして今、愚か者によって導かれている。
愚か者とは、決定してからも迷い、約してからも疑うという者達だ。
どうせ１０年２０年先など考えてはおらん。今、一時の損得で動いているに違いない。
しかもまだ手に入れていないクエーシトまで手に入れた気分でいるようだ。
それが手に入らない事は、失ったと同じ事のように感じるだろう。
アティーレ無く、パレント無く、クエーシトやグリファも消耗している。
バルカを見逃す理由は無い。
ギルモアにとって、バルカという防壁は不要となったのだ。

時間が欲しかった。
バルカもクエーシトも。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

フィアレスとバイカルノは連日議論を重ねた。

フィアレスは時としてバイカルノが思いも付かない手法を提示する。
バイカルノは溜息をついた。
以前は常にこのレベルで思考していたのか。
普通の人間じゃついて行けねぇな。

ギルモアへ書簡を送り時間を稼ぎつつ、グリファに密使を送り共闘体制を構築、更にギルモア要人の暗殺の準備を進める事とした。
直ちにバイカルノはサバール隊へ連絡を取る。
グリファへの密使は本人の強い希望がありジュノと決まる。
フィアレスが提示したギルモア首都への奇襲作戦は大臣達の強い反対にあって採用されなかったが、ヴェルハントがいたら何と言っただろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

幸いにもしばらく大きな会戦は行われそうに無い。
ギルモアも大義名分があるアティーレとパレントへの侵攻を優先させるだろう。

（バルカからギルモアへの書簡）
ギルモア本国によるアティーレ・パレント征伐の発令は、暗闇に光が差す気持ちでおります。
しかしバルカは、この戦乱に単独で立ち向かった結果、壊滅的な打撃を蒙っており、この度の軍団供出にはお応えする事ができません。
また、ギルモア国軍のバルカ駐屯は、周辺国を無用に刺激するでしょう。
バルカへの救援、戦乱を開いた者への懲罰という大義名分を失っては、単なる利己的な行為と見られかねません。
ギルモア国の精神にいささかの曇りも無く、国威にいささかの瑕もつかぬ事を願って止みません。

“ティエラ・ロウレン・バルカ”

世の関心はグリファ・アティーレ・パレントでもベルサ・ルーフェンでもなく、ギルモア対クエーシトに向けられていた。国家同士の激突。

近年衰えたとはいえ、古よりの歴史を持ち、大きな軍事力を誇るギルモア。

片や1人のエナルダが辺境の寒村から立ち上げたエナルダ国家クエーシト。

7－4　検体

戦場で失われるエナルダの数は以前に比べて倍増していた。
エナルダの“出し惜しみ”をしなくなったからだが、対エナルダ戦術や対エナルダ武具の研究も急速に進んでいた。
エナルダといえども数で包まれると苦しく、むしろ中級までのエナルダは狙われる傾向にあった。

それを補う為にクエーシトではエナル融合施術が頻繁に行われ、それに伴って施術による被害も増大していった。

施術中に検体が死亡したり、施術するマスターエナルダが精神負担によって死亡したり再起不能となるケースも出ている。
また“オルグ化”した検体によって施術者が死傷する事故も発生した。
そして、ついにクエーシトの国王ベイソル・ハイラはジョシュの実験及び施術を抑制する。
確かにジョシュの研究はマスエナルやリアエナルダを作り出したが、既存のエナルダを消耗したのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ほどなくクエーシト王はジョシュを“所詮は異人”という目で見るようになる。
同胞が死亡したり怪物になる可能性がある実験や施術を繰り返し、揚げ句に人間に動物を翼を移植するとは・・・。
神をも恐れぬ所業とはこの事だ。
ジョシュがクエーシトに入った時、エナル研究をクエーシトの為にと言った。

あのカピアーノ博士と共同研究をしていた人物の来訪にベイソルは喜んだものだ。
そして、ジョシュは間違いなく天才だった。
しかし、ジョシュは目的の為には全てを考慮しなかった。
決して豊かとはいえないクエーシトにおいてジョシュの研究チームは金も物資も湯水のように使う。
それだけならいざしらず、クエーシトの宝ともいうべきエナルダをも消耗している。
そして、ある事件をきっかけとして、ジョシュの研究を極端に縮小する命令が下った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

エナルダ研究が縮小命令を受けるきっかけとなった事件は次のようなものだった。

≪融合施術室にて≫
「ギルモア軍はアティーレの殆どを制圧して、クエーシトまで侵攻すると公言しているそうではないですか」
「あぁ、アティーレもパレントもバルカ戦で既に力を失っているからな。しかし所詮は愚か者ゆえの稚拙な戦略だ。まずバルカを攻めないのが愚かさの最たるものだ。自らの中立を反故にして火事場泥棒的な侵攻を開始しているくせに、また面子にこだわっているのだろう」
「しかしバルカはギルモアの軍神と称していますし、アティーレとパレントが滅ぼされればバルカは四方を囲まれてギルモアに降るしかないでしょう」
「いや、バルカは降らん。バルカの強さはその精神にある」
「確かに北の戦乱でアティーレとパレントの連合軍は3倍以上の兵力やエナルダを有しながらバルカに及びませんでした。私はいまだ

に信じられません」

「そうか、リードはバルカの“洪水作戦”や“津波作戦”を知らないんだったな。フィアレスは天才だ。それにバルカ兵の強さは他の国に比肩できん。組織戦力としても各個戦力としても非常に優れている」

リードは戦場に出た事がなかった。

「我がクエーシトも前線から兵力を召還している。グリファとは停戦に合意した。ベルサはグリファに滅ぼされるだろうが、先のルーフェン殲滅戦と今回の戦いでグリファ北部の兵力はほぼ壊滅しているから、グリファに軍事行動を起こす余力はあるまい。となれば敵はギルモアのみ。遠征に遠征を重ねたギルモア軍など簡単に打ち破れる」

「バルカがギルモアに降ったらどうなりますか？」

「そんな事は無いと思うが、バルカを先陣に侵攻されると面倒な事になるだろう。とにかく今は少しでも戦力を確保しなければならん」

リードは上級エナルダだった。これまで動物実験やエナルダ融合施術に立ち合ってきた。

その実績が認められ、本来はエクサー2名を配置するハイエナルダ融合（エナルダにエナル融合を行う施術）にエクサーのシューベックと共に立合う事になったのだ。

「私も戦場で戦いたいのです。施術中に苦しんで死んでいく者や、オルグ化した人間や動物を斬るのはもう疲れました」

「まぁ、そういうな。お前はエクサーではないが、その戦闘力の高さを見込まれたのだからな。それにこの仕事は機密事項も含んでいる。誰でも良いという訳にはいかんのだ」

「それはわかっていますが・・・」

「我々が施術に立合ったリアエナルダ達が前線で活躍しているのだ。我等の働きの成果ではないか」
「えぇ・・・」

ここで施術を担当するマスターエナルダが周囲を見ながら口を開く。
「では、融合施術を開始する」

今回の検体は４０歳台の男性。中級エナルダだ。
施術は思いのほか順調にすすみ、検体は吊るされていた鎖から下ろされ台に乗せられた。
台は大理石の上に革と毛皮を載せ、更にきめ細かい布で覆ったベッドだ。
手足の鎖はつけたままにオルグ化を確認する。
検体は目を覚ました。
その目は天井を見ていたが、リードは自分が見つめられているような錯覚を覚えた。
そして検体が、シューベックやマスターエナルダを順に確認しているように感じた。
瞳は動いていないから、そのような事はないだろうが・・・

マスターエナルダが声を掛ける。
「おい、気分はどうだ?」
「・・・」
答えられないようだった。
マスターエナルダも少々違和感を覚えた。
術後の検体は強い眠気を感じるものなのに、この検体は目をはっきりと開いたままだ。
そして機械的な声を漏らす。
「キブン・・・」
「お前はエナルダ融合施術を受けたのだ。大きな力を得る為に」

「チカラ・・・」
「私が言っている事が分るか?眠いなら寝ても良い」
「ネムイ・・・」
検体は目を閉じた。

「検体に混乱や凶暴性は認められない。成功だ、鎖を外して安静にさせろ」
「これからは暫く眠り続ける。施術メンバーは4時（昼を6等分したもの。午後3時ぐらい）にまた集まってくれ」

施術室に満ちた緊張がたちまち弛んでいく。
その中でリードだけは検体から目が離せなかった。

7―5　施術

シューベックとリードが立ち合ったエナルダ融合施術は成功した。
施術室の張り詰めた空気が緩んでゆく。
その中でリードだけが緊張していた。
「さて行くか。何事も無くて良かったな」
シューベックに促されたリードは動かなかった。思考が止まらない。
さっきの受け答え・・・違和感がある。

「おいリード、どうした?」
思考が中断され、リードはシューベックの後に続く。
シューベックとリードはジョシュへ報告、書類を整えた後、遅い昼食を摂った。

リードは先ほどの違和感を思い返していた。
「リード、仕事は好き嫌いじゃなくてどれだけ貢献できるかなんだよ」
「貢献ですか・・・」
「そりゃ嫌な仕事だが、誰かがやらなきゃならない」
「誰かがですよね・・・」
「男は必要とされて充実するものだろ」
「充実か・・・」
「お前は俺の話を聞いているのか?さっきから俺の言った事を繰り返すばかりで上の空じゃないか」

リードに衝撃が走り、抱えていた違和感が弾けた。
そうだ、繰り返しだ。
あの検体は自ら言葉を話さなかった。問われた言葉を繰り返しただけだ。

リードが感じた違和感は明確な形となって現れた。
指摘を受けたシューベックは考えた。
オルグ化した者は人間の思考を留めず、凶暴性のみを示す。
オルグ化していれば、目を覚ました時点ですぐに暴れているだろうし、欺こうとする知性など持ち合わせていないはずだ。
しかし、懸念が現実となれば恐ろしい結果を生むだろう。
知性を持ったオルグ。絶対に逃がすわけにはいかない。

すぐにジョシュへ報告。
この時、すでに時刻は4時を回っていた。
施術したマスターと立ち会いの軍事府高官、更に数名の研究員が術後の経過観察を行っているはずだ。
ジョシュはシューベックとリードにエクサー1名と上級エナルダ3名をつけて急行させた。

施術室は石造りの部屋に金属製の扉をつけた部屋だ。
扉を開けた時、「ごとっ」何かが落ちるような音がした。
踏み込むと部屋は血の海と化していた。壁にも天井にも血が飛び散り、遺体の多くは原形すら留めてはいない。
上級エナルダ2名は入口を固め、1名は報告に走る。

シューベックとリードは、応援のエクサーと共に施術室を慎重に進んでいく。
施術室の奥は器具や資材の保管庫になっている。もちろん行き止まりだ。
保管庫の手前には数体の遺体があった。
その中には肩についた飾りから軍事府副大臣と判る遺体もあった。
ここまで逃げて襲われたのだろう。

保管庫の入口から中を覗き込む。奥にある棚に何者かが身を寄せている。
シューベックが保管庫の入口で援護する。
刀を携えたリードと応援のエクサーが保管庫の奥へ向かう。
用心深く近づいたリードが目にしたのは、既に絶命した研究員だった。
張り詰めた緊張が後方へ飛ぶ。

シューベックは背後で何かが動く気配を感じた。
振り向いた瞬間、背中に何かを突き立てられた。
副大臣の遺体が消えている事に気付く。
もう一撃を受けながら視界に捉えたのは、副大臣の内務服を着た検体だった。
手にしているのは装飾が施された護身用のレイピア。
オルグと化した検体が笑っている。しかし、笑った顔はますます人間離れしていく。
シューベックは口から溢れる血を感じながら頭の中で悪態をついた。
「頭のいい奴め・・・」

最高の戦闘力を発揮するエクスエナルダとは言え、身体深くまで突き通された傷は致命傷となった。
シューベックは刀を投げ捨て、オルグ化した検体に抱きついた。
刀が壁にぶつかる音が響く。
オルグは離れようと暴れるが、シューベックは離さなかった。
駆けつけたリードがオルグの首を刎ねる。
シューベックは既に絶命していた。

被害は甚大だった。
軍事府副大臣と職員2名、エクサー1名、マスターエナルダ3名、研究員2名、合計9名が犠牲となった。

特にエクサーとマスターエナルダは取り返しがきかない損失だった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

国王から研究の規模縮小を命ぜられたジョシュは、エナルダ融合施術の件数を制限され、生体移植融合については研究及び新たな施術計画の中止を約束させられた。

ベイソル・ハイラの治世下の飛行型エナルダは、既に承認された１人が最後の施術となる。

ロスト？

誰かに呼ばれたような気がして振り返ると髪が頬にかかった。
指ですくって耳にかけると、誰もいない事を確認して溜息をつく。
年が明けて２ヶ月が経ち、学年末考査を間近に控えていた。

夏海は２学期に入ると同時に受験勉強を開始したようで、学校以外で会う機会は減ってしまった。
塾ではなく家庭教師が数名ついているあたりはさすがにお嬢様だが、なかなか息抜きができないと珍しくぼやいている。

コータは夏海が何気なく言った「一緒に大学行こうよ」という言葉に触発され、猛勉強に励んでいる。
先月の校内テストでは、それまで最低レベルだった順位を中間ぐらいまで上げて皆を驚かせた。
リョウスケは「あと半年でトップ１０入りする計算だな」といって皆を笑わせたが、リョウスケは本気で言っていたし、私もそうなるだろうと思った。
今年の夏には私とリョウスケ以外の誰もが驚いて思うのだろう「どうして？」と。
努力をしたからに決まってる。
そして、どうして努力をしたのかはコータだけが知っていれば良い事だ。

「伊藤くん頑張ってるね」
そういう夏海は常に１０位以内だ。
でも上位３位に入った事はない。私達の学年には“ホルダー”と呼ばれる、とんでもなく出来る人達がいるのだ。
その３人は男女２：１（ニーイチ）で一種のグループになっている。

よくいる勉強だけって人達ではないようだけど、その存在はどこか超然としていて、早い話が“浮いて”いた。
リーダー格の篠原くんのお父さんは脳神経内科の有名な先生なんだそうだ。

思い返すと、夏休みが終わってから忙しくてバタバタと時間が過ぎていった。
“あの場所”には何度か行ってみたが、もちろん何も無かったし、蔵人さんのお母さんにも同僚の加藤さんにも会うことは無かった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

玄関の前に立つと急にドアが開いて弟が飛び出していった。
開いたドアの向こうから女の人の声が聞こえる。
「こら！秋人（あきと）！もぉー」

走っていく弟の背中を見送りながらつぶやく様に言う。
「ただいま」

「あら、千夏ちゃん。おかえり～」

この人は私の母だ。
私とは違うおっとりとした優しい目をしている。

母との繋がりに不安を感じはじめたのはいつからだろう。
お母さんが握っているはずのヒモを辿っていったら、プツリと切れていたような気持ち。

今でもはっきりと覚えている思い出。
４歳だった私は昼ご飯の後、まだ１歳だった弟のベビーベッドの横

で寝てしまった。
目を覚ました私は激しい孤独感に襲われた。
泣いている私をお母さんは抱きしめて「どうしたの?千夏ちゃん」と訊いた。
私はその時「私のお母さんはどこ?」と言ったのだ。
お母さんは私を抱きしめたまま「ごめんね」と繰り返して泣いていた。
なぜ、あんな事を言ったんだろう。ひどく悪い事をしたと思った。

いつからだろう。“千夏ちゃん”と呼ばれる事がとても嫌だった。
それは子供っぽい呼ばれ方とか言葉の問題ではなく感覚的なものだ。
弟を呼ぶ声と私を呼ぶ声が違うように感じていた。

そしてある時、私は気付いたのだ。

その日は夏海が初めて遊びに来ていた。
「お母さん、この娘が同じクラブの夏海だよ」
「初めまして、夏海です」
「いらっしゃい。“夏海ちゃん”」
その後の母の言葉は覚えていない。
“千夏ちゃん”と“夏海ちゃん”がシンクロして私の頭の中に響いた。

よその子と同じなんだ・・・。
長年の不安と疑問は、ごく僅かな事実を残して融け、私の体の隅々へ重く沁み込んでいった。
僅かな事実とは、この直感に対する裏付けだ。

そして病気の伯母さんのお見舞いに行った時、その裏付けも融けたのだ。

病室は伯母さんと私だけだった。
私はこの伯母さんが好きだった。
その伯母さんは病気と違う苦しそうな顔で私に言った。
「千夏ちゃん、私はもう長くないの」
「伯母さん、そんなこと・・・」
「いいのよ、分ってる事だから。それに闘病って結構しんどいのよ」
「・・・あなたにはいつか伝えようと思っていた事があるの。もっと後で話すつもりだったんだけど・・・私の時間が無いわ」

「あなたはお母さんにそっくりなのよ。まるで生き写しのよう」
伯母さんは私が気付いているのかを探るように言った。
「わかってました。なんとなくだけど・・・」
本当にお母さんじゃなかったんだ。涙がつっと流れた。

「あなたは全てを知る必要があるわ。その上でお母さんに感謝しなさい。お母さんと呼んであげなさい。そして甘えなさい」

伯母さんは時折考え込むように息を整えながら知っている事を全て話してくれた。
私のお母さんは私が1歳の頃に失踪したらしい。
すぐに警察に届けられたが、何も分らなかったようだ。
本当の母、いや、神代奈央は理由も痕跡も何も残さずに消えてしまったのだという。
母親の失踪の後、暫くの間は伯母さんが私の面倒を見てくれたようだ。
お父さんは1年も経たずに再婚した。それが今のお母さんだ。
2人のお母さんは友達同士でお父さんと同じ会社に勤めていた。
今のお母さんは、ほぼ決まりかけていた縁談を断ってお父さんと結婚した。
ほとんど勘当状態らしい。
伯母さんは感謝していると言った。
お父さんと私の為にお母さんは全てを捨ててやってきたのだ。
そういえば実家の話はほとんど聞いた事がないし、お母さんが実家を訪ねるという事も無かった。
何もないんだ、お母さんには。わたしたち家族しか。
涙が溢れた。
心の中で何度も繰り返した。「お母さん、ごめんなさい」

おばさんは私が落ち着くのを優しい顔で待ち、私に話をした事を、明日お父さんに伝えると言って締めくくった。
だいぶ疲れた様子だ。

「伯母さん、ありがとう」
「あなたには辛い話だったわね・・・」

「いえ、本当に感謝しています。知る辛さよりも知らない苦しさの方が大きいもの」
「本当に大人になったわねぇ、私も大きな荷物を降ろした気持ちよ。後は明日、小さい荷物、恒彦に今日の事を話さなくちゃ」
伯母さんは安心したように笑顔を見せ、「本当にありがとう」と言って目を閉じた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

私は帰る前に心を落ち着けようと待合室の椅子に座った。
テレビからはプロ野球選手のインタビューが流れている。
低迷が続き、年齢的にももうダメと言われていたピッチャーが全盛期をも超える奇跡的な復活をとげたらしい。

私は席を立ってロビーに向かった。
明日の夜、お父さんと話をしよう。
今まで通りにに、いや、今まで以上に家族であろう。

でも、伯母さんが小さな荷物を降ろす事は無かった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

伯母さんから聞いた事をお父さんにも言わなきゃ。
伯母さんは荷物を降ろせなかったけど、私が受け取ったようなものだ。

伯母さんのお葬式の後、お父さんは頭痛がすると言って暫く会社を休んだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

伯母さんのお葬式から2週間が過ぎ、年度末考査も終わった。
お母さんは秋人の進学指導で学校へ行っている。
タイミングとしては今しかないと思った。

「お父さん、私、伯母さんからお母さんの事を聞いたの」
お父さんは新聞を畳むと一言だけ「そうか、すまなかったな」と言った。
お父さんが何にすまないと言っているのかは分らなかったが、私は今まで通りだし、何も気にしていないと伝えた。
お父さんは黙ったままで、私は気まずかった。
気まずさは私に余計な事まで喋らせた。
「でも、すぐに再婚したのは意外だったな」

「それがどうだと言うんだ」
「えっ」
お父さんの顔が変わった。
「お前のためだった。何を聞いたか知らんが、姉さんが言った事は全て事実だ」
お父さんの口から牙のようなものが見えた。
お父さんの瞳が滲んで眼球に広がったように見えた。
「お前のためだった！望まぬ結婚も！好きだった仕事を変えたのも！」

私は少しも動けなかった。
お父さんは暫く俯いていた。
恐ろしさの中、こう思うようにした。
私が無神経だったのだ。お父さんの苦労や心を考えなかった。

お父さんは息が落ち着くと「済まなかった。このところ体調が悪く

てな」と言って席を立った。
しかし、何かを隠すように一度も私の目を見なかった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

夜、喉が渇いて目が覚めた。
台所に行くと、窓から差す月明りの中に人影があった。
一瞬、ハッとしたが、それはお父さんだった。
お父さんがテーブルに俯いて座っていた。
肘をついた右手は額に当てられている。
明かりを点けて声をかける。
「お父さん大丈夫？」
「・・・」
「お薬、飲む？」
「・・・」
「お父さん？本当に大丈夫？」
「・・・ダイジョウブ」

7－6　初陣

ギルモアが“北の戦乱”への中立宣言を撤回し、アティーレへの侵攻を開始した。
アティーレは対バルカ戦で戦力を消耗しており苦戦は必至だ。
本来ならバルカにとって歓迎すべきギルモアの参戦も決して吉事ではなかった。
ギルモアは露骨にバルカへ圧力をかけてきたのだ。

バルカは書簡で時間を稼ぎ、グリファとの共闘や要人暗殺など手段を模索していたが、クエーシトの打つ手は限られていた。
ここでクエーシトは奥の手ともいうべき飛行大隊とエナルダ部隊をアティーレに派遣し、ギルモア軍を国外で叩く作戦に出る。
クエーシトの軍師はギルモア軍を数だけの軍隊と判断していた。
命令系統の破壊と恐怖心で簡単に瓦解するだろう。
そして進軍は止まり、動けなくなるに違いない。
一度立ち止まった弱者は進めないものだ。

アティーレの西と南から侵入したギルモア軍は４つの支城を落とし、あとはアラロス城と呼ばれている支城を１つ落とせば、ついに本城に迫る。
このアティーレ本城はアティーレの東端にあり、バルカ、パレント、クエーシトとの国境から近かった。

アティーレ城には、飛行大隊とエナルダ部隊を伴ってクエーシトの軍師が入城していた。
彼の指示でアラロス城に大量の財宝と美酒、食料、愛奴を放置した。
ここにギルモアの２個軍団６０００が入城する。
ここまで大きな抵抗も受けずに城を落としてきたギルモア軍は戦い

に対する感覚を徐々に鈍らせていった。
無敵という甘い言葉の錯覚に酔った。
大した戦闘もしていないのに自らの力を過大評価した。

アラロス城の守備兵はギルモア軍が近づくと早々に逃げ出した。
普通であれば、城の防御にあたる兵を残して進軍するだろうが、ギルモアの将校は城の奥に置かれた宝や愛奴を発見する。
将校たちは思った。ここまでの進軍速度は計画を大幅に上回っている。これまでの戦果を考えればこれくらいは当然だと。
つまり、本国への報告をせずに略奪に走った。
そこへ到着したのが、ギルモアの３個軍団７０００だ。
先に入城した２人の軍団長は略奪の発覚を恐れた。
彼等は甘言を用いて後続の３個軍団の軍団長および師団長を懐柔した。
腐った果実は他の果実をも腐らせずにはおかないのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

兵士には軍議と称して野営を続けさせ、財宝は隠し、酒と愛奴に溺れる。
ついには４日をアラロス城で過ごしてしまう。
本国も暢気なもので「苦戦しているならば増援を行う」との伝令を出しただけだった。
さすがにこれ以上は留まれないと考えたのか、アティーレ本城へ向けて進軍を開始する。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

アティーレ城は集結したギルモア軍で包囲された。
アラロス城からアティーレ城は１日の距離なのに６日も経過してい

る。

見張り塔からギルモア軍を見たクエーシト軍師は楽しそうに言った。

「随分と柔らかそうな奴等だ」

アティーレの軍事府士官は聞き返した。

「柔らかい？」

それに直接答えず、言葉を続ける。

「兵もそうだが、陣に緊張感の欠片もない。陣が緩んでいるという事は率いている者がダメな証拠だ。我々は必要なかったかもしれんな」

攻撃は明日だろうが作戦すら立ててはいないだろう。総指揮を執るのはどこの軍団長だ？

集まる薄い情報を積み重ねて、それとおぼしき軍団の本陣に飛行大隊を送る。

エナルダ部隊は大きく迂回して側面から。

アティーレの残存部隊は正面に構える。

ギルモア軍は圧倒的な戦力でアティーレ城を包囲したが、クエーシト・アティーレ連合はギルモアの中枢のみを包囲した。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

夜が明け、何の警戒もなく軍装すら解いた軍団長は準備された桶で顔を洗った。

この軍団長は、敵の城を包囲しておきながら、軍装を解いて寝ったのだ。

自分の手が届くなら、相手の手も届くと気付かないのだろうか。

ギルモアの第１軍団長は思った。

「今日はいよいよアティーレ最後の日だ」
ふとアラロス城での享楽を思い出して頬が緩む。
５軍団の軍団長と師団長が集まり、軍議が始まる。
「本城というくらいだから、お楽しみも多いのだろうな」
一同が笑う。
「どうやっても勝てる戦の軍議はかえって難しいというものだ」
また一同が笑う。
その時、後方の森で鳥が鳴いた。
誰も気にしなかった。森の中にも兵を配置している。
しかし、敵は森の上からやってきた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

グラシス達の武装は次の通り。
３×４連装ボウガンを２基、３連装ロングボウガン×２、刀×１。
３×４連装のボウガンは腕に装着する横幅４０ミティ（約６０ｃｍ）、長さ６０ミティ（約１００ｃｍ）の空対地ボウガンで、先端には縦にした弓が４つ並んでおり、それぞれ３本の矢が装填されている。人差し指から小指まで４つのフックがあり、それが引き金となっている。
その重量から片腕で取り回すのは不可能で、下方にしか発射できない。
ロックを外して腕から脱落できるようになっており、発射後は投棄する。
１人当たり２４本、３人で７２本。その威力はまさに弾幕といえるだろう。
これを一気に射撃した後は腰に下げた３連装ロングボウガンで狙撃を行う。ロングボウガンは通常のボウガンが長さ４０ミティ（約６０ｃｍ）のところ、６０ミティ（約１００ｃｍ）と大型で、威力が高めてある。長い分だけ取り回しは不便だが、撃ち下ろし効果と併

せて敵射程外からの狙撃が可能だ。
このような武装になるのは飛行型エナルダが格闘戦に向いていないからだ。

そして飛行大隊最大の持ち味は奇襲にある。よって最も重要なのは初撃だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

エナルダ隊が側面から斬り込む。
「敵襲！」
その声に軍団長たちが腰を浮かせたその時、上空から矢が降り注いだ。
アティーレがいつも行う遠距離からの矢ではない。
上空から撃ち下ろす矢だ。勿論矢勢は強い。
軍団長５名を含む将軍は殆どが即死。
ギルモア軍は大混乱に陥った。
飛行大隊は悠然と敵上空を飛び、将校と思われる者を上空から狙い撃った。
１３０００のクエーシト軍は命令系統を失い、方向すらバラバラに逃げ出した。
アティーレ軍が討ち取っただけでも４０００を超え、クエーシトの要請で進出していたパレント軍にも強かに叩かれた。
更にギルモア軍の悲劇は続く。
後詰でアティーレ城へ向かっていたギルモアの４個軍団１００００がアラロス城での略奪を発見、敗走し急接近する先行軍を叛乱軍と見なして壊滅させてしまったのだ。
ギルモア本国に略奪と叛乱、兵力１３０００の壊滅、作戦続行は不可能との連絡が届き、軍事府のみならず首脳部の誰もが不幸を呪った。

しかし、ギルモアにとって最も不幸だったのは、アティーレ本城での戦いが正確に把握できなかった事だったと言える。

ギルモアはクエーシトへの侵攻を無期延期としたが、アティーレとパレントだけは屈服させる必要があった。
後詰の４個軍団１００００でアティーレを滅亡させ、アティーレ城を拠点として、対クエーシトの防衛とパレント侵攻を行おうとしていた。
しかしこの動きをアティーレが察知。
前回より増強したパレント軍が後方、アティーレ軍が正面、側面からはクエーシトの騎馬隊とエナルダ隊によって広域の包囲戦を展開する。
ギルモア軍は兵力を４０００失って後退。
野営地に潜入した飛行大隊が軍団長を暗殺。
残る６０００はアラロス城まで退いて何とか踏みとどまる。
またもやギルモア軍は大敗を喫したのだった。
クエーシトの軍師が言ったように、ギルモア軍９個軍団２３０００は溶けるように消え、６０００を残すのみとなった。
ギルモアの軍団長は敵エナルダによる被害の大きさに、自軍のエナルダ隊をぶつけたが、その能力・装備・運用に至るまでクエーシトの敵ではなく、いたずらに戦力を消耗するだけだった。
ギルモアは、クエーシトのエナルダ隊の力を目の当りにして恐怖した。
ギルモアのみならず周辺国は戦争におけるエナルダについて再考を迫られた。

クエーシトで人工マスエナルと人造エナルダを量産しているとの噂。
最強の戦士と最強の武具の量産。
各国の軍関係者は対エナルダ戦術の練り直しを迫られた。
商業国家タルキアはエナルダ傭兵を高い待遇で国軍に編入し、流通

しているマスエナルの確保に走る。
技術立国のエルトアには高性能甲冑や連射ボウガンなど、武具の開発を急いだ。

そしてエナルダ自身も自らの力に対し、考え方を変えていくのだった。

7－7　果実

ギルモアのアティーレ戦線はアティーレ城から４０ファロ（約１６ｋｍ）で膠着した。
ギルモアは新たな兵力を投入するものの、南西方面の防衛を考えると兵力に余裕は無い。
圧倒的有利な戦力で侵攻したギルモアが逆に追い込まれていた。
軍団長７名以下、将校２４名の戦死という未曾有の損失。
軍事府大臣は戦局の悪化と軍の略奪行為により責任をとって辞任。
ますます混迷を深めるギルモアだったが、ここでようやく底力を見せ始める。

ギルモアの底力とは兵士の動員能力と軍の根底に流れるプライドだ。
軍事府大臣には老齢ながら前大臣が返り咲き、軍団長にも退役した将軍達を充てた。
組織を一新するなら若い人材を揃えるところだが、ギルモアは退役者の復帰で対処した。
今のギルモアに不足しているのは精神だという事を知ったのだ。

将軍達は国家の窮地に命を投げ打って任務に当たった。それに続かぬ者はいない。
そして、ある老将軍の発案で自らを囮とした作戦によって、クエーシト飛行大隊を戦線から排除する事に成功した。

この時に活躍したのが、エルトア国で開発された、設置型の多連装ボウガンだ。
これは地面に杭で固定した台座に３×４連装ボウガンを装着し、上下左右に射撃できるようにしたものだ。
これを更に対空用に改造。威力を増す為に大型化し、８０ミティ（

約１３０ｃｍ）という長大なものとなった。
カモフラージュを施した対空ロングボウガンを８基設置して飛行大隊を待ち構える。
射撃のタイミングは飛行大隊が３×４連装ボウガンを射撃し、投棄した直後。
投棄直後なら武装の変更に意識がいくので隙ができるからだ。
つまり、囮を“撃たせる”のだ。まさに壮絶な作戦といえる。

今度は飛行大隊に油断があった。
ギルモアが飛行大隊の存在を知ったという認識が足りなかった。
グラシスは侵入・弾幕・狙撃・離脱という攻撃パターンを繰り返す。
戦いは止まったら負けだ。それは思考の面でも全く同じなのだ。そういう点で言えば飛行大隊の攻撃パターンは思考停止していたと言われても致し方ない。

撃ち下ろした矢の２倍以上の矢が多連装ボウガンから放たれる。
クエーシト飛行大隊のウーディは重症を負い、何とか自陣に戻るも死亡。
エルファは負傷をしながら飛行を続けたが、バルカ国境の森に落下。
グラシスだけは３×４連装ボウガンの投棄と同時に飛行体制に移っていたため軽傷で済んでいる。
グラシスは失意のままクエーシトに召還された。
今回の非は同じ奇襲方法を続けたグラシスにある。
しかし、ジョシュはその点に触れようとはしなかった。
ただ、「残念な結果だが、やらねばならぬ事がまだまだある」とだけ言った。

飛行大隊の地上部隊はエルファの捜索を行い発見するものの、ギルモア軍と遭遇するやエルファを置き去りにして逃げてしまった。

そして飛ぶ力が残っていないエルファは森の奥へと逃げた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バルカ北部はギルモアとアティーレの激戦地に近く、最重要地区として、突撃大隊が第３軍の弓兵大隊を指揮下に置いて警戒にあたっていた。

俺はスパイクを連れて森の奥に入る。
ここはつい先ほど偵察隊が巡回を済ませた場所だったが、カポルという果物が生っていると聞きつけたのだ。
果物が好物の俺はスパイクの話に飛びついた。

「スパイク、そのカポルとやらは本当に美味いんだろうな」
「もちろんです。森の大木に寄生する植物なんで栽培する事はできないし、数が少ないので市場には出回りません」
「へぇ。で、どんな実なんだ」
「黄色くて子供の頭くらいの大きさです。１本で３～４個しか実をつけません。味はとても甘いんですが、爽やかな香りと風味があります」
「なんだか美味そうだ。よし、部隊の連中にも持って帰ってやろうぜ」

しばらく探すと偵察隊の言った場所にカポルが生っていた。スパイクが早速１つを割る。
「おぉ！これはウマイ！」
「でしょう？ラナシドやラバックは嫌いらしいですけど」
食感も味もマンゴーに近い。その中にも酸味とミント系の香りがある。
聞くところでは若い実ほどこの香が強く、熟すにつれて甘味が増す

のだそうだ。

俺とスパイクは2個づつマントに包んで背負う。
更にカポルを探しに森の奥へ入ったが、いつまでも遊んではいられないので、スパイクと二手に分かれてカポルを探しつつ戻る事にした。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

しばらく探してみたがカポルは見つからない。

ん？なにやら人の気配。というより大勢がこちらに向かってくる。
と、繁みからから何かが飛び出してきた。
女・・・というか、まだ幼い感じがする少女だ。
騎馬用のフットガードと膝上までの鎧下、腕からは血を流している。
俺に気付いた少女の目が絶望に染まる。
「どうしたんだ？怪我をしてるじゃないか」
「あの、私、あの・・・」
その直後、5～6名の兵士が繁みから姿を現した。
兵士達は俺を見て驚いたようだ。

俺の血圧が上がり始めた。怪我した女を追い回しやがって。
「おい、ここがバルカの領内と知っているのか？」
「我々はギルモアだ。そのエナルダを引き渡してもらいたい」
「お前らギルモアか。だったらお前らの名誉の為にも、このまま帰りな」「何もしゃべらなくていい。聞く事はないからな」
「俺は突撃大隊のクラトだ。この地区の警戒にあたっている。侵入者は排除せねばならんが、ギルモアならば斬るまでも無いだろう」
隊長らしき兵士が何かを言おうとした。

その時、少女が後方へ走った。
ギルモア兵からボウガンが発射される。
４発中２本が俺の身体をかすめ、１本が肩に当たる。
少女の足にも１本が突き刺さる。
「大丈夫か！？」
振り向いた俺の背中に２本の矢が突き立つ。
少女の顔が痛みから驚きへと変わる。
俺はキレた。

「てめぇら！ざけんなよ！」
俺は剣を抜いてギルモア兵を薙ぎ払った。
受けた刀ごと身体がヘシ折れる。６人を倒して、背中の痛みに気付く。
補強した軽装鎧を装着していて良かった。
背中の矢を抜きつつ呻く。
「痛ぇ、くそっ」

「おい、大丈夫か？」
座り込んだ少女の顔を覗き込んだ瞬間、俺の喉元に短剣が突きつけられた。
少女は泣いていた。
歯を食いしばり、唇を震わせ、しっかりと見開いた目から涙を流していた。
「俺の名前はクラトだ。喋りたくないなら何も聞かないが、早く傷の治療をした方がいい」
少女を支えていた何かが外れ、短剣を下ろし俯いて泣き続けた。

7－8　短剣

バルカ北部の深い森でギルモア兵に追われた少女。
体力の消耗が激しいようだ。腕に傷を負い、足にはギルモア兵の放った矢。
何者なのだろう。
矢傷に怯まない強さ、俺に短剣を向けた純真さ、そして少女の脆さ。
俺はノッカーと呼ばれたエナルダを思い出していた。
ギルモア兵は確かにこの少女をエナルダと呼んだ。
ギルモアが追うのだからアティーレか、いや、エナルダならクエーシトだろう。

足に突き刺さった矢を抜くと、少女は呻きながら耐えていた。
ボウガンの鏃は軸と同じ太さの金属製なのが幸いした。
タオルで縛る。マントを渡すと背に羽織った。

包んでいたカポルが転がる。
丁度いい。食っちまおう。

「短剣を貸してくれないか?俺の剣で切ってもいいけど、人を斬った後だからな」
少女は一瞬ポカンとしたが、呆れたような顔でクスッと笑い、短剣を差し出した。
2人でカポルを食べる。
さて、行こうか。きちんと治療しなくちゃならない。

少女は少し考えるようにしていたが、小さく頷いた。
剣を鞘ごと腰の後ろで横にして両腕で抱えると、丁度少女を背負える。

「名前は？」
「エルファ」
「俺はクラトだ。あ、さっき言ったか。とりあえずよろしくな」
エルファに短剣を返すと、戸惑った手が受け取った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

グラシスはジョシュの執務室を訪れていた。

「ジョシュ博士、私に新しい力を与えては頂けませんでしょうか」
「どういう事だ？」
「翼を追加してはもらえませんか。私の能力は十分ではありません」
「グラシス、気持ちは分るが、エナルダ融合を2回行う施術に成功した例はない。危険すぎるとして禁止しているのだ」
「はい、承知しています。しかし2枚の翼では力が足りません。また、2方向にしか噴射できない為、飛行機動が制限されてしまいます。半分くらいの翼で良いのです。もう1対の翼を付ければかなり機動性が高まるでしょう」
「グラシス、飛行大隊は2名を失った。残った君を失う訳にはいかない。新たな施術計画は制限され、飛行型の施術は計画済みの1回しか行えない。補充が絶望的なのだ。その意見は、最後の施術で応用させてもらおう」
「博士、移植する部分にだけをエナル融合させる事はできませんか」
「そんな。エナルは接着剤ではないのだ、グラシス」
「ジョシュ博士が仰るのですか？何も行わずして不可能だと」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ジョシュは密かに動物実験を繰り返した。そしてついに手応えを得る。

この施術に成功の確証は無い。いけるだろうという感覚だけだ。
しかし、グラシスの熱意とジョシュの執念は部分的な融合施術を成功させる。
ついにグラシスは飛行能力に加えて機動力を手に入れたのだ。

加えて、対空ボウガンの対策を講じるが、これは鎧の強化しかない。
重装鎧によって低下した機動性はハイクラスのマスエナルで補う事とした。

次の、いや、最後の飛行型は6枚翼を採用した。
肩甲骨の上と下、腰のやや後ろ、それぞれ左右1枚づつ。
背中に４０ミティ（約６０ｃｍ）×１５ミティ（約２５ｃｍ）が４枚と２０ミティ（約３０ｃｍ）×１２ミティ（約２０ｃｍ）
合計面積はグラシスの４枚翼と変わらぬものの、６方向への噴射が可能となり、加速・減速・方向転換などの機動性を高める計画だ。
もっとも、最初に計画された6枚翼は2枚翼型の2倍以上、４枚翼に比較しても3割以上、翼面積がアップする予定だった。
翼を小さくせざるを得なかったのは検体が少女で身体が小さく、翼をつなぐ筋肉量が確保出来なかったからだ。

そして、ついにジョシュは6枚翼の飛行型エナルダ施術をも成功させる。

元々器用であったのだろうか、６枚翼の少女は機動性と戦闘力を兼ね備えた飛行型エナルダに成長する。
地上戦闘時には小さな翼が有利に働いた。
鎧の肩と背中、腰の後ろに斜め下に突き出した装甲板を設け、地上では翼を装甲板の下に格納できるようにしたのだ。これで戦いに集中できる。
グラシスも同じような装甲板を肩から後方へ2枚、長く伸ばした鎧

を作り、戦闘力の強化に努めた。
飛行大隊はハイエナルダだ。その移動能力と併せて大きな戦闘力を発揮するだろう。
しかし、飛行中の翼だけはどうしても防御できなかった。
その飛行能力と引き換えに翼が大きな弱点となってしまうのだ。
また、飛行には体力と精神力を激しく労費し、長時間の稼動はできない。

飛行型エナルダは戦場に大きなインパクトを残しつつ、その中心に存在する事は出来なかったのである。

7－9　捕虜

北の森で追われていた少女は、エルファと名乗った。

「隊長、あの娘すごく警戒していて、治療を受けようとしないんですよ」

背中の傷を治療中の俺にスパイクが困った様子で報告する。

「ルシルヴァは？」

「今、巡回に出てます」

「そうか、じゃ俺が行ってみるよ」

俺がいくと、エルファは俺の背中に隠れた。

マントを羽織って胸のところを両手で固く握っている。

「なぁエルファ、擦り傷は構わないけど、足と腕は見てもらわないとダメだ。足なんて貫通してるんだからな」

「イヤっ」

「お前、歩けなくなるぞ、傷からバイキンが入って腐っちまうよ」

「え・・・ホント？」

「当たり前だろ。歩けなくなったらどこにも行けないぞ」

「行けるもん」

「なに言ってるんだよ、飛んでいける訳でもあるまいし」

「・・・行けるもん」

「まぁ、とにかく軍医に診てもらってくれ、頼むから。軍医はジジィだから恥ずかしがるな」

「悪かったね、ジジィで」髭まで白い軍医が椅子に体重を預けて言った。

とっくに退役した軍医も駆り出されて、挙句にこんな危険地域にまで送られるんだから人員不足も甚だしい。
しかし、俺はこの軍医が好きだった。肝が太いし、腕も確かだ。

「しょうがないよ、実際ジジィなんだから」
「クラト隊長、お前もいずれジジィになるぞ」
「ま、生きてりゃそうだろうね」
「儂（ワシ）は後方で医務に就いてたんで生き残ってしまったよ。前線じゃ若い奴等がバタバタと死んでいるのに」
「悪ぃ、そんなつもりじゃないんだ」
「はは、気にするな。こんな歳になっても憎まれ口を叩いてみたくなるのさ。お前のような奴の前ではな」
「さて、お譲ちゃん、傷を診せてくれないか。お譲ちゃんの傷が治らんと口の悪い突撃隊長が悲しむんでな」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

一通りの治療が終わった。
エルファは治療中もマントを離そうとはしなかった。
とりあえず家に送るなり送り出すなりしなければならないが、クエーシトだったらどうすればいいんだ？
そもそも本当にエナルダなのか？
動きや力を見る限りではとてもエナルダとは思えないんだが。

何処から来た？
なぜギルモア兵に追われていた？
エルファの答えは全て「分からない」だった。
記憶喪失か？
そんな感じもしないが、このまま放っておけないし。

戻ったルシルヴァに預けようと思ったが、エルファは傍を離れなかった。
どこへ行ってもマントを羽織ったまま付いて来る。
ラバックは、また隊長が姫に殴られるんじゃないかと冗談を飛ばしている。
それはたまらん。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

私は捨てられてしまったの。3回も。
最初に捨てたのは母親。その時の事は覚えていない。
次に捨てられたのはほんの半年前。エナルダ覚醒してすぐ。
捨てたのは親類の人達。大嫌い。
捨てられた先は研究所。あそこも嫌い。
ジョシュという所長は笑顔で私に言った。
「協力しないか？何不自由しない生活と将来を保証しよう。自分で決めて結構だ」
私には行く所なんて無いのに。
それなら“協力しなければ殺す”と言われた方が良かった。
私はどうでも良かったの。エナルダでも何でも。
拾われては捨てられてきたんだもの。
そして最後に捨てられたのが一昨日。

今までいつも「なぜ？」と思ってきた。
なぜ私は1人なの？なぜ叩かれるの？なぜ辛い事ばかりされるの？
でも、今日はいつもと違う「なぜ？」ばかりだった。

私とカポルを食べた人は、盾になって助けてくれた。
嫌な事は話さなくていいと言った。
私にしてくれる事もしてくれない事も私の為だった。

剣を突きつけた私を気遣う理由はなんだろう。
不幸だった理由と同じように、私には分からない。
分からないのに、私はどうしてもついて来たんだろう。

でも、自分で決めたんだ。そばに居ようって。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

結局、怪我をした詳細不明の少女を収容したとして、城に連れて行く事になった。
送って行った俺を待っていたのは、信じられない事実だった。

エルファは確かにエナルダだったのだ。
しかも噂に聞いていた飛行型、翼を持つ人造エナルダ。
何も思い出せないと言う彼女は、ほんの少しの時間“捕虜”として扱われ、形式ばかりの裁判の後、ファトマに預けられる事になった。

そして、男女が1つのカポルを分けて食べるのは将来を約束する意味があると知ったのは数日後の事だった。

7－10　承認

エルファが調書を取られたりしている間、ティエラの執務室で待っていた。
ラヴィスとファトマ、ルシルヴァも一緒だ。

カポルを探しに森に入った話をすると、みんなが　ずいっ　と顔を寄せる。
「あったのか？カポルが？」
「あったよ。スパイクと5つ見つけて、その場で1つ食った。ありゃ美味いな」
「残りはどうしたのだ？」
「俺はごたごたで持って帰れなかったが、スパイクが2つ持って帰ったはずだ」
「部隊のヤツ等にも持って帰ろうと思って探してる時に、追われているエルファに出くわしたんだ」

「残念だね、もう何年も食べてないよ」
「ふむ。私も何度か食べた事があるが、確かに美味じゃ」
「私も食べてみたいですわ、素敵な男性（ひと）と一緒に」

『・・・』

「まぁ、確かにファトマは早く見つけないとな。カポルを一緒に食べる相手を」
「それはティエラ様も皆様も同じですよ」

『・・・』

「今ひとつ話が見えないんだけど」

ここまで黙っていたラヴィスが少し姿勢を伸ばした。

「クラトは異人だからな。私が説明してやろう」

「カポルはなかなか手に入らない甘くて美味な果実だ。それを男女の幸せな生活に例えて、将来を約束した男女を“カポルで誓った仲”などというのだ」

「男性が意中の女性にプロポーズをする時に贈り、女性が受け入れた場合は2人だけで1つのカポルを食べるんだ。その時に使ったナイフは女性が持ち、貞操や家庭を護る御守とする」

「えっ？おい、ちょっと・・・」

ラヴィスは俺を無視して説明を続けた。

「古くからの風習のようなものだから、プロポーズの時には必ず必要ってものでもないが、しきたりに重んじる家系では、婚約の儀式に欠かせない果物として、手を尽くして探し出すそうだ」

ラヴィスは俺の顔から視線を外して付け加えた。

「まぁ・・・カポルでのプロポーズは女性の憧れのようなものだな」

「あの、何と言うか、俺、エルファとカポルを食っちまったんだが・・・」

『なにーー！！』

『なんですってーー！！』

「そんな驚く事か？だって単なる風習なんだろ？知らなかったんだし」

「この男はアイシャといい、毎度毎度、成人もしていない女子（おなご）ばかりを・・・」

「だから知らなかったんだって！」

「クラト、これは査問が必要だの」

「エルファだって断りゃ良かったんだよ」

「敵兵に追い回されて怪我までしていては、冷静な判断が出来なかったのではないでしょうか」

「それに、カポルを切るのにエルファの短剣を使ったんで・・・」
「渡したんだな？エルファに」
「なんだよラヴィス、顔が怖ぇよ」
「それはもう勘違いというレベルではないぞ。きちんとプロポーズの手順になっておる」
ティエラは腕を組んで椅子の背もたれに身体を預けた。

「エルファが婚約を主張したら成立しますね」
ファトマの言葉を聴いて、俺は驚いた。
「おいおいマジかよ、ちょっと困るぜ。ティエラが言うように、錯乱状態での話だから、エルファの意志が違うんじゃないのか？」

ティエラの口調は苛ついていた。
「何が困るだ、この問題発生源が。カポルを食べただけならいざ知らず、ナイフを受け取ったうえに陣中までついて来たのだぞ」

「陣中でもクラトの後ばっかり付いて回ってたしなぁ」
ルシルヴァは感情の無い声でつぶやいた。

「俺から話をするよ」
面倒な話になったと思いながら、俺は執務室を出た。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「ファトマ、クラトはダメじゃ。あの男は押されたら押し切られる」
「あやつは、自分の発言や約束に縛られ過ぎるのだ」
「クラトはこの世界の習慣を知らないのだし、ここはファトマから

エルファに説明した方がよかろう。エルファはまだ未成年だし、バルカの者ではないのだし・・・」

「成人しているバルカの女性なら良いのでしょうか？」
「なに？」
「いえ、何でもございません」
「ファトマ、気になる言い方ではないか」
「失礼しました。ただ、色恋事に介入するのは本意ではありません」
「これは色恋事か？」
「はい。少なくともエルファとしてはそうでしょう」
「しかし、クラトは望んではおらんぞ」
「それでもクラト様が受け入れるのなら、それは一つの形なのでしょう」
「では、どうするのじゃ」
「クラト様にお任せするしかありません」
「しかし」
「私にはティエラ様のお心が分りかねます。今件について、いつになくお言葉が多いように存じます」
「ファトマの話こそ意味が分からぬ」
「私がクラト様と一緒になりたいと言ったら、ご承認いただけますか？という事です」

『えぇ～～！！』

「私ではなく、ラヴィス隊長やルシルヴァ副隊長でもでも良いのです。ご承認いただけますか？」
「な、何を申しておる、そのような事は・・・」
ティエラの口許に視線が集まる。

「そ、それはクラトが決める事であろう。私が承認するものではな

い」

「私もそのように考えております」

ファトマに1本取られた形になったが、問いかけの真意にティエラだけが気付いていないようだった。

7－11　二人

エルファは徐々にその力を取り戻し、空に浮いて見せて皆を驚かせた。
記憶が戻ったと聞いたが、俺は出会った時から何も変わっていないように感じた。

エルファはクエーシトでの生活や実験、戦場で放棄された事を恨みに思っており、バルカで生きていく誓約を立てた。
家名もファトマと同じオルセインに改籍し、エルファ・オルセインとなる。
とりあえずというか、本人がどうしてもと言って聞かないので、突撃大隊に入隊となった。
ルシルヴァがいるし、他の軍団に比べれば少しはマシだろうが、俺は気が重かった。
カポルの件は俺が異人なので、約束の意味は知らなかったのだと言うと、元々そんな事を気にはしていないと言って、どういう意味なのか俺を悩ませた。
あやふやな決着だったが、カポルの話はそれきりになった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バイカルノから、エルファを偵察要員として戦場へ投入するよう要請があった。
鎧を準備する事になったが、エルファは“徹底して軽くしたい”と強く希望した。
足には騎馬隊が使う脚部鎧の膝下だけを着用、腰は鎖帷子を巻くのみとし、腹部は無し。
胸部の鎧も下の方を削って軽量化を図った。腕も前腕に篭手のみ装

着する。
しかし、少々露出が大きい。大腿、臍から胸の下までは何もつけていない。
これでは装甲のビキニだ。鎧下を着るように言ったが、空中機動で試したい事があるからと言って聞かなかった。
後日、確かにその効果を発揮する時が来るのだが、兵士達には少しばかり刺激が強い。
しかし、エルファは時間が経過するにつれて天真爛漫さを露わにしていき、今では突撃大隊のマスコットとして大事にされている。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「よーし、第４城壁を一周して訓練終了だ！」
「行ってこーい」俺の頭上から声がする。
「エルファ、お前、俺の頭に乗ってんじゃねぇよ」
「乗ってないよ、私は浮いてるんだから」
「俺の頭の上に来るなってーの！」
「何よ、女の子の股間を見上げてるんじゃないわよっ」
「ふ、ふざけんな！！」

「あー、騒がしくなったねぇ、この大隊も」
「エルファも他の連中がいる時はちゃんとやってますからね。まだ子供みたいだし、隊長に甘えてるんじゃないっスかね」
「クラトは何でも拾ってきちゃうからなぁ・・・まぁ、あたしも、あんたもだけどね」

高い空にルシルヴァとホーカーの乾いた笑い声が響いた。

「なんだ、相変わらず騒がしいな突撃大隊は」
気付くとティエラ姫とラシェット、アイシャがいた。

珍しくファトマも一緒だ。
エルファはファトマを見つけると、文字通り飛んでいった。
ファトマはエルファにとって姉とも母とも思える存在だ。

ティエラがラシェットに目を向けながら口を開く。
「バイカルノ殿預けになっていたラシェットだが、来月から正式にバイカルノ殿の元で軍略を学ばせたいと思う。クラトの許可が必要だ」
「あぁ、構わないぜ。ラシェットはそういう仕事が向いているだろう」
「後、ラシェットの体術はすごいぞ。誰も敵わん。これ程の使い手は見た事が無い」
「体術って格闘かい？」
「そうだ。傭兵やら拳闘士をしていたそうだ。今後は体術の師範としても働いてもらう予定だ」
「ティエラが認めるほどなら間違いないだろうな」「しかし、師範の立場が奴隷ではよろしくないな。早速、解放の手続きを取ろうぜ」
ラシェットが一歩前に出る。
「お言葉ですが、それは出来かねます」
「え、なんで？」
「奴隷の所有につきまして、商人は仕入れてから７２日間は税金がかかりませんが、商人の保護の為に商人以外の者が購入した場合、１４４日間は手放す事ができないのです」
「じゃ、解放もその後？」
「はい、２月１日までは解放できません」
何だか面倒だが、致し方ないだろう。

ティエラが今度はアイシャに目を向けて言った。
「あと、アイシャなんだが、体術ではラシェットとほぼ互角だ」
「はぁ？」

「勿論、体格的には敵わぬが、組まなければ、つまり打撃のみで闘えば互角だ」
「へぇ、アイシャ、すごいじゃないか」
アイシャは照れたように俯く。
「今は赤騎隊と護紅隊で騎馬と剣術を学んでいる。こちらも信じられないスピードで上達しているぞ。クラトはなかなか見る目があるな。お陰で優秀な人材を得る事ができた」
「ま、そんなんで助けた訳じゃないけどな。最初は男だと思ってたし」
ティエラが、ちろっと俺をにらむ。

「クラト様、我ら親子の居場所を与えて頂き、感謝しております。私の怪我まで治療して頂きまして、命を捧げてもこのご恩は返せません」
横ではアイシャが頭を下げる。
「いいよ、そんなの気にしなくて」
アイシャは俺の袖を引くと「私はクラトの役に立つように頑張る」と言って、はにかんだ微笑を見せた。

いつの間にかエルファが俺の肩越しに覗き込んでいる。

アイシャは一睨みして横を向き、エルファは舌を出している。

「これこれ、チミ達は仲が良くないのかね」
2人とも何も答えず、ス～っと去っていった。

ファトマは苦笑いをした。
「クラト様の取り合いですわ。あの子達」
「何にせよ、あいつらを戦場に出したくは無いわな」
ファトマは優しい眼差しを2人に向けたまま頷いた。

8－1　帰還

ギルモアはついにアティーレを滅ぼした。
アティーレの領主はギルモア王族の出身だったが、クエーシトと組んで国内の郷を攻めてはさすがに許されまい。
アティーレ郷を廃止してギルモア領とし、外郭地には蛮族を懐柔して新たな郷を作るとの噂だ。
バルカにとって良い話ではなかった。
この後、パレント討伐は行うとしても、クエーシトに侵攻する余力はあるのだろうか。
ギルモアがパレントを討伐して、この戦乱は終わる。
そんな楽観論も出始めていた。

そんな時だった。ジュノが帰還したのは。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ジュノのグリファ行は身の安全が懸念されたが、サバール隊の情報では、グリファは今回の戦乱はベルサ郷にあるとして、先のルーフェン殲滅戦での方針を転換。捕らえていたルーフェン郷の軍人を解放しているという。
ジュノも名乗り出れば罪を許され、戦力不足の折でもあるのでルーフェン郷かグリファ国の軍団長として招聘されるのは間違いないだろう。
しかし、ジュノはグリファとの同盟交渉自体を行わなかった。
既にギルモアがグリファに使者を送り、不可侵条約を締結していたからだ。
グリファは侵攻したクエーシトに対してもベルサをグリファ領とする事で停戦条約に調印したようだ。

北の戦乱は一気に終結に向けて動き始めたように見えた。
その中でバルカの状況だけが何も変わらなかった。

ジュノは故タレス将軍の身内をつてにカピアーノ博士を探した。
そしてカピアーノ博士はジュノの招きに応じてグリファ郷入りを承諾する。
クエーシトの狂気、同じ研究を強要するグリファ、博士も嫌気が差していたらしい。
もちろんベルファーも同行している。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「うわっ、ベルファーじゃないか！」
ベルファーは挨拶も無しに走り寄ると、跳躍してホーカーに向かった。
避けようとして倒れたホーカーの胸を前脚で押さえ、首に牙を押し当てる。
ジュノの鋭い声が飛ぶ。
「ベルファー！やめるんだ！」
ベルファーはなぜか俺に向かって唸った。
「今度会ッタラ必ズ仕留メルト言ッタハズダ」
「おいベルファー、そいつは人違いだ。名前はホーカーだけど、敵でもなければ奴隷でもない。仲間の為に傷を負い、矢を射る武人なんだよ」
ベルファーは上を向いて「ふぁふ、ふぁふ」と、おかしな声で吠えた。
「ソウカ、違ウナラコノ牙ハ必要無イ。ソレニ、アノ男ノ名前ナド憶エテハイナイ」
ベルファーはまるで“犬のように”スタスタと歩いてジュノとカピアーノ博士の間に戻った。

リアエナルの生物　＝　オルグというのは一般的な感覚だ。
ベルファーは“特別なパターン”だが、誤解を懸念してあくまで“ただの犬”として振舞うはずだった。
しかし、いずれは知られるに違いない。
それならば“見せてしまえばいい”リアエナルという事実と自らが持つ知性と理性を。
これはベルファーの作戦だった。
バルカの人々はベルファーを受け入れた。
知性と理性だけでなく、ベルファーの言動に武人を見たからだ。

カピアーノ博士が歓迎されたのは言うまでもない。
早速、内務府にエナル研究室が設立された。
ベルファーは博士の護衛だが、表向きは“番犬”という事で落ち着いた。

ジュノはベルファーを戦力としてみている。
カピアーノ博士にもエナル研究を期待している。
ジュノならアイシャもエルファも戦力として考えるだろう。
そういう点でジュノはシビアだ。それ故に優秀なのだ。

クエーシトは他国の想像を遥かに超えたレベルまでエナル研究を進めている。
人工マスエナルと人造エナルダ、飛行型エナルダ。
そして当たり前だが、カピアーノ博士はその内情について非常に詳しかった。

クエーシトは、いや、ジョシュは狂っている。
しかし、いくら天才であろうと、1人が狂っただけでは世界は狂わない。

ここまで研究が進んだ理由は狂った人間が多いという事だ。
「求めたのだよ。人間が、時代が、この狂気を」
クエーシトでは人造エナルダを生み出す為に、マスターエナルダを始め、多くの犠牲を生んだ。
犠牲は実験だけではなく、確立された施術でも多く発生しているのだ。

それともう一つ。
これらの施術で使用するために集成されたハイエナルは濃度が低かった。
自然発生したものに及ばないのだ。
故に未覚醒の人間に対する融合では特別な例を除いて中級エナルダのレベルだった。
マスエナルもハイクラスのものは作れないのだ。

ハイレベルのリアエナルダを生み出す為に、エナルダを被験者としたエナル融合を行う方法に至った。
ハイレベルのエナルダを被験者としてエナル融合を行えばエクサーを超える戦闘型エナルダが期待できる。
しかし融合施術に失敗するとエナルダを失う事になるし、オルグ化した場合の危険も大きくなる。
その失敗の原因をジョシュは解明していていないようだが、私は属性の不一致にあると考えている。

これは入手した実験データからの推測の域は出ないが、被験者が元々持っている属性と集成したハイエナル属性の一致が必要という事だ。
ハイエナルは様々な属性のエナルの集合体だが、融合では一番優勢な属性がハイエナルの属性となる。
不一致だと被験者は死亡する可能性が極めて高く、特に優勢が属性

がない場合にオルグ化すると考えられる。
飛行型エナルダについては言葉も無い。
先日、エルファを検査したが、エナルの融合と噴射はエナルの新しい利用ではあると思う。
しかし、それはエナルダによるエナルの利用だ。
エナルダがどんどん人間から離れていってしまう。
このままではいずれ悲惨な結果を生むに違いない。
私は争いを求める者ではないが、クエーシトのジョシュだけは止めなければならない。

私は人間と時代がこの狂気を求めたと言ったが、それはエナルダだ。
人間から離れるために、人間とは別の存在になるために。
意識せずとも求めているのだ。
それを進化と呼んでも良いのだろうか・・・私は答えを持たない。
しかし、私は人間でありたい。エナルダも人間であってほしい。

だから私も協力しよう。

8－2　主人

ラシェットは兵法を学ぶかたわら、体術の指導に余念がない。
しかもかなり厳しいらしく、早くも鬼師範と呼ばれている。
浅黒い肌に銀髪を後頭部でまとめたラシェットは兵士達を次々と打ち倒していく。
3年間も片足が不自由だったとはとても思えない。

ラシェットの訓練では怪我人が多く出る。時には大怪我もする。
大隊長や師団長から苦情が来るが平然としている。
訓練中のラシェットは、まるで人が変わったようだった。
「今のうちに怪我をしておけば死ぬ確率が少しは減るだろう」
「何だと！期待をしていた兵を潰しておいて、その言い草は何だ！」
「嗜（たしな）みとしての体術なら私は師範を降りる。私である必要が無いからだ」
「私の任務は兵士を強くする事であり、それは軍を強くする為に必要なのだ」
「戦闘とは格闘の延長であり、剣や刀は腕の延長だ。剣を振るのではなく、腕を振っていると知らねばならん。腕を振るために胴も足も必要だと知らねばならん」
「バルカ兵は強い。私が見てきた諸国の軍と比べても突出している。それを更に強くしようというのだ。生半可な事では実現できない」
「それに兵士は誰一人として弱音を吐いてはおらん。隊長方も辛いだろうが、黙って見守ってもらいたい」

クラトが訓練棟（くんれんとう）に入った時、肩を怒らせた師団長とすれ違った。
「俺のところのヤツ等は頑張ってるか？」
腕を組んで兵士の訓練状況を見つめるラシェットはチラリと視線を送るや、乾いた声で告げた。

「クラト大隊長、見学でしたらこちらでどうぞ」

少し見ていたが、かなり厳しい訓練だ。
兵士同士の組手が手加減無しで行われていた。
脳震盪で倒れる奴、打撃を受けて立ち上がれない奴もいる。
ラシェットはそれでも止めない。
組手で倒れた兵士に更に一撃を加えてから放置する。
そのままに訓練が続けられるが、ラシェットの一撃はかなりキツそうだ。
食らいたくなければ倒れないようにするしかない。
「よしッ、止めぇ！」
兵士達は倒れている者を引きずって行く。

突撃大隊から参加しているのは第2中隊と第4中隊だ。
ラナシドが俺を見つけて寄って来る。
「こりゃ厳しいですよ、クラト隊長の訓練も厳しいけど、あっちは苦しい訓練、こっちは痛い訓練って感じです」
「そうか、戦場で死なない為だ、頑張ってくれ」
「でも、体力だけは他の隊に負けてませんから、その点は助かってますよ。組手をやると実感するんですが、疲れてくると怪我もしやすいですからね。ウチの隊はそういう点で怪我人も少ないです」

そこへラシェットがやって来た。
「クラト様、先ほどは失礼しました。バルカの兵士は素晴らしいですね。見事に鍛えられている。その中でも突撃大隊は抜きん出ています」
「ま、走り回ってばかりいるからね。訓練でも戦場でも」
「特に腕が下がらないという点では、訓練が素晴らしい証拠です」
「それは嬉しいな。そうだ、俺も訓練に参加してみようかな」
「お断りします」

ラシェットはきっぱりと断った。
「え、なんで？」
「私はクラト様を打てませんので、訓練になりません」
「クラト様以外でしたら、師団長でも軍団長でもお受けするのですが・・・」
「またアレか？もう関係ないだろ？」
「そういう事だけではないのですが・・・」

「あ、そうだ。俺たちは突撃して敵兵と直接切り結ぶんだが、結局は押し合い圧し合いになる。そんな時、どうしても相手との接点は得物だけになるんだな。そういう時の足とかの使い方も教えてやってくれ。後は距離を取る時とか」
「はい、分りました。クラト様は体術をお学びで？」
「いや、俺は剣術しか知らないよ」
「しかし剣術ではそのような事は指導していないと思いますが」
「あぁ、俺がバルカに入った時、ラヴィスと斬り合いになったんだが、刀で押し合いになった時、ラヴィスが俺を蹴ったんだよ。俺は体勢を崩されたし、ラヴィスは距離を取ろうとしたようだ」
「そのような事があったのですか。クラト様のご希望は承知しました。ただ、もう少し後の訓練項目となります」
「それは構わんよ」

「アイシャもティエラ様やラヴィス隊長から指導を受けているので楽しみです」
「しかし娘は言葉遣いが至らなくて申し訳ありません。いつも気になって注意してはいるのですが」
「ああ、いいよ。言葉遣いの事を言い出したら、俺が一番困る」
ラバックとラナシドが笑い出した。
ピサノ大臣への暴言はもはや有名な話らしい。
「お前ら笑いすぎだよ。じゃ、俺は戻るから」

クラトは立ち上がって、ラシェットに「よろしく頼む」と言って頭を下げた。
訓練棟の出口で振り返って一礼する。

ラシェットはクラトの姿が消えてからも少しだけ見送った。

あの突撃隊長は我が主人（あるじ）なのだ。
解放していただいたが、これからも主人（あるじ）であり続けるだろう。

8－3　未来

訓練棟を出た後、赤騎隊の訓練を見に行った。
護紅隊も合同で訓練を行っているらしい。
相変わらず、ティエラとラヴィス、イオリアの騎乗は見事だ。
暫くすると休憩になった。
俺を見つけたラヴィスが馬を寄せる。
「どうしたんだ？何かあったのか？」
「いや、ラヴィスの顔を見に来たんだ。な～んつってな！」
「お前、また殴るぞ」
「やめて。痛いから。ティエラのはもっと痛いけどな」
「ははは、確かにあれは痛そうだった」
珍しく馬上のラヴィスが頬を緩ませる。
「何が痛いと？」
ラヴィスは馬上で背筋を　ぴんっ　と伸ばす。
「あ、ティエラ、ちょうど良かった。ちょっと話があるんだ」
「何だというのだ」
「アイシャとエルファなんだが、あいつらを戦場に出すのか？」
「行かせるつもりはない」
「そうか。訓練があまりに順調らしいんで、逆に心配になってな。済まないな、こんな事訊いて」
「いや、良いのだ。しかし、あの者達の将来を考えると選択肢の一つとして訓練はしておいた方が良いだろう。才能や能力があるのだからな」
イオリアが悪戯っぽく微笑んで口を開く。
「アイシャは突撃大隊の中隊長になりたいらしいのです」
「そりゃ無理な相談だなぁ」

「どうやらエルファが突撃大隊に入ったのを聞いて、自分もと考えているらしいのだ」
「丁度その件で相談があるんだ。エルファを赤騎隊か護紅隊に入れてもらえないかな」

「クラト、それは色々とあってな・・・」
ティエラはやや俯いた。
「クラト殿、エルファはバルカに帰順したとはいえ、元クエーシトのエナルダです。姫の部隊や護衛の部隊に入隊させる訳にはいきません。本来なら突撃大隊への入隊も認められないのですが、姫のお言葉添えがあって今の編成になっているのです」
「そうか」
「済まぬな」
「いや、俺が知らないところで気を遣ってもらってたんだな。こちらこそ済まなかった」
「しかし、突然エルファの所属の話とは・・・まさかカポルの件でも再燃したのか？」
ラヴィスが言うとティエラも伏せていた顔を上げた。

「いや、それは無いよ。それっぽい話すら出てこないし」
「ただ、あの格好だしなぁ。子供っぽくて何かと馴れ馴れしかったりするし、ちょっと支障が出そうなんだよな」
「それを指導するのもクラト殿の任務ではないのですか？」
イオリアはピシリと言う。
「確かにイオリアの言う通りだ」
「イオリア、ありがとう。ダメな所を言ってもらえると助かるよ」

クラトは帰っていった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「あの方はいつも自然体ですね。変な力が入っていないというか、不思議な魅力がありますね」
「そ、そうか？イオリアはあのような男が好みなのか？」
「確かに甘いところはありますけど、暖かさの裏返しともとれますし、例の暴走癖を見れば甘いだけとは思えません。変に格好をつけたり、えらぶるところもありませんし」「何にせよ、この世界では見かけないタイプですよ」
「ほ、ほう、その様なものか？」
「でも、私はもっとクールな方が好みなもので・・・」

そんなところにアイシャが駆け込んでくる。
「クラトが来てる？」
「こら、“来ていますか？”でしょ、それにあなたがクラト殿を呼ぶなら、様か隊長をつけなさい」
「はーい・・・」
「クラト殿は帰りましたよ」
「えぇ～」
「ちょっと寄られただけなのです。でも、あなたの事を気にされていましたよ。大事にして欲しいと仰ってましたよ」
「ホント？」
「えぇ、本当ですとも」
「私、突撃大隊に入りたい。クラトの役に立ちたい」
「その為に訓練をしているのでしょう？あなたはまだまだです。もっと頑張らねばなりません。礼儀作法もですよ」
「はい。わかりました」
「よろしい。では休憩の後は馬の手入れをしてから、剣術の訓練をしましょう」
「はーい」
アイシャは厩舎へ走っていった。

「うーむ、イオリアはアイシャの扱いが上手いな」
「アイシャの才能は、将来において有益です。大事に育てたいと思ってます」

イオリアはアイシャを赤騎隊の分隊長か護紅隊の隊員にさせたいと思っているようだ。
ラヴィスもティエラも同じ事を考えていた。
しかし、後にアイシャはバルカ初の夜間部隊“銀狼隊”を率いる事になる。
ただ、それはまだまだ先の事であった。

未来とは誰も知らないにも係わらず、誰もが思いを巡らすものだ。
未来とは思い通りにはならないが、それが不幸であるとは限らない。
そして、思い通りになる事が幸福であるとも限らない。

未来とは誰にも分らない。
何が起きるのかもどうなるのかも。
そして、いつまで続くのかも。

8－4　自嘲

ギルモアの参戦から3ヶ月が経つ。
ギルモアは10月33日に参戦を宣言、アティーレ討伐隊の13，000は緒戦の快進撃から30日余りでアティーレ本城を包囲するものの、クエーシトの飛行大隊やエナルダ部隊の奇襲によって敗走。更に略奪の発覚によりギルモア後続部隊からの攻撃を受けて壊滅してしまった。
その後続部隊もクエーシト・アティーレ・パレントの反撃により敗退。
この戦いでギルモアの損害は7名の軍団長を含む将校24名、兵員18，000にも及び、11月36日にはアティーレから完全に撤退した。
しかしギルモアは本来の力を発揮する。12月15日には反撃を開始、15日後の1月10日にはクエーシト飛行型エナルダ2体の撃破に成功する。
2月6日にはアティーレが滅亡、16日にはパレントがギルモアの直轄地となる。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

これで戦乱は終わるだろう。
誰もがそう考えた。事実、この3ヶ月、バルカ領内ではほとんど戦闘が行われなかった。
この間、フィアレスとバイカルノは戦力の補強を急ぐ。徴兵と訓練の実施だ。
大臣達は国力が疲弊しているとして異を唱えたが、2人の軍師は全く顧みなかった。
8日にカピアーノ博士とベルファーを伴って帰還したジュノは、早

速第４軍の編成を実施した。
ジュノは防御的遊軍として稼動する予定だ。
防衛戦といえばバルサムの第２軍団だが、場外での防衛戦や追撃戦ではジュノが上だ。
先の戦いでもその能力を遺憾なく発揮しており、大きな期待が寄せられている。
そして突撃大隊だが、単独行動や赤騎隊以外の軍団と連携する作戦も増えてきた。
これは赤騎隊が出陣しない時も突撃大隊は稼動しているという事だ。
突撃大隊はなかなかの評価を受けているらしい。
特に戦死率の低さは際立っており、フィアレス軍師から高い評価を得ている。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

そんなある日。
クラトはティエラの執務室にいた。ティエラは大臣達と会議だし、ファトマは侍女達を連れてティエラの軍装を引き取りに出ている。
執務室にはクラトとラヴィスだけが残された。

「なぁ、ギルモアはどうすると思う」
「ん、私はバルカに攻め込むような事はしないと思う」
「俺もそう思うよ。でも、バイカルノの話だと、ギルモアの新しい軍師ってのは相当出来るらしいぜ。出来る奴だからバルカを攻めるんだとさ。パレントで兵力を使わなかったのもバルカ攻めの為だって事だ」
「姫もフィアレス軍師から同じように聞いているみたい。そもそもフィアレス軍師はギルモアが参戦した時から指摘していたし・・・それでも私は“まさか”と思う」
「ま、俺たちは命令を受けて戦うだけだ」

「そう・・・ね。今のバルカにおいて突撃大隊は大きな戦力なの。正直なところ、私は見直してる。クラトには師団か軍団を任せるべきだと思うし、装備にもっと注文をつけても良いと思うけど」
「ま、与えられたものでやるのが仕事だよ」
「すごいね、クラトは」

いつからだろう。
2人で話をする時の口調が変わってきた。
パーキングの娘との関連付けは俺の頭の中では随分前に無くなっている。
ラヴィスはラヴィスだ。

少しの沈黙があった。
「そういえば、エルファはどう？」
「あぁ、相変わらず無邪気に元気だな。ファトマが上手く言ってくれたようで、大分大人しくなったよ、空中機動の訓練を懸命にやってるし」
「まぁ、ウチの隊員たちに可愛がられているよ」
「そう・・・カポルの件は？」
「え？」
「い、いや、どうでもいいんだけど、姫も随分と心配していたから」
「何でもないみたいだ。元々そんな事は気にしてないってさ」
「何だか微妙な感じね」
「そうだけど、今のところは何ともしようが無いしな」

2人の会話は決してスムーズではなかったし、少し居心地も悪かった。
でも、俺はこの時間が続けば良いと思った。

俺は中坊か。でも、こんなのも悪くない。

そのうちラヴィスは居たたまれないように席を立つと、「様子を見てくる」と言ってドアを開けた。
その背中を俺の声が追いかける。
「今度、カポルでも探しにいこうか」
「え？」
ラヴィスは“なぜ？”というような、怯えたような、そんな表情を見せた。
「ん～、みんな食べたそうにしてたからな。喜ぶだろうと思ってさ」
「なんだ、懲りてないな。それにカポルは時期が過ぎてる」
両手の甲を腰に当てて呆れたように言うと、ドアの外へ消えた。
次の瞬間、俯くように視線を外した顔だけをみせて、「来年の春になればカポルも実るだろう。その時に行こう」と言って、すぐに消えた。

暫く後にティエラと一緒に戻ってきたラヴィスは、いつもの口調に戻っていた。

ティエラの話では、大臣連中はバイカルノを高く評価しているらしい。
それを聞いたバイカルノは「俺が天才ではないという証拠だ」と自嘲して語ったという。

8－5　不器用

ギルモアはついにアティーレ、パレントを降した。
クラトは一時的な軍事空白地となった北東方面の警戒に当たっている。
追われていたエルファと出会った森の東、旧アティーレ・パレントの領境だった場所だ。
今日で警戒任務は完了となりバルカ城へ戻るのだが、サバール隊の隊長サイモスからバイカルノへの報告を受けてから出発となる予定だ。
サイモスは相変わらずうだつの上がらない風采で、見る者にはいかにも愚直な連絡要員といった印象を与える。
しかし実態は、非常に能力が高い隠密系のエナルダだ。
もちろん属性は“気”
クラトやルシルヴァのように大剣を振るうのは苦手だが、瞬発力と移動能力に優れる。防具を装着しない、つまり戦場以外での戦闘能力は特筆ものである。

受け取った情報は「グリファに異常なし」「クエーシトのエナルダ実験の停滞」だった。
ただ、クエーシトに潜入させた2個小隊（サバール隊の小隊は3人）は2名しか帰還しなかった。
この6名は優れたエナルダだったが、クエーシトのオロフォス隊と遭遇、4名が討たれたのだという。

「オロフォス隊の隊長はルヴォーグってヤツだ。とてもじゃないが敵う相手じゃない。オロフォス隊もだいぶ消耗しているようだが、ルヴォーグを筆頭にとんでもないヤツが数名いる」「クエーシトの

エナルダには気をつけろ」
「あぁ、恐ろしいヤツだよ、ジョシュってのは」
サイモスは話を結論まで進めたクラトを不愉快そうに見た。
「そういえばお前、ノッカーって呼ばれた女エナルダに止めを刺さなかったらしいな」
「・・・」
「死にそうな女を眺めるのが趣味なのか？」
「なんだと？」
「お前がどんな趣味を持とうと構わんが・・・」
クラトの右拳がサイモスの顎に飛ぶ。
しかし拳は左に受け流され、逆手に握ったナイフがクラトの目前に据えられた。
「お前の趣味が何だろうと構わんが、頭目の手を煩わせるな」
「お前こそバルカを裏切るんじゃねぇぞ、敵になったら真っ先にぶっ飛ばしてやるぜ」
「ふざけるな。バルカに飼われているお前とは違う。俺は頭目に従うだけだ。それに・・・もし敵になったら戦場に出る前に片付けてやる」
「話は済んだぜ、行きな」
サイモスは席を立つと、うだつのあがらない連絡員の顔になる。
その顔が不敵に笑って言った。
「さっきのお前の拳は戦場の突撃大隊と同じだ。良く覚えておけ。お前に簡単に死なれては困るんでな」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クラトは警戒任務を終えてバルカ城に戻った。
バイカルノにサバール隊の報告内容を伝え、預かった荷物を手渡す。
バイカルノはサバール隊によるギルモアとクエーシトの要人暗殺を検討している。

暗殺の対象となるのは、国王や領主、軍師や軍団長、エクサーやマスターエナルダなどだが、両国のガードは非常に厳しく、やり遂げるとすればサイモスが行かねばなるまい。そして、実行すれば結果に係わらず生還は難しいだろう。
それが故に対象も絞り込まれた。ギルモア国王マハール・ギルモア、クエーシト国ジョシュ・ティラント博士、そしてギルモアの三席軍師セシウス・アルグレインが付け加えられた。付け加えたのはフィアレスだ。そしてバイカルノはクエーシト軍師のデュロン・シェラーダンの名をあげた。

バイカルノは手渡された荷物を興味が無いように放ると「サイモスは不器用なヤツでな」と呟いた。
「そうらしいな。親切面が出来ないヤツだ。自分を傷つけずには他人に優しくできないんだろう。本当に不器用なヤツだよ」
クラトの言葉にバイカルノは少し驚いたようだったが、困ったような顔をして笑った。

サバール隊の隊長が務まる人間はそうそういない。サイモスがいなくなればサバール隊は存続できないだろう。
しかしギルモアの侵攻を受ければバルカは滅ぶ。選択の余地は無い。
そこへ急報が飛び込む。
確認不明の軍隊がバルカ北部へ侵入したという知らせ。
レガーノ第１軍団が出撃準備を整える間、ジュノが軽騎５００を率いて出撃していった。
その直後、サバール隊からの情報。
侵入したのはギルモア軍。
「最悪だ・・・早すぎる」

緊急の軍事会議が召集された。軍師・軍団長・ティエラ旗下部隊長のみで防御戦を打ち合わせる。

「まさか、ギルモアが・・・」
大臣達はほとんど茫然自失の状態だった。
そしてフィアレスの言葉を思い返していた。
“ギルモアにバルカという防壁は不要なのだ”

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ギルモアのバルカ侵攻は驚くほど迅速に行われた。
アティーレを滅亡させたギルモアはパレントの領主を追放。ギルモアから新領主を派遣する事で収め、クエーシトへの不可侵を宣言する。
あまりに早いギルモアの外交。
全てはバルカ侵攻のためだったのだ。

俺は混乱していた。
崇高な精神も頑強な肉体も、より大きな力の前では消え去るしかないのだ。
理不尽とさえ思った。
いつの間にか俺はバルカが好きになっていた。その風土も人間も愛し始めていた。
世界を失った俺が得た世界。それがバルカだった。
そのバルカが滅ぶ。
焦り、不安、恐怖、気持ちばかりが急いている。

会議場へ入ろうとすると、飛び出してきたラヴィスと鉢合わせになる。
ティエラがまだ来ていないという。
「わかった。俺が呼んでくる」
ラヴィスは席に着くや書類を広げた。フィアレスから配布されていたギルモア軍の構成と兵力分析だ。

会議場は一種異様な雰囲気に支配されていた。
大臣達は明らかに混乱していたし、軍団長達は会議に時間を取られる事に苛ついていた。
その中でフィアレスは超然としていた。彼はギルモアのバルカ侵攻を予見し、準備をしてきたのだ。
フィアレスを除かねばならないと考えるヴェルーノ卿もバイカルノで補えるのかと不安を感じるにはいられないほどの圧倒的な存在感。
バイカルノはこの会議の議長だ。フィアレスの意見をそのまま作戦・指示に変える為の配慮だ。
そのバイカルノはジュノからの伝令を接見しているという。
フィアレスは左目と鼻から下を覆った布の下で苦笑いを浮かべた。
「水も軍勢も流れる場所は決まっているだろうに・・・」

会議場は声に出すと出すまいと誰もの思考が入り乱れていた。
その中でフィアレスの意識だけが真実を知るのだった。

8－6　世界

ギルモアの侵攻に対してバルカはどのように対処すべきか。
重要かつ緊急の会議にも関わらず、会議場にティエラの姿がなかった。
クラトがティエラの執務室へ走った。

ティエラの執務室には侍女が1人控えているだけだった。
「ティエラはどこだ?緊急の軍事会議なんだ」
「ティエラ様は只今、奥室にいらっしゃいます」
奥室とはティエラが通常生活している部屋だ。寝室や衣裳部屋、食堂、浴室など、生活に必要な設備は全て備えている。
「案内してくれ、急いでるんだ」
「なりません、私がご用件をお伝えいたします」
「そんな悠長な事いってる場合じゃねぇんだ、ギルモアの軍勢がバルカに攻め入った」
「ギルモアが・・・」
侍女ですら言葉を失う未曾有の危機。
「早くするんだ!」
侍女は混乱と俺の勢いに押されてティエラの奥室へ急いだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バイカルノが伝令から得た北部戦線の情報は次の通りだった。

ギルモア軍は北部の町カペリアを攻略し、そこへ軍を入れている。
ジュノは使者を立て、バルカ郷として正式に抗議した。
勿論、時間を稼ぐ為だ。
宣戦無き侵攻への抗議に対し、ギルモアの回答は「軍事行動におい

て未遂は実行と同等の脅威と判断する」であった。
要するにバルカの“ギルモア侵攻作戦”が事実であったと判断し、その脅威を排除する為の侵攻であるから宣戦を行う必要が無いというのだ。
つまり6年前から戦争は始まっているとの認識だ。酷いこじつけだが、そんな事はどうでも良いのだろう。
ジュノは少し軍を下げ、要所に地形を利用した防御陣を張る。
ギルモア軍はいつになく慎重だった。
ギルモア軍は進軍を停止、今や前線基地となったカペリアには続々とギルモア兵が到着している。
ギルモアは無理に力押しをしない。バルカの降伏を待っている観があった。
ジュノは再度使者を立て、受けていない降伏勧告について本城に報告して回答すると伝える。
ギルモア軍からは一言「明日正午」と伝えられた。

初戦はジュノの完全勝利といえる。ジュノの機転により、とりあえずの時間は確保できた。
バイカルノの懸念は挙国一致の体勢が取れるかどうかだ。
混乱はパニックとなり、不安に耐えられない者は安易な解決策に頼ろうとする。
とにかく落ち着かせなければ。
明日の正午までの時間を確保した事で落ち着きを取り戻せるだろうか。
逆に降伏論などが出ては本末転倒だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クラトがティエラの奥室に入ると、そこは小さな居間のようになっていて奥にはいくつかのドアが見えた。それぞれが寝室や衣裳部屋

の入口らしい。
「ここで少々お待ち下さいませ」
侍女は一つのドアをノックして声をかける。
「ティエラ様、緊急の会議との事でお迎えがいらしております」
「わかっておる。暫し待て」

「ティエラはこの部屋にいるのか」
「おいティエラ！大変だ！ギルモアが攻めて来たぜ！」
「クラトか？すぐに行く、そこで待っておれ」
「そんな悠長な事いってられねぇよ、みんな待ってるんだって！」
ドアを叩くと重い音が響く。
「急いでくれよティエラ！入るぜ！」
「なりませぬ！」侍女がドアの前に身体をねじ込もうとする。
イオリアの声が響く。「クラト殿、姫は只今・・・」
クラトが力を入れるとドアノブが（ガコン）と鈍い音を立て、ドアは意外なほど簡単に開いた。
赤い甲冑が目に入った。
「おい、急げって・・・」
見れば、甲冑は立て台に掛けられていた。
ふと左に視線を送るとティエラがいた。
口を引き締め頬を染めた顔、驚きと緊張の顔、そして恥じらいと怒りが綯い交ぜになった表情だった。
イオリアはドアが開いた勢いで尻もちをついているし、ファトマは鎧下を両手に捧げ持ったまま固まっている。
クラトは気付いていないように、いや、本当に気付いていないのだろう、ティエラの腕を取ってドアへ向かおうとする。
ティエラが腕を振りほどく。
「どうしたってんだよ、ティエラがいないと会議が始まらないぜ」
「どうしたって・・・こんな格好で行けるかぁ！！」

「えっ？あ！？」
間の抜けた声を残してクラトの身体は浮いた。
イオリアが割って入る間も、ファトマがティエラの身体を隠す間も無かった。
腕を捻ってバランスを崩させ、低い姿勢から膝の裏を持ち上げて投げ捨てたのだ。
その間に鳩尾（みぞおち）へ一撃加えている。
ラシェットから学んでいるという体術の一つだろう。
「痛ぇ・・・」
起き上がろうとするクラトを尻目に素早く鎧下を着けたティエラが更に蹴る。
「お主という男は！無礼な！何も見えんか！何も気付かんか！このバカモノめが！」
完全に固まったイオリアとファトマ、侍女達を残して逃げるクラトと追うティエラは奥室を出て行った。響くのはクラトの悲鳴ばかりだ。

8－7　生贄

ティエラとクラトは会議室に現れず、赤騎隊副隊長のイオリアが姿を見せた。

会議場は明らかに苛立っていた。

ピサノ大臣がフィアレスをちらりと見てからイオリアを問い詰めた。

「ティエラ姫はどうなされたのだ?イオリア副隊長、説明せよ」

いつもは冷静なイオリアも落ち着きを失っていた。

「その・・・ティエラ様は・・・」

やめてくれー!痛ぇって!うぎゃー!

ざわつく会議室。

「あれはクラト大隊長の声じゃないのか?」

「・・・はい」

イオリアの声は消え入りそうだ。

「あの・・・ティエラ様が御召し替えの最中にクラト殿が・・・」

「姫は・・・その・・・何もおまといでは無かったもので・・・」

「はぁ!?」ラヴィスが思わず声を上げる。

「はぁ!?」誰もがラヴィスと同じ声を上げた。

ここでフィアレスはひとしきり笑った後、急に真面目な顔をした。

そして、裁判官が判決を告げるように言った。

「クラト大隊長の所業は万死に値するが・・・今死なれては困る」

レガーノが笑い出しながら言った「またアイツか!」

ピサノ大臣が珍しくレガーノに乗った。

「あの声を聞く限りでは、多少の同情は禁じえないな」

ひとしきり笑いが広がり、そして収まる頃には会議室の空気は一変

していた。

そこへバイカルノが姿を見せる。

（なんだ？随分と落ち着いてるじゃないか）

いぶかるバイカルノの耳に、遠くで人の喚くような声が聞こえる。

バイカルノはラシェットに訊ねた。

「外が騒がしいが、戦前（いくさまえ）の景気付けに猪でも屠（ほふ）ろうとしているのか？」

突然、会議室に笑い声が溢れた。

「生贄（いけにえ）か！姫の準備運動としては十分だな！」

第３軍団長アヴァンの声が響く。

意味が分らないといった顔で会議場を見渡すバイカルノを残して笑い声は続いた。

会議はティエラとクラトを除いて行われた。

決定事項については形式上ティエラ姫の承認が必要だ。

フィアレスがティエラ姫に報告を行って承認を得、クラトにはラシェットが説明する事となった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

戦力動員能力はバルカ８千に対してギルモア１２万、先のアティーレ戦で３万近い損害を出してもなおこれだけの戦力差があるのだ。

ギルモアの動員能力も然る事ながらバルカの消耗があまりにも激しい。

バルカ城の第３城壁の南門では出撃準備が整った軍団が整列していた。

ティエラが馬上から全軍へ訓示。

ギルモア軍が我々のバルカ郷へ侵入した。聞けばバルカの降伏を待っているというではないか。
恩を忘れて軍を差し向けるのみならず、バルカが降伏すると考えているとは、何と愚かな者達であろうか。
この度の戦は我も尖兵となって戦う覚悟である。相手は忘恩の愚者だ、容赦はいらぬ！武功を示せ！直ちに出陣せよ！！

歓声が上がり、誰もが刀や剣を空に突き上げた。
この歓声が戦場では鬨(とき)の声となって敵陣へと雪崩れ込むだろう。そしてギルモアに痛撃を与えるに違いない。
少なくとも一撃だけは。

赤い甲冑に身を包み、純白の駿馬に跨ったティエラは赤騎隊を率い、突撃大隊と護紅隊がこれに同行する。
敵は大軍だ。突撃力の規模も大きくしたい。突撃大隊はティエラの戦術上も不可欠だった。
「クラト！今日の戦、私と共に来い」
「えぇ～！？」ティエラからの“お仕置き”で顔にあざを作ったクラト。
「つべこべ抜かすな！」
「へぇ～い、わかりました～」

「何だよ、クラトは戦が始まる前からズタボロじゃないか」
バイカルノの声に笑いが湧く。

誰もが覚悟し、戦いに赴いた。
バルカの滅亡は自分の世界の消失だ。異世界から来たクラトでさえ同じように感じた。
クラトがいた世界ではこの感覚が希薄だ。
国家の命運を自らの命運とは考えない。

国家の存亡など考えもしないし、己の消滅など思いもよらないのだ。
だから“国の境が命の境である事”を忘れる。
人の生死は僅かな距離や時間で左右される。命とはそういうものだ。
命を懸けない者はそれを忘れ、命は保たれるものだと誤解する。

この世界の国家とは最大の組織にして、個人にとっては祖先が営々と築き、続いて来た世界そのものだ。
そして精神そのものであり、自らの居場所であり、プライドでもあった。

8－8　信頼

ギルモアはバルカへ侵攻を開始した。
思いも寄らない戦略だった。

アティーレを滅亡させたギルモアはクエーシトへは侵攻せず、パレントの領主を追放。
ギルモアから新領主が派遣される事で収めた。
余りにも早いギルモアの外交。動かしているのは誰だ？
これまでとは違う。全てはバルカ侵攻のためだったのだ。

バルカに侵入したのは第１・第３・第５軍団の１５，０００。
アティーレ本城を攻め落として実戦経験も豊富、今のギルモアにおいて最も強力な軍団である。
特に第３軍団は遊撃を行う精鋭だ。
その第３軍団は迎え撃った突撃大隊に２個師団を差し向けてきた。
対峙してみると侵入した軍なのに動かない。
突撃大隊の攻撃に対しても無理に防がず受け流す戦い方に終始する。

「ちいッ、手応えがまるで無ぇ！」
「本隊が見つからないよ！」ルシルヴァの声。
ラナシドがクラトに馬を寄せる。
「このまま留まれば封殺されます！一旦戻りましょう！」

しかし、敵は包囲すらしなかった。
敵としては城に近づくのが第一だ。
野戦では無類の強さを誇る突撃大隊が撤退するなら、むしろ歓迎すべきというところなのだろう。

その時、スパイクが声を上げる。
「見えた！見えました！」
「見つけたか！」
「右前方！先ほどから４０騎ほどの部隊に隊形の変化がありません。中心の数騎は肩当の色が違います」
「確証が薄いな・・・」
ラナシドが言う。

クラトは即断した。
「よし、突っ込むぞ！」
「しかし、１回だけだ、違ったら即引き揚げる」「スパイク！今からお前を１番隊にする！」
「あ、あいっ！」
気が急いているのか、緊張しているのか、スパイクは甲高い声で返事をする。
しかし、さすがに行動は早い。すでに大隊の先頭で突撃を開始している。
クラト、ルシルヴァ、ヴィクトールが続き、ラバックとラナシドが左右を固める。

敵は明らかに“動揺した”ように見えた。
敵兵が壁を作り、突撃の速度が緩んだ。
ここで繰り返し行った訓練が発揮される。
左右を進むラバックとラナシドが前面の敵防衛陣を避けるように左右へ展開、局地的な包囲戦に移行する。
これは包囲する左右の両翼が更に後方から敵に包まれる危険性を孕んでいる。必要なのはスピード。
包囲と殲滅、とにかく迅速に完了する事が要求される。
突撃大隊が想定している局地的包囲戦は６つの隊で行う。

中心に2隊、左右に2隊づつだ。

中心の2隊はヴィクトールとラナシド。敵の圧力に耐えて時間を稼ぎ、後方の長弓隊の防御を兼ねている。
左右の各1隊が敵を排除しつつ敵部隊の後方へ進出、敵を分断する。
これは俺とルシルヴァが行う。
残ったスパイクとラバックは俺とルシルヴァの隊を援護しつつ側面へ。

包囲が完了した時点で全軍で敵の殲滅を行う。
この局地的包囲戦は包囲した敵の殲滅途中で左右の各1隊が既に新たな包囲のために左右へ展開する事で完了する。
これを連続して行うと敵陣に食い込んでいけるのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

敵陣の壁を破ったとき、本隊と目していた一隊が逃走を始めた。
「追えっ！！」
敵の本陣を見つけた。もう迷わない。突撃して敵本隊の殲滅を目指す。
本隊が消滅すれば軍隊は脆い。
常人を戦士に変える装置は破壊され、戦士は常人に戻り無力化する。
戦場で無力化した人間は刈られるのを待つ草だ。

しかし不思議だ。追えば追うほど敵の陣が厚くなっていく。
先ほどまでと違って圧力がある。
つまり混乱していないという事だ。

その時、敵とも味方ともなく声が上がった。
「狼煙だ！」

振り返ると黄色を帯びた煙が上がっている。バルカ軍の撤退合図だ。
同時に声が上がる。
「赤騎隊の所在が不明です！」
この時、頭をよぎったのはティエラではなくラヴィスだった。
いつだっただろう、ティエラは言った。

私が何の憂いも無く突撃できるのはラヴィスの存在が大きいのだ。
ラヴィスは確かに優秀だが、私があやつを信頼する理由は、その誠実な人間性と真摯な姿勢にある。
だからこの命を預けられるのだ。
私が戦場で斃れる時、ラヴィスは生きてはおるまい。

身体を走る電流と共に脳裏に映ったのはラヴィスの拗ねた顔だった。
いつだってそうだった。気付くのが遅い。

8－9　風砕

侵入したギルモア軍は精鋭を誇る第3軍団だが、バルカ突撃大隊の攻撃を受け流し持久戦に持ち込む。
本隊と思われた部隊もカモフラージュだった。
無駄な時間と体力が削られる。

そして気が付けば、赤騎隊と分断されていた。
「ルシルヴァ！俺とヴィクトールが抑える。他の隊を撤退させろ！」
「・・・分かった！」
言いたい事や聞きたい事があるのだろう。しかし言わないし訊かない。
ルシルヴァは優れた副官だ。

俺の隊もヴィクトールの隊もだいぶ叩かれた。
やっと城に戻ると、ティエラは帰還したものの深手を負ったという。
敵は僅か１５０騎の赤騎隊に２個師団２，０００をぶつけてきたらしい。
これで敵の作戦目的が分かった。ティエラだ。
バルカ郷の王位継承者にして赤騎隊の隊長。赤い旋風と呼ばれるエナルダ。
バルカ軍の戦力的に、そして何よりバルカ兵の精神面で大きな存在だ。

「くそっ、甘かった」
バイカルノが呻くように漏らす。

既に新たに出撃した第2軍団が場外で防衛陣を構築している。
敵の主力は既に後方へ動き始めたという。

それでも俺の心はざわめいたままだ。
ラヴィスがまだ帰還していない。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ギルモア軍は撤退を開始したが、バルカ軍の被害も大きかった。
赤騎隊はその多くを失って、ティエラも深手を負った。
そして、護紅隊は１人も帰還していない。

赤騎隊副長イオリアの報告では、護紅隊は退路を断とうと動く敵に一撃を加えて戻る予定だったが、それきり戻らなかったという。

突撃大隊もだいぶ消耗している。まずは負傷者の収容と戦力の確認、再編成を行う。
ヴィクトールの部隊はラバック隊に、俺とルシルヴァの直属はスパイク・ラナシド隊に合流させ、ホーカーの長弓中隊を含めて、ラバックに一任した。

俺とルシルヴァ、ヴィクトールはイオリアを伴って捜索に当たる。
城を出てみると、まだ各所で小さな戦闘で行われているようだ。

「こちら方面からの撤退でした」
イオリアの顔が化粧よりも白く見えた。
ふと小さな丘の先に闘気を感じる。
確信めいたものを感じつつ急行すると、丘の先は小さな崖になっていた。
崖は１０リティ（約８ｍ）ほど落ち込み、左の先には敵兵を確認した。
１個大隊はいるだろうか、その敵軍の意識は一点に集中されている。

その一点。
敵兵に相対（あいたい）するラヴィスが崖の下に居た。
兜は脱ぎ捨てたのだろうか、黒髪が鎧を流れるように垂れている。
敵と対峙するラヴィスは腰を少し落として構え、凄まじい闘気を発している。

俺は息を飲んだ。
ラヴィスの左腕は無かった。
鎧のいたる所が割れ、右手に構える刀も折れて刀身が半分しかない。

「ラヴィス！！」
ラヴィスは冷徹な戦人（いくさびと）の顔で振り返り、ふいに悲しみの色に染まる。
刀を構えていた右手も下ろし、戦闘姿勢すら解いて立ち尽くす。
ただ顔だけで崖の上の俺を見上げた。
それは溢れそうな涙を堪えている表情にも似ていた。
敵兵も俺たちに気付く。およそ２００。
俺たちは崖を滑り降り、ヴィクトール、ルシルヴァがラヴィスの前で構える。
数的には絶望的な戦力差だ。

「ティエラは無事だ。お前は良くやった」
抱き支えながら、ラヴィスが一番聞きたい事を伝えてやった。

なんて事だ。ラヴィスの身体は細くて軽い。
知らなかった。
地面に横たえようとすると、ラヴィスは刀を捨てて俺にしがみついた。
抱きしめると、ラヴィスは右手を俺の背に回す。
強く抱きしめた。ラヴィスの右手にも力がこもる。

しかしラヴィスの右手は、ふいに落ちて地を叩く。
ひと言もなくラヴィスは逝った。
ラヴィスの身体を地面に横たえ、ぼろぼろになったマントをかける。

「ラヴィスは死んだぜ」
イオリアは唇を噛む。
「くっ、致し方ありません。遺体と共に撤退しましょう」
「・・・けんな」
「クラト殿、速やかに撤退を・・・」
「ざけんじゃねぇよ!どいつもこいつも!!」
「クソッ・・・俺もだ・・・クソ野郎が!!」

クラトは敵陣に突っ込む。ヴィクトールが続いた。
ルシルヴァはイオリアに「ラヴィスを頼む」ひと言残してクラトを追った。

ギルモア兵は風の音を聞いた。直後に意識が寸断される。
空気を切り裂く大剣と戦斧、それは常識を超えた力によって繰り出され、風のようにギルモアの兵を薙いでいく。
１０リティ先に敵が迫っているという認識を最後に次々と倒されていく。
聞こえるのは風の音、甲冑が砕ける音。それだけが続いた。

9－1　睥睨

ギルモアとの戦いにより、バルカは護紅隊長ラヴィスを失った。
しかし本当の激戦はこれからだった。

補充を受け、再編成されたギルモア第１・第３・第５軍団１４，０００が北から侵入。
バルカ軍は第１・第４軍団４，０００でこれに応戦にあたる。

更にギルモアは西および南方面から各５，０００がバルカ城を目指して進軍を開始。
急報を受け、ジュノが北方面から帰還、バルサムと共にバルカ城の防衛戦にあたる。
またフィアレスは第３軍団長アヴァンと共に２，０００を率いて南西へ向かい、西から侵入した５，０００の進路に兵を伏せるという。

フィアレスの出陣にバイカルノを始め大臣達も強く反対した。
バイカルノは自分が出撃すると進言したが認められない。
「良策はいくつもあるが、最善策は常に１つだ。そして、今回は良策ではなく最善策が必要なのだ」

そして説明するように付け加えて目を閉じた。
「敵はこの１０，０００だけではないし、バルカの戦いも今回だけではない」
その後ぼそりと呟いた言葉は誰にも聞こえなかった。
「最後ぐらいは疾風の軍師でありたいものだ」
彼には余り時間が残されていないのだ。
分るという事は時として残酷だ。

フィアレスはバイカルノ傭兵団が入城してから自分が高揚しているのに気付いた。
バルカ滅亡の危機はこの数年で見え初めていた。
それでも動かなかった心が今になって熱くなるのだ。
原因は分っている。バイカルノとクラトだ。
バイカルノは確かに優秀だ。まず状況の把握と展開の読みが早い。
立案能力と実行力、それに人を動かす力もある。
バルカ軍団長達の評価も高い。軍師として十分にやっていけるだろう。

しかし・・・“疾風の軍師”には遠く及ばない。

作戦に１００％はない。情報もそうだ。
断片的な情報の上に作戦が立案される。
少しでも可能性を高めようと斥候を放ち、数え切れない状況パターンをなぞる。
バイカルノは事実を積み重ねて、常に最善策を提示する。
状況から判断しうる最善策である事は間違いない。
フィアレスはバイカルノの能力に驚きながらも、小さな落胆も感じていた。
バイカルノの策は“人の策”であった。状況から作られている。
フィアレスは状況を作るのだ。

誤解を恐れず言うのであれば、フィアレスが感じる寂寥感は、言葉が通じない動物と暮らしている寂しさに似ているかもしれない。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

レガーノは被害を避けつつ持久戦に持ち込み、時として奇襲をかけて敵の戦力を削いでいく。

ここではエルファによる撹乱作戦も行われた。
夜陰に乗じて敵陣上空に侵入し、空対地連装ボウガンを幕舎に撃ち込む。
レガーノの作戦と相まってギルモア軍の侵攻スピードは極端に低下、ついには停止してしまう。

一方、バルカ城から3ファロ（約1．2ｋｍ）に集結したギルモア南方軍5，０００は第１０・１１軍団で組織され、堅実な将軍に指揮されていた。
かつてアティーレ本城を包囲した時のような油断は全く無い。

この時、バルカ城には突撃大隊の４００と急遽組織された第５軍団1，０００、後は赤騎隊８０騎ほどがあるだけだった。

クラトに出撃待機の命令が下った。相手は5，０００。
かつてこれ程の軍勢に突撃を行った事はない。
しかも戦場は開けた平原だ。どのように近づいても発見されてしまうだろう。

クラトに命令が下る前、城を出たフィアレスは既に手を打っていた。
2個中隊規模の強行偵察隊を組織し、バルサムを指揮官としてバルカ城の東に展開させる。
これはギルモアの北方面軍と南方面軍の連絡を絶つ事が目的だ。
ギルモア南方面軍5，０００は主力と連絡が取れず不安を感じるだろう。
そして西から侵入した5，０００と連携を取るに違いない。
西方にはサバール隊を派遣し、情報収集に努めている。

バルカ城の正面に構えたギルモア南方面軍は攻撃を開始せず、陣地を構築し始めた。

ギルモア郡の西に伏兵したフィアレスとアヴァン、城中のバイカルノ、ラシェットは時間が無い事と、戦いの主導権を得た事を即座に理解した。
直ちにクラトに出撃命令が下る。
ギルモア西方面軍がフィアレスの伏兵に近づいてからの方が良いのだが、南方面軍に強固な拠点を作られると全体の作戦が狂ってしまう。
クラトは突撃大隊を率いて城を出た。

ラヴィス戦死後、クラトの突撃はより鋭く苛烈になった。
ラヴィスを討ち取る為にギルモアはどれほどの兵士を消耗しただろう。
ラヴィスを討ち取った為にどれだけの損害が出るのだろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クラトは迂回もしなければ身を隠す事もしなかった。
ただ一直線に敵陣へ向かう。
陣地を構築中だったギルモア兵は道具を投げ捨て、装備もそこそこに防衛陣を張る。
しかしギルモア軍は先手を打つつもりもないようだ。

「俺たちの１０倍以上の兵で攻めて来ておいて防戦するらしいぜ！」
突撃大隊が笑いに包まれた。

ギルモア兵は息をのんだ。
近づいてくる。あの突撃大隊が。
噂に聞いた異人が率いる大隊だ。
アティーレもパレントも、クエーシトの特別遊撃隊をも敗北に追い込んだ大隊。

これから拳闘の試合でも見物に行くような雰囲気だ。
「ほ、本当に笑ってやがる・・・」
ギルモアの兵士達は一戦も、いや、一矢も交わす事なくパニックの寸前だった。

9－2　包囲

ギルモアの弓隊が前面に出る。
射程内に入ったら一斉に射撃を行って下がり、騎馬隊が突入するというオーソドックスな戦術なのだろう。

しかし弓隊が前面に出るのが早すぎる。
やはり極度の緊張を強いられているのだ。
軍団長は苛立っていた。
こちらは5，０００だぞ？戦力比は１０倍以上だ。兵は何を恐れている？
軍団長は兵士の心理状態を見誤っていた。
極度の緊張は兵士の意識を軍隊という組織から孤立させたのだ。
軍隊を意識していた時には感じない恐怖が兵士を掴む。
幸いにも老練な師団長が各隊に伝令を送り、徐々に落ち着きを取り戻すギルモアの陣地。

しかし、突撃大隊は突然右へ展開し、後方に控えていたホーカーの長弓隊が射撃を開始した。
今回は全員が長弓と連射弓を装備している。
長弓独特の射撃音が響く。
長弓である事を考えるとかなりの速射だ。
ギルモアの弓隊はたちまち半減してしまった。
尚も射撃を続ける。
ギルモア兵は各々が盾で矢を避けつつ動き回った。
弓隊の射撃という攻撃の初動を失ったギルモア軍は明らかに混乱していた。
これを見逃す手は無い。
ホーカーは前進しつつ今度は騎馬隊を狙い撃つ。

突撃大隊は敵の左翼へ突撃を敢行する。
クラトを始め、エナルダのルシルヴァとヴィクトールの戦闘力はギルモア兵の想像を超えていた。
特にヴィクトールの乱戦での強さは群を抜いている。

ヴィクトールの得物はモーニングスター。
棍棒に複数の棘を備えた武器は、その打撃力と棘の貫通力で重装鎧の相手に有効な武器だ。
それをヴィクトールが振り回す。
ギルモア兵は文字通り叩き潰され、宙に舞った。

3人が切り開いた後を各部隊が押し広げる。
ラバック、スパイクがその後から両サイドをガードしていき、ラナシドは長弓隊を護衛しつつ前進をする。

しかし、さすがに5，000の兵力は層が厚い。
突撃大隊は止まったら負けだ。
しかしスピードが鈍る。

ラナシドの声が響く。
「隊長！敵陣が厚すぎます！本陣への到達は困難ですし、我々は後詰めをもっていません。敵の混乱も収束しつつあります」「相当の被害を与えましたし、一旦退きましょう！」
「まだだ！フィアレスとアヴァンが戦場に到着してからだ！」
「分りま・・・隊長！西から敵来ます！軍団規模！！」
これは西から侵入したギルモア軍5，000だ。
突撃大隊に衝撃が走る。
一方のギルモア軍に歓声が上がった。

このまま退いたら大きな被害が出るだろう。

このまま留まって戦えば突撃大隊は壊滅する。

クラトは瞬間的に判断した。

「このまま退いたら死んで終わりだ！行けるだけ行くぞ！覚悟を決めろ！！」

「ホーカーには敵の騎馬隊を叩かせろ！」

「隊長、今なら城への退却路が確保されています！」

「このまま退いたら全戦線が崩壊する。新手の敵にはフィアレスとアヴァンの第３軍団が迫っているはずだ。フィアレスとアヴァンが到着するまで何とか持ち堪えろ！」

「隊長と副長だけでも退いてください！」

「ラナシド！てめぇ、今度同じ事言ったら、ぶっ飛ばすぜ！！」

ラバックが敵兵の首を狙って大剣を振るう。

スパイクは甲冑の急所を的確に突く。

ともに戦闘力を奪えば良いという戦い方だ。

ヴィクトールは兵士にもモーニングスターを持たせ、主に重装鎧の敵を狙い撃った。

ラナシド隊は槍で大隊に近づく騎馬を抑えている。

それぞれの中隊が機能していた。

しかし徐々に戦いは動きが乏しい圧し合いとなった。

こうなると数に勝るギルモアに分がある。

突撃大隊は斃（たお）れる兵が増えてきた。

ルシルヴァの隊が分断された。

クラト達も完全に包囲されてしまった。

ホーカーの長弓隊も騎馬隊を差し向けられ、援護射撃どころではなくなっている。

フィアレスとアヴァンはどうなっているだろう。

包囲されては確認すら出来ない。
巻き上がる砂塵の中、敵と味方が入り乱れた。敵を探して剣を振るう。
クラトは腕が重くなるのを感じた。兵士達は限界に近づいているだろう。
微かな思考がラヴィスの見上げた顔を脳裏に描く。
“ラヴィス、お前は良くやったぜ”

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

突撃大隊が包囲され圧力を受けている。このままでは圧殺されるだろう。
突然、敵陣が割れ、赤い騎馬が踊り込んで来た。
ティエラ率いる赤騎隊。
ティエラの傷は癒えてはいないはずだ。
「ティエラ！無理す・・・いや、助かったぜ！」

ティエラは真っ赤な唇だけで微笑みを見せた。
ルシルヴァ隊の包囲を破り、クラト達に合流させる。
しかし、敵に包囲されている事に変わりはない。
「ティエラ、城に戻りな。北はレガーノが何とかするだろう。西もフィアレスがいるから大丈夫だ」
「バルカは勝つ。だからティエラが必要なんだ」
「よし突撃だ！城への退路を確保しろ！ティエラが脱出したら俺たちも城に退くぞ！」

戻れまい。
誰もが思った。

ティエラ姫だけは逃げ延びて欲しい。
誰もが願った。

9－3　良将

突撃大隊の誰もが死を覚悟した。
その命をティエラに捧げると決めたのだ。
バルカの象徴が存在し続ければ、自分達の意志も存在し続けるだろう。
誰もが気持ちを奮い立たせた。

絶望的な戦場に凛とした声が響く。
「聞くが良い！！」
バルカ兵のみならずギルモア兵も動きを止めた。
「私はバルカの赤い旋風ティエラ・ロウレン・バルカだ。ギルモアよ、我がバルカの地を赤く染めるために来たか！大儀であった！！」

「クラト！お主、何を弱気な事を申しておるか！突撃の方向が逆だぞ！！」
言うなりティエラは敵陣へ向かった。
「あっ、ばかやろう！」「おい！ティエラを援護しろ！！」
この時、敵陣を通じて何かの衝撃を感じた。
ギルモア南方面軍にアヴァンの第３軍団がぶつかっていった。
ギルモア軍に動揺が走る。
「来たか！」
しかしギルモア西方面軍を撃破したにしては余りにも早い。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

アヴァンとフィアレスは最初から敵中突破を狙っていたのだ。

戦いの前にフィアレスはアヴァンにこう語った。

クラト達は敵に大きな被害を与えるだろう。
恐らく敵の被害は半数に及ぶはずだ。
そして突撃大隊も壊滅しているだろう。
我々は敵の西方面部隊を敵中突破してクラト達が叩いた敵を殲滅する。
そして返す刀で西方面軍を討つ。
それと、今回の突撃は私も同行する。私を護る兵が勿体無いからな。
アヴァンは口を開こうとして断念した。
フィアレスが余りにも穏やか目をしていたからだ。
誰が止められようか、このような目をした男を。

「突撃大隊はそれほどの損害を敵に与えているでしょうか。もし突撃大隊が早々に壊滅していたら、我らは敵二方面の間、死地に自ら飛び込む事になります」
「アヴァン殿、その通りだ」「しかし、私に“かもしれない”はないのだ。このフィアレスには」
「はッ、失礼しました」

アヴァンはこれほどフィアレスが大きく見えた事はなかった。
この戦いは勝つだろう。
しかし、戦いの後がどうなっているのかは想像もつかない。

フィアレスの読みは正しかった。唯一、突撃大隊が壊滅しなかった事を除いて。
そして、その事をフィアレスが知る事もまた無かったのだった。

ギルモア南方面軍は撃破したが、後方から攻撃を受けたバルカ第３軍は大きな被害を蒙る。
ギルモア西方面軍が勝利すれば北で戦うバルカ第１・第４軍団の背

後を衝くだろう。
そうなればバルカは全面的な敗北を免れない。

しかし、これ以上はないというタイミングで、ジュノが率いる2，０００が戦場に到着。
ギルモアの西方面軍の後方へ迂回し、包囲戦を展開する。
ジュノはフィアレスの指示を受け、市民兵５００を連れて北の戦線へ向かい、精鋭2，０００を率いて秘密裏に戻ったのだ。

北のギルモア軍は対峙しているバルカ主力を引きつけておけば、南・西方面軍の１０，０００がバルカ城を包囲するだろうし、バルカ主力が防衛の為に退けば、それこそ理想的な追撃戦が展開できると考えたのだ。

しかし、南と西から侵入したギルモア軍１０，０００はほぼ壊滅した。
ジュノは再編成した1，５００を率いて北方戦線に戻って行った。
この頃、パレントを経由して南西方面軍の壊滅を知ったギルモア北方面軍は撤退を開始するが、レガーノとジュノの追撃を受け、多くの兵を失った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

今回の戦いで勝利に大きく貢献したバルカ第3軍の敵中突破。
その陣中にギルモアから亡命した武人がいた。
ギルモアから逃れてきた武人。
その男はシュバルと名乗った。
その名は以前からバルカにも知られていた。
彼はギルモアのアティーレ侵攻作戦の際、略奪を行った軍団に大隊長として所属する将軍だった。

大隊長の彼が将軍を名乗れるのは大きな戦功があったからだが、彼の場合はオルグに遭遇した国王の娘を救った事による。
彼は国家に対する忠誠心に厚いだけでなく、高い戦闘能力を持っていた。
ただ、彼は上官に恵まれなかったのだ。

略奪の際も彼の大隊は強行偵察に出されていた。結果としてそれがシュバルを救う。
略奪への関与無しとして罪を問われる事はなかったのだ。
しかし、反乱軍所属の汚名は簡単に拭い去れるものではなく、かねてより不仲の将軍からあらぬ噂を流され、苦しい立場に陥った。
彼の大隊は解散させられ他の隊にバラバラに補充された。
彼に残されたのは将軍という称号のみだった。
そしてついには唯一の家族である母が自殺を図る。
ここに至って彼はギルモアへの復讐を近い、バルカへ亡命を果たした。
ギルモアにバルカ侵攻の計画あり。
彼はそう告げた。信じたのはフィアレスだけだった。

ギルモアがアティーレを滅ぼした直後、パレントは領主が追放され、事実上ギルモアの直轄地となる。
今までに無いギルモアの外交は次の動きがある事を予感させた。
たちまち現実味を帯びるギルモアのバルカ侵攻。
しかし、ここでバイカルノに疑問がよぎった。

“タイミングが良すぎる”

早速、サイモスに指令が飛ぶ。
サバール隊がギルモアに入り、シュバルについての情報を集める。
シュバルは代々国王の側近として使える家柄であり、忠臣と賞され

てきた。
彼は母孝行で知られ、人柄も良く、武人としての能力も高い。
非常に評判の良い人物だった。
そしてその母も確かに自殺しているようだ。
報告を聞く限りシュバルの話に怪しい部分は無い。
しかし、バイカルノはシュバルを全く信じなかったし、フィアレスもラシェットも同じように何かを感じた。
理由は無い。
強いて言えば、作られたストーリーを感じるのだ。
彼を重用すべきではない。むしろバルカに留めるべきではない。
しかし、ここで第2軍団長のバルサムがシュバルを擁護する。
不器用な誠実さを持つシュバルに同じ性質のバルサムは何かを感じたのだろうか。
バルサムの配下として登用される事となる。
彼の任務に対する直向(ひたむき)さに人々は彼を信頼するようになっていった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

そして、ギルモアのバルカ侵攻が開始される。
それは亡命のほぼ1ヶ月後の事だった。
これによってシュバルは信頼を得る。

バルサムはシュバルをフィアレスの護衛とした。
戦力不足の折、異を唱える者はいなかった。
誰もがシュバルを信用していたのだ。ただ2人を除いて。

その1人バイカルノはどちらに転んでも良いと考えた。
いずれフィアレスは除かねばならない。手を下さずともそれが成るならそれも良かろう。

もう1人はフィアレスだった。彼はいずれは同じ結果になる事が分っていた。
そして、もしその時が来ても、自分の為すべき事は完了しているはずだと考えた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

アヴァンとフィアレスが率いる第3軍団がギルモア西方面軍の後方から突撃を開始した。
ギルモア西方面軍は既に南方面軍を目視する位置まで迫っていたが、進軍を停止させ素早く後方に備えた。そこへ突入するギルモア第3軍団。
やや後方からフィアレスが突撃を開始した直後、シュバルの剣が馬車に乗るフィアレスの身体を貫いた。
そしてシュバルは逃げもせず、バルカ兵に討たれている。
彼がどうしてフィアレスを殺害した後、脱出しようとしなかったのかは不明だ。
しかし、そのような人物だからこそ、この作戦は成功したのだと言える。

9－4　進化

バルカはギルモアの侵攻を凌いだ。
大きな被害を出しつつもバルカ軍は城に帰還する。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

調練場に1人の男が剣を携え、身を正して座っている。
赤騎隊が帰還するのを待っていたようだ。
ティエラ達が男の存在に気付き、身を正した武人の声が響く。
バルサムだった。

「フィアレス軍師の戦死、その責は我にあり！この命をもって償わん！」
「バルサム！よさぬか！」
「姫、申し訳ございませぬ！」
彼は剣を鞘から30ミティ（約50ｃｍ）ほど抜き、剣の柄と鞘を持って首の後ろに添えた。
「誰か止めよ！！」
「ホーカー！！」
クラトの声と同時にホーカーは素早く矢をつがえ、バルサムの左手を射った。
鞘は剣から外れて後方へ飛び、バルサムは信じられないという顔で左手に突き立った矢を見た。
バルサムは立ち上がると剣の柄を地面に添え、切っ先を喉にあて一気に体重をかける。
剣は喉を貫き、大量の血が溢れる。
バルサムは立ったまま息絶えた。
そして、バルサムの屋敷では妻と子が眠るように死んでいた。

こうして、バルカも多くの損失を蒙ったのだった。
主席軍師フィアレス、第2軍団長バルサムを始め、多くの将兵を失った。
バルカ全体が心を折られたように意気消沈したが、歯を食いしばって次の戦いに備えた。

しかし、次の攻撃は防げまい。
満身創痍のバルカ軍に戦う力はほとんど残っていなかったのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

しかし、ここで思わぬ事態が発生する。
ギルモアの分裂だ。

マーカス・ルエンシャ・ルミノールの3郷が協力してギルモアから独立、共和制の国家を築いたのだ。
勿論、それらの領内にあったギルモアの直轄地は新しい国、トレヴェントのものとなった。
ギルモアは3つの郷を喪失し、バルカとは交戦状態、アティーレ・パレントは勿論、対トレヴェント国境にも兵力を回さなければならない。
クエーシトとグリファの兵力消耗によって何とか保っている状態だ。
ここでパレントはバルカを頼った。
ギルモアから派遣された領主を処刑し、バルカとの統合を望んだのだ。
バルカはこれを受け入れ、バルカ国が成立。
タルキア、エルトア、グリファに使者を送り、国家としての承認を得る。

これにより、大陸東部の雄と自他共に認めてきたギルモアの覇権は瓦解した。
兵力でいえば、ギルモア、グリファ、トレヴェントが拮抗し、バルカとクエーシトはその3割程度だ。
兵力に劣るとはいえ、バルカはその戦闘能力を改めて示し、クエーシトはエナルダ国家として“侮りがたい”不気味な存在となっていった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「エナルダの子はエナルダか？答えは“否（いな）”だ」
属性などは遺伝すると考えられるし、発現率も影響されるようだが確証は無い。
エナルダの発生率は高い家系でも1割にも満たない。
つまり家族が10人いれば1人のエナルダがいるという計算だ。だいたい3世代で1人の計算だ。
ではエナルダの発現率が高い家系同士の血が交わるとどうなるのだろう。
クエーシトは元々エナルダによって建てられた国家だ。
地理的にエナル濃度が高く、エナルダ発現率も高いといわれてきた。
加えてエナルダの移民を積極的に受け入れてきたのだ。
エナルダに血統というものがあるのなら、当然、その血は濃くなっていく。

この世界において、古の伝説（いにしえ）や神話に登場する英雄や異能者は全てエナルダだった。
非常に稀な存在だったのだろうと推測できる。
その点を考えると、エナルダの数は増えてきているといえるだろう。
エナルダとは、進化したヒトなのだろうか。
それとも、別な“種”なのだろうか。

どちらにせよ過程である事に変わりは無い。

進化とは優秀ではなく優性への変化である。
環境に適応する事が優性であり力を得る事になるのだ。
故に優秀だとするならばそれはそれで正しいのだろうが、人は単に“生き残り、子孫を残す”だけの生物ではない。
動物の人間の違いは精神だという。それを崇高な事実のように唱える。
動物を超えた精神は人間に何を与えたか。
理性か？知性か？
とんでもない。
どんなに言い繕おうと、人間は恥知らずな強欲さと目的を超えた野蛮さを持った生物なのだ。
そして、エナルは人間に新たな力を与えようとしている。
バランスなど無関係に力のみを与えようとしている。

クエーシト王ベイソルはエナル研究を抑制したが、クエーシトは決して豊かな国ではない。
それがグリファ、ギルモアを相手に戦争まで始めた。
バルカ国も敵と見ねばなるまい。
戦力の拡充は最重要項目だ。
ここで国論はエナルダ研究について二分される。
国王が反対の意思を示しているにもかかわらず、エナルダ研究継続の意見が根強いのは、クエーシトの立国から今日まで一貫してエナルに頼る国策を採り続けてきたからだ。
そしてその成果を得るだけの力は確かにあった・・・バルカさえ存在しなければ。
バルカが無かったら、北の戦乱はクエーシトの一人勝ちになっていたはずなのだ。
アティーレ（バルカ含む）、パレント（ルーフェン含む）との連合

王国を形勢し、その議長国として大きな力を得たはずだろう。
しかし、それを阻止されたクエーシトはバルカ憎しより、バルカへの恐怖の方が強かった。

ギルモアから侵攻を受け、バルカに軍神の矜持を保つものは無くなった。
ギルモアから独立したバルカがギルモアやグリファと渡り合っていくには国力が必要だ。
いずれ拡大の動きをとるだろう。その時ではもう遅いのだ。
クエーシトはバルカを仮想敵国とした。
そして、そのバルカは軍師フィアレスを始め、歴戦の将軍を失い、兵力的にも疲弊している。
ギルモアやグリファも干渉する余力はないだろう。
ならば・・・

9―5　排除

ラヴィスの後はイオリアが継いだ。
早速、護紅隊の編成を行う。

赤騎隊の副隊長にはルシルヴァが内定している。
ティエラの傷が癒えたら赤騎隊を再編成する予定だ。

エルファは正式に突撃大隊の偵察要員として配属された。
ギルモアとの戦いでは強行偵察隊に同行し、体力と神経をすり減らしながらも、隊員の半数を失う激戦を生き延びた。最後まで敵の連絡を妨害し続け、勝利に大きく貢献したのだ。
その任務は偵察、敵の後方撹乱に留まらず、敵将校の狙撃まで行った。
戦場に投入するにあたって年齢が問題となったが、既に偵察などの軍務に就いていた事も考慮されて許可が下りたのだ。
クラトは直接の戦闘参加には反対していたが、それはあくまで異人の考えに過ぎない。
有効な手段は使用して然るべきなのだ。
そして効率良く行わねばならない。
全てに言える事だが、敵へのダメージを最大限まで引き上げる方法とタイミングが重要だ。
自軍の戦力が2なら、敵の1にぶつけるべきであって、2にぶつけてはならない。ましてや3の戦力に向かうなど愚の骨頂だ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

トレヴェントとバルカ、この2つの国家成立によってギルモアの国力は決して突出したものでは無くなっていたし、周辺国家は“北の

戦乱”で疲れていた。
均衡と疲弊。戦乱の終結を誰もが疑わなかった。
しかし、戦いは終わらないと考える者も居た。
クエーシトの主席軍師デュロン・シェラーダン
ギルモアの第三席軍師セシウス・アルグレイン
そしてバルカの軍師見習いラシェット・ビアークル。
彼等は後に熾烈な戦いを繰り広げる事になる。

多くの人間の予想と期待を裏切って戦いの炎は再燃する。

クエーシトのデュロンはこう言った。
ギルモアやグリファなど何時でも打ち破れる。
しかし、バルカは違う。
バルカが存在する限りクエーシトが覇権を掴むのは困難だ。
逆に言えば、バルカさえ滅ぼせば、クエーシトは覇権を握る好機を得るだろう。
そして、今のバルカはこれまでになく消耗している。
クエーシトが覇権を望むなら、今を除いて機会はない。
表現は勇ましいが、その裏には力を回復したバルカの侵攻を受けたらという危機感が強い。
バルカはクエーシトが仕掛けた戦いを忘れないだろうし、それを放置するような国では無い。

戦いとは必ず防衛的思考を起点とする。
今のクエーシトは危機感から新たな戦いに突き進んだと言える。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

エルトアからギルモアを抜け、バルカに入った一団があった。
到着した彼らはエルトアの優れた技術者達だ。

もちろんエルトア政府は関知していない。
エルトアでは武具の技術者が国外に出る場合、例外無く監視がつく。
この一団は8年前からヴェルーノ卿が送り込んだ者達だ。
迎えたヴェルーノ卿は涙した。
「よくぞ、戻ってくれた」
早速バルカの軍事府兵器庁に配属され、鎧と武器の生産に着手した。

俺はそのエルトア人技術者から懐かしい匂いを嗅ぎとった。
タバコの匂いだ。
俺はタバコを欲しいとは思わなくなっていたが、この香ばしい薫りは懐かしかった。
しかし、懐かしさに感情が溢れる事もなくなっていた。
どうやら俺もこの世界の人間になってきたようだ。

エルトアでもタルキアでもグリファでもタバコは一般的に吸われている。
しかし、バルカでは喫煙者が非常に少ないらしい。
古くからその害が指摘され、歴代の領主が嫌ったからだ。
一方、クエーシトではエナル係数を高めるものとして古来から利用されている。
ニコチンは神経伝達物質の合成と放出を促進し、自らも神経伝達物質の代わりに作用する。
しかも、ニコチンは分解されない為、長い時間神経を刺激し続けるのだ。
これによって得られるのが「集中力が増す」「緊張が和らぐ」という効果だ。
それらは真逆の効果だが、タバコを吸う者は無意識に摂取量で調整しているのだ。
シャーマンが薬物を利用していたのと同じだろう。
クエーシトはエナル研究だけでなく医学でも進歩している。

特に薬物については神経に作用するものを中心に研究が進んでいるらしい。

隣りのエルトア人がタバコを咥えた。
何も気にせず話に興じていた俺の耳に届いたのは、懐かしくも聞き慣れた「カキン」という音。
自分の表情が変わっていくのがわかる。
ホイールが回転しフリントが火花を散らす。パチリとリッドを閉じる音。
俺はゆっくりと横を向いた。
技術者の手を凝視する。

異人の持ち物だったというそれを手に取る。
裏面にある刻印は「／／／ＺＩＰＰＯ／／」
間違いない。１９７７年モデルだ。

「そうか、あなたの元の世界のものなのか。ならばこれは私の手許に置くべきではない。どうか受け取って欲しい」
そのエルトア人技術者は余程人間ができているのか、事情を聞いた後、そのジッポを俺にくれた。
「それは宿屋の主が世話をした異人から礼として受け取ったものだ。そしてその宿屋の娘を娶った私が譲り受けたのだ」
「遠慮しないでくれ。あの突撃大隊の隊長と私の間につながりが出来たとは、またとない光栄だ」
その場にいた者達はこの話に聞き入った。

同じ世界から来た異人同士の接触。それは小さなライターを通じての事だったが、奇跡と呼んで差し支えないものだった。
この場にいた誰もが興奮に包まれる中、ジュノは無口になり、バイカルノは不機嫌になった。

クラトはバルカにとって不可欠な人物になりつつあった。
近隣の国や郷でも名を知られ“バルカの黒い大剣”とも呼ばれた。
どこから聞いたのか、ベナプトルの血を天から浴びたという話も出回っている。

「このジッポが俺を元の世界に戻してくれる訳でもないだろ」
そう言いながらも心臓は次第に高鳴っていった。
そしてジッポの持ち主の話を聞いた俺は冷静ではいられなくなったのだ。

「その異人は大隊長殿と同じ黒髪で・・・コスケ？いや、コースケだったかな。多いのかい？コースケという名前は？」
俺は返事が出来なかった。
そのエルトア人は酒瓶を取ろうと伸ばした手を止め、俺の顔を見た。
どんな顔をしていただろう。
エルトア人はぎょっとして酒瓶を倒しそうになった。

二十数年前に5歳の息子を残して失踪した男。
その名前を鳴海浩介という。

まとめ？　国・郷

≪大陸東部国家≫

【ギルモア】

バルカ・アティーレ・パレント・マーカス・ルミノール・ルエンシャの郷を持つ大陸東部の覇権国家。広大な領土と強大は兵力によって国力は突出している。

しかし、近年は政治混乱や軍部形骸化が進み、国威が低下しつつある。

＜バルカ＞

伝説の時代から存在する郷。ギルモアが弱小国家だった時代からギルモアの軍神を自負し、ギルモアの存続と領土拡大に貢献した。“大陸の炎上”と呼ばれる大陸東部の大戦乱でギルモアが覇権を握ってからはかつての関係は急速に冷めていった。

【グリファ】

近年国力を増した新興国家。ベルサ・ルーフェン・リンチェの郷を持つ。

【クエーシト】

北東部に位置する国家。領内に湿地が多く産業が育ちづらいが、それ故にエナル濃度が高くマスエナルを多く産出する。元々エナルダによって建国され、優秀なエナルダが多い。

またエナル研究と薬物研究が進んでおり、ジョシュ博士によってエナル研究は危険なレベルまで推し進められている。

弱小国と見られてきたが、エナルダの戦闘力によって侮り難い国家に成長していく。

【エルトア】

技術国家。甲冑や武器の技術力に優れており、特製甲冑は宝物として取り扱われる。

【タルキア】
商業国家。戦争は傭兵を雇い入れて行う。

【サンプリオス】
その昔、“大陸の炎上”でギルモアと覇権を争った国家。サイカニア・ヴェルカノ・インゲニア・ローヴェに分裂した。

【サイカニア】
サンプリオス領であった時代は対ギルモアの防衛地帯であった。国土の多くが山岳地帯であるため国力は低い。主な産業は林業と傭兵である。現在においてもギルモアの南下を防ぐ防衛ラインとしてサンプリオス・ヴェルカノ・インゲニアから援助を受けている。

【ヴェルカノ】
以前は海の回廊を通過する船の停泊地として大いに栄えたが、強大なオルグが海の回廊に出没するようになってからは勢力が衰えた。ただし北の回廊からローヴェに至る街道を持ち、陸運が国家を支えている。

【インゲニア】
タルキアがギルモアを経由しない陸路としてインゲニアをの街道を使用する為、陸運業が発達している。近年ではタルキアとの関係を深めている。

【ローヴェ】
大陸東部南端の国家。サンプリオス領の時代は王族の保養地であったが、現在は各国の王族や富豪が別荘を持つリゾート地として発展

した。完全中立国家として強力な軍隊を保持している。ローヴェ領内ではいかなる理由であろうと、国家郷領間の争いは認められない。

≪蛮族≫

【バルナウル連合】

大陸西部へ通じる北の回廊を押さえている強大な蛮族バルナウルを盟主とする蛮族の連合。

【北東部首長連合】

バルナウル連合に対抗して連合した大陸北東部の蛮族。

＜ブレシア＞

北東部首長連合に属しているが、近年ギルモアと親密度を高めている蛮族。

＞ｉ２８０４８―３６１７＜

まとめ？　国・郷（後書き）

「これってファンタジーじゃない？」
と思いつつ戦記で書き続けてきました。
やっぱりファンタジーなんだろうか？
それはさておき、読み返したら自分でもよく分からないので、まとめてみました。

まとめ？　エナル・単位・ボウガン

≪エナル≫

【エナル】

生物の脳神経に作用し様々な効果をもたらす謎の物質。質量は無いと考えられていたが、後に極めて小さな質量を持つ事が分かった。

【エナルス】

エナルの集合体。何らかの原因でエナル濃度が高くなったもの。グリファのジョシュ博士（当時）、クエーシトのサイヴェル博士が人工生成に成功。

【ハイエナル】

エナルスが複数混合し、エナル濃度が非常に高くなったもの。クエーシトのジョシュ博士が人工生成に成功するが、自然発生するものに比較して濃度が低い。

【マスエナル】

ハイエナルが無機物と融合して出来たインゴット。人間の拳大で形状は六角形の円盤。物質として安定しており、武具などに装着して装着者の能力を高める事が出来る。

⇒マスエナル効果

【リアエナル】

ハイエナルが融合した生物。能力が飛躍的に向上するが、ほぼ例外なく凶暴化し、それらをオルグと呼ぶ。人間がリアエナルとなった事例は無い。

【エナルダ】

エナルを利用し自分の能力を高める事ができる者。その力は突然現れ、それを発現または覚醒と呼ぶ。エナル係数によって、下級・中級・上級・マスターに分けられる。

【エナル属性】
エナルが持つ属性。気・水・土・火の４種類に分類され、それぞれの特徴を持つが、通常大気中のエナルはそれら４種類の混合体である。
人間も発現の有無に係らず属性を持っており、エナルダ覚醒した時の能力に特徴が出る。
＜気の属性＞瞬発力が高まり、視覚聴覚など五感が鋭くなる。
＜水の属性＞細胞活動が活発になり、治癒力が高まる。ハイレベルのエナルダは他人の治癒も行う事が出来る。
＜土の属性＞耐久力が高まる。
＜火の属性＞攻撃力が高まる。

【エナル係数】
エナルによって能力が高まる度合いの係数。係数が大きいほど能力の上昇率が大きくなる。

【マスターエナルダ】
エナル係数が特に高い者。ただし最近はエナル研究で能力を発揮する者を指すようになった。

【エクスエナルダ】
戦闘力が特別に高いエナルダ。エクサーとも呼ばれる。

【エナル集成】
空気中のエナルを集め、エナルス、更にはハイエナルへと濃縮していく事。自然発生するハイエナルに比べて密度が低く、集成を行う

マスターエナルダのレベルや体調、更には解明されていない原因により質の変動がある。

【エナル融合】
集成したハイエナルによって、人工的にマスエナルやリアエナルを作り出す事。

【エナルダ融合】
人間にエナル融合を行う事。未覚醒者への融合とエナルダへの融合がある。融合した者は人造エナルダとも呼ばれる。
施術の成功率は低い。また、オルグ化の危険性を孕んでいる。

【マスエナルダ】
外科手術によってマスエナルを頭部に装着した人造エナルダ。頭部に対する衝撃に弱く、兵士としての運用が困難である事が判明、実験は中止された。

【リアエナルダ】
未覚醒者がエナルダ融合した場合。

【ハイエナルダ】
エナルダがエナルダ融合した場合。トゥーレ（2度目の意味）とも呼ばれる。

【リアエクサー】
ハイエナルダの中でも戦闘力が特に高い者。ハイレベルのエナルダにエナルダ融合した場合に発生する。

【エナル噴射】
空気中の成分をエナル融合させ噴射する能力

【飛行型エナルダ】
エナル噴射によって飛行が可能となったエナルダ。ランケトスと呼ばれる動物の翼を生体エナル融合によって移植している。
＜スツーカ＞飛行型エナルダの総称
＜ティフガル＞2枚翼の意味。ティフと呼ばれる。3名が施術に成功している。
＜ボゥトガル＞4枚翼の意味。ブートと呼ばれる。ティフガルの1名が追加施術し誕生。
＜ファリガル＞多翼の意味。ファルと呼ばれる。1名。

【生体エナル融合】
エナルダ融合の際、他の生体を融合させる施術。ハイエナルダ施術のみ成功している。

≪単位≫
【長さの単位】
＜リティ＞約８０ｃｍ
＜ミティ＞リティの５０分の１。約１．６ｃｍ
＜ファロ＞リティの５００倍。約４００ｍ

【重さの単位】
＜リグノ＞約０．５ｋｇ
＜グノン＞リグノの５０分の１。約１ｇ
＜リガル＞リグノの５００倍。約２５０ｋｇ

【通貨の単位】
＜パスク＞

≪ボウガン≫

【3連装ボウガン】
軍用ボウガン。弓を3連装、引き金が3段階になっており、3発の矢を連続して発射する事ができる。

【ロングボウガン】
主に遠距離の狙撃に使用されるボウガン。通常のボウガンのように構えるが、台座が長大である為、肩に乗せる。

【3連装ロングボウガン】
ロングボウガンを3連装にしたもの。ロングボウガンと同じように肩に乗せて構える。

【3×4連装ボウガン】
ロングボウガンの弓を4連装とし、1つの弓に矢が3本装着したもの。一射ごとに3本の矢が発射される。
飛行型エナルダが腕に装着して使用するが、重量が大きい為、上空からの地上攻撃（下向き）にしか使用されない。発射後はその台座を投棄する。

【3×3連装ボウガン】
3×4連装ボウガンの弓を3連装とし、全体的に軽量化したもの。威力は低下したものの、ロングボウガンのように肩に乗せて構える事で全方向への射撃が可能となった。取り回しづらいのは否めない。

【3×3連装ショート】
3×4連装ボウガンのように腕に装着して使用するが、大幅に軽量化しており、腕に装着したまま全方向への射撃が可能となった。ただし威力も大幅に低下しており、近距離射撃用である。

【他連装ボウガン】

３×４連装ボウガンを地上に設置した台に備え付け、任意の方向へ射撃できるようにしたもの。準備した連装ボウガン本体を装填する事により矢を撃ち続ける事が可能となる。
様々なバリエーションがあり、最大４×５連装まで開発された。

【多連装対空ボウガン】
飛行型エナルダへの対抗策として開発された、他連装ボウガンの威力を高めた対空用ボウガン。

まとめ？　登場人物

≪バルカ人物≫

【クラト・ナルミ】
この世界では異人と呼ばれる異世界から迷い込んだ者。
元の世界より重力が小さく、酸素濃度が高いこの世界では驚異的な身体能力を発揮する。
この世界に迷い込んだ時に獣竜（ベナブトル）に襲われたジュノを助ける。
突撃大隊隊長。“バルカの黒き大剣”

【ジュノ・ガクレイ】　エナルダ（属性：水）
グリファ国ルーフェン郷の親衛隊第1隊の元隊長。ベルサ郷の陰謀によりルーフェン郷が壊滅、出会ったクラトと行動を共にする。
第2軍団長。“バルカの青い城壁”

【バイカルノ・ソルザン】
盗賊だったが武装商隊とレノ部隊のサバール隊を組織、頭目として活動していたが、バルカ内務府ヴェルーノ卿に見出され、バルカ軍副軍師として登用される。
主席軍師。

【ティエラ・バルカ】エナルダ（属性：火）
バルカ郷の姫。10歳でエナルダ覚醒、12歳で初陣を果たし、13歳で赤騎隊を編成。
バルカ軍の象徴であり騎乗戦の達人。得物は双剣。
赤騎隊隊長。“バルカの赤い旋風”

【ラヴィス・アラッセ】エナルダ（属性：火）
親衛隊の中でも姫を守る為に編成された護紅隊の隊長。

ギルモア防衛戦南西部戦線にて戦死。

【フィアレス・アクレイン】
“疾風の軍師”の称号を持つ、伝説のバルカ軍師。その能力は軍事だけでなく多方面で発揮されるが、それが故にバルカ政府の弱体化を招いた。
前領主が暗殺された際に毒矢を受け、後遺症によりかつての能力を失ってしまった。
ギルモア防衛戦で戦死。

【ヴェルハント・バルカ】
ティエラの父であり前領主。エナルダでは無いにもかかわらず脅威の戦闘能力を発揮した武人。
ギルモア侵攻作成をフィアレスと画策したが、所属不明のレノに暗殺される。

【レガーノ】エナルダ（属性：土）
バルカ軍第1軍団長。“バルカの黒い稲妻”

【バルサム・バルカ】
バルカ軍第2軍団長。
フィアレス軍師暗殺の責により自死。

【アヴァン】エナルダ（属性：火）
バルカ軍第3軍団長。“バルカの白き矛先”

【ヴェルーノ・マラウィ】
バルカ内務府大臣。第3軍団長や軍務大臣を歴任、弱体化したバルカ政府の建て直しを画策し、バイカルノ傭兵団をバルカ軍に編入させた。

【ホーカー】
元奴隷。壊滅したルーフェン郷の残党狩りに参加してクラトとジュノを狙うが、失敗して捕らえられる。クラトに開放され、その後クラト達に合流。
突撃大隊長弓中隊隊長。

【ルシルヴァ・バークレイ】エナルダ（属性：火）
マーカス郷内の貧村で生まれ、１５歳でエナルダ覚醒し自警団長を務めるも、国に土地を取り上げられ、村民は離散。村人と組織した盗賊の頭目となる。
クラト達が護衛するバイカルノ武装商隊を襲い敗北、クラトと行動を共にする。
突撃大隊副隊長。

【ヴィクトール】エナルダ（属性：土）
バルカ軍でも指折りの戦士。己の強さのみを追求し組織戦を行わない為、小隊長に甘んじていた。クラトとの打込み勝負でクラトに惹かれ、突撃大隊中隊長となる。
突撃大隊第１中隊隊長。

【ラバック】
突撃大隊第２中隊隊長。

【スパイク】
突撃大隊第３中隊隊長。

【ラナシド】
突撃大隊第４中隊隊長。

【エルファ・オルセイン】ハイエナルダ（属性：気）
元クエーシト飛行大隊所属の飛行型エナルダ。ギルモアとの戦闘で撃ち落されるが、クラトに救われる。
突撃大隊所属の偵察員。

【イオリア・レギーナ】エナルダ（属性：水）
赤騎隊副隊長。

【ファトマ・オルセイン】
ティエラ姫に仕える侍女達を取りまとめる侍女長。

【ラシェット・ビアークル】
娘のアイシャ共々売りに出されていた元奴隷。クラトに救われる。
傭兵や拳闘士の経験を持つ体術の達人。軍師としての才能をバイカルノに見出される。現在は体術師範、軍師見習い。後の“白銀の軍師”

【アイシャ・ビアークル】
ラシェットの娘。後の銀狼隊隊長。

【サイモス】エナルダ（属性：気）
サバール隊隊長。

【グレアス・カピアーノ】
エナル研究の大家。ジョシュの研究を危険視していた。グリファ国に籍を置いていたが、バルカに亡命した。

【ベルファー】リアエナル（属性：土）
リアエナルの犬。奇跡的にオルグ化せず、むしろ知性を高めた。人間と変わらない思考や判断力を持ち、戦闘能力も高い。人間の名前

をなかなか覚えようとしない。

【ピサノ】
王直府大臣。

【ランクス】エナルダ（属性：気）
元親衛隊第2隊の隊長。

≪クエーシト人物≫
【ベイソル・ハイラ】
クエーシト国王。

【サイヴェル・ハイラ】エナルダ（属性不明）
クエーシト王弟。ベイソル・ハイラの実弟。
エナル係数が高く、マスターとしてエナル研究に没頭する。
クエーシトエナル研究室室長。

【ジョシュ・ティラント】
エナル研究の第一人者。異人。
カピアーノ博士と師弟関係にあったが、あまりに新進すぎるジョシュの研究にカピアーノは反対。袂を分かつ。後にクエーシトに入国し、エナルダ研究を推し進めた。
クエーシトエナル研究所所長。

【グラシス・ハルンスト】ハイエナルダ（属性：気）
元エルトア軍所属。優れた武人だったが、上官との諍いにより家族を連れてクエーシトへ亡命。その噴射能力をジョシュに見出される。
クエーシト飛行大隊隊長。ボゥトガル（4枚翼の意味）。

【ウーディ・ルバルス】ハイエナルダ（属性：土）

クエーシト飛行大隊所属。ティフガル（2枚翼の意味）。
ギルモア戦線で戦死。

【イーネス・アティール】ハイエナルダ（属性：火）
クエーシト飛行大隊所属。ファリガル（多翼の意味）。

【デュロン・シェラーダン】
クエーシト主席軍師。

【ルヴォーグ】エナルダ（属性不明）
オロフォス隊隊長。

【セシリア】エナルダ（属性不明）
オロフォス隊副隊長。

【ルーフォス】エナルダ（属性不明）
特別遊撃隊隊長。

【ジャナオン】エナルダ（属性不明）
特別遊撃隊副隊長。

【カルラ】エナルダ（属性不明）
特別遊撃隊第3分隊長。

≪その他人物≫
【タレス・ガクレイ】
ルーフェン郷第2軍団長。ジュノの義父。
既に病没している。

【セシウス・アルグレイン】

ギルモア第三席軍師。
アティーレ戦線でのギルモア軍敗北を立て直した軍師。バルカ侵攻作戦を献策し、作戦は採用されるが、その才能を恐れた主席軍師により南東方面の盗賊征伐を命じられ、作戦本部より遠ざけられた。

9－6　失敗

クエーシトは想像だにしない行動に出た。

【クエーシトのバルカ侵攻】

バルカは完全に不意を突かれた。しかも迎撃するには余りにも戦力が低下している。
フィアレスがいたら何と言っただろう。
デュロン・シェラーダンはやはり只者ではなかった。
しかし、新興国トレヴェントからの援軍が到着する。
トレヴェントはバルカと友好関係を構築し、ギルモア包囲の一翼を期待している。
それに万が一、クエーシトがバルカを下せば、その勢いは止め難いものになると考えたのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「スツーカ接近中！高速です！」
「対空ロングボウ準備急げ！！」

クエーシトの飛行型エナルダは急降下して攻撃を行う事から、クラトが「スツーカ」と名付けた。
クラトの世界で空から攻撃を行う機械がスツーカと呼ばれていたらしいのだ。

今回は発見が早かったが、発見が遅れると将校が狙われる。
バルカの豪胆な将軍達も見栄を捨てて将校用の甲冑の装着をやめた。
確認されているクエーシトの飛行型エナルダは2体。

4枚翼と6枚翼だ。
エルファとは違うタイプで、特に6枚翼タイプは信じられない動きをする。
バルカとしては何としても堕としておきたいところだが、いかんせん捕捉自体が難しい。

以前、エルファが対ギルモア戦で堕とされたのは、罠にかかったという事もあるが、2枚翼タイプの空中機動が鈍いせいでもあった。
エルファが4枚翼や6枚翼に空中戦を挑んだら間違いなく堕とされるだろう。
それは誰の目にも明らかだった。
エルファはクエーシトのスツーカなど相手にしなくて良いのだ。
能力を最大限有効に使い、決して4枚翼や6枚翼と戦ってはならない。
ところで“スツーカ”は後に飛行型エナルダの総称として定着するが、この時点で存在する飛行型エナルダは3体のみで全て形状が違う為、個別に呼称されている。

エルファはティフガル（2枚翼の意味）呼称：ティフ
グラシスはボゥトガル（4枚翼の意味）呼称：ブート
イーネスはファリガル（多翼の意味）呼称：ファル

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クエーシトはバルカ侵攻にあたって、突撃大隊をターゲットにした。
これまでの戦いにおいて常に重要な役割を演じ、クエーシト、ギルモアに苦杯を舐めさせた部隊。
赤騎隊への攻撃でティエラを仕留められない理由もこの突撃大隊にある。
偵察や捕虜などからある程度の情報は得ている。

隊長はクラト・ナルミ、異人の剣士だ。
副隊長はルシルヴァ・バークレイという女エナルダ。
それぞれ中隊規模の兵を指揮しており、共に戦闘力が非常に高い。
他に4個中隊と2個中隊規模の長弓中隊を有しているが、それぞれの能力は高く、特に第1中隊と長弓中隊は特筆に価する。
また、対ギルモア戦で行方不明となっていた飛行型エナルダのエルファの存在も確認されている。
亡命の理由は不明だが、エルファの偵察によって本陣の位置特定が早く、師団規模でも短時間で崩されてしまう事がしばしばだ。
この突撃大隊を潰せば、赤騎隊が崩れるだろう。
赤騎隊はバルカの象徴でありバルカ兵の心の柱だ。

バルカ侵攻の総指揮を執るクエーシトの主席軍師デュロン・シェラーダンはギルモアのアティーレ討伐の際、アティーレ本城へ派遣された軍師だ。
ギルモア軍を撃退し帰国、その後体調を崩して暫く軍務を離れていたが、バルカとの戦いを前に復帰している。
もしデュロンがアティーレ本城で指揮をとっていたら、アティーレ城の陥落はなかったという声もある。それほどの能力を持った軍師であった。
その特徴はクエーシト人でありながら、エナルダのみに頼らない戦術を立てる事にある。
そして、大胆な作戦を立てる裏で非常に慎重に事を運ぶ。
この戦いでも勝ちを得るために手数を惜しまない。
まずは“突撃大隊の目”エルファを排除する。
エルファはクエーシト軍の隙を衝いて後方撹乱や狙撃を行い、厄介な存在になりつつあった。
“裏切りのティフガル”エルファには“ラスト・スツーカ”イーネスをぶつける。

しかし、エルファは空中戦闘を徹底的に避けていた。
そのように指示を受けているのだろうが、以前のエルファからは考えられない事だった。
バルカで何を見つけたというのだろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「エルファ、追いつかれる！降りろ！」

クラトの声にエルファは旋回しつつ降下した。
追うイーネスは旋回などせずにエルファを正面に捉えたまま斜めに飛行する。
イーネスの空中機動の特徴は同じ体勢を保ったままあらゆる方向へ飛行できる事にある。
エルファは手を挙げているクラトに向かって全力飛行する。
「もうすぐ」
後ろを確認すると、イーネスがボウガンを構えようとしている。
エルファは落下するようにして着地するとクラトの許へ走った。
兵士が集まって、たちまち盾の壁を作り、ホーカーの長弓隊が射撃を開始する。

「ちッ！」
イーネスはエルファとクラトに視線を向けたまま、後方へジグザグに飛んで行った。
「危なかったな、エルファ。あまり無茶はするなよ」
「はい、隊長」

突撃大隊に本陣を叩かれたクエーシト軍の師団はじわじわと退却していった。
「よし、撃退成功だ」

もうすぐ赤騎隊へ異動となるルシルヴァが指示を出す。
「またいつ来るか分らないからね、今の内に負傷者の後送と武具のチェックをしておくんだ」

クラトは森と草原の境に陣をおいて、草原の彼方、クエーシト軍が去った方向を見据える。
背後からエルファの声。
「隊長、お水」
振り返ると、カップを両手に持ったエルファが微笑む。
「お、気が利くな、ありが・・・」
エルファの肩を抱くようにして森に背を向ける。
水を溢れさせながらカップが舞う。
エルファはクラトの身体を通じていくつかの振動を感じた。
森の中には撃ちつくしたボウガンを両手に構えたイーネスが、怒りに満ちた目をこちらに向けている。

「撃たれた！隊長が！」
エルファの叫びに、大隊に衝撃が走る。
「あそこだ！」
すぐに矢が射かけられるが、イーネスは木々の間を縫うように飛んで逃げた。

「隊長！」
「こんな矢、どうって事ねぇよ」

「・・・！！」
突然、俺は心臓を掴まれた。
立っていられない、声も出ない。息が苦しい。
死ぬと感じた。

9－7　苦痛

「失敗だ！もう少しでエルファを仕留められたのに！」
「くそッ、もう少しだったのに！」
イーネスは自陣に向けて飛びながら、悪態をつき続けた。

クラトはエルファを庇って矢に倒れた。
しかも、イーネスが放った矢は死神どころか悪魔を宿していた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「やったのか！？突撃大隊の隊長を！」
「はい。しかしエルファを逃がしてしまいました」
「いや、隊長を仕留めればエルファなどどうでもいい。良くやったぞイーネス」
「またエルファを狙います」
「突撃大隊を潰してしまえば、エルファは帰る巣を無くした小鳥のようなものだ。そんなもののためにお前を危険に晒す訳にはいかん」
「しかし・・・」
「イーネス、命令以外の行動は一切認めん。とにかく大きな手柄だ。後で重く賞されるだろう」

隊長の言葉も届いていない様にイーネスは、恨むような顔で空を見上げていた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

俺は倒れた。
倒れたと分かったのは地面が目の前にあるからだ。

小さな花が見えた。
その小さな花を軍靴が踏む。
花を踏んだ軍靴がぼやけてきた。
苦しい。ただ苦しい。
視界がぼやけ、身体も動かない。
ただ耳だけはやけにはっきり聞く事ができた。

「きゃー！誰か！隊長が！」
「どうした！クラト！クラト！おい！」

身体が揺さぶられる。
目は開いているがはっきりとは見えない。

「運べ！急ぐんだ！馬車に乗せな！」
「ラバックとヴィクトールはクラトの護衛について戻れ」
「ラナシドは長弓中隊と同行で続け。スパイクとあたしの隊が殿だ」
ルシルヴァの指示を受けて大隊の動きは慌しくなった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ティエラはファトマを連れて病院へクラトを見舞った。
「今のところ命には別状はありません」
担当の軍医の言葉に2人は胸をなで下ろした。
しかし、軍医の顔はむしろ深刻さを増していた。
面会は遠慮して欲しいという。
「どういう事じゃ？面会といっても顔を見るだけじゃ」
「いえ、そういう事ではないのです」

クラトにはルシルヴァがついているらしい。
病室に近づくとクラトの声が漏れ聞こえる。

命をも危ぶまれた負傷者とは思えない大声だった。
ティエラの顔に笑みが湧き、すぐに怪訝さが取って代わる。
いつものクラトとは全く違っていた。
ティエラの顔がたちまち曇る。

「苦しい、クスリをくれ！痛ぇんだよ！クスリをくれよぉ！」
「しっかりしろ、これ以上クスリを使うわけにはいかないんだ！」
「くれよ！クスリを！早くしてくれ！」「頼むからクスリをくれ、クスリ・・・くれよ！！痛ぇよ！！」

ティエラは衝撃を受けた。
こんなクラトを見た事は無かった。
どんな怪我をしても、どんな痛みを受けても、このように取り乱す事など・・・。
軍医に訊ねる。
「薬は無いのか」
「この毒の痛みは通常の薬では抑えられません。フェンジンという薬で一時的に痛みを抑える事はできますが、フェンジンは“天国の悪魔”と称されるほど依存度が高く、使用を続けると廃人と化し死に至ります」「運ばれた時に使用しているので、後は夜まで打つ事はできません」

今度は軍医がティエラに訊ねる。
「この男は怨まれていたのですか？」
「突撃大隊の隊長だ。敵軍からは恨みの的だろう」
「そういった意味ではありません。射られた矢に塗られていたのは、別名“絶望の苦痛”と呼ばれる毒薬です。この毒薬は製造が難しく量産ができませんので、戦で使われる事はありません」
「効果は“殺さず苦しめる”事です。余程の怨みが無ければ用いないものです。何しろ死以上の苦しみですから」

「苦しみぬいて徐々に意識が混濁し、ほとんどの場合が死に至ります。ただし、なかなか死にません。いや、死ねないと言うべきでしょうか。長い長い時間を苦しむ事になります。処置は命を絶ってやるしかありません」

「命を絶って苦しみから解放するしか手段が無いのです」

「なんという事だ・・・」

ティエラは絶句した。

「この男は人並み外れて体力もあるし、精神力も高い。それだけ痛みをはっきりと感じ、長く苦しむという事です。明日、またフェンジンを打ちます。その時は少し落ち着くでしょう。この毒に侵されて話ができたら奇跡ですが・・・」

「どちらにせよ、早く決断してやるのがこの男の為です」

ルシルヴァが病室から出てきた。

既にクラトの叫び声は収まっている。

「ルシルヴァ、クラトは!?」

「意識を失いました。恐らくは痛みのせいかと」

「それほどの苦しみか・・・」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

隊長は私を助けてくれた。これで2度目だ。

隊長を撃ったのはクエーシトのファルだ。

私を執拗に狙ってくる女スツーカ。

矢には毒が塗ってあったのだそうだ。

苦しみぬいて死ぬ毒らしい。

病室に行くことはファトマに禁止されている。

ルシルヴァ隊長はこれまで見たこともないほど疲れ切っている。

涙が止まらない。
昨夜はとても疲れていたのに眠れなかった。
今日も眠れそうにない。

バルカに来て数ヶ月、それまでの１６年間の不幸を取り戻すくらい幸せだった。
この幸せは隊長がくれた。
でも私は何もしてあげられない。
そう思うと苦しくて、でも隊長はもっと苦しんでいるのだと考えると、ますます苦しくて、どんどん苦しみが大きくなる。
それでも隊長の苦しみには届かない。
苦しみで償う事もできない。
私はこのまま消えてしまうのだろう。
ぼんやりとそう考えていた。

9－8　機動

私は消えてしまうだろう。いや、消えてしまいたい。消えてしまうべきだ。
押しつぶされるような切り刻まれるようなつらい夜が過ぎていった。

翌日、ファトマが訪ねて来てくれた。
隊長は痛み止めを打って、少しだけ、ほんの少しだけ話ができたらしい。
病院の先生は奇跡だと言っていたって。
私が無事だと知ると「良かったな」と一言だけつぶやいたって。
涙は枯れているのに、また涙が溢れてきた。
枯れた涙とは違う涙。
温かい涙が止まらなかった。
それは頬を流れ、あごから胸に落ちた。

この温かい涙を抱きしめたら強くなれる。

自分の肩を掴むように抱きしめて思った。
私がやらなきゃいけないのは泣く事でも苦しむ事でもない。
隊長の突撃大隊のために私ができる事をやろう。
私だけが出来る事を。

隊長、勝手な事をしてごめんなさい。
でも、私もずっと訓練してきたの。
ティフガルの弱点を克服するために。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クエーシトは次の狙いをレガーノ元帥に定め、イーネスを暗殺に差し向けた。

バルカ第2軍団のバルサム将軍は対ギルモア戦で戦死している。
そしてバルカ軍の勝利の鍵ともいうべき突撃大隊の隊長を倒した。
これについでバルカの精神と呼ばれる、第1軍団長のレガーノ元帥を倒せば、バルカ軍の弱体化は加速するだろう。

エルファはクエーシトの狙いがレガーノと予見し、第1軍団に同行を申し出た。
上官にすら伝えていない依頼をレガーノは受け入れる。
これが結果としてレガーノの命を救う事になる。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

レガーノ元帥の幕舎を目前に地に伏して窺うイーネス。
先ほど上空から連装ボウガンを撃ち込んですぐに身を隠した。

「私がいつも空から来ると思っているなら、レガーノの命も今日までだ」
しかし、すぐ近くに矢が飛んできた。
「そんなばかな!?」
バルカ兵は、数箇所の繁みに向けてボウガンを発射している。
しかも執拗に何本も撃ち込み続ける。
このままではいずれ矢を受けてしまうだろう。
動けば見つかる。
致し方ない、レガーノの暗殺は諦めて逃げるしかない。

イーネスが繁みから飛び出す。
「スツーカがいたぞ!ファルだ!」

その声に他の兵士達が反応するよりも早く、イーネスは飛び去った。
狙撃に失敗して苛立ちに染まるイーネスの目が、飛び立ったエルファを捉えた。
見つけた！
口の端が歪むように引き上がる。

同時に様々な感情が溢れて絡み合う。
以前からエルファの無気力な姿勢が気に入らなかった。
そして次に目の前に姿を見せたのはバルカ軍に身を投じたエルファだった。
しかもエルファの顔は充実と幸せに満ちていた。
苛立ちは憎しみへと変わった。
理由は分らないが、どうしても許せなかった。
だからずっと狙っていたのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「ふん、ティフのくせに私に勝てるとでも思っているのか？」

イーネスの武装は3×4連装ボウガン×2、3連装ロングボウガン×2、刀×2だ。
既に3×4連装ボウガンは地上のバルカ軍に向けて撃ちつくし、投棄している。
3連装ロングボウガンを片手で構えるのは、さすがハイエナルダというべきか。
白兵戦をも考慮した鎧が異彩を放っていた。
翼を保護する為に肩・背中・腰から斜め下へ2枚づつ突き出した装甲板は、神話の竜人を彷彿とさせた。

対するエルファは3×3連装ボウガン×1、3連装ボウガン×1、ダガー×2。
3×3連装ボウガンは3×4連装ボウガンを3連装にして軽量化したもので、腕に固定せず肩に乗せて両手で扱う。矢の数や威力は低下するものの、下方向以外にも射撃が可能となっている。
しかし、エルファの鎧は身体のごく一部を覆っているにすぎない。胸部と腰部、膝下、これだけだ。
重量負担の軽減と身体の動きやすさを優先させるにしても極端すぎるし、鎧下すら着用しないのは不自然だった。
イーネスは戦場で見かけたエルファを“空の踊り子”と呼んで軽蔑した。
イーネスがいう踊り子とは、酒場などで踊り、客をとる娼婦の事だ。

イーネスは改めてエルファを見据えた。
ティフガルは空中機動において水平方向の動きに弱い。
だからこそグラシス隊長は4枚翼へ追加施術せざるを得なかったのだ。
それでも私の動きを超える事はない。
空中戦では私が一番優れているのだ。
ティフガルは鳥と同じだ。浮力と推進力を同じ翼から得ている。
そして、噴射を出来るだけ自分の身体に当てないようする為に姿勢が限定される。

その点、イーネスの空中機動は全く違う。
6枚の翼からあらゆる方向へ噴射する事で、直立姿勢を保ったままの移動が可能なのだ。
それは重力から解き放たれたような動きだった。
また、左右の翼を前後へ噴射する事で方向転換も早く、死角が少ない。
グラシスは追加した1対の翼を活用するだけでなく、翼の噴射量を

微妙にコントロールする事で6枚翼に近い機動を発揮するが、2枚翼のエルファには到底真似できるものではない。

9－9　空中戦

エルファを狙い続けたイーネスの前に、これまで戦いを避けていたエルファが自ら姿を見せる。

2人は約15リティ（約12m）の距離で対峙していた。
この距離、武器だけで考えればエルファに分がある。
3倍の射撃能力があるのだから。
しかし、イーネスは全く動じない。6枚の翼を同じ方向へ集中させた時の移動スピードはイーネス自身が苦痛を感じるほどであり、狙って射ち堕とせるものではないのだ。

「あなたがクラトを撃った」
「クラト？あの隊長か？」
「私は許さない」
「口を開くな、この裏切り者め」
次の瞬間、イーネスは高速移動に入った。

右・上・左下・左上、そこでボウガンを撃てば決まる。
しかし、射撃位置についた時、エルファは一気に後方へ避けていた。
「ちッ、臆病者が」
しかし、一旦後方へ退いたエルファが一気に距離を詰めて来る。
「愚か者め！今さら斬り合いでもあるまい！」
両手のボウガンを発射した。もちろん必中のタイミングだった。
しかしエルファは急激に横方向へ移動して避けた。
「ティフが？ばかな！？」
イーネスは辛うじて左右1発づつの矢を発射せずに留めた。
「なぜあんな動きが・・・」

エルファは不自然な体勢で3×3連装ボウガンを構えた。
3×3連装ボウガンを首の後ろで横に背負うようにしてイーネスへ向ける。
こうすれば右手だけで射撃ができる。
そして左手で3連装ボウガンを構えた。
これは単に矢の数を増やしたのではない。
2方向への射撃、しかも“弾幕”と“狙撃”の組み合わせだ。
そして、エルファは被弾を恐れていない。“相撃ち上等”なのだ。
飛行で逃げるには距離が近すぎる。
イーネスの首筋に冷たいものが伝う。

イーネスはこんなところで果てるつもりは無い。
ティフを葬る為に命を懸けるなど馬鹿げている。
もっと崇高な使命があるのだ。エナルダ国家の建設のために。
しかしエルファは命を失おうともイーネスを倒すつもりだった。
イーネスは能力で勝りながらも、戦いは互角、勝負では負けを認めざるを得なかった。

イーネスはエルファに悟られないように2枚の翼を上向きに噴射した。
その分残る4枚の噴射を強める。
後はもう一つ、何でもいい、僅かでも乱せれば。

「あのクラトという隊長はお前を庇って撃たれたのだ」
エルファに動揺が走る。
イーネスはボウガンを手放した。
「えっ？」
エルファの視線がブレる。
その瞬間、イーネスは上向きにしていた翼を横へ向け、6枚とも全力で噴射した。

激痛に顔をしかめながら斜め上方へ飛んだ。
3×3連装の矢はイーネスがいた空間へ、動きに追従した3連ボウガンもイーネスの僅か下を通過していった。

形勢は逆転。
全弾撃ち尽くしたエルファとボウガンを捨てたイーネス。
空中格闘戦ならイーネスに勝る者など存在したい。
しかし、イーネスはこれ以上の戦闘は無理だった。
急激な移動に身体がついていけないのだ。
鼻からは血が流れ、脳震盪のような症状もある。
朦朧とする意識に耐えながら離脱を図る。
一方のエルファも限界だった。
空中戦闘の負担は非常に大きく、疲労はピークに達している。

帰ろう。
クラトは生きている。
そう、きっと生きている。
私は帰ろう。彼の許へ。

ロスト？

「最近、酒が過ぎるんじゃないのか？シーズンは長い。それにお前の人生はもっと長い」
監督はベテランを嗜めた。
「でも、試合の前に飲むような事はしてませんし、結果は出してます」
「分かってる。ただ、新聞は持ち上げた後は落とす材料を探すものだ」

＊－＊－＊－＊－＊

オープン戦での結果を見ろ。何に文句があるって言うんだ！？
肩は完全に仕上がってるし、１２０球投げても何でもない。確かに異常だと思う。
あの原因不明の頭痛があってから日に日に体に力が漲ってくる。
今では力を抑えなければスピードが出過ぎてしまう。セーブしなければ恐らく１８０キロを優に越えてしまうだろう。もしそうなったどうなる？
メジャー最速記録ですら１７０キロに満たない。
世界最速投手？ヒーロー？メジャー移籍？とんでもない。
メジャーが、世界のトップが１７０で争っている時に１８０だと？誰も認めやしない。徹底的に。そうなったら俺すら知らない何かが出てくる。
なぜなら・・・これは本来の力ではないから。俺自身が分かっている。
しかし何だっていい。
あのナイター照明で輝くマウンド、何万もの観衆の視線を一身に集め、バッターを打ち取る快感。あれを味わえるんなら鬼でも悪魔で

も何でもいい。
一番大事なものを差し出したっていい。
だから慎重に使わなければならない。この力を。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

俺が若い頃の最高速は１５２キロ。直球勝負の速球派ピッチャーだった。
しかし、変化球とテクニックがなければ多少スピードがあっても簡単に打ち込まれてしまう。
プロはそんなに甘い世界ではないのだ。
ファームに何度も落ちた。どうすれば勝てるのか分からなかった。
４球団を渡り歩いて、去年は以前に世話になったコーチが監督を務めるチームにやっと拾ってもらった。しかし、成績は振るわなかった。
監督から来シーズンが最後といわれた。年棒も最低ラインだ。
オフは自主トレをみっちりやると宣言して山にも篭ってみた。
そんな事で変わる訳がないんだよ。でも、何かをやってるって見せなきゃって思ったんだ。
この時点で十分に負け犬だった。
山篭りは慣れないテント生活で疲れただけだった。
夜は硬いマットと虫で寝られなかった。

・・・そして、あの夜。
不思議な光が漂っていた。目をつぶったまま一晩中震えていた。
朝になると荷物もそのままに山を下りた。
それから数日後だった。頭痛が始まったのは。
折角の正月。プロ野球選手としての最後となるかもしれない正月。
俺は寝て過ごした。

熱にうなされた俺は、夢を見ていた。
渾身の一球を打たれて死ぬ夢だ。繰り返し何度も見た。熱が下がると同時に夢は見なくなった。夢の話をすると妻は顔をしかめた。
「冗談でも死ぬなんて言わないでよ、もう」
「俺はピッチャーだせ、バットで死ぬなら本望だよ」
休みの間に出かけられず、息子には悪い事をしたが、1月半ばには練習を開始できるようになっていた。

あの驚きは今でもはっきりと覚えている。
体が軽い。ふわふわする感じだ。まだ治りきっていないのか？
はっきりと分かったのはキャッチボールの時だ。
「最初から飛ばさんといて下さいよ～」
若手が皮肉のこもった声を出す。
コーチが近づいてくる。
「ベテランが頑張っているとチームの気合も上がるよ、うん」「だが、あまり無理はするな。今年が大事な1年だって事は解るが、故障しては元も子もないからな。ランニングでも張り切っていたようだが、徐々にでいい」
このコーチも俺を見限っている。どうせ今期限りと考えているだろう。
「ちょっとブルペン入っていいですか？」
「何を言ってるんだ、まだ早いだろう。それに体だって温まってない」
「いえ、自主トレで調整してますんで。肩も温まってます」
俺の目を見た途端、コーチはたじろぎ、「ならキャッチボールの後でやってみろ」と吐き捨てた。
若手に混じってブルペンに入る。
俺を見て失笑したヤツを見逃さなかった。
俺は笑顔で声を掛けた。
「今年はどうだい？少しはできそうか？」

俺に声を掛けられた若手はムッとしたようだった。
「まぁまぁいけると思いますよ。早いうちに2勝はしたいですね」
2勝・・・俺の去年の勝ち星だ。なめやがって。
「キャッチャー！最初からとばして行くぞ！」
声を上げると、隣の若手はグラブで口元を隠した。笑っている。いや、笑っているとアピールしている。
誰もが笑ってるんだろう。
「ふん、笑ってろ・・・一球で黙らせてやる」
その一球でブルペンは静まり返った。
キャッチャーが後逸した球は恐らく１５０キロ半ばだろう。
その後は投げる度に周りのヤツ等の顔色が変わっていく。
驚きは増し、最後は呆けたような顔をしていた。
監督はサングラスの下でどんな目をしてるのだろう。
取材陣は静まり返った後、急に慌しくなった。
球数が３０を超えるに及んで、コーチが慌てて止めた。
「いつでも投げられますよ、いくらでも。これはまだ8分くらいですかね」
翌日のスポーツ新聞には一面に俺が載っていた。
キャンプの取材は連日の大盛況。目当ては俺だ。
“再起を賭けた山篭り”“いきなり１５５キロ”“全盛期を超える球威”新聞の見出しに俺の記事が踊る。
息子も妻も喜んでいる。最近はいいところを見せられなかったからな。

しかし、なぜだろう。
息子が慕うのも妻が喜ぶのも煩わしいだけだった。
「コイツラハ無能ナクセニ、ノウノウト生キテイル」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

妻と口論になる事が多くなった。息子はあまり寄り付かなくなった。ダメ投手でも支えてくれた妻と慕ってくれた息子は、エースになると同時に離れていった。

酒をいくら飲んでも翌日の登板に支障はなかった。練習は形だけ、調整もしない。それでも勝てるのだ。

家には帰らなくなっていた。練習もろくにせずに酒を飲んでは女を拾う。それでも登板すれば勝ち投手だ。

そんな俺を世の中は“最後の豪傑”“遅れてきた怪男児”などと持てはやした。

その日、俺はたまたま1人で飲みに行った。1軒目で暫く飲んでから、場所を変えようと外に出た。

いままで気付かなかった路地を入ると小さなバーの看板が風に揺られている。背後から聞こえる街の喧騒が現実味を失っていった。

ロスト？

その小さなバーはカウンター５～６人、奥のボックス席が３つ程度の広さで客は居なかった。中年を過ぎようかというママが声を掛ける「いらっしゃい、御１人？」

「あぁ、１人だ」

明らかに失望の顔をしたママはドアの近くに向かって声をかけた。

「ご案内して」

人が居るとは気付かなかった。そこには若い女が物憂げそうに座っていた。

その女はまだ２０歳半ば位で細い線と気だるげな雰囲気を持っていた。

まぁ、一言でいえば美人だ。店が店なら相当稼ぎそうな女。

しかし蛇のような印象の女だ。

「ミキです」

ボックス席に着くや、女はいきなり水割りを作り始めた。

水割りを俺の目の前において、一言も話さずタバコをふかす。

何なんだこいつは。それに俺を知らないのか？

苛ついた気持ちが俺の体に満ちた。

店を変えよう。そう思いつつグラスを舐めた。

ふと気が付くと女がじっと俺を見ている。

「俺が誰だか気付いたかい？」

「知らないわ。でも、あなた目覚めちゃったのね」

＊－＊－＊－＊－＊

その後の記憶はない。

気付くとボトルは１／３程残っているだけだ。目の前にはママが座っている。

「まだ飲む？」
「いや、もう帰ろう」
「タクシーは？」
「結構だ、自分で拾う」
支払いを済ませて聞いた。
「あの若い子はどうした？」
「え？若い子？」「もう、帰り際にそんな事言うなんて、ちょっとカッコいいかもね」「でも、４０過ぎてるわよ、私よりちょっと下」
俺は言葉も無かった。前の店で飲みすぎたのだろうか。
やや気恥ずかしさも手伝って店を出る。
ママの声が追いかけてくる。
「またいらしてねぇ、サエコさんも喜ぶわ。今度は本人に言ってあげてね・・・」
ドアが閉まって、ママの声とＢＧＭが途切れる。
サエコ？ミキって名前じゃなかったか？

暫く歩いていると、なぜか涙が溢れてきた。俺は歩きながら泣いていた。
無性に家に帰りたかった。妻と息子に会いたかった。ダメだった自分が居た家に戻りたかった。
しかし、５分ほど経つとなぜ家族に会いたいと思っていたのか分からなくなっていた。

あてもなく歩き続けると裏路地の公園で、若い男女が５～６人たむろしているのが見えた。
（ドクンッ）
俺の心臓が鳴った。
その中に蛇のような印象の若い女がいた。俺に目覚めたと言った女。
何かを知っているに違いない。時計を見ると１１：３０を過ぎたところだ。

俺に気付いた若い男が吠える。
「なんだオッサン！なに見てんだよ！」
「お前に用はない。そっちの若い女に聞きたい事がある」
「は？何言ってんだ？酔っ払ってんのか？」
「おい、これ野球選手の・・・」
「あ、ほんとだ。丁度いいや、俺らに恵んで下さいよ。プロ野球選手って稼いでんだろ」
「頼んますよ～、俺らにも分けて下さいよ、幸せってのを」
「黙ってろ、俺はミキって娘に話がある」
突然、男達は笑い出し、そしてキレた。
「こいつ終ってるよ、なにがミキに話があるだよ、誰だよミキって！」
さっきから有機溶剤のニオイがしていたが、コイツら飛んでやがる。

ゴキン

鈍い音が俺の頭から響いた。
振り返るとバットを持った男が息を荒くして立っていた。
俺は手を軽く払った。俺の手はバットに当り、バットは男の顔面に当たった。
嫌な音がしてバットが転がる。
「何をした？何をした？」
残った男達がビンや棒を持って向かってきた。
ビンを奪って背中を蹴るとベンチに頭から突っ込んで動かなくなった。
「おらぁ！」棒を持った男が突っ込んでくる。
こいつらは何でこんなにノロいんだ？そう思うくらい俺の体は素早く動いた。
蹴り上げると棒を持った男は２ｍほどの高さまで浮き上がって落ち、

口から大量の血を吐いた。

ゴキン

また鈍い音がした。
振り向きざまに腕を払うと、男は首が折れ曲がってすっ飛んだ。
あれ？俺の顔がぬらぬらしている。血だ。
俺の脳裏に、渾身の一球を打たれた俺が映った。
足元にバットが落ちていた。これが俺を殺すのか。
そのバットを誰かの手が拾い、振り下ろした。
鈍い音が何度も続き、意識はプツリと切れた。

気が付くと女が見下ろしていた。
線の細い、蛇のような女だ。
「何だか手間が省けちゃったみたいね」
「パワースポットって知ってる？最近ブームみたいだけど、あれって本当にあるのよ」
「力が噴出しているの。ただそれを使う事が出来る人間と出来ない人間がいるってだけ」
「力を得た人間は他を圧倒するわ。歴史上の英雄や偉人は常に“目覚めた者”だったの」
「そして、あなたも目覚めたってわけ」
目覚め・・・？
「そう。でも、あまり居て欲しくないのよねぇ。目障りだから」
「じゃ、そろそろ行くけど、その前に薬打ってあげるわね。ワタシはその為に来たんだし」「動けないでしょ？ケミカルだからスッといくわよ。何もしなくても・・・ダイジョウブ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「信じられんな。これで生きているとは」
「しかし覚せい剤反応があったのはショックでしたね・・・」
「まぁ、あの歳であんな球を投げるのは不自然だったからな」
「でも、クスリをキメればあんな力が出るんでしょうか？」
「お前、医者がキメるとか言うなよ」
「あ、すみません」
「ＰＣＰ（フェンサイクリジン）とか使用者が怪力を発した例もあるからな」
「でもＤＣ（ドーピングコントロール）では何も出なかったと聞いてますけど・・・」
「あぁ、分からない事が多すぎる。レポートは苦労するぞ」

直後、心電図が音をたてる。
「ＣＰＡ（心肺停止）です！」
「処置急げ！」

10－1　準備

「おい、そこ！」
ラバックの声が響く。
「列が乱れてるぞ！」

兵士は緊張した面持ちで整列していた。
ラバックも落ち着きなく兵士の間を歩き回っていた。
ルシルヴァは同行するのだろう。姿が見えなかった。
ホーカーはもう泣いているし、スパイクは敵の本陣を見極める時のように遠くを見ている。
ヴィクトールは俯いて微動だにしないし、ラナシドはじっと前を見据えては時折上を向いて深呼吸をしていた。
エルファは大隊の一番後方に1人立っていた。
イーネスとの激闘の数日後、ティエラ姫とファトマ侍女長に連れられて突撃大隊に戻ってきた。気に病んでいるようだが弱々しい印象は無かった。むしろ強くなったように見える。

「き、来た！」
スパイクの甲高い声が響く。全員の身体がぎゅっと引き締まった。
現れたクラトは車輪のついた椅子に座っている。ルシルヴァが押しているようだ。
「おい、嘘だろ・・・」
ラバックの喉から搾り出されるような声は虚ろだった。

クラトは1人では立ち上がる事もできない。剣どころかスプーンすら持てないのだ。
背中には親指程の穴が4箇所開いている、毒で壊死したためだ。
意識はしっかりしているものの、口が利けない。

体はやや左に傾いている。どこを見ているのか分からない目が閉じられ、顔が歪んだ。
どうやら笑顔を見せたらしい。
錬兵場は静まり返った。
誰もが持っていたイメージは１５リグノ剣を振り回すクラトだった。
即復帰とはいかないまでも、大隊に合流していつものように軽口を叩くのだろうと考えていた。

これじゃ廃人じゃないか。
もうホーカーはボロボロ泣いている。ラバックもスパイクも涙が溢れるのを感じた。
どうしてこんな事に。
誰もがクラトの姿を悲しみ、運命を悔やみ、クエーシトのスツーカを怨んだ。

ここでルシルヴァが口を開く。笑顔だった。
クラト大隊長は今、“絶望の苦痛”と呼ばれる毒薬と交戦中だ。
これまでこの毒に勝利した者はいない。常人は痛みに耐えられず自ら命を絶つか狂ってしまうらしいが、こうして外出できるまでに回復した。
軍医の言葉をそのまま伝えよう。
『お前は奇跡を見た事があるか？目の前にあるのは間違い無く奇跡だ』
隊長がどこまで回復するのか、どれだけ時間がかかるのか、それは分からない。しかし、我々も大隊長に負けてはいられない。我々は突撃大隊なのだから。
アティーレもパレントもギルモアも撃退し、“バルカの大剣”と呼ばれた異人の隊長に率いられた突撃大隊なのだから。

ルシルヴァの目に力がこもる。

戦いの結果を恨んではならない。行いの結果を悔やんではならない。
何かを得る為に何かを失い、失わなければ得られない、という考え方は我々には不要だ。
そういった考え方は、得たものと失ったものの損得勘定となる。
損得を考えて大切なものが守れるか！己の未来が得られるか！
あるのは意志と戦いと結果だ。
だから・・・クラト隊長は納得しているんだ。この結果に。
これは結果であって損害ではない。ましてや代償でもない。
他の者が悔やみ悲しみ恨んでいる間に隊長は歩み続けている。
我々も遅れてはならない。立ち止まっている暇は無い。

クラトが小さく唸っている。
ルシルヴァが耳を近づけ、苦労しながら聞き取った。
「ダラダラしてるヤツは後でぶっ飛ばすぜ！戦場で死なないように訓練で死んで来い！・・・だってさ！」
ルシルヴァが泣き笑いながら声を張り上げると、ラバックが姿勢を正した。
「全員完全装備で南門に集合！！」
全員が走り出した。
立ち尽くしていたエルファは、一礼すると砂埃を舞い上げ、信じられないスピードで上昇していった。

「これでまた強くなるよ。突撃大隊はさぁ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クエーシトとバルカの戦いは膠着した。
両軍とも基本戦略は少数精鋭の短期決戦だ。それが膠着する理由は“北の戦乱”による消耗に他ならない。スピードに優れた拳闘士が消耗して足を止めて殴り合いをしているような状態だ。

トレヴェント国軍も最初こそ勇躍、戦場に赴いたが、戦場は想像を絶するものだった。
トレヴェント軍はバルカ軍の指揮下に入らざるを得ない。そうしなければ生き残れるような戦場ではなかったのだ。
クエーシトのエナルダ部隊、バルカのトレヴェント援軍、どちらも決定打とはなり得なかった。
戦力消耗による膠着は不戦状態を生み出し、両国とも戦力の回復を図る。
グリファもエルトアもギルモアさえも動かなかった。
もはやどの国家も戦乱を望んではいなかった。クエーシトとバルカもこのまま停戦してもらうのがベストだ。ギルモアの凋落により各国のパワーバランスが取れ始めている。
クエーシトだろうがバルカだろうが、戦力の拡大は好ましくはない。
これらの思惑は両国の戦いに関与しないという行動に現れた。

この状態は1ヶ月にも及び、新たな戦いの準備期間としては十分だった。

１０－２　落下

この日、突撃大隊の雰囲気は違っていた。戦意が高く、気力も充実している。
しかし、見る人間が見れば、それは“気負い”と映ったかもしれない。
もっと辛辣な表現で“形だけ”と言うかもしれない。

突撃大隊隊長が戦場に姿を現してから戦線に変化が生じた。
全戦線の一ヶ所、突撃大隊はクエーシト軍に打ち込まれた楔(くさび)だ。
その楔をきっかけとしてクエーシト軍に亀裂が走る。
「またあの異人か！」
デュロンは珍しく怒りを口にした。

今日も突撃大隊の先頭に立つ異人の隊長は、兜だけでなく頬当も着けていて、その表情を窺う事はできない。甲冑を黒く染め上げ、１５リグノ剣だけが不気味に光っていた。
突撃大隊の後方にはトレヴェントの１個師団が控えている。
トレヴェント１個師団は敵よりもむしろ突撃大隊を恐れていた。
自殺行為とも言える突撃を敢行し、敵を撃破する戦いはとても真似ができるものではない。そんな戦いに巻き込まれてはたまらないが、今の戦場で生き延びるには突撃大隊に付いてゆくしかないのだ。
「無茶はしてくれるなよ」トレヴェントの師団長は先を進む突撃大隊を見やった。

「突撃隊は敵の左翼に突っ込む。ホーカーの長弓隊は右翼を抑えろ。後ろは気にするな。トレヴェントが押し上げてくれるだろう」「ラナシド！トレヴェント軍に伝令だ！特装隊にも前進するように伝えろ！」

「了解しました！」
黒い鎧の突撃隊長が先頭に立って突っ込んでいく。敵の陣が裂けるように分断され、混乱に陥る。
突撃隊は敵の左翼から斬り込んで右翼後方へ迂回する。敵の右翼はホーカーの長弓隊と突撃隊の挟撃を受ける形となり、左翼は混乱が収まらないままトレヴェントの騎兵に蹴散らされた。
ほぼ完全勝利と言えるだろう。

「もはや突撃大隊はバルカ軍の看板だな。しかし・・・突撃大隊にしては勝ち方が綺麗過ぎるかな」
サイモスはつまらなそうに呟いた。
「やっぱりダメだな、これじゃあ。つまらん」今度ははっきりと口にしてバルカ城に向かった。

＊－＊－＊－＊－＊

突撃大隊の投入で北東部の戦局はバルカが主導権を握った。
対するクエーシトは飛行大隊を投入する。後方撹乱を行い、暗殺による将校の被害も出始めている。
地上とは違う戦いが空を舞台に行われようとしていた。
クエーシトのイーネスはバルカが目の敵にしているスツーカだ。
特にエルファには強い思いがあるだろう。
“私は十分に闘える。これが私の使命だ”
そしてその時は突然訪れたのだった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

グラシスの指示により、夜間奇襲に従事していたイーネスだが、今

日は偵察を兼ねて日中からバルカとクエーシトが睨み合う最前線を飛行していた。
ふと、何かを感じる。これはひらめきの様なもので脳裏に小さな光が瞬くような感覚だ。
じっと目をこらすと小さな点が遠くに浮いている。
「いたか！」
エルファも気付いているだろう。
「今日こそ決着をつけてやる！」

再び対峙したエルファとイーネス。
エルファはイーネスを恐れてはいない。
イーネスはエルファを侮ってはいない。

エルファは3×3連装ボウガンを軽量化した3×3連装ショートを両腕に装着し、腰には3連装ボウガンを2丁、脚にダガー×2。
イーネスは3連装ロングボウガン1丁、3連装ボウガン2丁、刀1本。
今回も仕掛けたのはイーネス。しかしその動きをエルファが躱(かわ)す。
イーネスの顔が一瞬驚き、たちまち怒りに変わる。
エルファは最高速度ではイーネスに到底及ばない。
少ないチャンスを活かす為に、射程が短くとも弾数の多い3×3ショートを2基装着したのだ。
2人とも有効な位置を占めようと動いた。

空中戦の機動は発見・占位・攻撃・退避で成り立っている。既にお互いが視界に捉えている状態では、次の機動である攻撃を行う場所を占める勝負になる。しかし2人の動きは考えうる空中戦の範囲を超えていた。
2人はお互いの背後や死角を取ろうと絡み合うように飛行を続ける。
イーネスは背後を取られると、避けるだけでなく体を回転させて攻

撃しようとしたり、急減速でオーバーシュートさせようとする。以前のエルファなら簡単に堕とされただろうが、今のエルファは体表からの噴射によって機動性を高めている。
しかし体表噴射は翼のように噴射方向を変更できない。やはり空中機動ではイーネスに分があるのだ。
地上からの矢が届かないはるか上空で2人の空中戦は続く。
その時、何かの偶然だろうか。思いがけずイーネスの背後をエルファが捉えた。
エルファは躊躇せずに両腕の3×3連装ショートを全弾撃ち込んだ。
その瞬間に脳裏を走る光。
とっさに撃ち尽くした3×3連装ショートを盾にする。

（ガンガンガンッ）

至近距離からのロングボウガンはその衝撃だけでもダメージを受けそうだ。3本とも腕に装着したボウガンの台座で受けたが、1本は突き抜けてエルファの頬をかすめた。
イーネスがわざと撃たせたのは間違いなかった。
エルファが3×3連装ショートを発射した瞬間イーネスは身体を縦に回転させ、頭を下にした状態で後方を向いて射撃したのだ。結果としてイーネスは脚部鎧の稼動部に矢を受け、左膝を負傷した。
イーネスは脚の怪我などどうでも良かった。

私には翼がある。脚など無くても戦える。

エルファが両腕の台座を投棄する間にイーネスは3連装ボウガンを両手に構えて迫った。
エルファはとっさに翼を上向きに噴射し、落下するように素早く避けた。
イーネスは頭を下に追った。エルファが撃ち上げる矢を交わしつつ

右手の全弾発射。
更に左手を発射しつつ右手が刀を抜く。
エルファも残りの3発を連射する。
矢を交わしたイーネスが迫る。
エルファは速度を緩めない。このままでは地面に激突してしまう。
「馬鹿な。私に度胸試しでもさせるつもりか」
もう間に合わない。
イーネスは翼を下方に全力で噴射した。骨が軋み視界が暗くなる。
一瞬ののち視界が明るくなった時、地上僅か１０リティ（約８ｍ）ほどだった。
エルファを見失ったが、あのタイミングで間に合うはずがない。エルファの2枚翼は面積でイーネスの6割にも満たないのだ。
「私に殺されるよりも墜死を選んだか・・・」

「・・・！！」
この時、太陽が違う位置だったらイーネスは死んでいたに違いない。
とっさに避けたイーネスの横を、ダガーを構えたエルファが通過していった。
「そんな・・・馬鹿な・・・あの位置からどうやって？」

１０－３　幕舎

イーネスよりも下を落下していたはずのエルファが上空にいた。
「そんな馬鹿な！・・・あの位置からどうやって！？」

エルファはイーネスが噴射を開始した直後、身体を地面と水平に大きく開いた。翼も左右に大きく伸ばし、下方への面積を最大限とる。そして全身から下方に噴射を行った。
急停止による身体への負担はイーネスの比ではない。かなりのダメージがあった。
それでも停止した位置は地上から２５リティ（約２０ｍ）だった。
下方にイーネスがいた。
ブラックアウトからの回復、そしてイーネスは当然のように下方を警戒している。
勝てるはずだった。その首筋にダガーを押し込めばこの戦いも終る。

しかし、運命は２人に戦いの継続を望んだ。
もはや２人の体力は限界に近かった。イーネスが刀を抜いた。エルファは逃亡を図る。
「ここまで闘って逃げるのか！」
エルファは徐々に高度を取る。イーネスも続く。
草原に立つ巨大な樹木の上を通過しようとしてエルファの速度が落ちた。
イーネスの刀がエルファを捉えようとした時、エルファは落ちた。
大木に向かって。
刀を手にしたイーネスが迫る。
イーネスはエルファが大木に飛び込むような事はしないと判断した。
翼が損傷する可能性が高いからだ。
しかし、エルファは茂る緑の葉に突っ込んだ。小枝が折れ、葉を散

らし、大きな枝が揺れる。
イーネスは大木の真上で停止。
エルファを追い詰めるべく両手の刀で枝を払う。
と、その時、葉の茂みから槍が突き出された。イーネスの左胸を突いた槍は、鎧に弾かれ穂先が折れつつも鎧を割った。そしてもう一度。穂先が無い木の柄に過ぎない槍がイーネスの胸を強く突く。
「ぐぁぅっ」
イーネスは呻きながらも槍を掴んだ。
この槍の先にエルファはいる。
刀を突き出した。
手応えはあったが確認はできなかった。
イーネスは槍の柄を掴んだまま後方へ距離をとった。

視界の端に腕を赤く染めたエルファが見えた。

体力の限界はとうに超えている。
エルファにも傷を負わせたようだが、戦いの続行は不可能だった。
イーネスの戦いは、エルファを倒す戦いから自ら生き延びる戦いへと移行した。

イーネスは必死に空に浮かんでいた。
超高速移動を身上とするファリガルとは思えない飛び方だ。
幸いにもエルファは追ってこない。
負傷した胸部は心臓の動きに合わせて痺れるように痛む。
左手も効かないし、左膝に矢傷を負っている。
何とか自陣まで戻らなければ・・・

イーネスは格闘戦用の鎧を装着し、地上での戦闘力も非常に高い。
シヴァオスの鎧と名付けられたイーネス専用の鎧は背中に6枚の防翼装甲を施している。

シヴァオスとは黒い竜の意味だ。
通常兵などものの数ではないが、今のイーネスは余りにも体力を消耗していた。
いま敵兵の中に降りるわけにはいかない。
それだけエルファとの空中戦は激しかったと言える。
しかも誤算があった。
空中戦が行われたのはバルカとの最前線。敵陣に深く侵入した場合に比べ、自陣は近いはずだった。
しかし、空中戦が行われている間にトレヴェント軍とバルカ機械化部隊が側面からクエーシト軍を挟撃。クエーシト軍は潰走し、戦線は一気にクエーシト領内深くまで押し上げられた。
そしてイーネスが気付いた時、地上は敵で埋め尽くされていた。
１０ファロ（約４ｋｍ）後方にあったクエーシト第３軍指令部が置かれた場所に戻ったイーネスは撤退を知り絶望感に満たされた。
もう、少しも浮いてはいられない。
目が霞む。既に胸の痛みも腕の痛みも感じなくなっていた。
イーネスに幸いしたのはこの場所に展開していたのがトレヴェント軍だったという事だ。
バルカ機械化部隊だったら、移動式ロングボウガンを射掛けられていただろう。
「敵のスツーカがいるぞ！」
その声を最後にイーネスは意識を失った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

戦いとは残酷だ。いや、命とは残酷だと言い換えよう。
戦場では全てのものが命と比較されてしまう。
そして命とは最も価値があるものだと勘違いされている。
命の前では痛みも苦しみも全てが軽く扱われる。
イーネスは鎧を剥がされた。イーネスの肌は白く美しかった。

その背中に6本の翼が焼き付けたように癒着し、好奇の目に晒されて小さく震えていた。
兵士達はバルカ機械化部隊を率いるランクス特装隊長に引き渡すまで厳重に監視するようトレヴェント軍大隊長から命じられた。
トレヴェント兵は捕らえた鳥にするようにイーネスの翼を2枚づつ縛り上げ、背中の施術痕が見えるように後ろ向きにして幕舎跡の柱に縛り付けた。
先ほどまで死から逃れようとしていたイーネスは死を望んだ。しかし、今となってはそれすらも叶えられる事はない。屈辱の中でゆっくりと死んでいくのだろうか。
イーネスは立っていられず膝を着くが、吊るした綱が腕に食い込むばかりで倒れる事も許されない。思考がゆっくりと巡る。

私はエルファとの空中戦に敗れた。
エルファは翼以外の体表からの噴射力を高め、ティフガルには出来ない機動を手に入れたのだ。
鎧を身に着けなかった理由はそれか・・・気付かなかった。
空の踊り子などと侮蔑して考える事すらしなかった。
エルファの機動は生半可な訓練で身に着くものではないだろう。しかもこの短期間に。
恐らくは命を削るような努力を重ねたのだろう。
私は負けたのだ。実力で。

10－4　疾駆

イーネスの朦朧とする意識の中で想いが巡る。

以前から不安だった。私には何も無い。
子供の頃からそうだった。言う事を聞かなければ相手にもされない。
役に立たなければ放り出された。
命令に従って役に立ってやっと愛されるのだと学んだ。
研究所では大事にされたが、それは私がエナルダだったからだ。
動物の翼を移植するというおぞましい手術を受け入れたからだ。
飛行型エナルダとなった後も何も手に入らなかった。
エナルダ国家建設も他人の思想を借りた夢でしかない。
エルファを憎んだ理由もその裏返しだ。エルファは私が持っていないものをバルカで手に入れていた。

役に立たなくなった時、私は消えていくのだろう。
消えていくのは当然だ。必要ないのだから。
役に立たなければ愛されないのだから。
悲しさでも悔しさでもない涙がつっと流れた。
遠くに喚声のようなものが聞こえる。遠くに。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

グラシスはトレヴェント軍が散開する草原に降り立った。
トレヴェント兵など眼中に無いように周囲を見渡している。
異様な形状の鎧が見る者を威圧する。
肩から突き出した防翼装甲板はまるでそれ自体が翼のようにも見えた。
胸部鎧に装甲版を後付けした旧型と違い、最初から胸部鎧と一体化

して製作されたそれは、肩から後ろ上方へ１５ミティ（約２０ｃｍ）、そこから曲線を描くように斜め下方へ５５ミティ（約９０ｃｍ）ほど伸びている。

「何て奴だ。こんな奴見たこともない」

トレヴェント兵は初めて見る飛行型（スツーカ）エナルダに驚愕した。

しかし、トレヴェント兵が動けないのはグラシスが発する圧力（プレッシャー）のせいだった。

グラシスの体からは何かが揺らめいているように見えた。これが闘気なのか。

兵士達が感じているのは単なる闘気ではない。それは“実体”がある圧力だった。

グラシスの体からはエナル融合された空気の成分が放出されているのだ。

グラシスの闘気や昂ぶりによって意識せずとも放出される微細なマスエナル。

その揺らめきが一瞬大きくなって消えた。

次の瞬間、両手に刀を持ったグラシスが地上を滑るように移動し、トレヴェント兵たちを薙ぎ払った。

グラシスが通過した後にはトレヴェント兵の死体が一直線に並ぶ。

兵士達は一歩も動けなかった。驚愕と恐怖によって景色は色褪せ、聴覚も奪われたように何も聞こえなかった。

グラシスが捕らわれたイーネスの元にたどり着くのに時間はかからなかった。

イーネスの周囲に居た兵士達はあっという間に斬り伏せられ、血煙が舞う。

腕と翼を縛った綱を切り、抱きかかえるとイーネスは薄く目を開けた。

グラシスは表情一つ変えずに言った。

「迎えに来た。帰るぞ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

イーネスは抱き上げられた時もその目を薄く開ける事しか出来なかった。

グラシスの声は聞こえなかったが、意味は分かった。

“私を迎えに来てくれた”

涙がまた頬を伝った。

涙が温かい事に初めて気付いた。なぜ今まで気づかなかったのだろう。

そしてイーネスはエルファに負けた本当の理由を知ったのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

第3親衛隊隊長だったランクスは新しく創設された機械化部隊を統括する特装隊の隊長となっていた。

機械化部隊とは装甲馬車に対空・対地のロングボウガンを装備した部隊であり、特装隊とは特殊な武具を装備した部隊である。

「なに？スツーカを捕らえたと？」

「はっ、しかも新型のファリガルであります。只今、クエーシト司令部跡に確保してあります」

報告の声は得意げであった。

「分かりました。すぐに軍を移動させましょう」

「ランクス様だけでもおいでになれませんか」

「いや、私は部隊と共に参ります」

「そうですか」

年配のトレヴェント兵は白けたような声で答えた。

飛行型エナルダ、しかも新型のファリガルだ。その生け捕りに成功

したのにバルカの特装隊隊長の反応は意外と冷たい。

ランクスが軍を伴って移動を開始した時、新たな伝令が飛び込んできた。

「スツーカがもう1体現れました！被害多数！！」

「ボウガンで撃退しろ！」年配のトレヴェント兵は叱りつけるように言った。

「高速で移動している為、ボウガンでは味方に被害が出ます」

返答する伝令の悲痛な声が響く。

ランクスは右手を上げて振り返った。

「アジャン！高機動隊を率いて私に続け！ジェルランは本隊をまとめて後からだ！」

高機動隊とは４頭立ての馬車に軽量のロングボウガンを搭載したものだ。

馬車に搭載するボウガンの種類として、標準仕様となる３×４ロングボウガンの他に、威力を向上させた３×４対空ボウガン、軽量化した３×３ロングボウガン、または威力は低いが矢数が多い４×４ショート、４×５ショート、など多くのバリエーションがある。

ランクスは高機動隊に先がけて単騎、戦場に向かった。

10－5　理由

単騎で先行するランクスの思考が廻る。
クエーシトのスツーカがもう1体?
新たなスツーカでない限り、それはグラシスのはずだ。
エルトアからクエーシトに流れ着いた孤高の武人。グラシスのエルトア脱出についてはエルトアから帰還した技術者達から聞いている。
ファルもグラシスもバルカにとって最優先に排除すべき対象だった。
しかし、ランクスはグラシスをバルカにこそあるべき人物と考えていた。
「なぜこんな事を考えるのだろう俺は。敵は排除すべき攻撃対象でしかないはずじゃないか」
バイカルノの言葉が頭をよぎる。
“クラトは誰彼構わず心に巣食う疫病神だ”
俺の心にも巣食ったっていうのか?疫病神が。
しかしクラトが疫病神でなかったらホーカーもルシルヴァも居ない。
ラシェットもアイシャもエルファもだ。

黒い甲冑を装着して突撃大隊を率いた。クラトの復活を演じる為だ。
戦いでは連戦連勝だった。しかし、本当に隊長の力が必要なのは苦戦している時だ。あの勝ち戦は突撃大隊の力であって俺の力じゃない。

「・・・俺は俺だ!クラトさんにもレガーノ元帥にもなれんし、誰も俺にはなれん!」

＊－＊－＊－＊－＊

丘を乗り越えたランクスは草原に書きなぐったような赤い線が縦横

に走っているのを見た。
それはグラシスが通過した後に斬り倒され、血にまみれたトレヴェント兵の死体だった。
やはり飛行型(スツーカ)エナルダをこのまま返す訳にはいかない。
ランクスは馬の横腹を蹴るやグラシスに迫った。
トレヴェント兵の血はグラシスの鎧を濡らし刀から滴った。
手綱を引いて急停止したランクスは、グラシスの後ろに白い肌も露わに美しい獣毛の翼を持った少女が倒れているのを見た。
「これがファルと呼ばれるスツーカか」

ランクスは自らのマントを外し、グラシスに放って名乗りを上げた。
「私はバルカ特装部隊隊長のランクスです、まずは尊厳をお護り下さい」
「私はクエーシト飛行大隊隊長のグラシスだ。やっと本当の武人に出会えたようだ」
グラシスは笑顔さえ見せてイーリスの身体にマントをかけた。
「グラシス殿、噂は聞いております。しかし・・・・」
ランクスの言葉が終らないうちにグラシスが動いた。
「そうだ!ここは戦場だ!!」
グラシスの両腕が空気を切り裂く。
ランクスは一撃を刀で防いだものの、もう一撃はまともに受けた。
新型の突撃甲冑でなかったら命は無かっただろう。
「驚きましたよ、これほど早いとは。しかも刀を構えた体勢のまま移動できるなんて」
「私も驚いた。私の一撃を受けた君が喋れる事に」
「あなたの祖国エルトアから供給された鎧のお陰ですよ」
ランクスは息が詰まりそうな胸部の痛みに耐えながら、心の中で舌を打った。
(ちッ!少しも動揺しないのか)

グラシスは微かに馬蹄の音を聞いた。ランクスと戦っている時間はない。
素早くイーネスの元へ移動するとマントでイーネスの体を包み、抱き上げた。
やはりランクスは追ってこない。いや来れないのだろう。それだけの手応えはあった。
もう一度イーネスに「帰るぞ」と声をかけ、上空へ舞った。

直後、雨が降り出したような音を聞いた。
アジャンの高機動隊が射撃を開始したのだ。
追撃・停止・照準・発射・離脱、高機動隊はこれらを迅速に行う必要性がある。
そしてアジャンの高機動隊は非常に優秀だった。
ロングボウガンの矢は束になってグラシスに向かった。

ガンガンッガガンッ
打撃音が響く。
イーネスは歯を食い縛って耐えていた。
グラシスが撃たれている。私を庇って、盾になって撃たれている。
イーネスの身体には1本の矢も届いていない。空中戦で負った傷の痛みも感じないほど消耗しているが、イーネスの心は痛みと苦しみに満たされ、ただ耐えるしかなかった。
追跡しつつボウガンを発射する高機動隊から射撃を受けること数度、やっとグラシスは射程圏外の高度を得た。

イーネスは飛行が左右にふらつき始めたのを感じた。
「イーネス、お前の存在は誰かに必要とされているのだ」
イーネスはグラシスがなぜ突然こんな事を言うのか解らないまま答えた。
「私を必要とする人は私の力を必要とする人。力が無ければ必要と

されない」
「それは本当の意味でお前を必要としている者ではない」
「そんな事ない。必要とするには理由がいるもの」
「イーネス、理由は要らないのだ、何も求めないのだから。ただ存在だけを望むのだから」
「そのような事が・・・きゃぁ！」
2人は落下していた。グラシスの体力も限界を超えていたのだろう。イーネスはグラシスの腕の中でマントを剥ぐとグラシスを抱きしめるようにして翼を下向きに噴射した。体力は少し回復しているようだ。弱い噴射でしかないが、落下速度は緩やかになった。
グラシスは気を失っていたらしく、慌てて噴射を再開し、落下は止まった。
「イーネス、噴射を止めるんだ。翼に負担を掛けてはいけない」

ふとイーネスは周囲に赤い霧のようなものを見た。
それはグラシスの翼から噴射されていた。グラシスの翼は激しく損傷していた。特に右の補助翼はほとんど千切れかかっている。
グラシスの血は翼でマスエナルの粒になって噴射されていたのだ。
イーネスは生まれて初めて心から人の身を案じた。
必死に噴射した。グラシスのために。
必死にグラシスを抱きしめた。離れまいと。
必死に考えた。自分という存在を。

１０－６　蛮族

戦局はバルカに傾き、城の防衛には突撃大隊が置かれた。
その日、やっと歩けるようになったばかりのクラトはティエラと領内を巡回した。
巡回はティエラとイオリアが行う予定だったが、クラトが外に出たいといって同行を希望したのだ。
比較的安全な南西部だが、急遽、４頭立ての馬車が用意された。
イオリアが自ら御者を務め、赤騎馬隊が１０騎護衛につく。
騎馬隊の甲冑を身に着けたティエラは兜だけ脱いで居心地が悪そうに馬車に乗った。
「馬車に乗ると・・・この小さい窓から流れる風景をみると、他国の祝賀行事にでも向かっているような気分になる」
「馬車に乗るのはそういう時だけかい」
「あぁ、さすがにドレスを着ている時は馬には乗れぬからな」
「そういや、戦つづきでティエラも軍装以外は久しく見てないな。ま、その分、正装した時に映えるのかもしらんけど」
ひとしきり笑い合った後、ティエラは真面目な顔でクラトに訊ねた。
「クラト、あの“ジッポ”とか申す道具はお前の世界のものなのだろう？」
「しかも父上のものだというではないか」
クラトはその問いには答えずに想いを巡らせた。
今まで死ぬ事をそれほど怖いとは思わなかった。
それは現実感の欠落に原因があったのだと思う。
今、バルカという居場所を得、死を間近に見た俺は、死の恐ろしさの本質を知った。
今やらなければという思いはほとんど衝動的でありながら、消えるどころかどんどんと強くなるのだった。

「知らなければ良かったのかもな・・・でも、俺はバルカの人間だ。戦い以外の事を考えるのは戦いが終ってからでいいだろう」
「そうか・・・そうだな。しかし、お主が必要なのだ・・・バルカには」
言い終わって唇を噛んだティエラは顔が見えないように窓の外に目をやった。

ティエラは確信した。クラトはバルカを去るだろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

エルトア技術者の話では、黒髪の異人は商業国家タルキアで商売を行い成功したらしいが、その後インゲニア、サンプリオス、ヴェルカノを経てエルトアに至ったという話だった。ある奴隷を探していたらしい。
そしてその奴隷を探して西へ向かったそうだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

その奴隷とはタルキアの奴隷市場で売られていた女の異人だ。美しく聡明そうな顔立ちだったが、エナルダと間違えるほど力が強く、命令にも従わないので手を焼いた持ち主が売りに出したようだ。
コウスケは新しい取引の打ち合わせで市場に来ていた。
そして併設された奴隷市場でその異人の奴隷と出会ったのだ。

商人として市場を訪れたコウスケがタバコに火を付けた時、揺れた炎が指にかかった。
「熱ッ」つい昔の言葉が出る。
その奴隷は激しく動揺した。
「ニホンジンデスカ」

コウスケはジッポを落としそうになった。強く噛みすぎてタバコの苦い味が口じゅうに広がる。
コウスケは奴隷に近づくと久しぶりの日本語で話しかけた。
「君はどこから・・・」
しかし、すぐに邪魔が入った。
この奴隷は高級な奴隷として2日後に行われる競売にかけられる。競売の商品は事前に言葉を交わしてはならない決まりだ。コウスケは一言だけ残して市場を去った。
「必ず助ける」
コウスケは軌道に乗って大きくなり始めた商売を全て畳んだ。売れるものは全て売った。購入したばかりの土地も店も仕入れた商品も。そして７５０万パスクを準備した。通常なら奴隷１人に考えられない金額だ。
有能な戦士系の奴隷でも３００万パスク、愛奴なら最高級でも１００万パスク、最近は愛奴を所有しない傾向にあるのでもっと安いだろう。
しかし、コウスケが最大限の金を準備したのは、ある豪族が強い興味を示しているのを知っていたからだ。
その豪族は３０を少し過ぎたぐらいで、首からぶら下げたカードには【インゲニア国／マヌーバ】と記されていた。金はある。面子のためならどんな無茶もする。そういう人間と感じられた。最大限の準備をすべきだ。コウスケはそう考えた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

競売は最初から異様な熱気を帯びていた。
最初から１００万の声が飛び、会場を騒然とさせた。声の主はマヌーバでもコウスケでもない初老の男だった。驚いた事にそれでも６人がレイズを続けた。
さすがに２５０万パスクを超えたあたりでバタバタと降り、コウス

ケとマヌーバの一騎打ちとなったが、コウスケが６５０万までレイズした直後、マヌーバは嫌な笑いを見せながら８５０万まで引き上げ、「これは売主へのサービスだ」と言って余裕を見せた。
マヌーバは自分の力を示せれば良いのだ。欲しいと望む者が多いほど、その思いが強いほど、この男は欲しくなるのだ。

コウスケは競売の後、マヌーバと接触を持とうとしたが、既にこの地を発っていた。
コウスケはマヌーバの使用人に、奴隷に贈り物を渡したいと言って金を握らせた。
しかし姿を見る事は叶わなかった。
奴隷部屋のドアの前で使用人は贈り物を出せと言う。自分が渡すというのだ。
直接渡すと言って押し問答になったが、贈り物が用意されていないと知るや使用人は激怒した。

その使用人は商人の主人を恨んでいた。物を右から左へ流すだけで大きな富を得ている。
身を粉にして働いている自分は僅かな報酬しか手にできない。
ついさっきまでは主人と戦った相手として同情を寄せていたが、この男も商人だ。簡単に大金を手にしているに違いない。でなければあんな異人の女に数百万パスクも出すものか。
護衛が呼ばれ、異人の男を連れ出そうとした。コウスケがその気になればこんな護衛の２人や３人は簡単に倒せるが、そうしたところで助け出す事はできないだろう。
護衛に抗いつつ、閉まったままのドアに向かって声を上げた。
「私は鳴海。鳴海浩介といいます。７年前にこの世界に来ました。あなたの名前は！？」
「私は神代奈央。ありがとう。そしてご迷惑をお掛けしたようです。申し訳ありません」

外に放り出されたコウスケに使用人は嫌な笑いを投げつけつつ言った。

「あの奴隷は取引先である蛮族への手土産だ。蛮族の国王は珍しい物が好きだからな。もうお前が手に入れるのは不可能だ」

その蛮族は大陸東部を抑える蓋のような存在だ。その蛮族の国名をバルナウルと呼ぶ。

１０－７　毛虫

クラトとティエラを乗せた馬車は１０騎の赤騎隊に守られて南西方面へ向かった。
暫く走ると、馬車は見晴らしの良い丘の上で停車した。
イオリアがティエラに報告する。
「ティエラ様、この先は馬車での巡回が困難ですので、お２人はここでお待ち下さい。半時間（地球の約１時間）ほどで戻ります」
「分かった」
「あの・・・ティエラ姫」
「なにか」
「その・・・護衛はいかが致しますか」
ティエラは一瞬きょとんとした後に視線を外して俯きながら答えた。
「そ、そうだな、警戒度１の地区ではあるし、ま、まぁ護衛はいらないだろう。その分、巡回をしっかり頼むぞ」
「は、畏まりました」

「この先の巡回行程は騎馬で行う。ラエリア分隊長以下５名は西ルート、残りは私と東ルートだ。全行程で半時間を目安にペース配分せよ」
馬車の外からイオリアの声が聞こえ、すぐに馬蹄の音が響いた。
ティエラは見送らなかった事に少し後ろめたさのようなものを感じた。

「クラト、聞いての通り暫く休憩じゃ、外に出るか」
「あぁ、今日は天気もいいし、少しは暖かいようだな」

ティエラは鎧を外した。太陽の光が鎧下に体のラインが映す。
それに気づく様子もなく、浮き立った声で話しかけた。

「あれを見よ、あれがバルカの涙と呼ばれる湖だ。季節によって色が変わって見えるのだ。美しいだろう」
「おぉ、これは見事な景色だな。さすがイオリアは休憩場所も良い場所を選んだな」
「まぁ、周囲の視界が開けているのは敵に備える意味もあるのじゃ」
「あの湖の向こうはタルキアと旧パレントの境、そしてずっと右手に見える山々がタルキアとの国境だ。そこに南北に街道が走っている。商業街道とも呼ばれ、北はクエーシトから南はインゲニアを過ぎてローヴェまで続いているのだ」
「俺はその街道を抜けてきたんだ。あの街道では色々な出会いがあったよ、ホーカー、ルシルヴァ、バイカルノ・・・」
ヴェルーノ卿とランクスとも出会っていたが、あえて伏せた。
「そしてパレントで捕縛されたという訳か」
「え、何で知ってんの？」
「ルシルヴァから聞いたのだ」
「まぁ、ルシルヴァは何でも楽しそうに話すからなぁ。本当は処刑されるはずだったんだぜ。リグノ刑とか百本刑とか」
「・・・ルシルヴァはクラトの話をする時は嬉しそうなのだ。ホーカーやジュノもそうだが」
「そう？違いがワカランけどな俺には」
「その後、クエーシトで開放されてバルカ入りしたのだな」
「そう、そして入城前にラヴィスとやりあった。危なく斬られるところだったぜ」
ティエラは少し沈黙した。
「俺はラヴィスの事は忘れないよ。良かった事も悪かった事も思い出話をするし、気に入らなかった事は文句も言うし・・・ま、ミミッチィけど。でもアイツが居るように話をするんだ。ちょっと巡回に出ているような気持ちで。だから忘れない」
「そうか、お主は割り切れるからな。でも、その方がラヴィスも喜ぶだろう」

「そして入城した後はティエラも知ってのとおりだ」
「しかし、お主が茶と菓子を全て食べてしまったのは本当に可笑しかった」
「あれ、結構無理して食ったんだぜ」
「それにピサノ大臣をハゲやら焼け跡などと、しかも会議室で・・・」
ティエラは暫く笑い続けた。
クラトは地に生えた草を引き抜いて笛にして鳴らした。
小さく風が吹き、ティエラの髪が揺れる。

風になびく草と一緒にティエラの栗色の髪も揺れる。
ティエラは自分がどんどん弱くなっていくように感じた。
敵陣に斬り込み、敵を蹴散らし、白刃をくぐる。そんな自分が躊躇してしまう事。
屈強な兵士を前に戦いの意味と武人の在り方を訴える。そんな自分が言えない言葉。
この男には虎のように接しても気持ちは仔猫ように弱い。
「少し歩こうか」
クラトは少々ぎこちなく立ち上がった。
少し歩くとクラトは疲れたのか岩の上に座り込んだ。
「大丈夫なのか」
「大丈夫、これも訓練だよ」
「そうか、無理はしてくれるなよ」
「あぁ、ここからの景色もイイなぁ」

ティエラが腰を下ろすと岩が小さいせいか体が密着した。
ティエラの鼓動は早まり、どうして良いのか分からなくなった。
「風は冷たいけど、ティエラは温かいね」
「そ、そうか、それは良かった。もっと温まるか？」
ティエラは何を言っているのか分からなくなっていた。

ふと美しい花を見つけた。
「こ、こんなところにも花が咲いているではないか」
「そうだな一番きれいな時だな。ティエラもそうだろう。戦いばかりでそんな事に構っている余裕はないだろうけど」
「そんな事は・・・。最近は髪の手入れも出来ておらんし、少々筋肉がつき過ぎてきたし、色黒になってきたし」
「全然気にするほどじゃないよ」
「そ、そうなものなのか」
「俺はそう想うよ」
「そうか、ありがとう」
ティエラは先ほどまでの混乱した気持ちが落ち着くのを感じた。

「それにしてもこの花は何とも美しいではないか」
「ま、その下の葉っぱには毛虫がついてやがるけどな」
「もぅ」
「しかし、悪食(あくじき)の毛虫も花は喰わないか。少しは遠慮ってモンがあるのかな。花の盛りに摘むのは無粋だからな」
「・・・美しい時だからこそ、摘んで欲しいと願う花もあるのではないか」
「え？」
「・・・」
言葉は無かった。さっきまでは聞こえなかった草の揺れる音が聞こえる。
「今日の私は少々おかしいようだ。気にしないでくれ。馬車に戻ろう。そろそろイオリア達も戻る頃だろう」

馬車に向かって歩き始めるとティエラは突然、言いようもない不安に包まれた。
この男を引き止める術はない。籠から出た小鳥のように自由に飛びまわり、やがて去って行くだろう。

この男は何も欲しがらない。
どうすれば私の傍にいてくれる。何をすればいい。何を差し出せば良いのだ。

ファトマが聞いたら言うだろう。
『ティエラ様は想いすら差し出してはおりません。クラト様は仰いました。ただ望めば良いと』

ロスト？

私は院長室に向かった。
ＰＣモニターの向こうに白髪が見える。院長はいつもと同じよう机に向かってキーボードを叩いていた。

“いつもと同じように？”

もう2年ほど前になるだろうか。院長の家族が行方不明となった。
数日後、優秀な医者であった息子とその妻子は遺体で発見された。
院長は変わった。
ハイスペックのパソコンに通信機材、毎日のように届く書籍。
以前は落ち着いた雰囲気の院長室も、机はさながら雑誌編集室のようだ。
誰もが同情した。
“息子を失った穴を仕事で埋めようとしている”

現代医学において電子機器は基礎だ。これを習得しなければ力を十分に発揮する事はできない。
医療機器にデータ、通信、解析・・・
経験と技術がある古い人間は足元に穴が開いたように感じただろう。
事実、機器の習得に苦しむ者が多かった。
だが、実力を備えた後継者を持ち、既に高齢の域に達していた院長はその苦しみとは無縁だった。
体に刻まれた経験と自らの手で事足りるのだ。

その院長が最新の機器に向かい、驚くべき習得力を発揮した。
誰かが言った。“悲しい”能力の発揮だと。家族を失った事が原因だというのだ。

しかし、そうだろうか。
私は家族が行方不明になる前から院長は変わったと感じていた。

＊－＊－＊－＊－＊

「呼び出しておいて済まないが、ちょっと掛けて待っていてくれ」
この部屋の中で唯一以前と変わらない応接セットに顔を向けた。
これは話の内容が“重要”だが、“短時間”で済むというパターンだ。
案の上、腰を降ろした院長は結論を言った。
「３０５の患者だが、私が担当しよう」
「えっ、院長が直接ですか？」
「そうだ。あまりに不明な点が多い。というより不可解な点が多い。我々が直面しているのは未知との逢着ではなく、既知への懐疑だ」
「レポートも私が作成する。担当メンバーも私が選定して指示を出すから、君はこれまでの情報だけ報告してもらえばいい」
「・・・」
「篠原くん？どうかしたか？」
「あ、いえ、承知しました」
「大変だっただろう。苦労を掛けたが、これからは自分の業務に集中してくれたまえ」「そういえば息子さんは大学受験だね、優秀だと聞いているよ。きみと同じ道に進ませるのか？」
「それが、息子は心理学に興味を持ちまして・・・」
「そうか、我々がやっているのはいわばハードの部分だからな。息子さんがソフトの部分に進むのも面白いだろう」
院長は微笑んで言った。
しかし視線に体温は感じられず、まるで爬虫類に見つめられているようだった。

＊－＊－＊－＊－＊

「良かったじゃないですか、面倒な仕事が減って」
「本当にそう思うのか？」
「えっ？」
「お前だってあの患者の経過を見てきただろう？あれほど損傷していた脳神経細胞も再生し始めている。脳細胞が脳の中心で再生される事を考えれば異常なスピードだ」
「ｂｃ１２遺伝子の作用など比較にならない。何かがあるはずなんだ。脳の障害や疾患の治療に役立つかもしれない。それを研究したいとは思わないのか？自分の手で解明したいとは思わないのか？」
若い医師は篠原の勢いにたじろぐように上体を引いて言った。
「すみません。気持ちも分かりますが、私にはちょっと荷が重いというか・・・」
私は、この若い医師が私を気遣って言った言葉をそのまま受け取ってしまったようだ。
事実、私は仕事を抱え過ぎていた。
担当している仕事以外にだいぶ手を出している。本当は担当業務を減らして身軽に動きたいが、人員不足はそれを許さなかった。
「・・・済まない」
「いえ、それにしても、どうして篠原さんが主担当どころかメンバーにも入っていないんでしょうか？形だけでもメンバーにしておけば資料やヘルプの時間も取れるでしょうに」
「分からん。理由が無いなら俺が快く思われていないんだろう」
「なに言ってるんですか、それこそ意味不明ですよ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「あなたが新しい人？」
「神代だ。あんたの指示に従うように言われている」
「あらそう、じゃ後で連絡するから指定した場所に来てもらえる？

難しい仕事じゃないから説明はその時にするわ」「私は一之瀬ミキ。ミキって呼んでもらって結構よ」

「ミキさんだね。分かった、連絡を待とう」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

お父さんは仕事を変えた。時間が不規則で結構疲れるらしいけど、お給料がいいんだって。

来年は私が大学だし・・・まぁ受かればだけど。

弟も高校生、何かとお金がかかる。

お母さんもパートに出てるけど、ギリギリというか厳しいらしい。

私は大学に魅力を感じられず、就職を希望したけど、お父さんが大反対した。

伯母さんが亡くなった後、お父さんは体調が悪かったし、私ともギクシャクしていた。

ところが先日、お父さんからの提案で家族で話し合いをしたのだ。

私を生んだお母さんの失踪と今のお母さんとお父さんの結婚、弟が生まれたこと。家族で話し合った。いつも食事をするテーブルで。

もっとも、最近４人で食事をする事はほとんどなくなっていて、４人が同じテーブルに着くのは久し振りだった。

お母さんは苦しそうに、ぎゅっと握った右手を胸に添えるようにして話してくれた。でも一番辛かったのはお父さんだと思う。

最後にお父さんが言った。

「家族とは共同体だ。血縁とは共同体である理由の一つでしかない。理由はいろいろあるだろうが、生活を基盤として最も影響を及ぼす人間の共同体という事が重要なんだ。・・・だから我々は家族だ」

「・・・」

「あれ、俺、自分でも訳が分からない事言ったな。ちょっとテンパってるのかな」

何もなかったテーブルに笑いが満ちた。
「秋人、初めて聞いた話もあって驚いたろうし混乱もしているだろう。千夏も綾子も不安だったろう」
「今日聞いた話の中で、知っていた事については今まで通りの家族だし、知らない事については今まで以上の家族になれたと思う」
「今日からは全員が共有したんだ。ある意味家族としてのスタートなのかもしれない。４人で頑張って行こう」

その後、お父さんがこっそり買っておいたケーキを冷蔵庫から出した。私達は驚いて見せたが、ケーキの箱が冷蔵庫に入っているのに気付かない訳が無い。
お母さんと弟は無邪気に笑っているが、私はお父さんの“抜けた”ところに安心していた。
お父さんを恐ろしく感じた夜以来、お父さんはどんどん変わっていった。
それまでふさぎ込んで疲れた顔をしていたお父さんに力が満ちていった。
ただ、それは車のエンジンを入れ替えたように何か決定的なものが“違うもの”になって、ますますお父さんがお父さんではなくなっていく様で怖かった。
時折見せる冷たい視線。関心がないという視線。繋がりが感じられない視線。
足下を歩く蟻を見るような、私達に価値も期待も求めない視線。
とても不安だった。
だからお父さんの慌てた様子や、ケーキの件は私を安心させたのだ。

ロスト？

お父さんの新しい勤め先は、重要書類や貴重品などの保管や運搬を専門的に扱う会社だ。急に仕事の連絡が入って出て行く事も多いし、数日戻れない場合もある。私から見ていてもかなりハードだ。しかしお父さんは疲れた顔もみせず、むしろ力に満ちていた。

お母さんの誕生日、ちょうど日曜日で私と弟は休みだし、お父さんも仕事を休んで４人で出かけた。

両親や弟と出かけるのは少し気恥ずかしくもあったが、思いの外お父さんがはしゃいでいて、私達もそれに乗せられるように楽しい時間を過ごした。

食事をして戻った後、ケーキがお母さんの前に置かれた。ろうそくに火を灯すと弟が部屋の照明を消した。

お父さんが照れくさそうにお母さんへの感謝とお祝いの言葉を贈る。

私達からの拍手。

ろうそくがなかなか消えず弟がからかう。

お母さんが笑う。弟が笑う。私が笑う。

ふとお父さんを見ると、ろうそくの小さい火に照らされて私達をつまらなそうに見ていた。

虫を見るような目で見ていた。

（えっ？）

その瞬間、ろうそくは吹き消された。

弟が照明のスイッチを入れる。

私は心臓を掴まれるような激しい不安を感じた。

明るさを取り戻した部屋の中でろうそくから白く細い煙がのびて消えた。

ケーキが切り分けられる。
ちらっとお父さんを見ると微笑みながらケーキを頬張っている。
さっきは何だったのだろう。

ケーキの後にお父さんと弟はコーヒーをお母さんと私は紅茶を飲んでいた。
その時、お父さんの携帯が鳴った。会社から支給された携帯だ。
お父さんは何度か返事をして携帯を切った。
「済まない。今日は帰れないと思う」
「あなた、あまり無理は・・・」
お父さんは残ったコーヒーを一息に飲んで言った。
「じゃ、行って来る」

お父さんは私達の言葉を避けるように出て行った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

あ、もしもし?神代さん?
早速で悪いんだけど、今から合流してもらうわ。
それにしても、あなたもそうなの?何だか最近多いわねぇ。

＊－＊－＊－＊－＊

俺は会社から預かったアウディＡ４クワトロを病院の隣にある公園の路肩に停車させた。
シートに体を預けると背中を包むような心地良い弾力を感じる。
約１５分前にミキと男２人を病院前で降ろした。この時間にどうやって侵入するのかは分からないが、俺の役目は連絡が入ったら車で迎えに行くって事だけだ。
時間は午前2時を回ったところだ。看護師のシフトも切り替わって

一息つく頃だろう。
ターゲットは一昨日緊急入院した患者。

携帯が鳴る。
急発進して病院前に寄せると、ミキは助手席に体を滑り込ませながら言った。
「失敗したわ、すぐに車を出して！」
「どこへ向ける？」
「次の十字路を左へ、国道にぶつかったら右、少し走るとインターがあるから下りに乗って」
俺は言われるがままに国道を抜けて、高速を下り方面に乗った。
「ワタシ以外の2人がどうなったか聞かないの？」
「聞く必要はない」
「な～るほどね。さすが瀧（タキ）さんのお気に入りだわ」「それにしても、あんな護衛が付いてるなんて聞いて無いわよ」
「連絡しなくていいのか？」
「一応この状況も想定していたの。任務は続行よ、次のサービスエリアに入って」
ウィンカーを左に出しつつ、サービスエリアに入る車線に車を入れる。
「一番手前に停めて」
そのサービスエリアは大きなパーキングエリアから近く、設備はトイレだけなので利用者は少ない。
入り口から一番近い駐車スペースにアウディを停めた。見渡すと他には前方に黒のレクサスが停まっているだけだった。
「前に停まってるレクサスに乗り換えるわよ」
「えっ？」
「この車は放置ってワケ。ブラックなの。ま、あのレクサスもだけど」
「レクサスはキーがついているわ。何も持たなくていいから急いで

乗り換えてすぐに出発、次のインターでユーターンしてもう一度病院へ向かって頂戴」

襲撃に失敗した現場に戻る？本気か？

今回のターゲットは一昨日緊急入院した国会議員だ。現与党において強固な派閥を持ち、水面下で野党第一党からの一本釣りを噂されている。もしそれが事実なら次の選挙で与野党の逆転が現実味を帯びてくる。

その政界のキーマンが交通事故に巻き込まれた。

その事故は多数の死傷者を出す惨事であったが、この時に不審な女が目撃されていた。

その女は事故で大破した黒塗りのセンチュリーを覗き込んでいたという。

今回の事故の関係者に女性はいない。その証言は見間違いとされた。

見間違いなら、何をしていたのか考える必要はない。

死亡５人負傷者３人の大惨事、しかも被害者の中に未来の総理とも目されている国会議員が含まれており、事故原因となったトラックの運転手は現場から逃走して自殺、話題には事かかない事故だった。

そして、誰も気付かなかった。本当の死者は２名のはずだった事に。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「あ、アウディのエンジンは切らないでね」

ドアに手を掛けると確かにロックはされていないようだ。ドアを開けた瞬間ドキリとする。後部座席に男が乗っている。見た事もない男だ。

すぐに分かった。

“ コイツは普通じゃない”

レクサスの後部座席に座っていた大柄で短髪の男は異様な雰囲気を持っていた。
落ち着いているのは自分の力に絶大な自信を持っているからだろう。その反面、プライドが強く理性は薄そうだ。つまり、何かの拍子に本能が先走りするタイプ。
それでもこんな仕事が出来るという事は、この男の性質が基本的に冷酷だからだろう。

シートに体を滑り込ませて振り向くと目で挨拶する。
男も目で返した。
エンジンを掛けるとサービスエリアに入って来たベンツＣ３５０が、出口に近い場所に停まった。
「車を出せ」短髪の男は低い声で言った。

レクサスをサービスエリアの出口へ向けた俺は、ベンツの前を通り過ぎたところで何かを感じた。
感じるのと同時に俺は動いていた。何も知らないのになぜ俺の体は動いたのだろう。

ロスト？

俺は停車しているベンツに何かを感じた。

“排除対象”

俺の体は戸惑うほど素早く行動を開始した。
俺の手には大型のバールが握られている。
ナビに座ったミキから溜息のような声が漏れた。

俺はレクサスから飛び出した。ベンツまでは１０ｍほどでしかない。

（ズンッ）

ベンツのウインドウが破壊された。
俺がベンツに取り付いた時、乗っていた２人は既に絶命していた。
「良く気付いた。しかし遅い」
短髪の男がニヤリと笑って名乗った。
「俺は須藤だ」
嫌な笑い方だった。
須藤の背後にミキの姿が見えた。

馬鹿な、あのタイミングで俺より早い！？
この２人、一体・・・。

「この人達は違うわねぇ。なんでこんな人達に追わせたのかしら」
ミキが楽しそうな顔をしている。
須藤が関心無さげに呟いた。
「尾行だけが目的だったんだろう」

「なるほどね。さて、戻って仕事の続きをしなきゃ」

レクサスは高速の上り車線を１１０？／hで走行している。
「ちょっと手強いかもしれないから、神代さんにも来てもらおうかしら」
「ミキ、この男は」
「大丈夫よぉ、瀧さんのお墨付きだもの」
俺の背中に殺気に似た感情が突き刺さる。
「神代とかいったな、何をすればいいか分かっているのか？」
「目に入った人間を殲滅する」
「あはは～、正解～、神代さんって面白～い。殲滅だって。難しい言葉使うのね～」
「言うのは簡単だが、お前、人を殺した事があるのか？」
からかうような言葉に、俺はハンドルを左に切りながら答えた。
「無い」
「なら教えておいてやる。死んで欲しくない人間は簡単に死ぬが、死んで欲しい人間はなかなか死なない。無理はしなくていい。俺達の後から来い」
「分かった」
男がなおも続ける。
「言っておくが・・・、俺達がお前をフォローする理由はお前が死ぬと処理に手間取るからだ」
「じゃ、あんたが死んだ時のために処理の方法を教えてくれないか」
「何だと！」
隣ではミキが笑っている。
「ほんとに面白い人ねぇ。目に入った人間を殲滅するのはいいけど、私達まで殲滅しちゃ嫌よ」
からかいの声に俺以外の笑い声が響く。
それに答えるように、俺は前を見据えたまま言った。

「何を言ってる。お前らは人間じゃないだろうが」

ほんの少しの沈黙の後、ミキと須藤は再び笑い出した。

「お互い様でしょ。ターゲットもそうだけど、あちらにも人間じゃないのがいるわ。手強いから1人で突っ込まないでね」

病院に戻ると驚いた事に警察どころか病院職員の姿すら見られない。ほんの1時間ほど前にここで数人の人間が死んだはずだ。何も変わった様子が無い事がかえって不気味な雰囲気を醸し出している。場合によっては単独で脱出・逃亡しなければならない。俺は言われた通り、付いて行くのがベストだろう。

病院の西側通路のドアは開いていた。踏み込むと2つの死体が投げ出されている。

ミキと最初に病院へ入った2人だ。

視線を感じて顔を向けると2階に通じる階段の踊り場に白髪の老人が立っていた。

全く感情の無い顔でこちらを見下ろしている。

「君たちがここに来たという事はあの2人は死んだか。彼らは“ノーマル”だからな、当然の結果か」

男は白衣のポケットに両手を突っ込んだまま続けた。

「その2体を回収して帰りたまえ。こちらも被害が出ているが目をつぶろう」

「あら、状況は3対1なのに、ずいぶんと上からものを言うじゃない？」

「ふん、あんな年寄り、俺1人で十分だ」

須藤が信じられないスピードで階段を駆け上った。

「須藤さん！ダメよ！」

須藤の手には６０？ほどのバールが握られている。

白衣の老人は身構えもしない。

須藤がバールの尖った先端を向けてぶつかっていった。
その時、須藤の体がビリッとしびれた様に震えて動きを止めた。

（ガランッ）
バールが足元に落ちて派手な音を立てた。
そしてもっと重いものが階段を転がり、俺たちの目の前に転がった。

「こんなもので突いては後の処理に困るだろうに。無粋な男だ」
「君らもこれ以上荷物を増やすわけにもいくまい。これで退いてくれないか？」「検体に対する考え方は概ね君達と同じだ。ここで無理をする必要は無いと思うがね」
ミキは顎を引いたまま睨むように相手を見据えている。
「あと、瀧くんに伝えてくれ。やはり私は協力できないとね」
『！！』
ミキの背後で俺は須藤の足を掴むと引きずってドアを出た。
残りの2人の死体もドアの外へ出す。
ミキはチラリと俺が死体を運び出したのを確認して言った。
「じゃ、私達は失礼するわ。伝言は確かに伝えるから安心して頂戴」
ミキが緊張している姿を俺は初めて見た。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

レクサスのトランクにボディーバックが積んである。
先の2人は死後硬直が始まっていて、強引に詰め込むと間接がいやな音を立てた。
俺達はミキが連絡をして待ち合わせた男達にレクサスと3つの死体を引き渡した。俺の初仕事はこうして失敗に終ったのだ。

「ねぇ、私のお店まで送ってよ」
「店？」

「そう、小さなお店なのよね。骨董とかクリスタルとか扱ってるの」
「構わんよ。俺もこんな時間には帰れないし」
送ると言っても車は無い。タクシーを拾った。
タクシーで帰るのに送る必要なんてあるのか。
そんな事を言うのは野暮だが、俺はミキに女を期待してはいない。
数時間の居場所が欲しかったのだ。

店に入ると香の匂いがした。
その香はミキの印象そのままに、甘く気だるげで苦かった。

ミキの店はオフィス街から少し外れた裏通りにあるビル１Ｆのテナントだ。
狭いが、こういう店にありがちな薄汚れた感じやチープな印象は無かった。
奥にあるヴェンゲ色のテーブルもそれっぽい雰囲気を醸し出している。
いつの間に準備したのだろう、茶が出された。
ガラス器の中で黄色い茶葉が上下している。
これは中国六大茶類の中で最も貴重品といわれる黄茶だ。
しばらくすると茶葉は沈み蓋が取られた。
ガラスの茶器が目の前に置かれる。
その繊細な味は、経験が無い者には分からない旨みがあった。
「これは良いものだ」
俺は旨いとは違う表現を使った。
「へぇ、君山銀針（ジュンシャンインジェン）を知ってるの？」
「いや、名前は知らないが味に品がある。それに良いものは主張しなくても理解される」
「ふぅ～ん、あなた面白いだけじゃないわね。ちょっと興味が出てきちゃったかな」
女はスッと立って奥へ消えた。

やや温めのお茶は口でも喉でも何処からでも吸収されるように俺の体に染み込んでいった。
飲み終えるとミキが奥から姿を見せた。
着替えたらしく、黒いシルクのルームウェアローブを羽織っている。
左手にはグラス、右手にはヘネシーを下げている。
人を殺してきたばかりだってのに、中国茶の次は酒か。この女もぶ

っとんでるな。
「なぁ、もう夜が明けて電車が動き出そうって時間だ」
「あら、私達はずっとお仕事してたのよ。仕事が終ってやっと帰ってきたんだから寛(くつろ)いだっていいでしょ」
「寛(くつろ)ぐって、一晩中動き回って汗だらけ・・・」
テーブルに置かれたヘネシーを見て驚いた。バカラのデキャンタに入った濃い琥珀色の液体。
「リシャールじゃないか」
バーで飲めば1杯2万は下らないだろう。
ミキは俺を試すように言った。
「どうする?」
帰ってからゆっくり飲(や)りたいが・・・
「もらおうか」
ミキはにこりと笑うと左手のグラスを鳴らした。
こんな笑顔もできるのか。驚くほど純真な笑顔だった。

ヘネシー“リシャール”
その香りはグラスに注がれた時からテーブルの上に拡がった。グラスを近づけると香りにむせるようだ。
フルーティ、豊か、まろやか、やわらかい、それらの表現は間違いではないが、適切でもなかった。バニラ、スパイス、花束、何とか表現しようとして色々な単語が並べられるがどんな言葉でも表せない。
最初は香りだけで十分だ。香りに慣れるともっと強い刺激が欲しくなる。グラスを揺らし掌の体温で香りを立たせる。それでも足りなくなってやっと口に含む。舌触りと刺激。
口に含んだまま鼻から息を抜く。その後やっと飲み込んで鼻と口で余韻を楽しむ。
純粋なコニャックメーカーの愛飲者からは、カミュ、レミーマルタンと並んでチクチクと嫌味を言われるのがヘネシーだが、やはり旨

いと思う。
椅子にもたれかかると体が弛緩していく。より強い刺激を求めて楽しむピッチが早まる。
「じゃ、何か食べる？」
「え？」
「お腹減ってるんでしょ。準備させてるわ」「シャオチャオ！」
呼ばれておずおずと姿を現したのはどう見ても１０代半ばの少女だった。
ワインとグラスが運ばれ、ミキがさっさとコルクを開けた。
シャオチャオと呼ばれた少女は、続いて両手に４枚の皿と小さなバスケットを器用に載せて運ぶ。
運ばれてきたのはステーキとパン、チーズだ。
コニャックの後にステーキとは・・・とことん狂ってる。
しかし、悪くはないと思った。

ワインは詳しくないので知らない銘柄だが、スパイシーなフルボディ。かなり良いものだ。
肉も美味い。かちりと嵌るように合ったワインと肉は組み合わせがひとつの料理のようだ。
旨い食事は人間を幸せにする。そう実感したた。
ふと気付くと、ミキはステーキを平らげパンとチーズを千切りつつ、新しいワインを飲んでいる。
会話はほとんど無かった。酒やチーズの話が少々。
ふと目に入った壁の時計は８：００を指している。
食べ終わる頃には俺は満足という名の幸福に包まれていた。その幸福は俺の体からじわじわと染み出し拡がっていった。俺はこの店、ミキという女を含めて幸せを感じ始めていた。ミキは例の純真な微笑みを俺に向けたままワイングラスの縁を指で撫でている。

目が覚めるとレースが掛かったベッドにいた。ミキが俺の名を呼ぶ。

名前で呼ばれるのが当たり前のように返事をする俺がいた。
窓からはまぶしい光が入り込み、部屋の奥を一層暗く感じさせる。
その仄暗さの中、白い肢体が浮かび上がる。振り返ったミキが手のグラスを差し出して微笑む。
いつからだろう、どうしてだろう。俺がここにいるのは。

視界の端で何かが動いた。
不意にシャオチャオと目が合った。
その瞳を見て、俺は何かを思い出しそうになった。
何も思い出せはしなかったが、俺は現実に引き戻された。
ヴェンゲ色のテーブルに2本のワインボトルとチーズとパンの皿が並んでいる。
店の時計が8：45を指していた。
我に返った。
ぼやけていた現実の境界が徐々にはっきりとしてくる。
俺はこのミキという女に惹かれている自分に気付いた。帰った方がいい。
「ちょっと休もうと思ったんだが、長居をしてしまったようだ。そろそろ帰ろう」
テーブルの向こうでは黒いローブを羽織ったミキがグラスを口にしたまま驚いた目を俺に向けている。
「随分とごちそうになってしまった。ありがとう」
「こちらこそお酒に付き合ってくれてありがと。楽しかったわ」
「じゃ、失礼する」
「あ～、お店でも開けようかしら」
「寝てないのに大丈夫か？」
「ひとりで寝る気分じゃないの」
人を殺したからって訳じゃなさそうだ。そんな玉（タマ）じゃないだろう。
むしろ俺が悪夢を見そうだ。
「俺は帰って寝るよ。良い夢が見られるといいが・・・」

「何言ってるの、夢ならたった今見たでしょ」
さっきのミキと暮らす夢の事か？この女は俺とは別な力を持っているのだろうか。
「それはそうと・・・いや、何でもない。じゃ、失礼する」
ミキはテーブルに右手の肘をついて顎を乗せ、左手を小さく振った。

店を出ると強い日差しに辟易としながら歩き出した。
女の子が路肩に佇んでいる。
「シャオチャオ・・・だったね？」
こくりと頷く。
「君は料理が上手だね。とても美味しかったよ、ありがとう」
またこくりと頷く。
「あと、君の目を見て何かを思い出しそうになった。そのお陰で私は自分らしい部分を保てたようだ。礼を言うよ」
シャオチャオは始めて俺を見上げた。驚いた瞳は少女のそれではなかった。
色々なものを見て何もかも知っている瞳だ。
「それじゃ、さよなら」
俺の言葉にシャオチャオは何か言おうとしたが、俯いて胸のあたりまで上げた手をぎこちなく振った。

10－8　傾国

戦局はバルカに傾いた。
そのきっかけは突撃大隊だが、大きく貢献したのは特装隊だと言える。

バルカが戦場に投入した機械化部隊は有効に作用し、連装ロングボウガンは戦場を一変させた。
しかし、バルカ軍の一部、特に古い人間の中には機械化部隊を嫌う者もあった。
武人の精神に反するというのだ。
突撃大隊の長弓隊を絶賛した者も、近づいて強力な矢を放っては逃走するこの部隊は好きになれないのだ。
古い武人にとって戦場とは人と人が打ち合う広さであって、遠距離から矢を放つロングボウガンは戦場の外から矢を投げ込む“無粋者”でしかなかった。
しかし、今のバルカに戦場に精神を求める余裕はない。
こう着状態の後に訪れた優勢は一気に決着をつけるチャンスだ。
トレヴェント軍は北へ向かい、クエーシトの後方を抑える。
バルカ軍は東へ迂回して北上しクエーシト城の攻略にあたる。
もちろん攻城戦にあたるバルカ軍の負担が大きい。

バルカ軍の最前線にはアヴァンの第3軍団が在り、槍のようにクエーシト領内を突き進んだ。
しかし戦場に突撃大隊の姿は無い。
突撃大隊は対ギルモアの防衛としてバルカ城に配置されたのだ。
「突撃大隊がバルカ城に居る。それだけでギルモアは動けまい」
バイカルノは断言した。

そうだ。先の戦いで異人の隊長も復帰した。
その後のクエーシトは防戦一方じゃないか。
こんな凶暴な番犬がいる城に近づくヤツはいない。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クエーシト領内のある村にアヴァン率いるバルカ第３軍団が迫った。
この村は地理的に防衛に適していないし、住人は逃げ去ったようだ。
アヴァンはここで休息をとろうと考えた。

村の端にある集落まで１５０ミティ（約１２０ｍ）の地点で突然人影が現れた。
アヴァンが停止を合図する右手を挙げ、バルカ軍に緊張が走る。

現れたのは子供だった。
バルカ兵は知る由もないが、年齢は１２歳と１０歳。２人は兄弟だった。
ひどく緊張した面持ちの少年達は何処に隠れていたのか、おずおずとバルカ兵の前に姿を現した。
彼らは不思議な形の重装鎧を身に着けていた。鎧が重いのか、やっと歩いているように見える。逃げ遅れた子供が手近にあった鎧を訳も分からず身に着けたのだろう。
バルカ兵の気が緩み、少年達に笑顔さえ向けた。
その中でアヴァンだけが緊張を保っていた。

おかしい。
この子供の目は怯えの奥に使命感を宿している。
『排除すべし』戦士の勘がそう告げていた。
しかし動けなかった。
当たり前だ。まだ１０歳くらいだろう。こんな子供に何ができると

いうんだ。
バルカ兵が二人に近づく。
「子供に近寄るんじゃない！」
アヴァンの声が響く。
その声で我に返ったように報告の声があがった。
「こちらにも子供が居ます、２人です」同じ言葉が５箇所から届く。
子供の数は６箇所に２人づつ合計１２名。
「なぜ２人づつなんだ」
『排除せよ』戦士の本能は警戒を発し続けている。
もしこの時に上空から見る事が出来たら、クエーシトの子供たちがいる６箇所がほぼ均等な距離を保っている事に気付いたはずだ。
アヴァンたちの前にいる子供は顔を見合わせると、お互いから離れ始めた。
１０リティ（約８ｍ）ほど離れただろうか。
１２人の子供たちは１人づつ適切な距離を取った。
子供たちの緊張は更に高まっているようだった。
アヴァンの目に前にいる少年の震える手には小さな笛が握られている。
その腕がゆっくりと上がった。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「上手にできるかな？」
やさしい笑顔で声を掛けられた。
嬉しかった。はっきりと答える。
「できる」
上手だと褒められて、隊長に任命されたのはつい一昨日の事だ。
隊長はクエーシト国旗のバッチをもらえるのだ。
胸に着けたそのバッチは少し重かったがその重さが嬉しかった。

優しい笑顔を向けるこの人はサイヴェル・ハイラ様。
クエーシト国王ベイソル・ハイラ様の弟君（おとうときみ）。
そして、ぼくたちのお父さんだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クエーシトの建国者であるベイソルの祖先は優れたエナルダだった。
エナルダではないベイソルは劣等感を抱き、エナルダでエナル係数も高いサイヴェルが国王になるべきだと進言もした。
もしそうなれば全力で弟を支えよう、そう思っていた。
しかし、当時国王だった父は認めなかった。
ベイソルは特に優れてはいないが良識のある人物だった。
そしてサイヴェルにはそれが欠落していたのだ。

「国王がエナルダである必要は無い。我々は力だけに頼る蛮族ではない。知性と忍耐力でこの過酷な地に国を築いたのだ。お前の左右を見るがいい。お前を助ける者がこんなにも居るではないか。しかもその優秀さは他国が及ぶものではない。もし“世界の混沌”のような大戦が起きたら・・・クエーシトが重要な鍵を握る事になるだろう」

しかし、良識だけで国をまとめられるほど甘い世界でもなければ恵まれた土地でもなかった。そして何かをせずにはおれないベイソルは、“世界の混沌”には遠く及ばないにせよ、大陸北東部に戦乱を引き起こしたのだ。
父である前国王はサイヴェルを国王に据えるべきではないと考えたが、ベイソルはサイヴェルよりも国家の崩壊を加速させたのかもしれない。

10－9　訓練

クエーシト国王ベイソルは皇太子であった頃、自らがエナルダではないという理由で弟のサイヴェルに王位を譲ろうと考えたが、前国王はそれを認めなかった。

ベイソルは弟に配慮してサイヴェルの歩む道を用意した。
サイヴェルは身体が弱く、高いエナル係数を活かす道はマスターエナルダとしての研究に限られた。ジョシュを迎え入れるよう画策したのも彼だ。
国王の弟にしてハイレベルのマスターエナルダ。

エナルダではないベイソルは、エナルダ国家の国王として、エナル研究を加速させる。
それはサイヴェルを活かす事でもあり、国土が貧しいクエーシト国の道でもあった。
ジョシュが入国してから研究は一気に進んだ。
マスエナル取引やエナルダ傭兵によって経済力も向上。国民の圧倒的な支持と、エナルダ達の忠誠を得、サイヴェルとの関係も良好だった。
しかし、徐々にサイヴェルとジョシュの関係が悪化。エナルダはサイヴェル派とジョシュ派に分裂してしまう。
サイヴェルは優れたマスターではあったが、エナル研究の分野ではジョシュに遠く及ばなかった。
ベイソルはエナル研究所の他に特別研究室を創設してサイヴェルを室長とした。
サイヴェルをジョシュから離し、取組むものを与える。これによって二人の対立は沈静化したかに見えた。
しかし、それは問題を2つに分けただけだった。そしてそれらは水

面下で大きく成長していったのだ。
しかも凡庸なベイソルは問題に全く気付かなかった。

バルカ兵がクエーシト城に踏み込んだとき、ベイソルの周囲からは護衛すら逃げ去っていた。
見限られた国王は差し出されるように放置され、バルカ軍に捕らえられたのだ。
サイヴェルは前線で自前のエナルダ部隊を指揮した。
後に“ザパル（悪魔）”と呼ばれる男はベルサの逃亡を図ったというが、その消息は未だに不明だ。
その悪魔が産み落としたもの。それはジョシュが失敗作としたマスエナルダの新しいタイプだった。
そのマスエナルダをサイヴェルは本気で素晴らしいと思った。

＊－＊－＊－＊－＊

サイヴェルは独自の研究でスティック状のマスエナルの合成に成功していた。
それを馬の脚の腱（けん）を煮溶かしたものでコーティングすると親指程のマスエナルカプセルが完成する。これを幼児の頭に埋め込むのだ。
マスエナルカプセルは頭蓋骨を削って埋め込まれる。カプセルは再生された頭蓋骨によって覆われ、マスエナルダの弱点を克服するはずだった。
成長過程にある身体の方が異物の包入施術に適しているという事もあるが、幼児を選んだ理由は、“抵抗されない”からだった。
確かにサイヴェルは悪魔（ザパル）の要素を多く持った人間だったのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

「さぁ、頭の中でイメージするのだ。自分の身体に力が湧き上がる

ように」
「その力はどんどん膨れ上がる。それにつれて苦しくなってくるが、ここで我慢しなければならない。ここで諦めては誰も褒めてはくれないぞ」
「よし、今日はこのくらいにしておこう。手と顔を洗って来なさい。おやつを食べよう」
「おやつの後は射的で遊ぼう」

この射的とは玩具のボウガンで立てた積み木を射って倒すという遊びだ。

「この引き金を引くと矢が飛び出すんだ。人に向けてはいけないよ。危ないからね」
「引き金に指をおいて、少しずつ力を入れてごらん。弓の弦の固定したフックが外れて矢が飛び出すんだ。この感覚を良く覚えるんだよ」

イメージするんだ。引き金を引いて、フックが外れる・・・“フックを外す感覚をイメージするんだ”

＊－＊－＊－＊－＊

訓練は毎日続けられた。
次にイメージするのは爆発を止めるためのフック。
ボウガンのフックを見た事があるだろう?あれと同じものを頭の中で考えるんだ。
そのフックがある限り身体にどれだけ力を溜め込んでも大丈夫。
苦しいけれど、頑張って力をたくさん溜めよう。そして限界まで力を溜めたら、少し我慢。
今度は溜めた力を少しずつ身体から抜いていこう。

あまり抜くのが早過ぎると耳が痛くなるから気をつけるように。

さぁ、今日はおやつの後にみんなが好きな絵本を読もう。

体が小さな弱虫ピッチは毎日毎日練習をしました。一生懸命訓練をしました。

体には力が漲(みなぎ)り、どんどん溜まっていきました。

訓練を繰り返すとたくさんの力を溜められるようになりました。

そしてある日、笛の音に合わせてスイッチを入れると、あら不思議。

小さな弱虫ピッチは強くて立派な戦士になりました。

戦士になったピッチは怪物退治で大活躍。

みんなから感謝され幸せに暮らしました。

＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊

訓練は最終段階へ

さぁ、今日は力を溜めてはいけないよ。溜めた力を自分のものにする訓練だ。

少しも力が溜まっていないかい。少しでも溜まっている子は見学だよ。力が抜けたらやってみよう。

さ、一人で岩の向こう側に行ってごらん。そこで頭の中にイメージしたフックを外すんだ。

少しずつ力を入れてフックが外れるタイミングを覚えるんだよ。

ここで一人の少年が死亡した。

その少年が岩の向こう側に姿を消し、少しの間をおいて鈍い音がした。

「ここにいるんだ！」

少年達を置いてサイヴェルは走った。

少年がいた場所は真っ赤に染まり、少年の頭部は跡形も無かった。

サイヴェルは小さく呻いた。そして叫ぶ。
「オルグだ！逃げろ！」
こども達は血相を変えて逃げ出した。サイヴェルは爆死した少年を引きずっていき、谷に投げ込むと急いで研究棟に戻った。
子供たちは班ごとに固まっていた。戻ったサイヴェルを見ると安心して泣き出した。
「なんという事だ。私の大事な息子がオルグに連れ去られてしまった。追いかけたが逃げられてしまった」
子供たちはサイヴェルの言葉を信じ、ますます訓練にのめり込んでいった。
強くなりたい。という気持ちの下に。
そして訓練は厳しさを増していった。

１０－１０　記録

子供たちがサイヴェルの特別研究室で訓練を重ねる中、対バルカ戦はクエーシトの劣勢に傾き、バルカ兵はクエーシト領内へ雪崩れ込んだ。
サイヴェルは時間が無い事を悟り、実戦投入を決断する。
研究はまだ途中であり効果の検討も不十分だった。
しかも、この戦いが世に与えるインパクトについては考えもしなかった。
戦争を研究室の実験のように考え没頭していたのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

みんな知っているかい。バルカが攻めてきたんだ。
クエーシトの戦士達は遠くで戦っているからここにはいない。
あのオロフォス隊もいないんだ。
だから弱いバルカ兵もクエーシトに入ってこれた。
バルカ兵はクエーシトの戦士を見かけたら一目散に逃げてしまうんだろうけど、ここには戦士が１人もいないんだ。
戦士さえいれば、バルカ兵は戦わずに逃げ出してしまうのに。

みんな、戦士になれるかい？
国王もお姫様も喜ぶよ。食事を作ってくれるおばさん達も喜ぶよ。
オロフォス隊も助かったと感謝するだろう。

みんな、戦士になれるかい？

「お父さんも喜んでくれる？」
１０歳の子供が手を挙げて訊いた。

サイヴェルは少し驚いた顔をしたが、笑顔で答えた。
「うん、私だってうれしいよ。小さいみんなが強い戦士になれるんだもの。たくさんの人に感謝されて幸せになれるんだもの」
「だったら、ぼく戦士になるよ」
「ぼくも」「ぼくも」

サイヴェルはなぜ自分が喜ぶかと聞かれたのか分からなかった。分からないから国王にも父親にも、そして人間にもなれなかったのだろう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

第４ケンドロス小隊と名付けられた１２名の少年はバルカとの国境に近い村に待機してバルカ軍の到着を待った。
ケンドロスとは若い竜という意味だ。
彼らが待機していたのは食肉の動物を屠殺する小屋だった。そこを待機場所に選んだ理由は村の外れにあったからだ。
彼らは血と臓物の臭いに耐えて待った。

そしてアヴァン率いるバルカ第３軍団が迫る。
ついに第４ケンドロス小隊は出撃した。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

１２歳の兄は１０歳の弟に目をやると笛を口にする。
アヴァンは全身の血が逆流するのを感じた。
笛を口にした子供を蹴った。
蹴られた子供は仰向けに倒れつつも笛の音を響かせた。
子供たちは一斉に膝をついて、両手で頭を抱えるようにした。鎧は球体に近い形状になった。

「伏せろ！！」
アヴァンの声を掻き消すかのように、異様な音が各所で響く。
それは何かが弾けるような音だった。
子供達は身体を爆発させ、鎧は２ミティ（約３ｃｍ）ほどの金属片となって飛び散った。
多くのバルカ兵が体を蜂の巣にされて倒れた。

アヴァンが伏せた顔を上げると、自分が蹴った子供が仰向けになったままもがいているのを見えた。
手足の動きが止まり、子供の身体は血飛沫となって上空に舞い、同時にアヴァンは顔に激しい衝撃を受ける。
第４ケンドロス小隊の隊長だった少年は甲冑の破片を飛ばす事は出来なかったが、胸につけていたバッチが弾け飛んだ。
この戦いでアヴァンは兵８７名と左目を失った。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クエーシト北部の山岳地。

デュロン・シェラーダンはふと思い出したように尋ねた。
「セシリア、イーネスはどうなっている？」
「はい。動揺が激しいので、自室で待機させています。グラシスの事が相当ショックだったようですわ」
セシリアは豊かな金色の髪を揺らしながら貴族然とした口調で答えた。
セシリアはクエーシトでも有数の貴族の娘で、オロフォス隊に入隊する直前までその屋敷からほとんど外出した事はなかった。娘の余りにも高いエナル係数が必ず不幸を呼ぶと考えた父が屋敷から出る

のを禁じたのだった。

腕を組んで聞いていたルヴォーグが口を開く。

「私は以前、異人から人間のように動く機械の話を聞いた事がある。イーネスは私がイメージする機械人間に似ていると思っていた。しかしやはり人間は人間だ。良いメンバーになるだろう」

それだけ言うとルヴォーグはまた目を閉じた。

デュロンの傍らに佇立していたカルラはチラと視線をルヴォーグに向けたが、その視線をデュロンに戻して言った。

「それより博士はどうなされたのですか？」

「博士には“王冠”に入っていただいた。既に必要な機材の搬入も完了しているし、研究所の人員もじきに到着するだろう」「クエーシト国内の研究施設は徹底的に破壊している。検体は全て駆除されたし、サイヴェルの特別研究室の研究員もほとんどを始末した」

「もうクエーシト＝ハイラ王朝も終わりですね」

「そうだ。国王と王族はバルカの虜となっているだろう」

「良いのですか？国王を生かしておいて」

「もし国王が亡き者にされていたら、バルカは新しい勢力を警戒するに違いない。それに、ベイソルには国王としてクエーシト滅亡という最後の幕引きをしてもらわねばならん」

「この後はどうなるのでしょう」

「バルカの勢力拡大を望まない国は多い」

「バルカの戦闘力とクエーシトのエナル研究が合致したらどうなると思う？誰が認めるものか、野獣に翼を与えるような事を」「そういった点でジョシュ博士の消息が不明なのは有効だ。バルカはジョシュ博士を得、隠したのではないか？どの国もそう考えるだろう。それにバルカにはあのカピアーノ博士もいる。グリファ国は穏やかではあるまい」

「もし両博士が協力して研究にあたったら、兵員数×３６がバルカの兵力と考えねばならない。トレヴェントもバルカの盟友などとは

言っておれまい」「それこそ、各国が一致してバルカを潰しにかかるに違いない」

「バルカもそれは百も承知だろう。だから国王を捕らえたらそこで戦いは終わりだ。バルカはクエーシトを領有する事は放棄するだろう。かといってバルカ以外の国家が主張する理由はない。まぁ、ギルモアが持ち前の強欲さを見せるかもしれんが、失笑を買うだけで承認する国家など無いだろう」

「クエーシトはどの国のものにもならないし、各国のバルカに対する疑念は残る」

デュロンの読みは正しかった。しかしサイヴェルの研究は各国を震撼させるには十分過ぎた。

それはデュロンの読みをも狂わせるのだった。

サイヴェルの研究はどの点を考えても許され難いものだったのである。

後の歴史家はハイラ王朝滅亡に際し、ジョシュ博士、ベイソル国王に続いて、サイヴェルのケンドロス小隊を“第３の暴走”と表現した。

各国からはクエーシトの徹底的な破壊を主張する声もあがり、デュロンは計画の変更を余儀なくされた。

トレヴェント軍が北からクエーシト城に向けて南下した際、アヴァンの第３軍団と同じように攻撃を受けた。トレヴェント軍は大混乱に陥った。

兵士達はクエーシト研究者の狂気と残忍さにかつてない衝撃を受けた。

進軍中に子供を発見すると恐怖し、ついには集団で戦いを避けていた子供２０人を殺害するに至った。

もうクエーシトの地には常識も正義もなかった。あるのは凄惨な戦場の風景だけだ。

押収した記録からサイヴェルが“作成した”マスエナルダは５０体である事が分かった。
研究中で死亡したものが６体、これまで戦場で自爆したものが３２体、あと１２体が残っているはずだったが、サイヴェルの消息と同様にどうしても発見する事はできなかった。

１０－１１　処理

クエーシトのエナルダ研究は許されるものではなかった。
子供を兵器化する研究、そしてその実行。

バルカとトレヴェントはこの事実をグリファ、エルトア、タルキア、サイカニア、そしてギルモアにも伝え、会議を提案した。
会議の場所は商業国家タルキア。
そしてタルキアの意見によって、南方の国々、ヴェルカノ、ローヴェ、インゲニア、サンプリオスにも会議への参加を呼びかける事となった。
これら１１カ国は大陸の東部の国家全てだ。

＞ｉ２８０４７―３６１７＜

大陸は北に蛮族、東端と南端は海があり、中央部に巨大な山脈が大陸を東西に分断していた。この山脈を越えるのは不可能とされ、いままで挑んだ者の多くは帰らなかった。
山脈の西側へ行くには南の海か、北の蛮族の地を迂回するかしかなく、それぞれ“海の回廊”、“北の回廊”と呼ばれている。
しかし、この世界の海は危険極まりない場所だった。特に南の海には強大なオルグが生息しているうえ、山脈が海岸線沿いに西に伸びているので上陸も停泊もできない断崖絶壁が５０ファロ（約４０ｋｍ）続いている。
北の回廊も強大な蛮族の地を経由する必要がある。この蛮族は東西の交易で栄えている反面、排他的で物の通過は認めても人間の通過は安易に認めなかった。
自然と大陸東部は独自の世界を築く事となったのだ。

会議が開かれるタルキアは、クラトとジュノがグリファから逃れる時に経由した国だ。この地でホーカー、ルシルヴァ、バイカルノ武装商隊、そしてヴェルーノ卿、ランクス、といったメンバーと出会ったのだ。

会議はクエーシトの処遇と、トレヴェントとバルカの国家としての承認が主な議題だ。

クエーシト処遇の問題はクエーシトの国土よりもエナルダ研究がどの国のものになるかという点に尽きる。

誰もが所有を主張しなかった。しかし、他国の所有を承認する事もしないのは明らかであった。

クエーシトは国家として存続し、クエーシトのエナル研究内容は一切が各国に等しく開示される事となった。

つまり、“共有こそ権利と責任の平等”という決着だ。

しかしジョシュ博士とサイヴェル王弟の行方は不明のままだし、その研究結果もほとんどが消失している。またオロフォス隊や特別遊撃隊、デュロン軍師の所在も明らかになっていなかった。

各国は博士と研究結果についてバルカに疑念を持っている。これは当たり前の心理だ。

しかし、各国は研究結果の消失はクエーシトによる隠滅である事が明らかだったし、バルカ軍に同行していたトレヴェント軍の証言もあった。

各国は考えた。

戦乱の元はエナルダだ。エナルダ研究はエナルダを人間ではないものにした。それは獣人であり、人間爆弾だ。もう二度とこのような研究を許してはならない。

ジョシュ博士とサイヴェル王弟は蛮族を含め全土に賞金手配された。

問題はこの戦乱、狂気の責任をどうするかだ。

元々貧しい国家だったクエーシトは戦乱で徹底的に破壊され、賠償金などとても無理だ。損害賠償については各国が放棄せざるをえないだろう。残るのは道義的責任だ。

当然ながら矛先はベイソル国王に向けられる。

ベイソルは国家継続を聞き、責任を取るとして自死を申し出た。

しかしそれは許されなかった。つまり、死だけでは許されなかったのだ。

弾劾を受け、処刑されなければならない。国王の罪状にはジョシュやサイヴェルの罪まで書き連ねられた。

ここでクエーシト主席軍師だったデュロン・シェラーダンが姿を現す。

そしてオロフォス隊の所在も明らかになった。国王の密命によりジョシュとサイヴェルを追っていたというのだ。

ジョシュの消息は不明のままだが、サイヴェルについては王族の別荘地に建設された特別研究室を急襲して殺害したという。その際、サイヴェルの護衛部隊と激戦になり、オロフォス隊にも相当の被害が出たとの報告だった。また、特別遊撃隊の生き残りも指揮下に置いて待機させているという。

グリファやギルモア、トレヴェントは主席軍師デュロン、オロフォス隊隊ルヴォーグ、副隊長セシリア、特別遊撃隊隊長ルーフォス、副隊長ジャナオンの処罰を求めた。

高い戦闘力を持つ者への処罰は処刑または削力刑である。

削力刑とはその能力を発揮できないように体の一部機能を破壊する事で、通常は視力を奪うか、腕や足の切断が行われる。

もっとも、特別遊撃隊隊長のルーフォスは既にバルカ戦線で戦死しているし、副隊長のジャナオンはバルカの機械化部隊に特攻的な攻撃をしかけ、確認こそされてはいないが乱戦のなかで戦死したと考えられている。

タルキアを中心とした南部の国家はオロフォス隊と特別遊撃隊によるクエーシトの防衛を主張した。
バルカがクエーシトの領有を放棄した事を受けての意見だ。
クエーシトを守る軍が無ければクエーシトはギルモア・グリファ、いずれかに併合されるかもしれない。
そうなればまたパワーバランスが崩れる。クエーシトが独立国家として存在する事が戦乱を避けるために有効だと考えたのだ。
エナルダによる少数精鋭は侵略的な戦いには向かず、むしろ防衛戦で有効に機能するとの思惑もあった。クエーシトの再軍備は侵攻ができない防衛隊でなければならない。
この問題についてバルカは発言の機会を放棄した。他の国で話し合われた結果に従うという意味だ。
この会議でバルカは最も発言権を持つはずだった。しかし、バルカの全権代表であるヴェルーノ卿は多くの事案で発言や主張を放棄している。これは事前にバイカルノと相談し、会議で承認を得たものだ。パレントを得て国家として承認されればバルカにとって大きな前進である。これ以上を望んで各国から危険視されるのは得策ではない。

バルカが意見を放棄した事案は全てが腰砕けの対処となった。つまり“どの国家も得をしない無難な決着”に落ち着いたのだ。
ここでデュロン・シェラーダンは訴える。
「ベイソル国王はジョシュ、サイベルのエナルダ研究には反対し抑圧していた」と。
そして、ベイソルの処刑すら回避される。
各国の代表はベイソルを特別な才能を持たない単なる良識の人と判断した。彼を振り回すジョシュとサイヴェルがいない今、新たな人物を立てて混乱を懸念するよりも、国民の人気が高いベイソルを据えた方が安定すると判断したのだ。

ただし、クエーシトは当面の間、“被管理国家”として存続する事。
管理は各国からの代表によって設立する“クエーシト管理機構”が行う事とし、議長はタルキア代表とした。
他条件として、次の点が定められた。
?蛮族を含む他国との条約締結は一切が認められない。
?エナル研究は全廃。
?ジョシュ博士の捜索を続行する。
?軍事力は国家として兵員5，000名まで。
更にクエーシト国内の人口、エナルダ数、国庫状況、蛮族との交易状況、などの情報提出、ハイクラスのマスエナルの供出。

そして、トレヴェントとバルカの国家として承認するかという事案は、それぞれ棄権1以外は全て賛成票が投じられた。
ここに正式にトレヴェント国、バルカ国が成立した。懸念されたギルモアから領土問題についての異議もなく、ここに会議は終了した。
各国代表はクエーシト管理機構の議員を残して帰国する。管理機構の議員は改めてクエーシト国内を視察してからタルキアで会合を持つ予定だ。

終ったのだ“北の戦乱”が。1年半にも及ぶ戦乱。
各国を疲弊させ、幾多の悲劇や惨劇を生んだ戦乱がここに終結したのだ。

１０－１２　許可

“北の戦乱”は甚大な被害と深刻な傷を残して終結した。
人目を憚りながらもエナル研究は５０年進んだと言う者もいる。
そして戦いも様変わりしようとしていた。バルカの機械化部隊は各国で採用された。
対エナルダ戦を想定して設立された機械化部隊であったが、その機械化部隊に対抗できるのもまたエナルダなのだった。

バルカにとっては厳しい戦いの連続であった。
滅亡の危機は何度もあった。それを奇跡的に乗り越えたのだ。
外政大臣は謝礼の宝物を携えトレヴェントに向かった。次いでギルモア、エルトア、タルキアに向かう予定だ。他国には副大臣が向かう。

ラシェットはクエーシト侵攻作戦について違和感を持っていた。
バルカ軍がクエーシト領内に攻め入ってから被る被害はもっと大きいと予想していたのだ。
しかし反撃はほとんど受けなかった。オロフォス隊はジョシュとサイヴェルを追っていたというが・・・。
ラシェットはバイカルノへ意見を求めようとも思ったが、行うべき事があまりにも多すぎた。
それにバイカルノが何か別な事を考えていると分かっていた。

バルカ国内、いやそれはグリファでもギルモアでもトレヴェントでも同じ声が満ちた。
「終った。悪夢の戦乱が」
季節は春になっていた。春の訪れと戦乱の終結は人々の心を明るく

させた。
物資も欠乏しているし、家族が戦死した者も多い。しかし戦乱の世界は、そこに住む人々は、振り返る事はしないのだ。
どんなに苦しく悲しい中にいようと喜びは喜びとする。それがどんなに小さいものであろうと。
そういう精神が彼らの生活と心を支えていた。

「そうか、終ったのか」
ヴェルーノ卿からの報告を受け、ティエラは呟くように言った。その声は国に広がる喜びとはかけ離れた印象を与えた。
それを多くの将兵を失った事への心痛と感じたイオリアは姫に考える事を提供する事で和らげようとした。
「ティエラ様、ご心痛はご察し申し上げますが、国務に1日も停滞があってはなりませぬ。早速、赤騎隊と護紅隊の再編成についてご策定願います」「ルシルヴァと私の処遇について保留となっておりますが、この際、全くの白紙からご検討頂くべきかと存じます」
そうだ、ラヴィスの戦死によって、イオリアが護紅隊の隊長に、ルシルヴァが赤騎隊の副長にという人事が内定していた。しかし、戦乱とクラトの戦線離脱によって計画は頓挫していたのだ。もっともラヴィスが戦死した時に護紅隊は壊滅しているので、新たに隊員の補充から行わなければならない。イオリアはここにアイシャを用いる予定であった。

「クラト次第なのだ。ルシルヴァの件も」
「しかし停滞は許されません。策定する際に想定しない方が良いでしょう。クラト殿は」
「なぜだ!?」
余りの勢いにイオリアは言葉を失った。
「いや、クラトはクラトで大きな戦力なものでな。済まぬ」
「いえ、その通りでございます。私も思慮が足りませんでした。申

し訳ありません」

イオリアはティエラの想いも理解しているし、クラトのジッポの一件も知っている。
それにクラトは戦場に立てるような体ではない。

久し振りに深酒をしたバイカルノはラシェットにこうこぼした。
「戦いが終って、バルカの“柔らかい問題点”が表面化した」
そして、そのバイカルノも新たな欲求が大きくなるのを抑えきれずにいた。

バルカ軍の再編成案はバイカルノとラシェットによって起案されてはいたが、まだ提示されていなかった。その内容は次の通りだ。

軍師：ラシェット（後の“白銀の軍師”）
第1軍団：レガーノ元帥“バルカの黒い稲妻”
第2軍団：ランクス軍団長（特装部隊隊長兼務）
第3軍団：アヴァン軍団長“バルカの白き矛先”
機械化部隊：ジェルラン隊長
高機動隊：アジャン隊長
赤騎隊：ティエラ姫“バルカの赤い旋風”
護紅隊：イオリア隊長（赤騎隊副隊長兼務）
突撃隊：ルシルヴァ隊長代行

重要な人物の名前がなかった。
主席軍師バイカルノ“傭兵軍師”
第2軍団長ジュノ“バルカの青い壁”
突撃隊隊長クラト“バルカの黒い大剣”

全てはクラトから始まった。

クラトは西方へ旅をしたいと願い出ていた。反対意見は多かった。真っ先にピサノ大臣が発言した。

「姫、あの男は縛り付けてでもバルカ城に留めるべきです。あの男はもうただの大隊長ではありません。私はレガーノが出て行くと言っても止めませんが、あの男が出て行くのは何が何でも反対です」

「なかなか言ってくれるな。しかし俺も同じ意見だ」レガーノはそう切り出すと言葉を続けた。

「しかしピサノ、あの男は異人なんだよ。バルカの人間になりきっているとしても」「本来の世界や人生があったはずだ。そしてこともあろうか、小さな道具一つで動揺している。つまらん事だ」

「アイツはバルカの為に死ぬ事を厭わないだろう。事実、何度も死しか見えない戦地に躊躇なく赴いているしな」

「アイツはバルカの為なのか、ティエラ姫の為なのか、誰の為なのか、それはわからんが、いずれ死ぬだろう。死に際して最後の望みは罪人ですら認められるではないか」

「それに西に向かったって山脈と蛮族だ。どうせ見つかりはしない。気が済むまで探せばいい。そして本当のバルカの戦士として帰ってくるだろう。アイツは戻ってくる。バルカがアイツを必要としているのと同じく、アイツもバルカを必要としているのだから」

「ウムム・・・」

暫く考えていたピサノは顔も上げずに言った。

「わかった。その代わり、アイツが居ない間のバルカ軍は任せたぞ。それに・・・アイツには最大限の護衛をつけてくれ」

「馬鹿な、兵士をつけたらどの国も通れやしない。アイツがバルカ国を出るのも機密事項だ」

ここでバイカルノが手を挙げ、ジュノが立ち上がって姿勢を正した。

「クラトにはバルカ軍をそっくり同行させる予定だ」

冗談だろうが、会議場はザワついた。

「俺とジュノが同行する」

会議場のザワつきは混乱と言えるレベルまで高まった。
「軍師と軍団長がいればバルカ軍そのものではないか。そんなに騒がなくていい。実はエルトアの武具について見ておきたいのだ」「しばらくの間、戦は起きないし、エナルダの研究は滞るに違いない。しかし、それを崩す勢力が出るとするなら、やはりエナルダが鍵になるだろう。だから対エナルダ戦を今のうちから検討しておきたいんだ。それにギルモアがアティーレの北に蛮族を懐柔して作った新しい郷ブレシア、ここの情報も仕入れたい」

そんな理由で納得する者はいない。
しかし、バイカルノは実施を主席軍師裁量で決定した。後はティエラ姫の許可だけだ。
判断はティエラに委ねられ、ティエラは結論を保留とした。

「俺の代わりはラシェットに任せる。十分にやれるだろう」
「まぁ、ラシェットの方が礼儀正しいし男前だからな」とピサノ。
「最近、やけに乗ってるんじゃないのかピサノ」とレガーノ。
「お2人ともです」とバイカルノが笑って説明を続ける。
「ジュノの代わりはランクスに頼みたい。ジュノと同じ能力を発揮できるとしたらランクスだろうからな。特装部隊は兼務だ」
ジュノはバルカ城攻防戦で見事な防衛戦を展開、ギルモアの侵攻を砦で食い止め、多彩な防衛戦を展開、“バルカの青い壁”と評されている。一方のランクスも組織を率いる力を付け、軍団長クラスに位置づけられている。

「それにしても軍師、あなたはバルカ軍をクラト殿につけると言ったが、軍師と軍団長だけでは足りないだろう。兵士がおらんではないか」
この問いに対してバイカルノはこう答えた。
「クラトのわがままにこれ以上の人員は割けないな。仕方ない、ク

ラトにやってもらおう」
湧き上がる笑い声を合図に会議は終了したが、ティエラの顔色は冴えないままだった。

１０－１３　分際

クラトの体力は徐々に回復しており、診断した軍医は「この男に奇跡という言葉は必要ないようだ」と言って呆れながら笑った。

突撃大隊は久し振りの宴会を張った。

突撃大隊の宴会は常に外だ。

クラトはルシルヴァの肩を借りて車の付いた椅子から降りた。

クラトとルシルヴァを中心に中隊長、その周りに小隊単位で座る。

今日は内務府より人が出て、突撃大隊の隊員は新人兵士に至るまで給仕を行う事はなかった。

誰もが笑顔だった。

「良かった、本当に良かった・・・」ホーカーは相変わらず涙もろい。

「今なら隊長に勝てるかな？」冗談を飛ばすラバック。

「隊長とやるなら俺に勝ってからだ」なぜか真に受けるヴィクトール。

「隊長、ウチの新入りがまだ隊長の立会いを見た事がないんですよ、体が戻ったら一発頼みますよ」とスパイク。

「隊長、私は突撃大隊に配属された事に感謝しています。隊長は私の話を聞いてくれる。私を活かしてくれる」ラナシドは早くもでき上がっているようだ。

「隊長、新しい訓練考えたんスよ。今度見て下さいよ」

「隊長、背中の穴はどうなりました？ウチのお袋が虫を潰した薬が効くって、預かってるんですが・・・」

隊長、隊長・・・

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

クラトのバルカ軍離脱が申請された会議の半年後、季節は秋を迎えようとしていた。

ティエラは領主の地位に就いた。
ティエラ・ロウレン・バルカから
ティエラ・パーセル・バルカとなったのだ。
ロウレンとは皇太子ロウドゥスと同意だが女性である事を示す。
パーセルとは女王を示す。国王はパルゾスだ。

戦乱終結直後からトレヴェント、グリファ、タルキアからティエラへの婚姻申込があった。
しかし、ティエラは特定の国家との急接近は混乱の元になるとの理由で全てを断り、自らが領主となったのだ。
バルカの誰もが祝った。まさに国を挙げて。
他国からも祝賀の使者が引きも切らない。婚姻を申込んだ国家もティエラの拒否を不満に思うどころか、適切な判断であるとして高く評価した。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

ティエラ女王即位の祝賀ムードも落ち着いた9月。
バルカに、バイカルノ、クラト、ジュノの姿はなかった。

「傭兵は傭兵。戦が終れば離れていくものだ」という説明には誰もが納得しなかった。
彼らはもう傭兵ではない。主席軍師に、第2軍団長、そしてバルカ最強と評される突撃大隊の隊長なのだ。
特に突撃大隊と第2軍団にはティエラ女王も列席し、レガーノ元帥・ヴェルーノ内務卿から直々の説明が行われた。
「あの者達は風なのだ。バルカを吹き抜けた戦場の風なのだ。もし、

彼らが居なかったら・・・バルカは滅んでいたに違いない」
「彼らに感謝せよ、そして自分の仕事をするがいい。それがバルカの、バルカ軍の精神でもある」
「私の名を賭けて約束しよう。彼らは必ず戻る。北の地に吹雪が吹くように、灼熱の地に砂嵐が吹くように、彼らはバルカの地にこそ似合う戦場の風だ。そして、我々同様に死に場所もバルカの地なのだ」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

秋の空の下、突撃大隊の訓練が赤騎隊と合同で行われていた。
訓練が終って昼食の時、ルシルヴァは沈んだアイシャを見つけた。
ホーカーもスパイクもひどく落ち込んでいた。
突撃大隊の中隊長連中も、あのヴィクトールも見るからに落ち込んでいる。
ルシルヴァも体から力が抜けた状態だが、そうも言っていられない。
「どうしたどうした！お前らは捨て犬かい？」
ルシルヴァの喝にラバックが不貞腐れた声をあげた。
「似たようなモンですよ、何も言わずに出て行くなんて」
スパイクが胡坐の膝に肘をついて言う。
「私は隊長に文句を言うつもりはありません。しかし何というか背骨を抜かれたような気分なんです。シャンとしない自分が嫌で堪らないんですが」
「分かる。見て欲しい相手がいないと力が入らない」とラナシド。
「しっかりしな！お前ら、女王様より直接のお言葉を頂いてるんだ。レガーノ元帥とヴェルーノ卿からもだ。バルカの最上層部から説明を受けてるんだぞ、大隊の面を汚すんじゃないよ！ここまでしてもらったら、白を黒と言われても納得するもんだ！」

「あの・・・」

エルファが静かに口を開いた。
「私は隊長がどこにいても大丈夫。憶えてるから」
誰もが動きを止めてエルファを見つめた。
「初めて会った時の言葉も、訓練の時の笑顔も、戦いの時の強さも、庇ってくれた時の胸の温かさも、全部憶えてるから」
「隊長がくれたものを全部胸にしまってその胸を抱きしめるから。私は強くなれるの。出来る事を精一杯やる事が、私が隊長にしてあげられる事だから」
アイシャが泣き始めた。
ヴィクトールはエルファの前に立つと言った。
「済まなかった。俺たちはエルファよりも子供で女々しい男だったよ。男は別れを辛いって言えないんだ。だからグズグズ腐って苛ついてるのさ。でも、もう大丈夫だ。俺たちはバルカの突撃大隊なんだから」
そしてルシルヴァに正対して頭を下げた。
「代行、大変申し訳なかった。我ら中隊長の立場でありながら・・・」
他の中隊長も立ち上がって直立するや、頭を下げた。
「ああ、わかったよ。だけど、よく憶えておいてくれ、己を中心に置かない事を。常に大隊を中心に置くんだ。それができれば死のうと生き残ろうと、非難される事はないだろう」
「うん、それに、私も落ち込んでたのさ、隊長代行の分際で！」
突撃大隊に笑顔が戻った。
「ありがとうございます、代行」
「わかった。もう言葉は要らないよ。ヴィクトールにしちゃ、喋り過ぎだよ！」
笑い声が一段と大きくなり、突撃大隊はまた一歩階段を登ったのだった。

10－14　下賜

ラシェットは腕を組んで突撃大隊の訓練を見ていた。
「素晴らしい。しかし・・・それ故に危険だ」
「とはいえ、突撃大隊が“特別”であるうちは問題にはならぬでしょう」と、傍らのランクス。
「そうだ。彼らは標準（スタンダード）ではない。あくまで特別（スペシャル）なのだ」
「それにしてもここまでのものを作り上げるとは」
「不思議な方でしたね」
「私も“待つ者”として精進せねばならん」

≪時は1ヶ月ほど遡る≫

半年ほど前に行われた極秘会議と場所・メンバーを同じくして再度会議が行われた。

会議室にティエラの澄んだ声が流れる。
「バイカルノ・ソルザン、ジュノ・ガクレイ、クラト・・・クラト・ナルミ。汝らのバルカ軍脱退を認める。またこれまでの貢献を評価し、削力刑は免じる」「明日よりバルカへの忠誠と義務はない。またバルカからの庇護もない。心して生きていくが良い」
ティエラは型通りの言葉を口にした。
通常、バルカ市民権の返上を伴った軍からの脱退に対しては削力刑が付随する。ただし、それは昔の話で現在は刑が実施される事はない。
ティエラは凛として落ち着いた振る舞いを見せた。
彼女はもう姫ではない。女王なのだ。

ラシェットが続ける。

「バイカルノ、機密事項の他言無用なり。それをここで誓え」
「は、私バイカルノ・ソルザンは機密保守を誓います」
「ジュノ、クラトも同じく、ここに誓え」
『は、機密を漏らさぬ事をここに誓います』
ヴェルーノ卿。
「よし、さすれば只今よりあらゆる役職より解任し、一市民とする。そして明日よりバルカの市民でもない。以上だ」
こちらも型通りの言葉をやり取りし、あっけないくらい簡単に会議は終了した。
そしてこの事実が国内外に正式に公表されない。去る者を語る事はないのだ。
その代わり新体制が人事を含めて発表さえるだろう。
その内容はバイカルノとラシェットが起案したものとほぼ同じだった。
ただ、突撃大隊は赤騎隊隷下として、完全にティエラ直属となった。
ルシルヴァが隊長代行。
女王となったティエラに出陣の機会はほとんど無い。赤騎隊は僅か３６名まで削減され、隊長はイオリア。護紅隊も２４名となり、実質は赤騎隊に含まれている。
各隊の弱体化はいうまでもないが、現状ではこれが精一杯だ。

会議が終るとそのまま送別の会となる。会と言っても別れの言葉を交わすだけだ。
何しろ、今日の内でなければ挨拶すら許されない。
しかも機密保持のため、ここに出席した者以外とは挨拶すらできないのだ。
今日の夜半に３人は出発する予定だ。

突然ヴェルーノ卿が声を上げた。
「クラト大隊長、いやクラト、お前はバルカに戻ってくるのだろう

な？」
「ここに居る皆に言おう、俺は戻るよ。受け入れてもらえるなら」
ここでピサノ大臣が立ち上がる。
「戻って来ると約束しろ」
「たった今言いましたが」
「私に約束しろ、このピサノに」
皆が驚きの目をピサノに向けた。どうしたというのだピサノ大臣は。
「さぁ、約束するんだ。本当だろうな、戻るというのは」
「ピサノ大臣、俺はこの世界で戦しかしてこなかった。だから戦場に身を置いた人間を信用している。ましてや戦士にいい加減な事は言わない」
「この私を戦士と言ってくれるのか・・・」

バルカでは大臣に就任する条件として軍団長の経験が必要だ。
勿論、大臣となる為の形として軍団長を経験させる事もある。その場合、常設軍団の軍団長が副軍団長となり、そこへ軍団長として着任する。
最低でも1年間の軍務を経験させるのだが、バルカは形だけでは終らせない。
1年間の間に戦闘が発生しない事はあり得ない。戦闘に投入されるし、指揮は自ら執らねばならない。副軍団長が口を出すのは“全滅を回避する場合のみ”に限られているのだ。
招聘された者の中には、これによって大臣の地位を諦める者も多かった。
バルカでは戦士である事が最高の栄誉なのだ。

ヴェルーノ卿は3人に感謝の言葉を述べた。
元々はヴェルーノ卿が引き込んだ3人だ。そして想像を絶する働きをしてくれた。
「バルカ軍に身を投じた者は、バルカを去ったとしても必ず戻るだ

ろう」「無事を祈るぞ、また会おう、必ず会おう」

レガーノはいつもの笑顔を3人に向けた。
「俺は遠い未来の約束など、ましてや待つしかない約束などするつもりはない。まぁ、行ってこい」「お前達がいなくてもと言いたいところだが、お前達が創り、育て、残したものは余りに大きい。忘れるなよ、お前達の死ぬ場所はバルカだ」

視線がティエラに向いた。
ティエラの感情は限界に近かった。大きな声と涙でなければとても表せない感情だった。
「その方らの尽力にバルカ女王として感謝する。自愛し達者で過ごすがよい」
これがティエラにとって限界だった。
「以上だ、会を閉じる。さらばだ」
ティエラはほとんど逃げるように会議室を出た。
廊下を走った。
通路を抜け中庭に出た。
そこにはファトマが唯1人立っていた。
ティエラはよろめくように近づき、その胸で泣いた。
ファトマは我が子に言い聞かせるように言った。
「ティエラ様、旅に護身の武具は必要でございます。軍務を離れていたクラト様にはその準備が無いでしょう。以前クラト様のために鍛えた剣を下賜なさいませ。なに、少々重いでしょうがクラト様なら大丈夫です。1時間後（地球の2時間）に執務室で受け取るよう伝えておきます故、何卒直接お授け下さいませ」

１０－１５　見張塔

クラトは久し振りにティエラの執務室を訪れた。
ファトマはお茶と菓子を準備して席を外した。
「色々と迷惑をかけたなぁ」
クラトはお茶を飲むと、ぼそりと言った。
「・・・」
「それはそうと、俺が・・・」
「私はティエラ・パーセル・バルカ、バルカ女王だ」
ティエラはクラトの言葉を遮った。
「だから、強くあらねばならぬのだ・・・」
クラトは言葉もなかった。
もう何もしてやれない。そんな自分が言うべき言葉は無い。
別れの言葉以外は。

「クラト、これを持って行ってくれ」
ティエラは立て掛けてある大剣を示した。
それは１５リグノ剣より一回り小さく見えた。
それでも大分大きいし、重さも常人が使う範疇にはないだろう。
「ありがとう、俺の剣は刃こぼれが酷いし、錆が出てどうしようもないからな。助かるよ」

しかし、受け取ってみるとそれはとんでもない重さだった。
「おぉ！？なんじゃ、こりゃぁ！？」
ティエラは楽しそうに言った。
「クラトにしか扱えぬ、２０リグノ剣じゃ」
「２０リグノ？俺、病み上がりっていうか病み上がり前って状態なのに、２０リグノ！？」「何で重くしちゃたの？普通、軽くしないか？」

「いや、これを鍛えたのは大分前でな。渡しそびれていたのだ」
「重てぇ～。これで斬るなら、敵に動かないようにお願いしてからじゃないと当らんな」
「ははは、そんな願いを聞く相手もおるまい」
その剣はバルカの宝物庫に保管されていた最も硬いといわれる金属を鍛え上げたものだ。
「実はラヴィスの剣と私の双剣も同じ金属で鍛えている」
「ラヴィスのって、あの半身だけになってた刀かい？」
「いや、ラヴィスは勿体無いと言って飾っていたようだ。それこそ勿体無いのだが」
ティエラは席を立って執務室の奥へ行くと、刀を一振り手しにて戻った。
「これがラヴィスの刀だ」
その刀はラヴィスの髪のように黒い拵えに、鞘の握りは真紅の太刀緒が巻かれていた。
ラヴィスらしい雰囲気を醸し出している。
というかラヴィスそのものだ。刀から目が離せなくなった。

ラヴィスこの刀を戦に使わなかったという。
俺たちが回収した刀、ラヴィスが最後まで握っていた刀はティエラが保管している。
しかしなぜか、この刀の方がラヴィスの意志や精神を宿しているように思えた。

ティエラは刀を横に握るやクラトに突き出した。
「この刀もお主が持ってゆくがよい」
「いや、これは・・・」
ラヴィスの刀はティエラを護る刀だ。
バルカを離れる俺が受け取れる刀じゃない。

ラヴィスの刀から目を上げると、ティエラの両目からは涙が溢れていた。
「・・・分かった。受け取るよ、その意志も」
この刀は約束だ。必ず戻る。ティエラを護る為に。
それをラヴィスにも約束しよう。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

夜半となった。クラトたち3人はバルカ城を出る。
夜明けまでに平地を抜けて山道に入っておきたい。

城外まではアヴァンが同行するそうだ。
「いざとなったらバルカ政府発行の通行証がものを言うだろうが、できるだけ避けた方が良いだろう。バルカ国の関係者と思われると面倒な事も多いからな」
「ありがとうございますアヴァン殿」
「しかし、クエーシトを制圧した将軍に送り役をやらせるとは、ラシェットめ」
バイカルノの言葉にアヴァンが笑って言った。
「俺が望んだのだ、お前らが最後にどんな顔をしてどうやって去って行ったかを見るためにな」
俺は気の効いた事も言えずにアヴァンの眼帯を見つめた。

「よし、行くか」
バイカルノの声にジュノと俺は頷いた。
アヴァンは俺たちに野外用ランプを手渡す。
「ランプは城下を抜けてから使ってくれ。じゃ、行ってこい」
「おう、行ってくるぜ」
こんな簡単なやりとりも一つの約束だろう。明確でなくとも形が無くても、理解し合えば約束になる。

ラヴィスの刀もそうだ。誰が知らなくとも俺は約束した。
そんな約束もあるのだ。

＊－＊－＊－＊－＊

ジュノを先頭に3人は月明かりの下、道を急いだ。
やはりクラトが遅れがちになる。
風が出てきた。月が蔭った。

ふと、右前方に何かの気配を感じた。
ジュノが左手を上げて、バイカルノとクラトは足を止めた。
ジュノの右手は早くも刀を抜いている。
雲が流れ、月明かりが地を照らす。
その月明かりを背に何者がこちらを見ている。
明らかに人間ではなかった。
「オルグか？」
バイカルノの声に緊張が走る。
「マァ、オルグト言エバ、オルグカモ知レナイナ」
「ベルファー！」
「ジュノ、私来タ、見送リニ来タ」
「よく分かったな、俺たちがバルカを離れる事を」
「そうだよベルファー、見送りは厳禁なんだよ」
「ハハハ、私ヲ、犬ダト思ッテイルノダ。私ガ傍ニ居テモ何デモ話ス。コノ時間ニ私ガ出歩イテモ誰モ気ニシナイ」
「そうか、ありがとうベルファー」
「ウン、私寂シイ、戦ガ終ワッテ、ジュノト遊ベルヨウニナッタノニ。博士モ残念ニ思ウヨ」
「博士は知っているのかい？」
「博士ハ知ラナイシ、知ラセモシナカッタ」

バイカルノが初めて口を開いた。
「さすがだな。この犬は」
ベルヴァーはバイカルノに顔を向けた。
「私ハ、ベルファーダ・・・」
「犬では私を認識できない・・・ってか?」クラトが言うと、ベルファーは鼻で笑って言った。
「ソノ通リダ」
「サイモス　カラモヨロシク伝エテクレト言ワレテイル」
驚いた、サイモスの名前を覚えたのか?
「アノ男ハ良イ。協力シテクレト言ワレタ。ダガ、ソコニ居ル元軍師ノ許可ガ必要ナノダ」
「いいぜ。サイモスに協力してやってくれ。俺からも頼む。お前なら潜入もお手のものだろう」
「オ前デハナイ、ベルファーダ」
「すまんすまん、ベルファー、よろしく頼むぞ」
「じゃ、私たちは行くよベルファー。博士にもよろしく伝えてくれ」
「ウンウン、博士ニ伝エル。私モ博士モ待ッテル。皆ガ待ッテル」
「じゃあな、ベルファー」

「クラト・ナルミ」
3人が振り返ると、ベルファーは尊大な姿勢で言った。
「オ前ハオカシナ奴ダガ、ソレデ良イダロウ」
「はぁ?何だそりゃ。ったく、また偉そうに・・・。ま、いいか!またな、ベルファー!」

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

バルカ城の見張塔にティエラは1人佇んでいた。
クラトには自分の双剣の1本を渡そうと思っていた。
しかし、なぜラヴィスの形見を渡したのか。

渡した時、どうしてあれほど涙が溢れたのか。
なぜ、戻って来いと言わなかったのか。
・・・なぜ、待っていると言えなかったのか。

小さな灯りが3つ揺れているのが見える。次第にそれは見え隠れし、
ついには見えなくなった。
声を殺して泣いた。夜が明けたら女王で在(あ)ろう。
だからそれまでは、日が昇るまでは泣くことを自分に許そう。

１０－１５　見張塔（後書き）

この物語も一段落となりました。
完了とはなりませんが、今までのペースでの更新はできそうにありません。
多くのお気に入り登録ありがとうございました。
続ける中でとても励みになりました。

11－1　山脈

東を振り返ると眼下に街が広がり、その先には市がたつ広場が見える。
そして、そのずっと先には朝日に照らされて屋根を輝かせたバルカ城の見張塔が微かに見える。

「ここからだとまだ城が見えるぜ」
「クラトが遅いからだ」
「分かってる事言うなっての、ほんと口が悪いよな」
「まぁまぁ、それにしてもクラトさんの回復振りには驚きますよ」
「私が知っている“絶望の苦痛”の被害者は3日と持ちませんでしたからね」
「ま、バカみたいに頑丈だからな。エナルダでもないのに」
「バカって言うな。それにしてもブレシアに行くなら北だろ？何でこんな道も無いようなところを西に向かってるんだ？」
バイカルノの代わりにジュノが答える。
「ネメグト丘陵を通るんですよ」
「ネメグト丘陵？」

バルカ国西部には標高4，０００～5，０００リティ（約3，２００～4，０００m）の山々が連なる山岳地帯があり、これはジャドフ山脈と呼ばれギルモアとの国境になっている。
この山岳地帯の通過には困難が伴い、商隊などは北か南を大きく迂回せざるをえない。
また、この山脈のバルカ側の麓は1，０００リティ（約８００m）ほどの高地になっており、山脈に沿って南北に走る街道がある。この街道をネメグト街道、丘陵地帯をネメグト丘陵と呼ぶ。この丘陵地は景観に恵まれ、遠くバルカの涙と呼ばれるメツェル湖や南部の

バルゴー高地を望む事ができる。この為、わざわざこの街道を移動経路にする者もいるが、バルカ中心部に向かうなら南と北からもっと大きな街道が整備されているし、サイカニアに抜けるならギルモア側の街道を使用した方が早い。
そんな事もあって他の街道に比べると通行する人の数は決して多くはなかった。

「そのネメグト丘陵を通る理由ってなんだ？」
「バルカの地形を軍事面で考えるなら、西のネメグト丘陵とジャドフ山脈、南のバルゴー高地は重要だからな」
「え〝？もしかしてあの山脈を登るの？」
「いえいえ、登るとしても後ですね。クラトさんが本調子ではないし。元々、この旅の初期はクラトさんの回復期間を兼ねてるんですよ」
「そうか、済まないなぁ」
「でも、この丘陵地の登りを移動できるんですから、だいぶ回復していると思いますよ」

＊－＊－＊－＊－＊

大陸にはいくつもの山脈や高地が存在するが、ジャドフ山脈の更に西、エルトア西部にそびえる大山脈は１０，０００リティ（約８，０００ｍ）の山々と深い谷が、北は蛮族の地から南はヴェルカノの海岸線まで続いている。その幅は海岸線で１００ファロ（約４０ｋｍ）という広大なものであった。それは北端まで同じ幅が続いているとされ、その環境の苛酷さと相まって踏破不可能とされている。神話によれば、この山脈地帯の中心は広い平地が開けた楽園があり、その楽園は直径２０ファロ（約１６ｋｍ）の円形で“天空の王冠”と呼ばれる神々の住処なのだという。
この山脈はタガンザク山脈と呼ばれ、歴史上の名だたる探検家が挑

んだが、踏破どころかそのほとんどが帰還すらできなかった。特に山脈に接しているエルトアとヴェルカノは、国外にも探検家を求めてその踏破ルートの発見に努めたが、ことごとく失敗に終っている。最後にして最大の挑戦と言われた、サイカニアの有名な冒険家ドルケンの探検隊もドルケン以外が全滅するという被害を出して失敗。その過酷な探検行は奇跡的に生還したドルケンによって克明に伝えられた。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

我々は3日を掛けていくつかの峰を攻略した。そしてついにこの山脈地帯で一番高いと思われる山を前にしたのだ。つい頂上への登頂ルートを考えてしまう自分に苦笑いしながら、やっと中腹にルートを発見した。

この天の壁と名付けた巨大な峰を越えれば、その先には西の世界を見下ろすことができるはずだ。復路を考慮すると余り時間はない。踏破は次回でも構わない。とにかくこの天の壁の向こう側を見るだけでいいのだ。どのように西へ下るか、どれぐらいの時間が必要か？ルートは？これだけでも得られれば次回の踏破が見えてくる。もし行けるなら行ってしまえばいい。どうせ引き返す苦労も同じ事だ。そんな楽観的な考えもあった。

しかし、天の壁はあまりにも過酷だった。何度もルートの変更を余儀なくされ、その都度落石と雪崩で犠牲者を出した。峰に辿り着いた時、残っている隊員は１２名から６名に減っていた。しかも峰から見た景色は、更なる山の峰が見えるだけでしかなかった。

私は峰を山頂に向けて登り出した。もちろん天の壁の先を見るためだ。

暫く進むと探検隊は私と副隊長しか残ってはいなかった。途中で何度も引き返すことを進言した副隊長は、２人きりになった途端に進むペースを上げた。彼も根っからの冒険家なのだ。

未知の世界をこの目で見たいと強く願う。命で購う事になろうと。
むしろ私の気持ちは晴れやかだった。
もう死んでも構わない。しかし西の世界を見下ろしてからだ。

頂上を目前に副隊長のペースが極端に落ちた。
私は遅れつつあった副隊長を振り返った。
「一歩でも新しい地を踏んで死ぬ。俺は本望だ。行こう山頂へ。そして西側をこの目でみてやろうじゃないか」
私の後方１５リティ（約１２ｍ）を続く副隊長は、私の言葉に手を挙げ、そのまま斃れた。私は副隊長を置いて進んだ。１５リティの距離が惜しかったからだ。
その場に食料などの荷物を放棄して身軽になると一気に頂上を目指した。世界で最も高い天空の頂を寝台にして永遠の眠りに就くのも悪く無い。西の世界を見下ろしながら・・・
しかし、辿り着いた頂上から見えたものは、山々が延々と続く黒と白の世界だった。遠くには天の壁を遥かに上回る山脈が横たわっている。
東側を振り返えれば、３日間かけて進んだ山脈が驚くほど低く見えた。それほど西の山脈は高く広大に存在し、暗く寒く白かった。
私は膝を着いてつぶやいた。「俺はツイている」
私は引き返した。放棄した食料を食べ、副隊長の装備から必要なものを回収する。この時、副隊長がマスエナルを所持している事に気付いた。どうやら“気の属性”らしい。
私はマスエナルを装着して進んだ。
それから先も斃れた隊員達が補給ベースのように存在した。
私は多くの隊員を死なせ、その死によって生き延びたのだ。

11－2　街道

超空の山脈タガンザクの東、ギルモアとバルカの国境を形成するジャドフ山脈の麓にあるネメグト丘陵。この丘陵地にはジャドフ山脈を迂回するネメグト街道が南北に走っている。

ネメグト街道を北に進むと、ギルモア北部をクエーシトからエルトアまで東西に抜けるジレイト街道にぶつかる。ジレイトとは復讐者の意味で、ある国の王子が父の仇を追ってこの街道を西から東へ通過したという神話から名付けられている。

ヴェルハントとフィアレスがギルモアの首都を急襲する時に使用する予定だったのもこの街道である。

大陸の主要な街道は以下の通りだ。

東西に抜ける街道はこのジレイト街道と、トレヴェントのレジーナ街道（神話の女神の名）、サンプリオス・インゲニアを抜けるレスフォール街道（南海の意味）がある。

その他に北の回廊から蛮族の勢力下を東の海まで抜けるバルロス街道（蛮族の意味、蛮族はジルオン街道と呼ぶ）があるが、もちろん蛮族以外はほとんど使用しない。

南北の街道は、クラトとジュノがグリファから脱出した際に北上したタルキア街道、エルトアを通るエルトア街道、ギルモアからサイカニアの難所を抜け、ローヴェに至るペテスロイ街道（串刺しの意味）がある。

大陸の街道はその重要性と規模によって1級から4級に分けられており、これらは全て1級街道だ。ネメグト街道は3級街道にあたる。

バイカルノ達はジレイト街道に至った。

ここからジレイト街道を横切って北上し、ブレシアに入る予定だ。

サバール隊から入った情報ではブレシアは混乱しているという。

ブレシアはその昔、全蛮族を糾合した“ジルオン連合”の中心として栄えた部族だ。しかし、バルナウルの台頭と離脱、ギルモアの拡大などによって、その勢力は次第に衰えていった。

ブレシアがジルオン連合の盟主であり得たのは、蛮族の伝説で神々の生まれたのがブレシアにある丘陵地とされていた為に蛮族宗教の司祭はブレシア王の務めであった事と、何代にも亘って優れた王が出た事による。

歴代のブレシア王は神々の言葉を聞き、各国の王や領主にその意向を伝える立場にあった。つまり前時代の蛮族は祭政一致の政治であったのだ。

ブレシア王の言葉は神々の言葉として伝えられた。ブレシアが絶大な権力を持った理由はそこにある。ただ、神々が住まう地とされたブレシアの中心部は“神に遠慮して”開発は殆ど行われず、城と最低限の施設が置かれた。次第に中心部だけが教会のような機能を持ち、周辺地から隔離していった。

中心部以外の周辺地は辺郷とも呼ばれる6つの行政区に分けられ中心部とは区別されていた。ブレシアの中心地にあるジルオン城（現ブレシア城）から周辺地の行政官へ神託の内容が伝えられ、行政官はその内容を担当する国や部族に神言として命じるのだ。

その体制は非常に不安定ながら、優れたブレシア王と独特の世界観を持つ蛮族宗教によって、むしろ有効に機能していた。

それを破壊したのは南に存在する国々だった。

東大陸の北部に位置する蛮族は自分達以外の国々をレストルニア（南方の国）と呼ぶ。その当時、蛮族に武力で対抗できる国家はレストルニアには無かった。

しかし蛮族は統治能力に劣っており、またそれを自覚していた。

彼らの統治はあくまで蛮族宗教があって初めて成り立つものであったのだ。それでも優れた武力を背景に各国からは朝貢という形で折

り合いをつけていた。

ジルオン連合の本当の敵は大陸西側の北部に存在する勢力だったからだ。その勢力をゼリアニア（西方の国）と呼び、かつてジルオン最強と謳われたバルナウル国を置いて激しく対立。この対立によって“北の回廊”は遮断されていたといえる。そしてその分“海の回廊”が活性化し、サンプリオスという強大な国家を誕生させることになる。その後、サンプリオスはギルモアとの覇権戦争“大陸の炎上”で敗北、レストルニアでの覇権を握ったギルモアが北の蛮族を圧迫するに至る。

しかしそれは武力ではなく経済力と技術力によって行われた。いや、行われたというのは正確ではない。ブレシアは自壊したのだから。

ジルオン連合の市民、特にブレシアの市民は教えを守り、この世界、自然、生物の一部として、ある意味節度を持った生活を営んできた。しかし、その傍で技術力と経済力によって豊かな生活を享受する人々が存在したのだ。それがエルトアであり、ギルモアであった。

“貢物を納める下位の国が我々より豊かに暮らしている”

徐々にブレシアの市民は豊かな生活を望むようになった。この時のブレシア王はそれを認めてギルモアとの交易を拡大するが、大きな失敗を犯す。

輸入品は国王が買い取り、利益を乗せて連合内の国家に販売し、連合からの輸出に関税をかけたのだ。これでは交易の利益は常に連合内から支出される事になる。しかも利益を得るのは国王のみだ。元々の交易が国王名義での輸入のみであり、次に輸入品の連合内での販売、続いて連合からの輸出と拡大していった経緯があるとはいえ、その理不尽とも言える内容に批判が高まっていった。

そんな不満が燻（くすぶ）る中、バルナウル国はゼリアニアの東端、つまりこれまで長年にわたって戦火を交えてきたゼレンティの混乱に乗じて一部を吸収、隣国アジェロンを誘って、ジルオン連合からの離脱を

宣言、４つの近隣部族を従えてバルナウル連合を名乗る。
バルナウル連合はさらにゼレンティを攻めて北の回廊を制圧、その一帯を整備して商業路として物品のみの通行を認めた。
人の通過は認めないが、物品の通過を認めるという事はバルナウル領内で交易が行われるという事だ。つまり交易ルートだけではなく、交易地としても利益を得る事になる。
バルナウルが指定した交易地は強力な軍隊に守られた城壁の中にあり、一切の国家勢力を排除していた。人の通過が認められない分、情報の交換が盛んに行われ、これもバルナウルの国力増大に寄与している。
高い武力と経済力の融合は覇権の条件だ。ジルオン連合のみならず、レストルニアの国々も警戒を強めたが、商人は北の回廊へ殺到した。海の回廊は海洋性オルグの出没によって安全性が低下しつつあったし、北方の国々にとって海の回廊は時間があまりにもかかり過ぎる上、経費も高くつくルートだったのだ。
ジルオン連合で唯一の交易権を持っていたブレシアはその利得の喪失とバルナウル離脱によって、ジルオン連合内での求心力を失っていった。
ブレシアは明らかに転換期を迎えていたが、国王を始め中心部にいた為政者はそれに気付かなかった。それだけブレシア中心部だけが全ての恩恵を享受し、世界の変化から目を背けていたといえる。
西大陸―バルナウル―エルトア・ギルモアという交易ルートの確立により大陸北東部は物・金・人・情報の主流から外れ、経済力は大幅に低下した。当然非難はブレシア国王に集中、ついにジルオン連合は瓦解する。一歩間違えば、蛮族の大戦乱が発生していただろう。
そして、もしそうなればバルナウルとギルモアによってその多くの領土を失っていたに違いない。
通常、政治形態を変えるには大きな損害を覚悟しなければならない。
それが革命だ。しかし、ブレシアのそれは驚くほど穏便に行われた。

混乱と困窮の極にあったブレシア国王を救ったのはブレシア国内で差別を受けていた辺郷の行政区だった。
第2行政区長官のライゼン・キルジェの献策により、ブレシア国王ジェノン・ブレシアはジルオン連合の盟主を退き、司祭の地位も返上する事を決断。
ここにジルオン連合は崩壊、新たに北東部首長連合が発足した。
ブレシアはその一構成国となる事で存続を得たのだ。しかし、もともと開発が行われず、経済は他国からの奉納と辺郷の税で成り立っていた国だ。再出発は困難を極めた。
ブレシアはジルオンの盟主というプライドと根底に流れる賢者の系譜を持ちながらも、丘陵地の草原が続く農業と酪農が主な産業の田舎臭い郷となってしまった。
ブレシア国内では国王ジェノンと、献策したライゼンへの非難の声が強く、北東部首長連合において4番目の席と決められた直後、ライゼンは何度も暗殺されかけた。
4番目というのは連合を構成する4国8部族（元々は6国、12部族であったが、バルナウル・アジェロンの2国と他4部族が離脱している）の国家として最下位である。
元々プライドが高い国民性であり、一部の過激な者達はその怒りをライゼン・キルジェに向けた。しかし、全ての暗殺者は返り討ちにされる。
そう、彼は優秀なエナルダだった。彼の家系はエナルダの発現率が非常に高く、優秀な戦士を輩出してきた血筋なのだ。

11－3　ジルオン

ジルオン体制の崩壊と北部首長連合の成立。それはジルオンの盟主ブレシアの凋落と生き残りを模索した結果だ。

首長連合内でのブレシアの立場は非常に悪かった。威勢を張っていた過去の反動もあって不利な条約や取引を要求される事が多く、またそれを容認せざるを得なかった。あまりに国力が低かったからだ。それだけ他国に頼っていた結果といえよう。

それでもバルナウル連合に属するアジェロンと国境と接するブレシアにはそれ相応の軍が配備され、その維持の為に援助を受けていた。プライドと現実の狭間（はざま）で苦悩するブレシアは、ついにギルモアへの接近を図る。ギルモアから交易ルートの整備を名目として会議をもったのがその発端だった。最初は有利な交易条件による援助だった。徐々に資金と技術力の援助が行われるようになり、しかもその規模は驚くほど大きかった。

そしてジルオン首脳部は金品にせよ労働力・技術力にせよ、受け取る事に慣れ切っていた。美しくも愚かな蝶が蜜に誘われるがごとく援助に傾いた。

勿論ライゼン・キルジェを含む憂国の士は強く異を唱えたが、今度は国王もライゼンの言葉を聞かなかった。

こうしてブレシアはギルモアに取り込まれていったのだ。

北東部首長連合はブレシアのギルモア接近を快くは思わなかったものの、現に戦火を交わしている相手はバルナウル連合であり、ギルモアとの関係悪化を避ける必要もあった為、ブレシアの行動を黙認していた。

ブレシアは親ギルモアの度合いを急速に強め、北東部首長連合との関係はギルモアとの交易とバルナウル連合との戦いだけになってい

た。

その後もブレシアはギルモアとの親密度を高めていき、ついにはギルモアのアティーレ郷征伐の際、正式にギルモア国ブレシア郷となった。当然、北東部首長連合からはギルモアを非難する声明があったが、ブレシアは実質的に首長連合から離脱しており、この非難声明もある種のポーズといえるだろう。

ギルモア国の郷として新たな出発をしたブレシアではあったが、その地理的にも歴史的にも複雑な事情を持つこの国は、その郷内で意見の違いによる派閥の対立が激しくなっていった。

派閥は3つ。ギルモア派、首長連合派、そして独自路線を主張するジルオン派。

ギルモア派は現領主のジェノン・ブレシアを始め、領主に近い王族や貴族達で構成されている。ギルモア国の傘下として援助を受けつつ国力の増強を図るという方針だ。最辺境の郷は本国からの干渉も受けるが、援助は手厚く大きな軍事力が認められる。既にギルモア国の郷として条約を交わしており、一番現実的な路線と言える。

領主のジェノンは自ら推し進めたギルモア融和政策を主張するギルモア派の代表でもある。

他国の郷になるという事は彼にとって苦渋の選択である事は想像に難くない。それは将来に期すものがあっての事だが、ジルオン連合の盟主から東部首長連合の構成国、そしてついに郷へとその地位を下げ続けた事に反発する勢力も多かった。

特にジルオン体制崩壊時に一構成国になる事でブレシア滅亡を救ったとされるライゼン・キルジェは老齢ながら王に直言をもって諫めたのち自害している。

首長連合派は年配の軍人を中心に、一部の王族と貴族も参加している。この派閥は首長連合への復帰を望むというよりは、むしろ反ギルモアと言っても良いだろう。ブレシア凋落の一因でもあるギルモ

アに頼るくらいならば、首長連合に戻ったほうがマシというのだ。
感情論的にも思える主張ではあるが、その生活習慣から信仰までギルモアとの違いは大きく、神話で6人の兄弟を祖とする蛮族の連合時代を懐かしむ者も多かった。
そこへもって北の戦乱でギルモアが大敗を喫したのだから、いやがうえにも勢いが増している。

そして最も少数派のジルオン派は第2皇女を中心として、急進的な一部の王族と若い軍人で構成されていた。
この第2皇女はギルモア国への編入時に王へ直言して憤死したライゼン・キルジェの外孫である。ジルオン派はギルモアの傘下に入る事を潔しとせず、首長連合内の低い席にも我慢できない者達だ。徹底的に戦いを避けてきた政府に対する不満を持ち、プライドが強く独立路線を主張する彼らは、他の派から現実味の無い空論と見られていたが、その急進的かつ過激な行動は危険視されていた。
そのジルオン派はバルカを見ていた。その精神に自らのプライドを重ねたのだ。

◇＊◇＊◇＊◇＊◇

サバール隊からの報告はかなり詳細に亘っていた。それだけ情報が漏れやすいという事だ。
バイカルノはあきれたような声をあげた。
「正式にギルモア国の郷になったってのに、国内の意見が対立したままなのか」
「まぁギルモアも然りですね。ブレシアの凋落から何も学ばなかったのでしょう」
「それはそうと、今日の宿はどうすんの？」
「そうだなぁ、折角賑やかな街道に出た事だし風呂付きの部屋をとって贅沢してみるか」

「マジ？」
「バイカルノ殿、お任せしているので口出しはしたくありませんが、抑える事が出来る部分は抑えるべきではないですか？」
「分かってる」
「ジュノ、余計な事言うなって！バイカルノがイイって言うんだからさぁ」
「って言うか、クラトは汚れすぎなんだよ。すぐに転ぶから服も傷んでるし。1人で歩いてたら浮浪者に間違われるぜ」
「しょうがないだろ、病み上がりなんだから」
「やっぱり馬でネメグト街道を南から移動した方が良かったんじゃないですか？」
「まぁ、バルカ領内では馬の調達が難しいってのあったし、クラトの回復期間として訓練になると思ったんだ」「でも、ここから先は馬で移動する予定だ。アティーレからブレシアを経由してエルトアに抜けるにはどうしても馬でないとな」
「ちょっと時間が早いが、宿を手配しよう。市場によって衣類だけでも用意しておこう」
ジュノが近場の宿に向かおうとするのをバイカルノが止めた。
「ジュノ、宿は情報収集の場所でもあるんだぜ。安宿はダメだ。俺が手配しよう」
バイカルノの先導で着いた宿は貴族や大商人が使う宿だった。
「ここには数日滞在する予定だ。クラトはゆっくり休んでくれ。ジュノもたまには羽根を伸ばしたらどうだ？」
「バイカルノ殿、ここはちょっと高すぎませんか・・・というか我々の身なりが」
「大丈夫だ」
バイカルノが懐から札を出して受付に渡すと受付の男の顔色が変わり、奥へ引っ込む。直ぐに色白のやや太った男が出てきた。
「これはこれは・・・」
硬い笑顔を浮かべたまま、その先の言葉が出ないようだ。

「最上とは言わんが良い部屋を頼む。あと衣類を新調したい。誰かよこしてくれ。」
「はい、畏まりました」直ぐに部屋が準備された。
案内された部屋には専用の浴室が付いているし、身の回りの世話をする女も3名待機していた。
バイカルノは女達に金を与えると、「必要な時には呼ぶ」と言って下がらせた。
入れ替わるように現れたのは年配の仕立屋だ。手早く3人の寸法をとると、バイカルノから注文を受けて下がった。
「お前ら、風呂に入っとけよ、俺はその間にもう一つ片付ける事があるんでな」
バイカルノは出て行った。

11－4　テラス

風呂は浴場と言って良い広さだった。
居間ほどもあるその浴場は、一番奥から蒸気が噴出しており、奥に行けば行くほど熱い。壁や床は石造りで、それ自体が暖かくなっている。
湯船は無く、人間が入れるくらいの大きな桶が3つ置かれていた。
ジュノと俺は歓声を上げた。
「これは気持ちイイな、おい」
「そうですね、こういう風呂は維持にも手間とお金が掛かるんですよ」
「あ、その桶は1人づつ使う水浴び用です。蒸気でゆっくり寛いで水で体を洗い流すのです」「そういえば、クラトさんの世界では湯船に入るんですよね」
「そう。こういうのはサウナって言うんだ」
この世界の一般的な風呂にも浴槽がついているが、それに入るのは上品ではないとされている。そこから湯を汲んで体に掛けるだけだ。
冬は寒いが、室温が高く、湯温も高めなのでそれほど気にならない。
もっとも浴室を温める余裕がない人々は浴槽に入るらしい。
貴族や金持ちの浴場はここと同じように蒸気が供給されて、浴槽には水か温い湯を張っている。
「なるほど。場所によって熱さが違うって訳か。これは眠くなるくらい気持ちイイぞ」
「横になれる備品も揃っています。分厚い布を張った木の長椅子が部屋にありますからそれを持ち込めば横になれますよ。持ってきましょうか？」
「いや、いいよ。とりあえず腹が減ってしょうがない」
「じゃ、バイカルノ殿が戻らなければ先に済ませてしまいましょう。あ、自分が使った樽にはタオルを掛けて置いておいて下さいね。使

用済みという事で」
「了解～」
俺は久し振りにさっぱりとした気分を楽しんだ。

バルカに入ってからジュノの体はだいぶ逞しくなったようだ。刀傷もだいぶ目立つ。俺の印象では敵の刀なんて触れさせもしないって印象があるんだが、それだけ北の戦乱が激戦だったという事か。それに引き換え俺の体は相当衰えている。ま、半年以上も寝てたんじゃ致し方無しだ。
そんな事を考えながら体を拭いていると、ジュノが驚きの声をあげた。
「クラトさん、背中の傷がだいぶ良くなってますよ。やはり凄い回復力ですね、まるで水の属性のエナルダですよ」
「ふぅ～ん、俺にはワカランけどね」
ジュノと俺は用意してあっ衣類に着替えた。部屋着との事だが、ぶらりと外出するにも差し支えないものだ。いつの間にか届けられていた飲み物を飲んでバイカルノを待っていたが、戻らなかった。
「じゃ、行きましょう」
「おう、がっちり食ってやる」
「ははは、その食欲が回復力の一因かもしれませんね」
部屋を出ると若い男が1人立っていた。
「ちょっと食事に出ます。連れが戻ったら下の酒場に居ると伝えて下さい」
「はい」
若い男は涼しげな目元に微笑を浮かべて答えた。なかなかよく出来てる。一般の宿みたいに荷物をいちいち預けたり、交代で風呂や食事に行かなくても済む。まるでホテルだ。

酒場に入ると大変な混雑でテーブルが開くのを待つしかないようだ。
「俺、飯食うのに並ぶのって嫌いなんだよね」

「ま、致し方ないでしょう。他が空いているとも限りませんし、この料理はかなり味が良いはずですから、我慢ですよ」
俺達が待っていると宿の受付にいた男が酒場の奥へ入っていくのが見えた。
その直後に給仕が来て、席が空いたので案内するという。
「お客様、大変お待たせして申し訳ありません。只今テラス席をご用意致しましたので、ご案内致します」
どう考えても何組も飛ばしているみたいだが・・・
「これもバイカルノの顔ってやつかな。待っているヤツらを横目に案内されるのは、あんまりイイ気分じゃないなぁ」
「そうですか、やっぱりクラトさんは変わってますよね。特権的な扱いは誰もが喜ぶ事なんですけど・・・クラトさんの世界とこの世界ではやはり価値観が違うのかな」
「そうかもな」俺は躊躇しながら答えた。
その時、声が響いた。
「いつまで待たせるんだい！」
見れば老婆といって良いだろう、やや成金趣味的な服装の婆さんが店員に詰め寄っている。
「お客様は犬をお連れになっているので、中庭のテラス席になりますが、テラス席は上席でもあるので予約で埋まっております。もうすぐ空くかと思いますので・・・」
「それにしたって待たせすぎじゃなのかい！どうせ私を田舎者だと思ってるんだろ！」「もう、ラオファ達とははぐれちまうし、足は痛いし、喉が渇いて空腹の極致、最悪だよ！」「もう湖の水を全て飲み干して、草原のアマルカを全て食べ尽くせるくらいだってのに！」
婆さんの足元には白く毛足が長い犬が行儀良く座っている。
俺は思わず笑っていた。犬の方がなんぼか落ち着いている。
婆さんは俺をぎろりと睨んだ。
「なに笑ってんだい」

「いや、よく出来た犬だなと思ってさ」
なおも何か言い出しそうな婆さんから給仕に視線を移して言った。
「俺達は待つから、この婆さんを通してやってくれないか」
「しかし、お客様・・・」
ジュノに顔を向けると、半分呆れながらも目が頷いていた。
「報告するなら、俺達がテラス席を嫌がったって言ってくれよ」
「あの、しかし・・・分かりました」
給仕は戸惑いながらも恭しく頭を下げ、婆さんを案内しようとする。
しかし、驚いた顔をしていた婆さんは不機嫌な様子で言った。
「断る」
そう言いながらも婆さんは目の奥に若々しさを宿し、関心を抱いている。
「どうして私に譲る？」
しかし何かを疑うような色は全く見られなかった。その顔にはもう飲み物も食事も興味が無いといった様子だった。
「俺達は湖の水は飲み干せないからな。それに、だいぶ疲れてるんだろ？」
「ははは、そうかい。年寄りには親切にしないとねぇ」「でも、気持ちだけ感謝しとくよ。あんたが誰かは聞かないが、なかなか出来た男じゃないか」
「俺は年寄りじゃなく女に親切なだけだ」
今度は本当に驚いた顔をした後、大声で笑った。
「・・・ふふ、ははは。じゃ遠慮なく譲ってもらうよ。女として譲られたんじゃ、断れないからね」「ネーベルおいで、この男に礼を言うんだ」
「ウォン」
「驚いた、まるで言葉が解るみたいじゃないか」
「なに言ってるんだ、みたいじゃなくて解るんだよ。ネーベルはあんたより頭がいいよ」
「譲った相手にそれはねぇだろ」

「軽く流して文句を言わなきゃ格好良かったのに、詰めが甘いねぇ」
「あの・・・」
給仕に促された婆さんは「せっかく話が乗ってきたのに気が利かない給仕だね」とぼやきながらテラスの席に向かった。振り返って投げキッス。
「ムムム、あのババァ、いい気になりやがって、譲らなきゃ良かったぜ」
「ははは、まぁまぁ、私は面白かったですよ」
「何だよ、ジュノまでそんな事言って」
「バイカルノ殿が聞いたら喜ぶでしょう」
「やめて、面倒だから」

緩んだ雰囲気の中でくだらない話。部活が終わっての帰り道のような、懐かしい雰囲気。こんなのも悪くない。
壁に寄りかかりながら外を見ると夕方も暮れようとしていた。

11－5　泡酒

ほどなくテーブルが1つ空いて俺達は食事をした。確かに旨い。
肉は柔らかくて味付けも良い。酒も頼んだが、これも旨い。
ジュノが頼んだ飲み物は泡立っていてビールを連想させた。
俺もそのアネスという酒を追加した。
その酒には親指の先ぐらいの石が小皿に載せて添えられている。
酒をグラスに注いだ後に石を入れると盛んに泡が立つ。その泡を飲むのだそうだ。
飲んでみたけど、味は全然ビールじゃなかった。
草の匂いがするその酒はアブサンのような味だった。
「この酒はちょっときついんですが、水で薄めると香りも薄まってしまうので、泡にして飲むんです」
「ふぅ～ん、でも何だか飲んだって気がしないな」
「まぁ、これは香りを楽しむものですからね」
そんなこんなで十分に食べて飲んだ。バイカルノはまだ来ない。
俺達が席を立つと、男2人が血相を変えて奥へ向かった。
奥のテラス席から婆さんの声。
『何してんだい！私を見失うなんて！それでもお前達は騎士だっていうのかい！』
どうやら、はぐれていた連れと再会したようだ。
「あの老婦人は辺境の貴族って感じですね」
「田舎者丸出しで品が無いのは分かるけど、なんで貴族なんだ？」
「騎士を護衛に出かけるといったら貴族か王族しかありませんから」
「でも、貴族って感じじゃねぇな。冗談なんじゃないのか？」
「そうかも知れませんね」
「だが、面白い婆さんだ」
また声が聞こえる。
『私が拐(かどわか)されでもしたら、お前達の首は無いよ！』

「うはぁ、言うに事欠いて“拐されたら”だってよ、ばばぁのくせに。どこの誰が拐すんだっての。あんな事言われちゃお供もたまらんよなぁ」

俺とジュノは婆さんの勢いに辟易して、さっさと酒場を出た。

部屋に戻るとバイカルノが居た。風呂から上がったばかりのようだ。

「すみませんが先に食事に行きました」

「あぁ、俺も済ませてきた。明日も出かけるから適当にやっといてくれ」「この宿の中だったら後払いだが、金が必要な時にはこれを使ってくれ」

「え、こんなに？馬でも買っておきますか？」

「いや、馬は気にしなくていい。明後日見本が３頭ここに届く予定だ」

「見本？」

「バルカには馬が必要だ。しかし馬の調達は目立つ。分散して数を確保しておきたい」「武具はエルトアから技術者が戻ったのでだいぶ楽だし、城の改修はラシェットとヴェルーノ卿で何とかなるだろう。しかし労働力不足は如何ともし難いな」「何にせよ経済が立ち直らないと何もできない」

俺とジュノはポカンとした顔をしていたのだろう。

バイカルノは何かを察したのか、早く戦えるようになるのがクラトの仕事だし、それまでの護衛がジュノの仕事だと言って書類に目を落とした。

どうやらバイカルノは憎まれ口を叩く暇も無いようだ。

翌日、バイカルノは朝出かけると夜遅くまで戻らなかった。

俺とジュノはその間、市場を見て回ったり剣術の鍛錬をしたりして過ごした。剣はジュノが１０リグノ剣を買ってくれた。

それでも俺には大分重い。振る事はできるが、すぐに疲れてしまうのだ。

「１５リグノ剣は程遠いな。って言うか持ってるのは２０リグノ剣だし」
「私も２０リグノ剣なんて見た事ないですよ。ティエラ様も意外と酔狂な方なんでしょうか」
「でも、ヴィクトールとかだったら簡単に振り回すんじゃないの？」
「それは可能ですけど、２０リグノもの重さの武器を使うなら、剣よりもモーニングスターとか戦斧（バトルアクス）を振り回した方が有効ですから」
「そうなの？」
「重心の違いですよ。打撃力が大分変わってきます」
「じゃ、なんで２０リグノ剣なんて作っちゃったんだ？」
「クラトさんには大剣というイメージがありますからね。だから、この剣は単に武器というだけではないのでしょう」
「じゃ、これもそうか」
俺はラヴィスの刀をジュノに見せた。ジュノは暫く刀に見入っていた。
「確かにラヴィス隊長という印象（イメージ）の刀ですね」
「ティエラの双剣も一緒に作ったらしいぜ」
「そうですか。先程は酔狂なと言いましたが、感傷的になられていたのかもしれませんね」
「ま、あの立場はキツイよな」
「そういった中でクラトさんの存在は大きかったんでしょう。何かにつけてクラトさんでしたからね」
「そんな事はないだろ、ラヴィス以外にもイオリアだってファトマだっていたんだから」
「彼女たちには出来ない事もあるんですよ。っていうか、クラトさんは鈍すぎます」
「うわっ、お前、鈍いって言ったな、それは禁句だっての」
「それは的確な事だから痛いんですよ」
「いや、確かに元の世界で痛い思い出があるんだよね・・・詳細は省くけど」

「そうですか。詳細に興味はありませんが、今後は鈍いという表現は控えます」
「すっきりしないけど、頼むわ・・・って、何で俺が鈍いんだよ」
「言うと悪口っぽくなってしまいますが・・・」
「じゃいいや、ジュノが冷静に悪口言ったら相当痛そうだから」

俺がラヴィスの刀を抜くとジュノは身を乗り出した。
「こ、これは素晴らしい。ちょっと見せてもらっていいですか？」
ジュノは刀を手に取ると、まず刀身の背を見た。それから切っ先、刃を上にして灯りにかざす。
「これは普通の金属じゃないですよね？」
「なんかバルカ城の宝物庫にあったものらしいけど・・・」
ジュノは自分の髪を1本抜くと刀の刃に乗せた。刀を軽く動かすと茶色い髪が2つになって落ちる。
「これと同じような刀をグリファで見た事があります。その宝刀は特殊な金属で作られていて、その金属は黄金と同じ重さの価値があると云われています。それで２０リグノ剣を作ってしまうとは・・・５００万パスク以上の価値があると思いますよ」
「５００万？・・・すごいかどうか今一つピンとこないな」
「はぁ～、もうちょっとびっくりして欲しかったんですが、クラトさんはそういう事に関心が無いからなぁ～」
「買物なんてしないしな」
「まぁ、バルカに入ってからは戦いばかりでしたからね。明日は剣術の鍛錬の後、食事を兼ねて市場に行きましょう。午後からはちょっと足を伸ばしてみましょうか」
「お、いいねぇ、知らない街をぶらぶらするってのは旅の醍醐味だよな。じゃ、俺は寝るわ。何だか疲れたよ。動いて喰って寝れば身体も元に戻るだろう」

そうだ。心配する前に動けばいいんだ。ただ懸命に。

そう、懸命にさえやっていれば本当に必要なものだけ欲しくなる。
必要なだけ眠くなる。
ぼんやりと考えながら、俺の意識は薄れていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7824o/

エナルジア戦記

2011年11月26日01時39分発行